

ヨハネの默示録

すぐに起ころうはずのこと 第3巻

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの默示録

見よ。わたしはすぐに来る。(默示録 22・12)

すぐ起ころうはずのこと

第3巻

ゴットホルド・ベック著

黙示録 8章~15章

すぐに起こるはずのこと

ヨハネの默示録

第3巻

ゴットホルド・ベック著



イエス・キリストの默示。これは、
すぐに起ころるはずの事をそのしもべたちに
示すため、神がキリストにお与えになつた
ものである。そしてキリストは、その御使いを
遣わして、これをしもべヨハネにお告げになつた。
(ヨハネの默示録 1・1)

まえがき

ゴットホルド・ベック

「わたしが、あなたの神、主である。わたしがあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。しかしわが民は、わたしの声を聞かず、イスラエルは、わたしに従わなかつた。それでわたしは、彼らをかたくなな心のままに任せ、自分たちのおもんばかりのままに歩かせた。ああ、ただ、わが民がわたしに聞き従い、イスラエルが、わたしの道を歩いたのだったら。わたしはただちに、彼らの敵を征服し、彼らの仇に、わたしの手を向けたのに。」

(詩篇 81・10～14)

主は大いなる方。大いにほめたたえらるべき方。その聖なる山、われらの神の都において。高嶺の麗しさは、全地の喜び。北の端なるシオンの山は大王の都。

(詩篇 48・1、2)

英語のヒストリイ (history) という言葉は、ヒズ・ストーリイ (His story) だと言えましょう。歴史とは単なる運命とか偶然の集積ではありません。創造主なる神が支配者としてすべての背後にあって導いておられます。過去も、現在も、未来も、この偉大なる主の御手の中にあります。そして主は、ご自身のご計画を間違いなく成就なさいます。

默示録が書かれた目的の一つは、「すぐに起ころるはずのこと」を、主を信じみことばに拠りたのむ人々に知らせ、力づけるためであり、生き生きとした希望で満たすためです。

世界には多くの有名な都市がありますが、その中でもっとも重要な都市は、言うまでもなくエルサレムです。エルサレムはイスラエルの首都ですが、この事実を認める国は決して多くありません。世界の平和について考えるとき、エルサレムの抱えている問題は、最優先で解決されなければならないものの一つです。

世界の人口の半分以上はキリスト教徒以外の人々です。エルサレムでは、イスラム教徒も多く、エルサレムを聖地として大切にしています。

聖書の中に、エルサレムという名前は八百十一回出でます。しかしイスラム教徒のコーランには、エルサレムという名前はただの一回も出でません。にもかかわらずイスラム教徒は、エルサレムだけでなく、イスラエルが現在領有している国土はすべて本来は自分たちのものであり、返還されるべきであると主張しています。ノーベル平和賞をもらったアラファト議長は、かつて、「ユダヤ人は一人残らず殺されなければならない」と発言したことがあります。

エルサレムは、主によって選ばれた町です。列王記第一の8章44節でソロモンは、「あなたの選ばれた町、私が御名のために建てた宮の方向に向かって、主に祈るなら、天で、彼らの祈りと願いを聞いて、彼らの言い分を聞き入れてやってください」と祈りました。

エルサレムは、他の町とは比べられない町です。エルサレムは、主なる神の、この地上における歴史の中心そのものです。

アブラハムの神、イスラエルの神、そしてヤコブの神は実際に存在しておられるのですから、聖書に従えば、彼らの子孫であるユダヤ人は、今のイスラエルの領土だけではなく、もつと多くの領土を持っていてよいはずです。しかし彼らは、聖書に啓示されていいるまことの神、そのひとり子である主イエス様の存在を認めようとせず、当然ながら「神によって約束された土地」を信じようとしたのです。

しかし、聖書の中で、ユダヤ人に對してはつきりと国家としての主権や土地の領有を約束された主は、今も生きておられるだけでなく、自分の約束を確實に実現する力をお持ちです。もしイスラエルに、隣国が主によつて約束された土地を与えるなら、それは隣国にとつても利益となり、政治的にも経済的にも繁栄するようになるでしょう。また、現在イスラエルに住んでいるアラブ人たちは、イスラエルの国に永住することによつて、束縛されずに自由を得るはずです。しかし問題は、イスラム教という宗教です。

悲劇的なのは、次の事実です。現在イスラエルに住んでいる多くのユダヤ人たちは、無神論者です。ですから彼らは、「全能の神が約束された土地は、必ず与えられる」と確信することができます。その結果、彼らは見当違いのことをしています。つまり、ユダヤ人の最大の敵であるイスラム教徒とカトリック教会とに交渉すれば、問題は解決可能だと思つています。

かつてカトリック教会に属していたドイツのアドルフ・ヒットラーは、明言しました。「ユダヤ人を一人残らず抹殺することは、私の教会の長年の目的であり、ユダヤ人がいるかぎり、世界には平和がない」と。

主なる神によつて選ばれた民であるユダヤ人を滅ぼそつとする國々は、決して祝福されることはありません。聖書ははつきり言つています。

「あなたを祝福する者をわたし（主）は祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。」

（創世記 12・3）

かつてイエス様は、次のように言されました。

「こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしてしまいました。

した。偽善者たち。イザヤはあなたがたについて預言しているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたくしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』

（マタイ 15・6～9）

現在、大部分のユダヤ人にとって大切なのは、「聖書に約束されていること」とよりも、「ユダヤ人の言い伝え」です。イスラエルの政府は、全能の神、主の約束を信じようとせず、外交交渉によって、極めて困難な、きわどい平和を模索しています。

しかし、それとは関係なく、主の約束は必ず実現します。

「わたしは、わたしの民イスラエルの捕われ人を帰らせる。彼らは荒れた町々を建て直して住み、ぶどう畑を作つて、そのぶどう酒を飲み、果樹園を作つて、その実を食べる。わ

たしは彼らを彼らの地に植える。彼らは、わたしが彼らに与えたその土地から、もう、引き抜かることはない。」とあなたの神、主は、仰せられる。 (アモス 9・14、15)

千九百八十年の七月三十日、イスラエル政府は「エルサレムは、永久に分割されることはない」と宣言しました。イスラエルの歴史はたしかに悲劇的です。ユダヤ人のように悩み、苦しみ、憎まれ、迫害された国民は他にありません。しかしユダヤ人は、主イエス・キリストを認めようとしないために、自分の薄いた種を刈ることになったのです。彼らは二千五百年間迫害され、自分の国を失つて流浪の生活を強いられました。

また現代のユダヤ人たちは、かつてそうだったような模範的な国民だとは言えなくなっています。他の国々の悪いところが入り込んでいます。

一方、現在のイスラエル国内のイスラム教徒を見ても、事態は悪くなる一方です。多くの夫は暴力を振ります。しかもその結果、もし妻が殺されてもそれは悪いことではない、とイスラム教のコーランに書かれています。イスラエルのイスラム教徒の中でも、このような悲しい現実を見かけるようになっています。

それだけではなく、イスラエルの約二十万人の人々は、薬物中毒です。そしていろいろな映像メディアやテレビゲームによって毒された多くの人々は、現実の世界から離れ、夢の世界の中に生きるようになっています。

また、結婚についても、籍を入れずに同居すればよいと考える人々が増え、入籍してもすぐ離

婚する人々が非常に多くなっています。同性愛者同士の結婚も普通の結婚と同様に認めるべきだと考える政治家たちも増えています。結局、イスラエルでは、主なる神が定めておられる「罪」は、もはや罪ではなくなりつつあります。

また、カトリック教会は、父なる神、子なるイエス、聖霊を信じています。しかし、イスラム教では、神は「父なる神」ではなく、ましてその「子」など認めようとしません。

聖書は、まことの神は人間を例外なく愛していくくださり、その証拠として、神のひとり子イエス様を人間を救い出すための犠牲にしてくださった、と述べていますが、イスラム教のコーランでは、神は正しい人間しか愛そうとしない神です。罪を犯した人をまことの神が救われる、という贖罪、罪の赦しは存在しません。

そして問題は、カトリック教会が、イスラム教が礼拝する神と、カトリック教会が礼拝する神とは同じである、と宣言していることです。

イスラム教徒にとつては、イスラエルは地上から消されるべきで國です。さもないと、イスラム教の説く教義はまちがつたものになるからです。

マホメットは十六人の女性と結婚しましたし、またそのほかの少なくとも六十四のそばめたちを使つっていました。彼はおそらく読み書きにも不自由でした。コーランの中には、主イエス様は十字架の上で死なれなかつた、と書かれています。その意味で、イスラム教もユダヤ教も、主イエスの十字架の血による贖いの大切さを無視しています。

近い将来、これらの問題は恐ろしい解決を見るようになります。つまり、ユダヤ教も、いわゆ

るキリスト教も、そしてイスラム教も、一人の強大な人物によつて一つにされるのです。この人物は聖書の中で、「反キリスト」と呼ばれています。ローマ法王は、自分はイエス・キリストの代表者である、と言いますが、しかしこの言葉をギリシャ語に訳すと、反キリストとなります。

この驚くべき歴史の進展は、空中再臨の後で起こります。空中再臨のとき、主イエス様によって救われた何百万人の人々は、いつぺんに地上からその姿を消します。彼らは死を見ないで天に引き上げられます。この空中再臨によつて、世界は大きなショックを受けます。そして、それから反キリストの時となるのです。

主イエス様は、いつも来られるかわかりません。今日かもしれません。明日かもしれません。私たちはいつもイエス様を待ち望んで、期待をもつて生活すべきです。主イエス様を待ち望まない者は、祝福されえません。そしてイスラエルの国、またイスラエルの国民のために祈らない者は悪魔の側に立つ者です。

目次

すぐに起ころばずのこと ヨハネの默示録（第3巻）

まえがき	...	ゴットホルド・ベック	6
第3部			
10	嵐の前の静けさ	8	1～5
11	四つのラッパのさばき	8	6～12
12	第五のラッパのさばき・第一のわざわい	8	13～9
13	第六のラッパのさばき・第二のわざわい	9	12
14	近づいている神のご計画の成就1	13～21	
15	・天の御使いの特徴と権威	66	43
	・近づいている神のご計画の成就2	88	1～7
10	人間の使い、ヨハネの権威と備え	10	8～11
8		11	
11		110	

目 次

16	真のイスラエルと、偽りのイスラエルの測り分け	11	11
17	ふたりの証人	3	2
18	世界を統治するための主の来臨	14	
19	・ 第七ラッパのさばき、第三のわざわい	11	
20	神とメシヤに対する竜の戦い	19	
21	悪魔に対するミカエルの戦い	12	
22	神とその民に対する悪魔の迫害	7	
23	聖徒の忍耐と信仰	12	
24	悪魔の道具、地からの獸とにせ預言者	13	
25	悪魔の権力と誘惑のなかのなぐさめ	13	
26	大きな苦しみの終わりの時代への預言	11	
27	さばきへの知らせと警告	18	
15	さばきの中で守り通される者たち	14	
16	カラーページ「ドイツよろこびの集い」・キリスト集会のご案内	14	
17	・ キリスト集会出版物のご案内	20	
18		13	
19		5	
20		6	
21		1	
22		10	
23		1	
24		13	
25		14	
26		14	
27		14	
15		1	
16		8	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	
26		1	
27		1	
15		1	
16		1	
17		1	
18		1	
19		1	
20		1	
21		1	
22		1	
23		1	
24		1	
25		1	

10

嵐の前の静けさ

黙示録8章1節から5節まで

1 香の満ちた香炉

聖徒の祈り

イエス様の祈り

聖靈の祈り

2 火の満ちた香炉、祈りのごたえ

1 祭りのためのラッパ

2 戰争のためのラッパ

戴冠式のためのラッパ

小羊¹が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあつた。それから私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。また、もうひとりの使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに立つた。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであつた。香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、使いの手から神の御前に立ち上つた。それから、使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といなずまと地震が起つた。

(黙示 8・1～5)

この部分に出てくるラッパについて、私たちは、旧約聖書の民数記に記されている記述を思い起こします。

ついで主はモーセに告げて仰せられた。「銀のラッパを二本作らせよ。それを打ち物作りとし、あなたはそれで会衆を召集し、また宿営を出発させなければならない。この二つが長く吹き鳴らされると、全会衆が会見の天幕の入口の、あなたのところに集まる。

もしその一つが吹き鳴らされると、イスラエルの分団のかしらである族長たちがあなたのところに集まる。また、あなたがたがそれを短く吹き鳴らすと、東側に宿つている宿営が出発する。あなたがたが二度目に短く吹き鳴らすと、南側に宿つている宿営が出発する。彼らが出発するには、短く吹き鳴らさなければならない。集会を召集するときには、長く吹き鳴らさなければならない。短く吹き鳴らしてはならない。祭司であるアロンの子らが

ラッパを吹かなければならない。これはあなたがたにとつて、代々にわたる永遠の定めである。また、あなたがたの国で、あなたがたを襲う侵略者との戦いに出る場合は、ラッパを短く吹き鳴らす。あなたがたが、あなたがたの神、主の前に覚えられ、あなたがたの敵から救われるためである。また、あなたがたの喜びの日、あなたがたの例祭と新月の日に、あなたがたの全焼のいけにえと、和解のいけにえの上に、ラッパを鳴り渡らせるなら、あなたがたは、あなたがたの神の前に覚えられる。わたしはあなたがたの神、主である。」

(民数 10・1～10)

これからはじまる箇所の題名として「嵐の前の静けさ」、あるいは「天国の眺め」というのが適當だと思われます。默示録は神のしもべたちに対して与えられたものです。これによつて神は、心から主に仕えたいと願うしもべたちに対して、「自分の計画と目的について示してください」といふ。私たちが主なる神に近づければ近づくほど、神は私たちにご自分の計画を明らかにしてくださるのです。

わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。

(ヨハネ 15・15)

主はこう考えられた。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべき

だらうか。

(創世記 18・17)

まことに、神である主は、それはかりごとを、ご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさらない。

(アモス 3・7)

默示録においては終わりの時代のさばきが明らかにされています。終わりの時代には、「封印のさばき」、「ラッパのさばき」、「怒りの鉢のさばき」という三つのさばきがあります。しかし、すでに見て来たように、これら三つのさばきは順序よく示されているわけではありません。19章までを通して「封印のさばき」として見られるのはさばきの大体の内容でしかありません。これに比べて「ラッパのさばき」と「怒りの鉢のさばき」は、19章までに細かく一つ一つが同時に記されています。

私たちが6章3節から17節までに見てきたのと同じことが8章、9章において詳しく記されていります。

「嵐の前の静けさ」はいつ始まるのでしょうか。默示録8章1節には「小羊が第七の封印を解いた時、天に半時間ばかり静けさがあった。」とあります。ここでの「静けさ」は、神が怒りを抑えて待つことができるということを表わしています。神の怒りは、神の愛に反するものではありません。神の怒りは「さばき」となって表われますが、それは神の来られる時が近づいていることを示します。さばきはすべて神によるものであり、神はあらゆることの支配者です。

では、天において静けさが保たれている間にどのようなことが起ころうか。神は聖徒たちの祈りを聞いておられ、顧みることを忘れてはおられません。ここで「一つのこと、第一に「香の満ちた香炉」、第二に「火の満ちた香炉」について考えてみましょう。「香の満ちた香炉」とは祈りを表わし、「火の満ちた香炉」とはこの祈りに対する神の答を表わしています。そして祈りに対する神の応答がラッパのさばきなのです。

1 香の満ちた香炉

はじめに香で満たされた香炉、つまり、「祈り」について考えて見ましょう。ここでいう祈りには、聖徒の祈りも、イエス様の祈りも、聖霊の祈りも、そのすべてが含まれます。

聖徒の祈り

聖徒たちの祈りは聞かれています。この祈りは默示録11章に出てくる二人の証し人の祈りであり、イスラエルの十四万四千人の人々の祈りであり、そして患難時代の始めの三分の一において救われる人々の祈りです。また地上で苦しんでいる人々の祈りでもあります。

「香」は主イエス様がなされたことを通して、初めて人々の祈りは神に聞き入れられるようになったのです。多くの祈りは自「」中心のものでしかなく、何と多くの祈りが、苦しみから逃れるためのものであり、報復のためのものであり、不満と拒絶から出てくるものでありましょうか。しかし、そんな罪深い私たちのためにイエス様は身

代わりとなつて死んでくださつたばかりか、父なる神にとりなしていてくださるのです。このことを忘れるわけにはいきません。

2 イエス様の祈り

8章3節にててくる「御使い」は疑いもなくイエス様のことを指しています。聖書の中には天使が主の前で私たちのためにとりなしをするという記事はなく、ただ大祭司としてのイエス様だけが、私たちのためにとりなしの祈りをしてくださつてゐるからです。

罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださつた方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

(ローマ 8・34)

3 聖霊の祈り

そして、主イエス様が私たちのためにとりなしてくださるだけではなく、聖霊もまたどう祈つてよいのかわからぬ私たちのために代わつて助けてくださいます。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈つたらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言ひようもない深いうめきによつて、私たちのためにとりなしてくださいます。

(ローマ 8・26)

もし「香」がなければ、つまり、イエス様と聖霊による助けがなければ、私たちの祈りは何の価値もないものになります。イエス様と聖霊の助けを通してのみ、私たちの祈りは大きな力をもたらします。私たちはしばしば、自分の祈りが神に聞かれているかどうか疑いを持つてしまいます。しかし、8章には祈りが大きな効果のあるものだということが明らかに記されています。

聖書には「祭壇」について多くのことが書かれています。祭壇とは、罪を犯した人間の代わりに獸が捧げられる場所です。祭壇は神のさばきの場であり、神と人間の出会いの場でもあります。祭壇に捧げられた獸はさばきの火によって焼き尽くされます。罪はさばかなければなりません。祭壇はすべて、キリストの十字架を示しています。私たちの身代わりとなつて、私たちの罪を取り除くためにイエス様は十字架につかれました。

8章3節の「金の祭壇」は、神の御座の前にあります。祭壇はただ一度だけでなしとげられたイエス様の贖いを表わしています。キリストを通してのみ、私たちの祈りは主に届くのです。

私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御靈において、父のみもとに近づくことができるのです。

(エペソ 2・18)

私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもつて神に近づくことができるのです。

(エペソ 3・12)

次の聖書の箇所は、祈りについてもあてはまります。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来る」とはありません。」（ヨハネ 14・6）

「ここで忘れてならないことは、神」自身が私たちに対して神を呼び求めるよう命令なさつておられるということです。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。（詩篇 50・15）

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。（イザヤ 55・6）

「求めなさい。そうすれば与えられます。捗しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」（マタイ 7・7）

いつでも祈るべきであり、失望してはならない…（ルカ 18・1）

「あなたがたは今まで、何もわたしの名によつて求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」

（ヨハネ 16・24）

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによつて、あなたがたの願い事を神に知つていただきなさい。

(ピリピ 4・6)

このように神は私たちが祈ることを命じておられます。それと共に、祈りを聞き届けてください」という約束もなさつておられます。

「だからあなたがたに言うのです。祈つて求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」

(マルコ 11・24)

「…してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知つてゐるのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖靈を下さらないことがあります。」

(ルカ 11・13)

「またわたしは、あなたがたがわたしの名によつて求めるることは何でも、それをしましょう。…」

(ヨハネ 14・13)

黙示録における祈りの主題は、「主よ、来てください」(黙示22・17)です。これは「神の国が来ますように」という祈りであり、言いかえれば「神の御心がなるように」、そして「すべての被造物によつて神の御名がほめたたえられる日が来ますように」という祈りなのです。

「主イエスよ、来てください」という祈りが私たちの祈りの中心とならなければなりません。それはイエス様に「早くあなたのみもとに召してください」という祈りでもあるでしょう。このような祈りは、私たちを感じている以上に価値のある祈りです。このように祈ることを通して、私たちは世界史の中に共に加わることができるのです。

2 火の満ちた香炉、祈りのことえ

次に私たちは、8章5節にある「火の満ちた香炉」について考えてみましょう。これによつて、神がどのようにして聖徒たちの祈りに答えられたかを見るることができます。

神は祈りに対し平和と幸福をもつて答えられたのではなく、「雷鳴と声といなすまと地震」によつて答えられました。

「火の満ちた香炉」は聖徒たちの祈りに対する神の応答でした。この火は祭壇から出てきた火です。さばきの火はさばきが行なわれる所から、つまり祭壇から出てくるのです。祭壇である十字架において、イエス様はご自身をお捧げになられました。そして、私たちはイエス様が罪人である私たちの身代わりとなつて死なれたことを信じ、心からの悔い改めと感謝をもつてこたえるとき、救われ、さばかれることはありません。しかし、イエス様の身代わりの死を否定し拒む人は、さばきの火の前に出るのです。

「雷鳴と声といなすまと地震」は神の神聖さを象徴しています。もはや神が悪に耐えることがおできにならないことを表わしています。そのためラッパのさばきが行なわることになるのです。

「火」はさばきを表わしていますが、また同時に「火」は聖める力ももっています。イザヤ書には、次のようにあります。

すると、私のものに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えかかる炭があつた。彼は、私の口に触れて言つた。「見よ。これがあなたにくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」

(イザヤ 6・6、7)

火によつてこの地上は、イエス様の再臨の前に聖められるのです。「さばきの火」にあうこととは、それによつて聖められるか、または焼き滅ぼされるかどちらかを意味します。

このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであつて、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の國のためです。つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとつて正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の榮光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。

(IIテサロニケ 1・5～10)

1 祭りのためのラッパ

默示録8章2節に出てくる、ラッパを与えた「七人の御使い」は、ふつうの御使いではなく、「御使いの頭たち」です。彼らは主の御前に立っているばかりでなく、主の側にいて周りを囲んでいる者たちです。イエス様がベツレヘムの馬小屋で誕生なさったときに、これを知らせたのもこの御使いの頭の中の一人でした。

2 戦争のためのラッパ

七人の御使いに与えられた七つのラッパが吹き鳴らされるとき、いよいよ解放の時が来たことが告げ知らされるのです。この解放の時とは、それ以降イエス様のご支配による千年間の平和な国が続くことを示しています。解放の時には、敵である悪魔の要塞がすべて打ち破られます。こうして、ラッパは確かにさばきを知らせるものでもありますが、同時に神の救いをも知らせるものとなります。すばらしい千年王国の救いが来る前に、地上ではさばきが行なわれ、悪が取り除かれなければならないのです。

ラッパのさばきはまた、主がイスラエルの民をエジプトから脱出させる前にエジプトの国に送られた災厄や疫病に似ています（出エジプト7章から12章）。イスラエル人の祈りが神のみもとに届き、これに対する答として神のさばきがエジプトに下されたのです。そして、神はパロの支配からイスラエルの民を解放されました。

同じように終わりの時代において、神は聖徒たちの祈りを聞きとどけられ、あらゆるこの世の

支配から私たちを解放してくださるのです。

3 戴冠式のためのラッパ

小羊イエス様による絶対的な支配をもたらすことが、神のさばきの目的です。その時に、戴冠式のラッパが吹き鳴らされるのです。それを耳にする私たち一人一人がすでに小羊イエス様のご支配のもとにいる幸いな羊であるなら、何と感謝すべきことでしょう。

四つのラッパのさばき

默示録 8章 6節から12節まで

- 1 第一のラッパのさばき
- 2 第二のラッパのさばき
- 3 第三のラッパのさばき
- 4 第四のラッパのさばき

すると、七つのラッパを持つていた七人の御使いはラッパを吹く用意をした。⁶ 第一の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、血の混じった雹と火とが現われ、地上に投げられた。そして地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。⁷ 第二の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海上に投げ込まれた。そして海の三分の一が血となつた。すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。⁸ 第三の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。⁹ この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになつた。水が苦くなつたので、その水のために多くの人が死んだ。¹⁰ 第四の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれたので、三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、また夜も同様であった。

(默示 8・6～12)

默示録8章のこの部分に書かれている、四つの「ラッパのさばき」について考えてみましよう。この四つの「ラッパのさばき」は、神が人類にもたらす大きな患難を象徴するものです。

默示録8章1節から4節までに書かれている「静けさ」は、もはや過ぎ去つてありません。主なる神は人間のような焦りや軽率さなどではなく、「完全な」お方ですから、すべてを完璧になされます。そしてもちろん、そのさばきにおいても「完全に」遂行なさいます。創造者である主が、こ

こでは「建てる」ためではなく「壊す」ために働くとしておられます。主の怒りがさばきを通して明らかにされようとしています。

前半の四つの「ラッパのさばき」では、人間には直接の危害は加えられず、ただ人間をとりまく自然、つまり「陸」「海」「川」「天体」にさばきが下ります。

ここに記されている「ラッパのさばき」は、先に出てきた「封印のさばき」と同じ、終わりの時代に起こります。そして「封印のさばき」の後に続いて「ラッパのさばき」が起ころのではなく、この二つは、同時に行なわれるさばきを別の面から描いているにすぎません。

1 第一のラッパのさばき

まず、第一のラッパのさばきについて見てみましょう。

このさばきは、エジプトに対して行なわれた苦痛に満ちたさばきを思い起こさせます。このことから、私たちは默示録に記されているさばきが、エジプトにおいてなされたと同じように、現実的なものであることを悟らなければなりません。

モーセが杖を天に向けて差し伸ばすと、主は雷と雹を送り、火が地に向かつて走った。主はエジプトの国に雹を降らせた。雹が降り、雹のただ中を火がひらめき渡った。建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことのなかつた、きわめて激しいものであった。

(出エジプト 9・23、24)

私たちは、第一のラッパのさばきを読むとき、ミサイルや核の爆発を連想しないではおられません。それが世界的な規模で起るとき、地上の三分の一と森林の三分の一が焼失してしまい、青草はすべて焼き尽くされてしまうことでしょう。また、放射線被爆によって人間の血液も破壊されてしまうでしょう。私たちは燃え上がる街々や血を流している人々を見ることになるでしょう。人間が築いてきたすべての文明が破壊され、地もまた私たち人間に對して産物をもたらすことを拒むようになるでしょう。戦争の結果は大々的な国土の破壊です。これは、ヨエル書にある預言の成就です。

わたしは天と地に、不思議なしるしを現わす。血と火と煙の柱である。主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。 （ヨエル 2・30、31）

「不思議なしるし」と「火」は神のさばきを意味しています。さばきの結果は「血」、つまり「死」です。しかし、ここでのさばきは部分的なさばきであり、三分の一と限定されていますから、地のすべてが燃え尽くされるわけではありません。

2 第二のラッパのさばき

第二のラッパのさばきも、主がエジプトに対して行なわれた最初のさばきを思い起させます。

モーセとアロンは主が命じられたとおりに行なった。彼はパロとその家臣の目の前で杖を上げ、ナイルの水を打つた。すると、ナイルの水はことごとく血に変わった。ナイルの

魚は死に、ナイルは臭くなり、エジプト人はナイルの水を飲むことができなくなつた。エジプト全土にわたつて血があつた。

(出エジプト 7・20、21)

今日の世界で言えば、河川、海洋の水質汚染が連想されます。おびただしい生物と人々がその影響を受けて死滅するのです。

8章8節の「燃えている大きな山」は、一つの大きな国家やその産業活動を意味していると思われます。エレミヤも、周囲のすべての国々を滅ぼし自らも滅ぼされる結果となつたバビロンについて、こう語っています。

全地を破壊する、破壊の山よ。見よ。わたしはおまえを攻める。——主の御告げ。
わたしはおまえに手を伸べ、おまえを岩から突き落とし、おまえを焼け山とする。

(エレミヤ
51・25)

默示録の「燃えている大きな山」は、現代によみがえつてくる反キリストの帝国を表わしているのではないでしようか。つまり、この大きな「山」は、ある一つの政治的、精神的、そして悪魔的な巨大な権力を表わしていると思われます。さらに、その巨大な権力機構がもたらす産業活動の廃棄物の山を連想させます。

このさばきの結果は、海の三分の一が血となり、海中の生物の三分の一が死に、舟の三分の一が打ちこわされるというものです。

3 第二のラッパのさばき

8章10節の「燃えている大きな星」は、巨大な流星雨、また大挙して襲つてくるミサイル攻撃、それに積み込まれた生物化学兵器のことかも知れません。もしそれが水源に落ちれば、飲み水が汚染されることでしょう。

あるいは「燃えている大きな星」は、悪魔的な権力を意味しているのかも知れません。11節の「苦い水」というのは、旧約聖書においては、飲むことができず、それを飲むことは死を招くことになる水のことです。

彼らはマラに来たが、マラの水は 苦くて飲むことができなかつた。

(出エジプト 15・23)

また、こうも考えられます。かつて人々の生きる心の糧だった文学、詩、音楽、美術などの芸術は、終わりの時代にはすっかり汚染され毒されてしまい、心の死をもたらす原因となるでしょう。さらに、統一教会やものみの塔その他多くの新興宗教などの間違った教えも、毒の入った水のようなもので。このような間違った道を教える教祖たちは、いつの時代にも存在しました。

「…汚れがエルサレムの預言者たちから出て、この全土に広がつたからだ。」万軍の主はこう仰せられる。「あなたがたに預言する預言者たちのことばを聞くな。彼らはあなたがたをむなしいものにしようとしている。主の口からではなく、自分の心の幻を語っている。」

飲み水がなければ人間は長く生きていいくことができません。それと同じように人間の靈は「生けるいのちの水」がなければ死んでしまいます。

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたし가を与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」（ヨハネ 4・13、14）

終わりの時代の特徴は、このような「生けるいのちの水」がもはや手に入らなくなることです。しかし今はなお恵みの時です。今はまだイエス様は、人々を自身のもとに招いておられ、今はまだいのちの水を提供してくださっています。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

（マタイ 11・28）

「ああ。渴いている者はみな、水を求めて出て來い。金のない者も。さあ、穀物を買つて食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買い、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を貰え。なぜ、あなたがたは、食糧にもならない物のために金を払い、腹を満たさない物のために労するのか。わたしに聞き従い、良い物を食べよ。そうすれば、あなたがたは脂肪で元気

づこう。耳を傾け、わたしのところに出て來い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたとこしえの契約、ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ。」

(イザヤ 55・1～3)

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。

(イザヤ 55・6)

また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渴く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。」

(黙示 21・6)

4 第四のラッパのさばき

第四のラッパのさばきについては12節に記されています。ここまで私たちは、主の祝福がどのようにして地上から取り去られていくかを見てきました。先ず最初に「陸」から、次に「海」と「川」から取り去られました。そして、12節では「天体」からも主の祝福が取り去れようとしています。混乱がますます拡大していくのです。出エジプト記にもこれに似たことが記されています。

主はモーセに仰せられた。「あなたの手を天に向けて差し伸べ、やみがエジプトの地の上に来て、やみにさわれるほどにせよ。」モーセが天に向けて手を差し伸ばしたとき、エジプ

ト全土は三日間真っ暗やみとなつた。三日間、だれも互いに見ることも、自分の場所から立つこともできなかつた。しかしイスラエル人の住む所には光があつた。

(出エジプト 10・21～23)

核爆弾の爆発によつて山や都市が破壊され、大量の塵が大空高く舞い上がりつて地上に暗闇が訪れるということはありうることです。自然の秩序が人間によつて破壊されるとき、人間の判断の基準も判断力も混乱してしまふのです。

星が道しるべの役割を果たしているように、イエス様の福音も道しるべの働きをします。主から与えられた人間の良心も、道しるべです。良心によつて人は正直さと真理と聖さがどういうものかを知ります。

しかし終わりの時代においては、これらの道しるべは暗闇におおわれてしまひます。人間の社会生活の中においてもこのよくな暗闇が支配することになります。太陽であるイエス様のおられないところでは、闇が人々の間を支配し、人々の関係は冷たくなります。

しかし、イエス様がお働きになる所には、明るさがあり、暖かさがあります。

イエスはまた彼らに語つて言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

(ヨハネ 8・12)

イエス様の預言は終わりの時代に成就します。

「そして、日と月と星には、前兆が現われ、地上では、諸国の人々が、海と波が荒れどよめくために不安に陥つて悩み、人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり氣を失います。天の万象が振り動かされるからです。そのとき人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗つて来るのを見るのです。これらのことが起っこり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上に上げなさい。贅いが近づいたのです。」

（ルカ 21・25～28）

創世記を見ると、神の天地創造の四日目に天体が創られました。默示録においては、第四のラッパのさばきによつてこれらが暗闇に変えられます。これはアモス書の預言の成就です。

見よ。その日が来る。——神である主の御告げ。——その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渴くのでもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。彼らは海から海へとさまよい歩き、北から東へと、主のことばを捜し求めて、行き巡る。しかしこれを見いだせない。

（アモス 8・11、12）

イエス様が地上に来られた二千年前、すでにヨハネによつて「人々は光よりも闇を愛した」（ヨハネ3・19）と証しされています。このことは、終わりの時代においてますますはつきりしていくのです。

私たち自身はどうでしょうか。私たちは光よりも闇を愛していないでしょうか。それとも、光

に来て、罪を告白し、罪の赦しを受けている者でしょうか。

主人の帰りを熱心に待ち受けている人のようでありなさい、とイエス様は言われました。

「主人が婚礼から帰つて来て戸をたいたら、すぐに戸を開けようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。」

(ルカ 12・36)

主を体験的に知るようになった人の証しはこうです。

神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。

(詩篇 46・1、2)

私たちは今、終わりの時代に生きています。過去に起こつた戦争を見れば、来るべきさばきの時代がどのように恐ろしいものであるかが想像できます。たとえば共産主義による国家支配は悪魔から出た靈的な力です。共産主義が理想とする自由と平等と博愛は、一見神の国の掟に似ています。しかし、神から離れた共産主義は今までにこの地上で多くの争いを引き起こし、多くの人々を殺害してきたのです。カトリック教会も彼らの考え方と異なる人々を異端者として迫害し、この地上で多くの人々を殺害してきました。宗教戦争の名によつて、多くの人々の血が流されました。このような迫害は、権力者の欲望を正当化する旗じるし、「神の国をこの地上に建設する」という「かけ声」のもとに行なわれてきたのです。

権力者による教育と宣伝は、芸術、文学、学問、学校教育、そしてラジオ、テレビ、新聞など

を通して多くの人々を間違った教えに導き、人々は目隠しをされ何も見えなくさせられています。まことの教会の携挙のあと、このような時代はさらに悪くなります。携挙の後に地上に残されている上位だけの信者たちは、塩味のない、光をもつていない者たちです。終わりの時代の教会つまり「まことの教会の携挙」の後の教会は、イエス様がおられない教会、聖靈がおられない教会です。このような教会のことが默示録17章から19章までに記されています。

こうしてテサロニケ人への第2の手紙2章11節、12節の預言が成就するのです。

不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。なぜなら、彼らは救われるためには真理への愛を受け入れなかつたからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。

(II テサロニケ 2・9～12)

聖靈が支配される教会が取り去られたところでは、悪靈が支配するのです。

今まで見てきた四つのラッパのさばきを通して、将来いかに恐ろしいことが起こるかがわかります。しかし、まことの信者たちはさばきの前にイエス様のみもとに召されることを喜ぶでしょう。イエス様ご自身が、ご自身の花嫁を迎えるために来られるのです。イエス・キリストの靈を持つ者はこの花嫁に属し、携挙のときにイエス様と出会えるのです。

救いの確信をまだもっていない方は、イエス様の招きの声を、いま聞こうではありませんか。

すべて、疲れた人、重荷を負つてゐる人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

(マタイ 11・28)

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

(ヨハネ 6・37)

また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渴く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。」

(黙示 21・6)

21・6

12

第五のラッパのさばき・第一のわざわい

黙示録8章13節から9章12節まで

- 1 開かれた底知れぬ穴と神の御手
 1 誰が底知れぬ穴を開いたのか
- 2 底知れぬ穴とは何か
 3 底知れぬ穴から何が出てきたのか
- 2 解き放たれた悪霊とその王
 1 悪霊の根源
 2 悪霊の力
 3 悪霊の目的

この部分を学ぶにあたって、まず、ヨエル書にあるみことばを見ておきましょう。

一つの国民がわたしの国に攻め上つた。力強く、数えきれない国民だ。その歯は雄獅子の歯、それには雄獅子のきばがある。
(ヨエル 1・6)

やみと、暗黒の日。雲と、暗やみの日。山々に広がる暁の光のように数多く強い民。このようなことは昔から起こったことがなく、これから後の代々の時代にも再び起こらない。

(ヨエル 2・2)

その有様は馬のようで、軍馬のように、駆け巡る。さながら戦車のきしるよう、彼らは山々の頂をとびはねる。それは刈り株を焼き尽くす火の炎の音のよう、戦いの備えをした強い民のようである。

(ヨエル 2・4、5)

その面前で地は震い、天は揺れる。太陽も月も暗くなり、星もその光を失う。

(ヨエル 2・10)

さて、今回学ぶところは、默示録の次の箇所です。

また私は見た。¹³一羽のわしが中天を飛びながら、大声で言うのを聞いた。「わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴

らそうとしている。」

第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。¹ その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によつて暗くなつた。² その煙の中から、いなごが地上に出て來た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。³ そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、ただ、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。⁴ しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五ヶ月の間苦しめることだけが許された。その与えた苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であつた。⁵ その期間には、人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。⁶ そのいなごの形は、出陣の用意の整つた馬に似ていた。頭に金の冠のようなものを着け、顔は人間の顔のようであつた。⁷ また女の髪のような毛があり、歯は、ししの歯のようであつた。⁸ また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その翼の音は、多くの馬に引かれた戦車が、戦いに馳せつけるときの響きのようであつた。⁹ そのうえ彼らは、さそりのような尾と針とを持つており、尾には、五ヶ月間に害を加える力があつた。¹⁰ 彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語でアバドンといい、ギリシャ語でアポリュオンという。¹¹

第一のわざわいは過ぎ去つた。見よ。この後なお二つのわざわいが来る。

この部分から第五のラッパのさばきが始まります。このさばきは「第一のわざわい」に相当するものです。その内容は、「額に神の印を押されていない人間」だけに対してなされる、底知れぬ穴から出てくるいなごの攻撃です。

8章13節でヨハネは、空を飛ぶわしを見ました。このわしは人間に警告を与えるために遣わされた神の使いです。このわしが「わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る」と三回くり返した言葉は、さばきが非常に速く、そして大きな勢いをもつて来ることを表わしています。わしはしばしばさばきと関連して出てくる生き物です。

主は、遠く地の果てから、わしが飛びかかるように、一つの国民にあなたを襲わせる。
その話すことばがあなたにはわからない国民である。

(申命 28・49)

角笛を口に当てよ。驚のように敵は主の宮を襲う。彼らがわたしの契約を破り、わたしのおしえにそむいたからだ。

(ホセア 8・1)

13節の後半には、「あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている」つまり「地に住む人々に」、三つのわざわいが来ることが告げられています。これらのわざわいは今までと違つて、人間に対しても直接に加えられるさばきです。前半の四つのラッパのさばきは、人間を取り巻く自然、「地」、「海」、「川」、「天体」に対しても加えられるさばきでした。これに対して今からみる後半の三つのラッパのさばきは、人間に直接加えられるさばきです。しかし神は、前もつて何も警告

を与えることを行なわれることは決してなさいません。

また、ここには「地に住む人々」という表現が出てきます。この表現は默示録にしばしば出でます。「地に住む人々」とは、この地上で居心地よく生活している人々のことです。

これらの人々は、地上で「よそ者や旅人」のように生活をするまことの信者たちの生活とはまったく違った生活をしています。これらの人々の心は、ただこの世の生活にのみ向けられているのです。そして、主のいのちから遠ざけられていて、イエス様の愛をもたず、天にある希望をもつていい人々です。

つまり第五のラッパのさばきはユダヤ人の国で起ることです。証印を押された人々は、イエス様を信じ、救われたユダヤ人であり、証印を押されていない人々は、救われていないユダヤ人です。

1 開かれた底知れぬ穴と神の御手

これから私たちは特に二つのことについて考えてみましょう。第一番目は、「開かれた底知れぬ穴と神の御手」、第二番目に、「解き放たれた悪霊とその王」についてです。

黙示録9章においても、私たちは、主がすべてのできごとの背後に立つておられ、主の御手が働くのを見るることができます。さばきは御使いが主の御座からラッパを吹き鳴らした後ではじめて行なわれるのです。「与えられた」という表現がくり返して用いられていますが、これは主の全能の力を表わしています。悪魔も悪霊も、主が許されるのでなければ何もできません。「苦しみの

時」は主によつてはつきりと定められています。悪魔がどんなに信者たちを憎んでいても、主が許されるのでなければ何も彼らに害を与えることはできません。

默示録8章と9章を比べてみると興味深いことに気がつきます。8章は上から来るものについて書かれています。9章は下から来るものについて書かれています。さらに8章では祭壇からの香の煙のことが、9章では底知れぬ穴からの煙のことが記されています。8章においては祭壇にいる御使い、9章では底知れぬ穴にいる御使いのことが記されています。

ここで、次の三つの問い合わせて考えてみたいと思います。はじめに、「だれが底知れぬ穴を開いたのか」、次に、「底知れぬ穴とは何か」、そして、「底知れぬ穴から何が出てきたのか」ということです。

1　だれが底知れぬ穴を開いたのか

9章1節の「星」というのは文字通りの星ではなく、前にも学んだように御使いのことを意味しています。そして、一人の御使いがやってきて底知れぬ穴を開いたことがわかります。底知れぬ穴は、いのちを持たない、物質である星によつて開けられたのではなく、一人の人物、つまり御使いによつて開かれたのです。

主が、御使いに「底知れぬ穴を開くかぎ」を与えられました。この「天から地上に落ちた」御使いは誰のことかというと、ある人々はこれを「反キリスト」だと考え、また他の人々はこれを11節に出てくる底知れぬ所の御使いである「悪魔」だと考えたりしています。しかし、多分この

御使いは、神から遣わされた御使いであつて、千年王国の始まる直前に底知れぬ穴を開いて、そこに悪魔を閉じこめることになる、默示録20章1節から3節までに出てくる御使いだと思います。

また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持つて、天から下つて来るのを見た。彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛つて、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の人々を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならぬ。

(默示 20・1～3)

1節で使われている「星が天から地上に落ちる」という表現は、堕落して神から離れたという意味では決してなく、天から降りてきたという意味だと思われます。そしてこのことは、第一のわざわいが非常に速く行われることを意味しています。

2 底知れぬ穴とは何か

では、底知れぬ穴とは何でしようか。これは悪霊の住家です。

悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願つた。

(ルカ 8・31)

悪魔は千年王国の期間中もこの場所にいます。そしてこの穴に住んでいる悪魔たちは、終わりの時代に人々を惑わすためにいる者たちです。

しかし、御靈が明らかに言われるよう、後の時代になると、ある人たちは惑わす靈と悪靈の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。

(イテモテ 4・1)

イエス様は多くの悪靈たちを追い出されました。このような悪靈については、ルカの福音書8章26節から36節で詳しく見ることができます。

こうして彼らは、ガリラヤの向こう側のゲラサ人の地方に着いた。イエスが陸に上がられると、この町の者で悪靈につかれている男がイエスに出会った。彼は、長い間着物も着けず、家には住まないで、墓場に住んでいた。彼はイエスを見ると、叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。「いと高き神の子、イエスさま。いつたい私に何をしようといふのです。お願ひです。どうか私を苦しめないでください。」それは、イエスが、汚れた靈に、この人から出て行け、と命じられたからである。汚れた靈が何回となくこの人を捕えたので、彼は鎖や足かけでつながれて看視されていたが、それでもそれらを断ち切つては悪靈によって荒野に追いやられていたのである。イエスが、「何という名か。」とお尋ねになると、「レギオンです。」と答えた。悪靈が大せい彼にはいっていたからである。

悪靈どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようになると願った。ちょ

うど、山のそのあたりに、おびただしい豚の群れが飼つてあつたので、悪靈どもは、その豚にはいることを許してくださいと願つた。イエスはそれを許された。悪靈どもは、その人から出て、豚にはいった。すると、豚の群れはいきなりかけを駆け下つて湖にはいり、おぼれ死んだ。飼つていた者たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や村々でこの事を告げ知らせた。人々が、この出来事を見に来て、イエスのそばに来たところ、イエスの足もとに、悪靈の去つた男が着物を着て、正気に返つて、すわっていた。人々は恐ろしくなつた。目撃者たちは、悪靈につかれていた人の救われた次第を、その人々に知らせた。

(ルカ 8・26～36)

反キリストもまたこの底知れぬ穴から出てくるのです。

そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上つて来る獸が、彼らと戦つて勝ち、彼らを殺す。

(黙示 11・7)

あなたの見た獸は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上つて来ます。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獸が、昔はいたが、今はおらず、やがて現われるのを見て驚きます。

(黙示 17・8)

悪魔は「底知れぬ穴」という所にいる「悪靈の王」です。

彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいてる

(黙示 9・11)

この「底知れぬ穴」というのは、最後の滅びの場所ではありません。

それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」(マタイ 25・41)

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獸も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

(黙示 20・10)

いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

(黙示 20・15)

そこは悪靈たちを一時的に閉じこめておく場所なのです。主は愛をもつてすべての造られたものを闇の世界から守つておられ、悪靈を穴の中に閉じこめておられるのです。しかし、終わりの時代にはその穴が開かれて悪靈どもが出てくるのです。これらの悪靈は主が許されるときにだけ外に出ることができます。しかもそれは、神の特定の目的を成就するために外に出ることが許されるだけです。

3 底知れぬ穴から何が出てきたのか
底知れぬ穴から何が出てくるのでしょうか。第一に煙、第二にいなご、第三に底知れぬ穴の御使いが出てきます。

・ 煙

煙は人の視界を曇らせます。煙によつて人はものが見えなくなり、「何が善で何が惡であるか」も見分けられなくなります。煙によつて、主と人々との間の距離はますます大きくなります。煙は悪靈による惡魔的な影響をもたらします。煙によつて自然の光である太陽が曇らされるだけではなく、世の光であるイエス様も見えなくされるのです。イエス様に対し長く拒み続ける場合は、人はもはやイエス様を見いだすことができなくなつてしまひます。

・ いなご

煙だけでなく、いなごも出てきます。これは文字通りのいなごではなく惡魔的な靈のことです。終わる時代にはこのような惡靈どもが人々をますます支配し、追いつめ、苦しめることになります。私たちはこのような惡靈の働きを目で見ることはできません。しかし、その現われの一つの例として、イスラエルに向かつて多くの国が戦争をしかけるのを見るでしょう。

・ 底知れぬ穴の御使い

煙といなごに続いて、「底知れぬ穴の御使い」が出てきます。これは悪魔自身です。

いなごには王はないが、みな隊を組んで出て行く。

(箴言 30・27)

実際の昆虫のいなごには王はいません。しかし、悪靈の軍勢は悪魔が王なのです。したがつてこの軍勢には秩序があり、悪魔がすべての動きを支配しています。次にこの点について詳しく学んでみましょう。

2 解き放たれた悪靈とその王

ここからは、悪靈について三つのこと、「悪靈の根源」、「悪靈の力」、「悪靈の目的」を考えてみましょう。

1 悪靈の根源

悪靈とは汚れた靈です。

すると、すぐにまた、その会堂に汚れた靈につかれた人がいて、叫んで言つた。

(マルコ 1・23)

夕方になつた。日が沈むと、人々は病人や悪靈につかれた者をみな、イエスのもとに連れて來た。こうして町中の者が戸口に集まつて來た。イエスは、さまざまの病気にかかつ

ている多くの人をお直しになり、また多くの悪霊を追い出された。そして悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかつた。彼らがイエスをよく知つていたからである。

(マルコ 1・32～34)

また、私は竜の口と、獸の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた靈どもが三つ出て来るのを見た。彼らはしるしを行なう悪霊どもの靈である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大きいなる日の戦いに備えて、彼らを集めめたためである。

(黙示 16・13、14)

彼らは神のもとから堕ちて悪魔の使いとなつた者たちです。

それから、王はまた、その左にいる者たちに言ひます。「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」(マタイ 25・41)

悪魔は一人ですが、この悪魔に仕えている何百万という悪霊たちがいるのです。これらの悪霊に人々が支配されることがありうるのでです。そうなると悪霊は、これらの人々を通して話したり、また行動をとつたりするのです。

悪霊の活動と、それが現実に存在することは、いつの時代にも見ることができます。例えば、サウル王は靈媒者のところに行き、悪霊の支配を受けました。

サウルは自分の家来たちに言った。「靈媒をする女を捜して來い。私がその女のところに行つて、その女に尋ねてみよう。」家来たちはサウルに言った。「エン・ドルに靈媒をする女がいます。」サウルは、変装して身なりを変え、ふたりの部下を連れて、夜、その女のところに行き、そして言つた。「靈媒によつて、私のために占い、私の名ざす人を呼び出してもらいたい。」すると、「この女は彼に言つた。「あなたは、サウルがこの国から靈媒や口寄せを断ち滅ぼされたことをご存じのはずです。それなのに、なぜ、私のいのちにわなをかけて、私を殺そうとするのですか。」サウルは主にかけて彼女に誓つて言つた。「主は生きておられる。このことにより、あなたが咎を負うことは決してない。」

すると、女は言つた。「だれを呼び出しましようか。」サウルは言つた。「サムエルを呼び出してもらいたい。」この女がサムエルを見たとき、大声で叫んだ。そしてこの女はサウルに次のように言つた。「あなたはなぜ、私を欺いたのですか。あなたはサウルではありませんか。」王は彼女に言つた。「恐れる事はない。何が見えるのか。」この女はサウルに言った。「こうこうしい方が地から上つて来られるのが見えます。」サウルは彼女に尋ねた。「どんな様子をしておられるか。」彼女は言つた。「年老いた方が上つて来られます。外套を着ておられます。」サウルは、その人がサムエルであることがわかつて、地にひれ伏して、おじぎをした。

サムエルはサウルに言つた。「なぜ、私を呼び出して、私を煩わすのか。」サウルは言った。「私は困りきっています。ペリシテ人が私を攻めて来るのに、神は私から去つておられ

ます。預言者によつても、夢によつても、もう私に答えてくださいないのです。それで私がどうすればよいか教えていただくために、あなたをお呼びしました。」サムエルは言った。「なぜ、私に尋ねるのか。主はあなたから去り、あなたの敵になられたのに。主は、私を通して告げられたとおりのことをなさつたのだ。主は、あなたの手から王位をはぎ取つて、あなたの友ダビデに与えられた。あなたは主の御声に聞き従わず、燃える御怒りをもつてアマレクを罰しなかつたからだ。それゆえ、主はきょう、このことをあなたにされたのだ。主は、あなたといつしょにイスラエルをペリシテ人の手に渡される。あす、あなたも、あなたの息子たちも私といつしょになろう。そして主は、イスラエルの陣営をペリシテ人の手に渡される。」

すると、サウルは突然、倒れて地上に棒のようになつた。サムエルのことばを非常に恐れたからである。それに、その日、一昼夜、何の食事もしていなかつたので、彼の力がうせていてからである。女はサウルのところに来て、サウルが非常におびえているのを見て彼に言つた。「あなたのはしためは、あなたの言われたことに聞き従いました。私は自分ののちをかけて、あなたが言われた命令に従いました。」

（I サムエル 28・7～21）

偶像礼拝をさせる力も、聖書によれば悪霊から出ているのです。

その偶像に仕えた。それが彼らに、わなであつた。彼らは自分たちの息子、娘を悪霊のいけにえとしてささげ、罪のない血を流した。

（詩篇

106・36、37）

いや、彼らのささげる物は、神ではなくて悪靈にささげられている、と言つているのです。私は、あなたがたに悪靈と交わる者になつてもらいたくありません。

(イコリント 10・20)

現代においても、悪靈が支配していることは、古いや靈媒の存在などによつてわかります。

2 悪靈の力

悪靈は人間の精神と肉体とを滅ぼすことができます。聖書には悪靈につかれた人をイエス様が解放してくださる場面がいくつも出てきます。

そのとき、悪靈につかれた、目も見えず、口もきけない人が連れて来られた。イエスが彼をいやされたので、そのおしはものを言い、目も見えるようになつた。

(マタイ 12・22)

「主よ。私の息子をあわれんでください。てんかんで、たいへん苦しんでおります。何度も何度も火の中に落ちたり、水の中に落ちたりいたします。そこで、その子をお弟子たちのところに連れて來たのですが、直すことができませんでした。」イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまであなたがたといつしょにいなければな

らないのでしよう。いつまであなたがたにがまんしていなければならぬのでしよう。その子をわたしのところに連れて来なさい。」そして、イエスがその子をおしゃりになると、悪靈は彼から出て行き、その子はその時から直つた。

(マタイ 17・15～18)

「この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやつてはいけないのでですか。」

(ルカ 13・16)

悪靈どもはイエス様をいつでも「王」であり「主」であると認めています。

それで、悪靈どもはイエスに願つてこう言つた。「もし私たちを追い出そうとされるのでしたら、どうか豚の群れの中にやつてください。」イエスは彼らに「行け。」と言われた。すると、彼らは出て行つて豚にはいった。すると、見よ、その群れ全体がどつとがけから湖へ駆け降りて行つて、水におぼれて死んだ。

(マタイ 8・31、32)

悪靈どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願つた。

(ルカ 8・31)

悪靈を通して悪魔が今日の世界を支配しています。

ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かつて立つていたが、そこに、第一の君のひと

り、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、…

(ダニエル 10・13)

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

(エペソ 6・12)

悪霊を通して間違った教えも行なわれています。

しかし、御霊が明らかに言われるよう、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しております、結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。

(イテモテ 4・1～3)

悪霊は神のご計画に逆らって働きます。

愛する者たち。靈だからといって、みな信じてはいけません。それらの靈が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。人となつて来たイエス・キリストを告白する靈はみな、神からのものです。それによつて神からの靈を知りなさい。イエスを告白しない靈はどれ一つとして神から出たものではあ

りません。それは反キリストの靈です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝つたのです。あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。彼らはこの世の者です。ですから、この世のことばを語り、この世もまた彼らの言うことに耳を傾けます。私たちは神から出た者です。神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け、神から出ていない者は、私たちの言うことに耳を貸しません。私たちはこれで真理の靈と偽りの靈とを見分けます。（ヨハネ 4・1～6）

さて、悪靈は一種類、自由な悪靈と囚われた悪靈がいます。現在囚われている悪靈たちは、大きな患難のとき、悔い改めることをしない人々に向かつて解き放たるためにいるのです（黙示録9章1節から21節）。

悪靈と悪魔に抵抗する唯一の武器は「祈り」です。

悪靈の力を描いた作品に、「エクソシスト」という映画があります。この映画の中では悪靈がリアルに描かれています。このような映画は見るべきではなく、またこのような映画を見ないよう他の人々にも注意を与えていたいものです。この映画の中で、「もし私たちが悪靈どもと関係を持つようになれば悪靈の影響を受けることになる」と言っているのは本当です。しかし、悪靈からの支配を自殺によって逃れうると言っているのは間違っています。本当の解放はイエス様の御名による熱心な祈りによってだけなされるので、決して自殺による解放などありません。悪靈を追

い出すことのできるのは、ただイエス様だけです。

終わりの時代に解き放される悪霊の力は大変に大きなものです。この悪霊の力は非常に強いために、人々は自分の行くべき道と自分のよりどころのすべてを失うことになります。人々はもはや心の中に主にある確信を失い、代わりに自信や自惚れによつて満たされることになります。すべてが見せかけであり、偽物となるのです。

いなごは金の冠に似たものをかぶつています。これは本当の金ではなく見せかけの金です。いなごは鉄の胸当てをつけています。それは彼らが他の人々の言うことを聞かず、他の人々の教えに耳を傾けないことを意味しています。終わりの時代には、人々は鉄のように頑なな心を持つことになるのです。そこには少しの同情心もなく、許すことのない残酷さがあるだけです。

3 悪霊の目的

黙示録9章11節で、悪霊たちの名前はヘブル語で「アバドン」、ギリシャ語で「アポリュオン」と呼ばれていますが、これらは「破壊する者」という意味です。したがつて、悪霊の目的は破壊することです。

悪魔は私たちに快樂や満足や出世やにせの自由などを約束しますが、しかし結局は私たちを混乱へと導くのです。いかに私たちは悪霊の王である悪魔によつて、絶望と無力と失望へと導かれやすいことでしょうか。悪魔、また悪霊の目的は、私たちをイエス様とそのみことばから引き離すことがあります。

すべてイエス様から引き離すものは私たちにとつて毒なのです。

不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があつて、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人人が現われますが、主は御口の息をもつて彼を殺し、来臨の輝きをもつて滅ぼしてしまわれます。不法の人の到来は、サタンの働きによるのであつて、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるためには真理への愛を受け入れなかつたからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるよう、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。

(II テサロニケ 2・7～12)

私たちはこの箇所において大きな患難について見ることができます。「破壊者」である悪魔は、反キリストを通して彼のわざを行ないます。黙示録9章1節から12節までの攻撃は、現代の核ミサイルを連想させます。そしていなごの形は戦闘機にとてもよく似ています。戦闘機の前面はいなごの着けていた「金の冠のようなもの」に似ています。8節に「女の髪のような毛」ということばが出てきますが、これは戦闘機の後ろに残される飛行雲に似ています。「しきの歯」は戦闘機の窓枠に、また「さそりのような尾と針」(10節)は戦闘機から発射される小型ミサイルに似ています。「翼の音」(9節)は戦闘機の音を表わしているとも考えられます。

ヨハネの時代にはもちろんこのようなものは存在しませんでした。しかし、ヨハネの書いてい

るイナゴと戦闘機がいかに似たものであるかは驚くべきことです。

これから先、どのような武器が開発されるかわかりません。私たちはヨハネが幻を見て書き記したすべてのことが、現実にどのようになるか、ということはまだはつきりと知ることができます。しかし、すべての目に見える事柄の背後に、目に見えない力が働いていることは知っています。核爆弾が爆発する前に、見えない世界では悪靈が働くことでしょう。目に見える軍隊の背後に、この世を越えた悪靈の働きがあるのです。しかし、この悪靈の働きは、神の命令によらなければ何もできません。

黙示録にある「さばき」は、悔い改めて主に立ち返ることへの呼びかけです。主は絶えまなく、悔い改めへの呼びかけをなさつておられます。しかし主の呼びかけが拒絶されるときには、必ずさばきが行なわれます。そしてここにおいても、人間に危害が加えられる期間は五ヶ月であると決められています。

エジプトに対するさばきにおいて、主はイスラエルの民とエジプトの民との間に一つの区別を設けられました。

わたしはその日、わたしの民、がとどまつてゐるゴシエンの地を特別に扱い、そこには、あぶの群れがないようにする。それは主であるわたしが、その地の真中にいることを、あなたが知るためである。

（出エジプト 8・22）

しかし主は、イスラエルの家畜とエジプトの家畜とを区別する。それでイスラエル人の

家畜は一頭も死はない。

(出エジプト 9・4)

三日間、だれも互いに見ることも、自分の場所から立つこともできなかつた。しかしイスラエル人の住む所には光があつた。

(出エジプト 10・23)

黙示録でも同じことが行なわれています。神は「額に神の印を押された人間」と「神の印を押されていない人間」との間に区別をつけておられます。

悪靈の攻撃が加えられている間、十四万四千人の神の印を押されたイスラエルの民は神によって守られるのです。つまり、神の印を受けた人々には悪靈も害を加えることができません。しかし、神の印を押されていない人々は悪靈に惑わされ、さばきにあうのです。

私たちはすでに聖靈による神の印を押されているでしようか。

また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持つて、日の出るほうから上つて來た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えた四人の御使いたちに、大声で叫んで言つた。「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまつまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」

(默示 7・2、3)

第六のラツパのさばき・第一のわざわい

黙示録9章13節から21節まで

1 わざわいが起こる前にあること

1 聖徒たちの祈り

人間の罪

3 四人の御使いが解き放たれる

2 わざわい

1 火

2 煙

3 硫黄

3 わざわいの結果

1 宗教的な混乱 · 偶像礼拝 · 悪魔の働き

2 社会的な混乱 · 殺人 · 魔術 · 不品行 · 盗み

これから学ぶのは「第六のラッパのさばき」、「第一のわざわい」についてです。またこれは「神がなさる、悔い改めへの最後の呼びかけ」でもあります。ここに終わりの時代に起る最後のさばきが記されているのです。

第六の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は神の御前にある金の祭壇の四隅から出る声を聞いた。¹⁴その声がラッパを持つてゐる第六の御使いに言つた。「大川ユーフラテスのほとりにつながれてゐる四人の御使いを解き放せ。」¹⁵すると、定められた時、日、月、年のために用意されていた四人の御使いが、人類の三分の一を殺すために解き放された。¹⁶騎兵の軍勢の数は二億であつた。私はその数を聞いた。¹⁷私が幻の中を見た馬とそれに乗る人たちの様子はこうであつた。騎兵は、火のような赤、くすぶつた青、燃える硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は、ししの頭のようで、口からは火と煙と硫黄とが出ていた。¹⁸これら三つの災害、すなわち、彼らの口から出でている火と煙と硫黄とのために、人類の三分の一は殺された。¹⁹馬の力はその口とその尾とにあつて、その尾は蛇のようであり、それには頭があつて、その頭で害を加えるのである。²⁰これらの災害によつて殺されずに残つた人々は、その手のわざを悔い改めないで、悪靈どもや、金、銀、銅、石、木で造られた、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝み続け、その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを悔い改めなかつた。

(默示 9・13-21)

默示録の9章では、すべての人間的できごとの背後に、いかに悪霊の軍勢が働いているかが特に明らかにされています。9章1節から12節までの「第一のわざわい」はいなごが中心になつていて、「第二のわざわい」は騎兵の軍勢が中心です。「第一のわざわい」は空中から攻撃があり、いなごと戦闘機の類似が思い起さされました。しかし、9章13節からは地上における戦争が始まります。

先ず、第一と第二のわざわいの様子を比較してみましょう。そうすると、二つの攻撃がいかによく似ているか、また後の攻撃が前よりもいかに激しくなつてあるかがよくわかります。

9章3、5、10節では、魔の性格が「さそり」のようなものとして描かれていますが、一方の9章19節では「蛇」のようなものとして記されています。両方ともその特徴は、4と19節にあるとおり人間に「害を加える」ことです。またその姿も似ています。8節に「ししの歯」、17節には「ししの頭」が出てきます。さらに9節と17節の両方で「胸当て」のことが語られ、また7節に「出陣の用意の整った馬」、16節には「騎兵」という表現が出てきます。このように二つのわざわいには多くの類似点をみつけることができます。

しかし、「第一のわざわい」では攻撃が前よりも激しさを増しています。魔的な性格が一層強くなっていることが、さそりの毒と蛇の毒とを比較することによってわかります。その行動にもさらに激しさが加わっています。5節には彼らは人間を「苦しめることが許された」とあります。15節には、彼らが「殺すために解き放された」と記されています。その姿形もまた一層大きくなっています。「第一のわざわい」のいなごは、形は馬に似ていますが小さいものです。「第

「一のわざわい」に出てくる騎兵の馬はそのような小さなものではありません。

さばきが行なわれる範囲も拡大しています。「第一のわざわい」のさばきは一ヵ所に限られていますが、「第一」のわざわいのさばきはそのような限界がありません。というのは、この箇所に出てくる「金の祭壇の四隅」(13節)、「四人の御使い」(14節)、「定められた四つの時」(15節)、「四つの罪」(21節)の、「四」という数字は限界のない広がりを表わす数字だからです。これから私たちは、この箇所を三つに分けて考えてみましょう。始めに「わざわいが起ころる前にあること」、次に「わざわい」、そして、「わざわいの結果」についてです。

1 わざわいが起ころる前にあること

13節から16節を見ると、わざわいが起ころる前に、次の三つ、「聖徒たちの祈り」、「人間の罪」、そして「四人の御使いが解き放たれる」ことが記されています。

1 聖徒たちの祈り

8章3節から5節までの間に、聖徒たちの祈りのことが記されています。この祈りはイエス・キリストを通して、神の御前に絶えず立ち上っています。9章13節に「金の祭壇の四隅から出る声を聞いた」とありますが、これは聖徒たちの祈りに対する「主の答え」です。聖徒たちが祈った目的は何だったのでしょうか。彼らは神の栄光がこの地上で回復されるために祈ったのです。彼らは自分たちの名譽のためにではなく、「あなたの御名のご栄光を現わしてく

ださい」と祈りました。

私たちの神よ。今、あなたのしもべの祈りと願いとを聞き入れ、主ご自身のために、御顔の光を、あなたの荒れ果てた聖所に輝かせてください。私の神よ。耳を傾けて聞いてください。目を開いて私たちの荒れすさんださまと、あなたの御名がつけられている町をご覧ください。私たちが御前に伏して願いをささげるのは、私たちの正しい行ないによるのではなく、あなたの大いなるあわれみによるのです。

主よ。聞いてください。主よ。赦しください。主よ。心に留めて行なつてください。私の神よ。あなたご自身のために遅らせないでください。あなたの町と民とには、あなたの名がつけられているからです。

(ダニエル 9・17～19)

このような祈りに対して、主はお答えになられたのです。

2 人間の罪

人々の祈りに対する神の答えは、ここにおいては「さばき」であり、また「戦争」です。戦争は、常に神と小羊イエス・キリストの栄光に対する反抗の結果として起こります。戦争は、「神に栄光を帰すことを見失った者は、そのために苦しまなければならない」ことを意味しています。主なる神の声に聞き従うおうとはせず、心を頑なにする人は、その結果が決して良くないことを経験しなければなりません。なぜなら主は生きておられるからです。

ここに出てくる人々は、意識的にイエス様を拒み、悪魔を拝んだ人々でした。聖徒たちが主なる神の栄光のために祈っている一方で、罪を離れて悔い改めようとしている人々がいるときに、祭壇から主の声が下されるのです。

主はさばきをもつて答えられます。主はご自身の聖さとご自身の御名とご自身の栄光のために罪を罰しなければならないのです。

3 四人の御使いが解き放たれる

さばきの前に、四人の御使いが解き放たれます。私たちは、神がすべての命令を下す力をもつておられることを見てきました。悪魔も悪靈も、主のご計画によらなければ、自分自身では何もすることができません。主はご自身のものである御使いに命令を下し、「つながれている四人の御使い」を解き放たれます。

私たちは先に、「自由な」悪靈と「囚われている」悪靈の二種類の悪靈について見てきました。默示録のこの部分で語られているのは、「囚われている」悪靈の方です。これらの「囚われている」悪靈たちは、悔い改めない人々に向けて、大きな患難のときには遣わされるのです。

「囚われている」御使いのことについては、次の聖書の箇所にも出てきます。

神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。

(IIペテロ 2・4)

また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもつて、暗やみの下に閉じ込められました。

(ユダ 6)

これまで、主が人間を憐れみ、「囚われている」御使いたちの自由を奪つておられましたが、この時からは、彼らは解き放たれるのです。彼らは、神の命令によつて、さばきのための神の道具として解放されます。これらの御使いたちは自分たちの力で自由になつたのではなく、ただ神によつて、行動の自由が与えられます。彼らは神に敵対する者です。しかし、それにもかかわらず、神に仕えるようさせられます。自分自身ではそれを望んでいませんが、神のさばきの時に使われる、備えられた神の道具となるのです。

さばきも祝福も、すべての「時、日、月、年」が神によつて決定されるということは、何といふ慰めでしょうか。私たちは混乱と偶然の中に生きているのではなく、神のご計画の中を生きているのです。この大きな患難の時期も、黙示録9章15節にあるとおり、神によつてはつきりと定められています。

これらの御使いたちが解き放たれる場所はユーフラテス川のほとりです。ユーフラテス川のほとりにはかつてバビロンが存在しました。また、ユーフラテス川の源はエデンの園にありました。一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となつていた。第三の川の名はヒデケルで、それはアシュルの東を流れる。第四の川、そ

れはユーフラテスである。

(創世記 2・10、14)

ユーフラテス川はイスラエル民族に約束された国の国境線でもあります。

その日、主はアブラムと契約を結んで仰せられた。「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大川、ユーフラテス川まで。」

(創世記 15・18)

向きを変えて、出發せよ。そしてエモリ人の山地に行き、その近隣のすべての地、アラバ、山地、低地、ネゲブ、海辺、カナン人の地、レバノン、さらにあの大河ユーフラテス川にまで行け。

あなたがたの領土は、この荒野とあのレバノンから、大河ユーフラテス、ヘテ人の全土および日の入るほうの大海上に至るまでである。

(ヨシュア 1・4)

ユーフラテス川のほとりにはパラダイスがあり、そこで罪がはじまり、悪魔が最初に勝利したのです。ノアの洪水が始まつたのもここからでした。そこにイスラエルの最大の敵が存在したのです。一言で言えば、ここには「サタンの座」が置かれていました。そして終わりの時代に、再びここからサタンがその力と勢いとをあらわすことになるのです。

2 わざわい

17 節から 19 節を見てみましょう。ここでは「火」と、「煙」と、「硫黄」の三つの災害が述べられています。これらはすべて、刑罰としてのさばきと地獄の象徴です。

16 節にあるとおり、底知れぬ穴に閉じこめられた御使いたち、つまり惡靈が、神の定められた時に解き放たれて、二億の軍勢が出てきました。「第一のわざわい」では、「いなご」と戦闘機との類似性が連想されました。「第一のわざわい」に出てくる「騎兵」は、今の時代で言うなら「戦車」に似ています。騎兵の馬の口からは、火と煙と硫黄の三つの災害が出ています。「ししの頭」のような馬の頭は戦車の上の部分、「蛇」のような馬の尾は戦車の大砲に似ています。大砲は十三世紀まではドイツ語では「畑の蛇」と呼ばっていました。17 節にある「一億の騎兵の胸当」では、「火のようない赤」、「くすぶつた青」、「燃える硫黄の色」です。赤、青、硫黄の黄色の三つの色は、戦車に塗られている迷彩色に似ていないのでしょうか。

また「赤」は、イエス様とイスラエルに対する火のような憎しみを表わしています。「くすぶつた青」は人間の理性の疊りを意味しています。すべてのものが煙につつまれたようにぼんやりとしてはつきり見えなくなるのです。「硫黄の色」は不品行を象徴しています。人間の心はますます主のことばに鈍くなり、主への感受性を失うのです。「火」は人間の世界を焼き尽くし、「煙」は人間の世界を疊らせ、「硫黄」は人間の世界を汚すものです。

私たちはすでに今日、文学、映画、学校教育、マスコミによつて人々が悪い影響を受けているのを見ています。これらによつて、人間の理性と感情はますます鈍くされ、神の声に対しても感じ

にくくなっています。

多くの解釈者たちは、「二億の軍勢は悪霊を意味する」とだけ考えていますが、私はこれを一步進めて、北と東からイスラエルを攻撃するためにやつて来る諸国の軍隊のことではないかと思うのです。中近東はじめ、中国、ロシアにはすでに二億以上の軍隊があります。従つて、ダニエル書11章の預言の言葉は、現在、まさに成就されかかっていると言えましょう。

イザヤ書には、ユダヤの王は北と東の国からの攻撃を防ぐために、新たに再生するローマ帝国と契約を結ぶことになると預言されています。北と東の国とは、現代では中近東、さらにはロシアと中国ではないでしょうか。また、新しく再生するローマ帝国というのはダニエル書に出てくる十の国のことであり、ヨーロッパの中心に形成される十の国の連邦のことを意味しています。そして、これらの対立する連合国同士の間で大きな争いが起こるようになるのではないでしょうか。

二億の軍勢はユーフラテス川からきます。

第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまつた。
(黙示 16・12)

そして、ここにハルマゲドンの戦いが起ころう。

彼らはしるしを行なう悪霊どもの靈である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めそのためである。——見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物をつけ、裸で歩く恥を人に見られな

いようにする者は幸いである。——こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。

(黙示 16・14～16)

そして、これらの地上の軍勢の背後には、目に見えない悪霊の軍勢が立っているのです。これらの戦いのことについては16章でくわしく学びましょう。

3 わざわいの結果

20節、21節を読むと、わざわいの結果、二つのことがもたらされます。一つは「宗教的な混乱」、もう一つは「社会的な混乱」です。この20、21節はとても大切な箇所です。というのは、ここには、主が罪人の死を喜ばれないことが記されているからです。主は、罪人が悔い改めて生きることを望んでおられるのです。

わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。——神である主の御告げ。——彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。

(エゼキエル書 18・23)

あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして新しい心と新しい靈を得よ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。——神である主の御告げ。——だから、悔い改めて、生きよ。

(エゼキエル書 18・31、32)

彼らにこう言え。「わたしは誓つて言う。——神である主の御告げ。——わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえつて、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。」

(エゼキエル書 33・11)

主は、ある人たちがおそいと思つてゐるよう、その約束のことを遅らせておられるではありません。かえつて、あなたがたに對して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(IIペテロ 3・9)

ここでのさばきは、最後のものではありません。悔い改めへの最後の呼びかけです。イスラエルの「残りの者たち」、つまり「神の証印を押された人々」は、終わりの時代に神の証人となるのです。

この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。

(マタイ 24・14)

この「神の証印を押された人々」の伝える福音は、あらゆる所で聞かれ、悔い改める可能性は

まだ人々に残されています。しかし、これらの人々が証しをしても、驚いたことに、誰一人として悔い改める者が現われないのでした。

わたしは四十年の間、その世代の者たちを呑みきらい、そして言った。「彼らは、心の迷っている民だ。彼らは、わたしの道を知つてはいない。」と。それゆえ、わたしは怒つて誓つた。「確かに彼らは、わたしの安息に、はいれない。」と。　（詩篇 95・10、11）

わたしもまた、あなたがたのあらゆる町で、あなたがたの歯をきれいにしておき、あなたがたのすべての場所で、パンに欠乏させた。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰つて来なかつた。——主の御告げ。——「一、三の町は水を飲むために一つの町によろめいて行つたが、満ち足りることはなかつた。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰つて来なかつた。——主の御告げ。——　わたしは立ち枯れと黒穂病で、あなたがたを打つた。あなたがたの果樹園とぶどう畠、いちじくの木とオリーブの木がふえても、かみつくいなごが食ひ荒らした。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰つて来なかつた。
——主の御告げ。——　わたしは、エジプトにしたように、疫病をあなたがたに送り、剣であなたがたの若者たちを殺し、あなたがたの馬を奪い去り、あなたがたの陣営に悪臭を上らせ、あなたがたの鼻をつかせた。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰つて来なかつた。——主の御告げ。——　わたしは、あなたがたをくつがえした。神がソドムとゴモラをくつがえしたように。あなたがたは炎の中から取り出された燃えさしのようであつ

た。それでも、あなたがたはわたしのもとに帰つて来なかつた。

(アモス 4・6、8～11)

人々は悔い改めることをしないで、ますます心を頑なにするのです。それはまさに、エジプトの王パロと同じことでした。

1 宗教的な混乱

20節には、宗教的な混乱があることが記されています。これらの混乱がどのようなものか、いくつかの項目にわけて見ていきましょう。

・ 偶像礼拝

金、銀、銅、石、木など、偶像が作られる材料がこの20節にあげられています。これを見ると、偶像の真の姿が何であるか、ということに気づかされ、目を覚ませられます。この当時、偶像に對して使われていた一般的な言葉は、「飾りもの」を意味するのと同じ言葉でした。しかし聖書の中では、偶像に對して「影のようなもの」、「見せかけのもの」、「偽物」という言葉が使われています。偶像の本当の意味を伝えようとしていることがわかります。さて、「悔い改める」とはどういうことでしようか。先ず、偶像に仕えることから離れ、まことの神に仕えるようになることです。偶像をあがめる姿勢を捨て、神に對して栄光を帰するということです。また、「悔い改める」

とは、自分の罪を認め、自分の罪から離れ、自分の罪を告白し、イエス様が十字架上でなしてくださったみわさに對して感謝を捧げることを意味します。

・ 悪靈の働き

ここに、一つの「逆説」があります。人々は、「現実には力をもたない、虚しい偶像」を拝んでいるにすぎないように見えます。しかし、結果的には、そのことを通して、実は「現実的で力をもつ悪靈」に向かって礼拝を捧げていることになるのです。恐ろしいことです。このことがコリスト人への第一の手紙に説明されています。

肉によるイスラエルのことを考えてみなさい。供え物を食べる者は、祭壇にあずかるではありませんか。私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像の神にささげた肉に、何か意味があるとか、偶像の神に真実な意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。いや、彼らのささげる物は、神ではなくて悪靈にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪靈と交わる者になつてもらいたくありません。

(Iコリント 10・18～20)

まことの神でないものを拝むとき、すべてその背後には悪靈が立っています。旧約時代の予言者たちも偶像の眞の姿を次のように言っています。

偶像を造る者はみな、むなし。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕える

ものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。だが、いつたい、何の役にも立たない神を造り、偶像を鋲たのだろうか。見よ。その信徒たちはみな、恥を見る。それを細工した者が人間にすぎないからだ。彼らはみな集まり、立つがよい。彼らはおののいて共に恥を見る。鉄で細工する者はなたを使い、炭火の上で細工し、金槌でこれを形造り、力ある腕でそれを造る。彼も腹がすくと力がなくなり、水を飲まないと疲れてしまう。木で細工する者は、測りなわで測り、朱で輪郭をとり、かんなで削り、コンパスで線を引き、人の形に造り、人間の美しい姿に仕上げて、神殿に安置する。

彼は杉の木を切り、あるいはうばめがしや樺の木を選んで、林の木の中で自分のために育てる。また、月桂樹を植えると、大雨が育てる。それは人間のたきぎになり、人はそのいくらかを取つて暖まり、また、これを燃やしてパンを焼く。また、これで神を造つて拌み、それを偶像に仕立てて、これにひれ伏す。その半分は火に燃やし、その半分で肉を食べ、あぶり肉をあぶつて満腹する。また、暖まって、「ああ、暖まつた。熱くなつた。」と言ふ。その残りで神を造り、自分の偶像とし、それにひれ伏して拌み、それに祈つて「私は救つてください。あなたは私の神だから。」と言う。彼らは知りもせず、悟りもしない。彼らの目は固くふさがつて見ることもできず、彼らの心もふさがつて悟ることもできない。彼らは考へてもみず、知識も英知もないので、「私は、その半分を火に燃やし、その炭火でパンを焼き、肉をあぶつて食べた。その残りで忌みきらうべき物を造り、木の切れ端の前にひれ伏すのだろうか。」とさえ言わない。灰にあこがれる者の心は欺かれ、惑わされて、

自分を救い出す」ことができず、「私の右の手には偽りがないのだろうか。」とさえ言わない。

(イザヤ 44・9～20)

預言者たちが言つてているのは、偶像礼拝をする愚かな人々のいる限り偶像が存在する、ということです。今日でも人々は偶像を拝んでいます。しかも、これらの偶像礼拝者たちは、理性を十分備えた人々です。賢い人々でも偶像礼拝者となってしまうのはどうしてでしょうか。

私たちは、偶像の材料となる金、銀、銅、石、木などがそれ自体は何の力ももたないことを知つており、これらの物質を拝むのが愚かなことだということもわかつています。ところが現実的には、非常に熱心な偶像礼拝者たちがいて、これらの偶像が宗教的力をもつてゐるのを見ることがあります。彼らは自己中心的でわがまままで、他の人の言うことに耳を傾けようとしません。そして、時間であれ、金であれ、名誉であれ、健康であれ、どのような犠牲であれ払おうとしているのです。

聖書はこのような偶像礼拝の背後には「悪靈の力」が働いていると明らかに言つています。

悪靈は人間の内に力をふるいます。一例として、世界中で莫大な資金が軍備のためにつぎ込まれてゐる一方で、毎年何千万の人々が飢えのために死んでいきます。これも人間が悪靈に支配されていることの証拠です。

宗教的な混乱と社会的な混乱とは互いに関連しています。ここに一つのことわざがあります。それは「あなたが何を抨んでいるのか言いなさい。そうすれば、あなたの日常生活に何が起ころるかをあてましょう」というものです。

なんと、あなたがたは、役にも立たない偽りのことばにたよっている。しかも、あなたがたは盗み、殺し、姦通し、偽って誓い、バアルのためにいけにえを焼き、あなたがたの知らなかつたほかの神々に従つている。

(エレミヤ 7・8、9)

黙示録9章21節でてくる「殺人、魔術、不品行、盗み」はその一つ一つの罪が問題にされているのではなく、その心の態度が問題にされているのです。

・殺人

最初に「殺人」が指摘されますが、彼らは殺人に対しても悔い改めようとしているのです。憎しみから、お金のために、また単に自分の楽しみのために人を殺します。今日盛んに行われている妊娠中絶もまた殺人の一種です。神こそがすべての生と死との主であることを無視して、人々は自己中心的に問題解決をはかるうとして、その結果殺人を犯すのです。

・魔術

第二の罪は「魔術」です。魔術はエジプトの知恵と呼ばれているものですが、この魔術によつ

てエジプトの王は神に対する不従順の道へと墮ちて行きました。

モーセとアロンはパロのところに行き、主が命じられたとおりに行なつた。アロンが自分の杖をパロとその家臣たちの前に投げたとき、それは蛇になつた。そこで、パロも知恵のある者と呪術者を呼び寄せた。これらのエジプトの呪法師たちもまた彼らの秘術を使つて、同じことをした。彼らがめいめい自分の杖を投げると、それが蛇になつた。しかしアロンの杖は彼らの杖をのみこんだ。それでもパロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞き入れなかつた。

（出エジプト 7・10～13）

しかしエジプトの呪法師たちも彼らの秘術を使って同じことをした。それで、パロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞こうとはしなかつた。 （出エジプト 7・22）

魔術はまたバベルの知恵とも呼ばれています。この魔術的な知恵によって、人間は安心感を与えることがあるのです。しかしそれは、さばきへの道に誘われて行くことになります。

だから今、これを聞け。楽しみにふけり、安心して住んでいる女。心の中で、「私だけは特別だ。私はやもめにはならないし、子を失うことも知らないで済もう。」と言う者よ。子を失うことと、やもめになること、この二つが一日のうちに、またたく間にあなたに来る。あなたがどんなに多く呪術を行なつても、どんなに強く呪文を唱えても、これらは突然、あなたを見舞う。

（イザヤ 47・8、9）

人が幼子のように、まことの神である主への信仰をもとうとしないところで、悪靈が働き、魔術が人間を酔わせるのです。いわゆる靈媒者と交わりをもつことは、聖書によれば惡靈と交わりを持つことです。靈媒者を通して現わるのは、亡くなつた家族の靈ではなく、惡靈なのです。惡靈は偽りの靈です。アハブの時代にも偽りの靈がいました。

そのとき、主は仰せられました。「だれか、アハブを惑わして、攻め上らせ、ラモテ・ギルアデで倒れさせる者はいないか。」すると、あれこれと答えがありました。それからひとりの靈が進み出て、主の前に立ち、「この私が彼を惑わします。」と言いましたと、主が彼に「どういうふうにやるのか。」と尋ねられました。彼は答えました。「私が出て行き、彼のすべての預言者の口で偽りを言う靈となります。」すると、「あなたはきっと惑わすことができよう。出て行つて、そのとおりにせよ。」と仰せられました。今、ご覧のとおり、主はここにいるあなたのすべての預言者の口に偽りを言う靈を授けられました。主はあなたに下るわざわいを告げられたのです。」

(I列王記 22・20～23)

終わりの時代には偽りの靈がもつとたくさん出でます。

しかし、御靈が明らかに言われるよう、後の時代になると、ある人々は惑わす靈と惡靈の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。

(Iテモテ 4・1)

悪靈の教えは統一教会やものみの塔の教えです。

・不品行

第三の罪は不品行です。これは道徳的、靈的な意味での不眞実を表わすものです。終わりの時代には裏切りが特徴となります。あらゆる人同士が互いに相手を裏切り、誰も他の人に對する思いやりを持たなくなります。すべての人が自分自身のことだけを考えるようになります。それがこの終わりの時代の人々の根本的な態度です。

・盗み

第四の罪は盗みです。盗みは、愛すること、仕えること、そしていやすことのちょうど反対の行為です。イエス様を裏切ったイスカリオテのユダは盜人で、貧しい者たちのことを考えていかつたと聖書に書いてあります。

しかしこう言つたのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盜人であつて、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである。

(ヨハネ 12・6)

盜人とは、大変自分勝手な人々を総称することばでもあります。

盜人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。

(ヨハネ10・10)

今まで四つの罪を見てきました。私たちは、これら一つ一つが罪として問題なのではなく、そこに表われている「心の態度」が問題だということがわかりました。これらの罪の背後には、神の呪いがあります。罪の中にいる人は神から逃げているのです。その人は悔い改めをしたくないのです。その人は自分自身の人生が破産状態にあることを認めたくないのです。その人はへりくだりたくないし、赦しを求めようとは思いません。

しかし、もし、人が悔い改めようと決心するなら、神から逃げようとはしません。神から逃げないとは、イエス様のところに行つて自分自身の罪の赦しを求めることを意味します。このようにして罪の赦しを受けた者は、将来に対する不安、さばきにに対する恐れ、一切の不安から解放されます。なぜなら、その人はイエス様の血潮によつて自分の罪が清められ、過去のすべてが洗われ、罪が赦され、罪が忘れ去られたことを知るからです。

私たちは、すでに自分の罪の赦しを確信し、神の子とされている喜びを持っているでしようか。

近づいている神のご計画の成就 天の御使いの特徴

默示録10章1節から7節まで

1 御使いの特徴

2 御使いの栄光

- 1 雲の衣——主のご臨在
- 2 頭上の虹——主の憐れみ
- 3 太陽のような顔——主の勝利
- 4 火の柱のような足——主のさばき

3 御使いの権威

- 1 立っている場所
- 2 その声
- 3 誓い

私たちは默示録第10章を二つの部分に分けることができます。前半は「天の御使いの特徴と権威」（1節～7節）、後半は「人間の使い、ヨハネの権威と備え」（8節～11節）がテーマになっています。

これまで默示録第8、9章で、地上にくださる恐ろしいさばきについて見てきました。しかしそのさばきが行なわれる前に、ヨハネは、主が額に証印を押した人々を守られ、御座の前に多くの群衆が神に導かれているのを見ました（默示7章）。同じように10章でも、ヨハネは後の第12、13章に出てくる苦しみのときに対する慰めを与えられるのです。

ダニエルは幻を見たとき全身の力を失ってしまいましたが、主によって将来起ころうとしていることを告げられる前に、励まし、力づけられました。

私は、ひとり残って、この大きな幻を見たが、私は、内から力が抜け、顔の輝きもうせ、力を失った。

（ダニエル 10・18、19）

すると、人間のように見える者が、再び私に触れ、私を力づけて、言った。「神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。」彼が私にこう言つたとき、私は奮い立つて言つた。「わが主よ。お話しください。あなたは私をちからづけてくださいましたから。」

（ダニエル 10・18、19）

この時のダニエルのように、ヨハネも苦しみのときに対する慰めを与えられているのです。この

章の目的は、読者を「力づけ」、「励ます」ことがあります。

これから10章前半にある三つの問題、「御使いの特徴、この御使いは誰であるか」、「御使いの栄光、どのように栄光が現われたか」、「御使いの権威、どうやって知ることができるか」について考えてみましょう。

また私は、もうひとりの強い御使いが、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。¹その頭上には虹があつて、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようであつた。²その手には開かれた小さな巻き物を持ち、右足は海の上に、左足は地の上に置き、しげがほえるときのように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がおのおの声を出した。七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から声があつて、「七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな。」³と言うのを聞いた。それから、私の見た海と地との上に立つ御使いは、右手を天に上げて、永遠に生き、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方をさして、誓つた。「もはや時が延ばされることはない。⁴第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。」

(默示 10・1～7)

1 御使いの特徴

默示録第10章1節にある「強い御使い」が誰であるかについては、すでに多くの人々によつて

考えられきましたが、私はこれは黙示録第8章3節に出てくる「金の香炉を持つて祭壇のところに立つた」御使いと同じ御使いだと考えます。つまり、イエス様が別の姿をとつてここに現われておられるのだと思います。8章に現わされたお方は「大祭司」としてのイエス様でした。10章に現わされた御使いは、「来るべき世界の支配者」としてのイエス様です。

ここで問題となるのはイスラエルの民です。千年王国で中心となるのはイスラエル民族です。旧約聖書におけるイスラエルの歴史の中で、イエス様は何度も「御使い」の姿でイスラエルの民にご自身を現わしておられます。

主の使いは、荒野の泉のほとり、シユルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけ、「サラの女奴隸ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか。」と尋ねた。彼女は答えた。「私の女主人サラのところから逃げているところです。」そこで、主の使いは彼女に言った。「あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして彼女のもとで身を低くしなさい。」また、主の使いは彼女に言つた。「あなたの子孫は、わたしが大いにふやすので、数えきれないほどになる。」さらに、主の使いは彼女に言つた。「見よ。あなたはみごもつていて。男の子を産もうとしている。その子をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞き入れられたから。彼は野生のろばのような人となり、その手は、すべての人に逆らい、すべての人の手も、彼に逆らう。彼はすべての兄弟に敵対して住もう。」そこで、彼女は自分に語りかけられた主の名を「あなたはエル・ロイ。」と呼んだ。それは、「ご覧になる方のうしろを私が見て、なおもここにいるとは。」と彼女が言つたからである。

神は少年の声を聞かれ、神の使いは天からハガルを呼んで、言つた。「ハガルよ。どうしたのか。恐れてはいけない。神があそこにいる少年の声を聞かれたからだ。行つてあの少年を起こし、彼を力づけなさい。わたしはあの子を大いなる国民とするからだ。」神がハガルの目を開かれたので、彼女は井戸を見つけた。それで行つて皮袋に水を満たし、少年に飲ませた。

それから主の使いは、再び天からアブラハムを呼んで、仰せられた。「これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかつたから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。」

(創世記 22・15～17)

そして神の使いが夢の中で私に言われた。「ヤコブよ。」私は「はい。」と答えた。すると御使いは言われた。「目を上げて見よ。群れにかかつてゐる雄やぎはみな、しま毛のもの、ぶち毛のもの、まだら毛のものである。ラバンがあなたにしてきたことはみな、わたしが見た。わたしはベテルの神。あなたはそこで、石の柱に油をそそぎ、わたしに誓願を立て

たのだ。さあ、立つて、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。」

(創世記 31・11～13)

すると主の使いが彼に、現われた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかつた。：神は仰せられた。：…また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神である。」

(出エジプト 3・2、6)

さて、主の使いがギルガルからボキムに上つて来て言つた。「わたしはあなたがたをエジプトから上させて、あなたがたの先祖に誓つた地に連れて来て言つた。」「わたしはあなたがたとの契約を決して破らない。」

(士師 2・1)

主の使いが彼に現われて言つた。「勇士よ。主があなたといつしょにおられる。」ギデオンはその御使いに言つた。「ああ、主よ。もし主が私たちといつしょにおられるなら、なぜこれらのことのみな、私たちに起こつたのでしょうか。私たちの先祖たちが、『主は私たちをエジプトから上らせたではないか。』と言つて、私たちに話したあの驚くべきみわざはみな、どこにありますか。今、主は私たちを捨てて、ミデヤン人の手に渡されました。」すると、主は彼に向かつて仰せられた。「あなたのその力で行き、イスラエルをミデヤン人の手から救え。わたしがあなたを遣わすのではないか。」ギデオンは言つた。「ああ、主よ。私

にどのようにしてイスラエルを救うことができましょう。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。」主はギデオンに仰せられた。「わたしはあなたといつしょにいる。だからあなたはひとりを打ち殺すようにミデヤン人を打ち殺そう。」

(士師 6・12～16)

主が「御使い」としてご自身を現わされるときには、いつも他の御使いたちとははつきりと異なる姿をとられます。そのときには、その名は「神の使い」、「主の使い」、「ご自身の使い」、「わたしの使者」、「契約の使者」と呼ばれます。

ついでイスラエルの陣営の前を進んでいた神の使いは、移つて、彼らのあとを進んだ。
それで、雲の柱は彼らの前から移つて、彼らのうしろに立ち、：　(出エジプト 14・19)

しかし、彼が出かけると、神の怒りが燃え上がり、主の使いが彼に敵対して道に立ちふさがつた。バラムはろばに乗つており、ふたりの若者がそばにいた。　(民数記 22・22)

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救つた。その愛とあわれみによつて主は彼らを贖い、昔からずっと彼らを背負い、抱いて来られた。

(イザヤ
63・9)

「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ねもとめている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ來てある。」と万軍の主は仰せられる。

(マラキ 3・1)

これらは主がご自身を人間に現わそうとなさるときの姿です。

この「御使い」はヤコブに向かつては「わたしはベテルの神」と言い、モーセに対しては「わたしはアブラハム、イサク、ヤコブの神である」と言っています。またハガルに向かつて、「あなたの子孫はわたしが大いに増やす」と言されました。これらの言葉は、ただ主ご自身だけが語ることのできる言葉です。

ハガルはこの御使いに対して、「あなたはエル・ロイ（^ミ覧になる神）」と呼んでいます。ヤコブは「すべてのわざわいから私を贖われた御使い」（創世記48・16）と呼びかけました。この御使いの現われた場所で、彼らは礼拝をささげています。しかしふつうの御使いに対しては礼拝することは禁じられているのです。

これらのことを見聞き、また見たのは私ヨハネである。私が聞き、また見たとき、それらのことを示してくれた御使いの足もとに、ひれ伏して拝もうとした。すると、彼は私に言った。「やめなさい。私は、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書のことばを堅く守る人々と同じしもべです。神を拝みなさい。」

(黙示 22・8、9)

「主の御使い」はイスラエルの民を守るものであり、この御使いの声にイスラエルの民は従わな

ければならなかつたのです。

見よ。わたしは、使いをあなたの前に遣わし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所
にあなたを導いて行かせよう。あなたは、その者に心を留め、御声に聞き従いなさい。決
して、その者にそむいてはならない。わたしの名がその者のうちにがあるので、その者はあ
なたがたのそむきの罪を赦さないからである。
(出エジプト 23・20、21)

士師記の中で主の使いは「わたしの名は不思議という。」(士師13・18)と言つています。そし
てイザヤ書の中ではメシヤも「その名は不思議な助言者」(イザヤ9・8)と記されています。
黙示録10章に出てくる御使いは、永遠のみことばである「主イエス様ご自身」です。みことば
を通じてイエス様はご自身を現わしておられるのです。

初めからあつたもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、じつと見、また手でさわつ
たもの、すなわちいのちのことばについて：
(ヨハネ 1・1)

マラキ書3章1節では、イスラエルが尋ね求めているメシヤは「契約の使者」であると言つて
います。この御使いをイスラエルは待ち望んでいます。今私たちが学んでいるこの10章にお
いて、約束された解放が近いことが述べられています。

以上のことから見て、ここに出てくる「御使い」が、「まことの神であるイエス・キリスト」で
あることは明らかです。

2 御使いの栄光

この「使い」の栄光がどうやって現わされるか、ここには四つのことが記されています。

1 雲の衣—主のご臨在

第一にこの使いは「雲に包まれて」いました。「雲」は旧約聖書では「主のご臨在」を象徴するものでした。イスラエルの民は荒野を四十年にわたって雲の柱、火の柱によつて導かれました。ここでも「雲」は主のご臨在を現わしている言葉です。イエス様は雲に包まれて天に上つて行かれました。そして再び雲に乗つて来られるのです。

見よ、彼が雲に乗つて来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかし。アーメン。
(黙示 1・7)

イエス様の再臨のときに、すべてのまことの主を信ずる人々は、雲の中で主に出会うのです。

次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといつしょに雲の中に引き上げられ、空中で主と会うのです。

(イテサロニケ 4・17)

黙示録の中でもイエス様はしばしば雲に包まれて現われておられます。

また、私は見た。見よ。白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗つておられた。

雲は天の栄光を現わすものです。

2 頭上の虹—主の憐れみ

第二に、「虹」が「御使い」の頭上にありました。「虹」は造られたすべてのものに対する「神のあわれみ」を示しています。イエス様は確かにこの地をさばくために来られます。しかしイス様はこの地を滅ぼさないという約束をお忘れになつたのではなく、この地を聖めようとしてさばかれるのです。これが「虹」のもつ意味です。

千年王国の前にこの地が聖められなければなりません。しかし神のさばきは神の怒りを現わすものではなく、神の誠実さを現わすものです。

3 太陽のような顔—主の勝利

第三にその顔は「太陽」のように輝いていました。ヨハネは前にもこのように輝く顔を見たことがあります。(黙示1・6) 太陽のように輝く顔は勝利者の顔です。

このような輝きをパウロもまた見たのです。

ところが、道を進んでいつて、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。

(使徒 9・3)

このときパウロを照らした光は太陽のように輝いていたのです。

太陽は「キリスト」の象徴でもあります。イスラエルの民は来るべきメシヤを太陽として待ち望んでいるのです。

しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼にはいやしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにはねまわる。 (マラキ 4・2)

4 火の柱のような足—主のさばき

第四に、「御使いの足」は「火の柱」のようです。これはさばきを現わし、この御使いがさばくために来られることを示しています。イエス様にとって価値のないものは滅ぼされるのです。前に默示録1章15節で見た御使いの足はそれとは違つて、「炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのよう」だつたことを思い出してください。

3 御使いの権威

次にこの御使いの「権威」について考えてみましょう。私たちはどのようにしてその権威を知ることができるのでしょうか。それについて次の三つのことを見ていきましょう。

1 立っている場所

第一に御使いの立っている場所について見ましょう。この御使いは「右足は海の上に、左足は地の上に」（2節）置いています。ここでイエス様はすべての地を「自身のものとされたのです。すべての地はイエス様が創造されたものです。そしてご自身の血の代価を支払つて、この地を買いた戻されたのです。イエス様こそが全地を所有しておられるお方です。

地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。

（詩篇 24・1）

モーセは彼に言つた。「私が町を出たら、すぐに主に向かつて手を伸べ広げましょ。そうすれば雷はやみ、雹はもう降らなくなりましょ。この地が主のものであることをあなたが知るためです。

（出エジプト 9・29）

今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中にあって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。

（出エジプト 19・5）

海は主のもの。主がそれを造られた。陸地も主の御手が造られた。

（詩篇 95・5）

時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にある

ものも、いつさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。

(エペソ 1・10)

イエス様が地と海とに両足を置いておられることは、イエス様が「無限の支配権」をこの世に對して持つておられることを表わしています。ここまでsabaきは、国ごとに個々にくだされていたのですが、これから先は全地にわたって行なわれるのです。

2 その声

2節にはこの御使いが「しげがほえるときのように大声で叫んだ」と記されています。イエス様が地上におられたとき、人々はその声を聞くことができました。その御声を聞いてラザロは墓から出でたのです。またイエス様の御声によつて嵐は静められました。十字架の上でイエス様は「完了した」と言つて息をひきとられたのです。

10章では、イエス様は悪魔もおののくほどに力強い声で叫ばれます。雷のような大声については、聖書に他にも例が見られます。

主は、天から雷鳴を響かせ、いと高き方は御声を発せられた。（IIサムエル 22・14）

あなたは彼らにこのすべてのことばを預言して、言え。「主は高い所から叫び、その聖なる御住まいから声をあげられる。その牧場に向かつて大声で叫び、酒ぶねを踏む者のように

に、地の全住民に向かつて叫び声をあげられる。」

(エレミヤ 25・30)

水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。

(詩篇 104・7)

「ししの声」と「雷の声」はともに、近づいているさばき主を象徴している言葉です。「七つの雷」は、さばきが完全に行なわれることを告げ知らせるものです。

默示録2、3章で私たちは、神の「七つの御靈」とともに主の恵みと平安が与えられているのを見てきましたが、ここでは主の「七つの雷」とともに、悔い改めないすべての人々に対してもさばきが与えられます。主の声はイエス様の支配を認めるものです。そして主の声は、イエス様の御國の建設に至る前の、イエス様のさばきを知らせているのです。

神の声に耳を傾けず悔い改めをしない人々に対して、神のさばきがくだされます。さばきを通して神は語りかけておられるのです。

動物の世界では、すべての生き物は王と言われる強いししの前に息をこらします。ししの声の前にはすべての動物が恐怖のため沈黙します。ちょうどそのように、イエス様のさばきの前には、全世界が静まります。主の呼びかけを拒んだために、人々は主のさばきにあうのです。

ヨハネはこの恐ろしい「主のさばきのことば」を書き留めようとしましたが、御使いはそれを禁じました。この世は、「主のさばきがいつ起ころか」を知るべきではないのです。さばき主は「盗人」のように突然この世に来られる、とあります。その昔ダニエルも、同じように主によつて示

3-14 近づいている神のご計画の成就1・天の御使いの特徴と権威

されたことばを封じなければなりませんでした。ダニエルは書き記したことばを公けにすることができなかつたのです。

「先に告げられた夕と朝の幻、それは眞実である。しかし、あなたはこの幻を秘めておけ。これはまだ、多くの日の後のことだから。」
(ダニエル 8・26)

「ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。」
(ダニエル 12・4)

しかしその封印の期間は、一定の時に定められていました。

ヨハネも、またパウロも、その示されたことばを書くことも語ることも許されませんでした。

バラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。
(IIコリント 12・4)

ですから私たちとは、決して主からすべてを知らされているのではなく、部分的な啓示を与えていたに過ぎないのです。主は私たちに救いと、悪魔の攻撃に対する必要な力を与えてくださいますが、その他のすべてのことは私たちが後になつて経験するようになるのです。

3 誓い

この御使いは一体何のために誓いを立てたのでしょうか。

信仰をもつてゐる人でさえ、ときには、果たして主はその約束を本当に成就されるのだろうかと
いう疑いにとらわれることがあるでしょう。誓いをする人はその誓いを守らなければなりません。
ここでまことの神であるイエス様は黙示録10章5、6節にあるように、「永遠に生き、天とその中
にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方をさして」誓われた
のです。

多くの人々は、「神は死んでしまった」と言つています。しかしまことの神は生きておられます。
神は変わることのないお方です。この世のすべてのものが過ぎ去つても神は動かされることがあ
りません。たとえこの世界のすべての人が神の言葉を無視しても、神はご自身のことばを守られ
ます。この神をさして、御使いは誓われたのです。それはまことの神が将来、すべてのことにお
いて新たにことを起こされるからです。

この誓いの内容は「もはや時が延ばされることはない」というものです。ギリシャ語では「時」
と「ためらい」は互いに関係をもつてゐる言葉ですから、「時」というのは「神によつて延ばされ
た時期」をも意味します。しかし、ここでは、「もはや何のためらいも、少しの延期もゆるされな
い」と語られているのです。神の「時」は必ず成就します。

そこで、神はノアに仰せられた。「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来てい
る。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに

に滅ぼそうとしている。

(創世記 6・13)

「それゆえ、彼らに言え。『神である主はこう仰せられる。わたしが言ったことはすべてもう延びることなく、必ず成就する。』——神である主の御告げ。——」

(エゼキエル 12・28)

人類が墮落して以来、地上の歴史は、結局「世界審判の延期」に過ぎないと言えましょう。そしてこれは「主の赦しの愛の現われ」以外の何ものでもありません。主の目的は、墮落してしまった人類を悔い改めへと導くことです。

あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。

(ローマ 2・3、4)

しかし、「あわれみと恵みのとき」が終わる瞬間がやがては来ます。ですから私たちは遅すぎることのないよう、「今日、この日」を用いなければなりません。

私たちは默示録の中で、さばきが時を追つて激しくなつてくるのを見てきました。「封印のさばき」においては人類の四分の一がさばかれ(默示6・8)、「ラツパのさばき」においては三分の一がさばかれ(默示9・18)ることを見できました。しかし破局が近づいているだけではなく、そ

れと同時に人々の「頑なな心」と「悔い改めたくない」という思いもますます強固なものになつてきているのです。「封印のさばき」の時、人々は耐え難さのあまり山や岩に向かつて、「御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまつてくれ。」(黙示6・16)という叫び声をあげました。「封印のさばき」においては、「殺されずに残った人々は、その手のわざを悔い改めないで、：偶像を拝み続け、その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを悔い改めなかつた。」(黙示9・20、21)と記されています。こういうことの後で、この御使いの「誓い」がなされているのです。「最後のラッパのさばき」によつて「恵みのとき」は過ぎ去つてしまします。それまでは主は忍耐して待つておられます、しかし、それ以上もはや主は待たれることはありません。主の招きが終わつた後で、主の最後のさばきが行なわれます。このさばきについては16章の「鉢のさばき」において部分的に見ることができます。その時人々は「神にけがしごとを言つた」のです。(黙示16・21)

7節に「神の奥義」のことが語られています。「奥義」というのは聖書では、「今まで隠されていたけれど後に神によって明らかにされる真理」のことです。私たちはここで、第七の御使いがラッパを吹き鳴らすときに「神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する」(黙示10・7)ことを知ります。そしてイエス様のご支配がはじまるのです。

第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起つて言つた。

「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなつた。主は永遠に支配される。」

(黙示 11・15)

旧約聖書において主は、「キリストが先ず苦しみを受け、その後ですべてを支配される」ことを預言者たちに示されました。

この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御靈が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、誰を、また、どのような時をして言われたのかを調べたのです。

(Iペテロ 1・11)

しかし、イエス様が支配をなさるその時が「いつ」であるかは、預言者にも隠されていました。それは「この世の悪が最もひどくなるとき」です。悪もまた「満ちる」ようにならなければならぬのです。

主人は言つた。「いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいつしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。」（マタイ 13・29、30）

神は悪を満ちあふれるままにしておくために、悪魔に自由を与えておられます。多くの人にとって、このことは理解できないかもしれません。詩篇73篇の作者も「このことが理解できませんでした。しかしこの時代もやがては終わり、「神の支配の時」が始まるのです。悪魔は縛られ自由を失います。この預言者の預言は成就するのです。

7節の「告げられたとおりに成就する」の中にある、「告げられた」という言葉は、原語を直訳すると「福音が宣べられた」であると聖書の注にあります。この「福音」とはさばきのことではありません。さばきのあとで実現する「キリストのご支配」のことです。十字架につかれた後、ご自身のからだをもつて復活なさったイエス・キリストが、全世界を支配し、まことの神を知る知識が全地に満ちるその時のことの意味しているのです。

主のご支配のもとで地は栄えます。地を平和と喜びとが支配するのです。

この「強い御使い」は、一方でさばきの御使いとして、さばきがよりいつそう厳しくなることを伝えていますが、もう一方では「福音を伝える御使い」でもあります。まもなくイエス様が支配されるようになる、主のご計画が成就することを告げておられるのです。主の民に、「あなたがたの救いが近づいているから喜びなさい」と呼びかける声が聞こえてくるではありませんか。

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

(ローマ 1. 16)

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであつても、救いを受ける私たちには、神の力です。

(コリント 1. 18)

「十字架」こそが「福音」であり、イエス様が「救いのみわざを成就してくださった」という「喜びのおとずれ」であり、「滅びゆく罪びとを贖うために払ってくださった犠牲の死」です。パウロ

は「福音は：救いを得させる神の力である」とはつきり言っています。「福音」であるイエス様こそ、私たちを救うことがおできになり、また解放することができる唯一のお方です。

現在この世には、ただ「破壊するための力」だけがあふれていますが、イエス・キリストそのものである福音は「築き上げる力」です。福音の救う力はすべての人のために提供されています。ひとりひとりが感謝して福音であるイエス様を受け入れさえすればよいのです。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。

（ヨハネ 5・24）

信じる者は、それを切に望む者は、福音を体験するのです。

近づいている神のご計画の成就 2 人間の使い、ヨハネの権威と備え

默示録10章8節から11節まで

1 主が私たちに語られる—みことばの七つの働き

2 主に聞き従う

1 正しく聞く

- ・主が語るまで黙っていること
- ・みことばを食べること
- ・服従すること

2 正しく聞いた結果

- ・大きな喜び
- ・深い苦しみ

⁸ それから、前に私が天から聞いた声が、また私に話しかけて言つた。「さあ行つて、海と地との上に立つておる御使いの手にある、開かれた巻き物を受け取りなさい。」⁹ それで、私は御使いのところに行つて、「その小さな巻き物を下さい。」と言つた。すると、彼は言つた。「それを取つて食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」¹⁰ そこで、私は御使いの手からその小さな巻き物を取つて食べた。すると、それは口には蜜のようにも甘かつた。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなつた。¹¹ そのとき、彼らは私に言つた。「あなたは、もう一度、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならない。」

(黙示録 10・8～11)

これから学ぶ個所のテーマは、「人間の使い、ヨハネの権威とその備え」です。

10章4節で見たように、ヨハネは雷が語つたことを書き留めようとしたときに、「書き記すな」という天からの声を聞きました。それと同じ声が今度は「新しい使命」つまり「もろもろの民族、國民、國語、王たちについて預言しなければならない。」(11節)という使命をヨハネに与えたのです。「預言する」ということは、主の御名と主の権威とによつて人々に主のみことばを伝えることです。主に遣わされる使者たちは、主のみことばを自分で選んで伝えるということはできません。ヨハネが預言するに先立つて、主から与えられたみことばを食べたように、自分自身が主のみことばと一つにならなければならないのです。

ところで、私たち信仰を与えられた者の使命は何でしょうか。一方においては「人」に仕える

ことであり、もう一方においては「主」に仕えることです。

私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった（黙示　1・6）

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださつた方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

（ペテロ　2・9）

「人に仕える」という意味は、おもに人のためにとりなしをするということであり、それは隠れた所でなされる主への奉仕です。これに対し「主に仕える」ことは、主のみことばを公に人々に伝えることです。私たちはこのようなご奉仕への備えができるでしょか。

ヨハネには、いかにして「主の使い」として預言する者の権威が与えられたのでしょうか。

これには二つの前提があります。第一に「主が私たちに語りかけられること」、第二に「私たちが主に聞き従うこと」です。これからそのことについて考えてみましょう。

1　主が私たちに語りかけられる—みことばの七つの働き

主はヨハネに向かつて個人的に語りかけておられます。主が人間に直接語りかけられるというのは、驚くべき奇蹟です。主が人間を信頼しておられるということは、私たちの理解を超えたこ

とです。そして主が現在についても将来についても、ご自身の目的を人間に示されるのは聖書に見られる事実です。

主はこう考えられた。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」

（アモス 3・7）
まことに、神である主は、それはかりごとを、ご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさらない。

「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」

（ヨハネ 15・15）

ヨハネが与えられた巻物は、封じられたものではなく、開かれていました。ヨハネはこの開かれた巻物によって、主がこれから何をなさるうとしているのかを知ることができました。主は現代に生きている私たちに対しても語りかけようとしておられます。私たちも神に語つていただけるよう期待しようではありませんか。

エゼキエルは神のみことばを拒むことなく受け入れました。

「人の子よ。わたしがあなたに語ることを聞け。反逆の家のようにあなたは逆らってはな

らない。あなたの口を大きく開いて、わたしがあなたに与えるものを食べよ。」そこで私が見ると、なんと、私のほうに手が伸ばされていて、その中に一つの巻き物があった。それが私の前で広げられると、その表にも裏にも字が書いてあって、哀歌と、嘆きと、悲しみとがそれに書いてあつた。その方は私に仰せられた。「人の子よ。あなたの前にあるものを食べよ。この巻き物を食べ、行って、イスラエルの家に告げよ。」そこで、私が口を開けると、その方は私にその巻き物を食べさせ、そして仰せられた。「人の子よ。わたしがあなたに与えるこの巻き物で腹ごしらえをし、あなたの腹を満たせ。」そこで、私はそれを食べた。すると、それは私の口の中で蜜のようにならつた。その方はまた、私に仰せられた。「人の子よ。さあ、イスラエルの家に行き、わたしのことばのとおりに彼らに語れ。」

(エゼキエル 2・8～3・4)

ヨハネも主のみことばを自分のものとするために、巻物を食べなければなりませんでした。ここにおいて食べるというのは、もちろん紙を食べるのではなく、靈的な何ものかを食べるということです。主のみことばは、ただ単に聞いたり読んだり頭で理解するだけでは十分ではありません。そのままを受け入れ、かみくだき呑み込む、つまり食べなければなりません。そうして初めて、神のみことばは私たちのものとなるのです。

聖書を通して今も主は私たちに語りかけておられます。その目的は何でしょうか。主のみことばは私たちに何をすることができるのでしょうか。ここで短く七つのことについて考えてみたい

と思います。

第一に、主のみことばは堅い心を打ち碎くことができます。五旬節のときには、多くの人々の心が主のみことばによつて打ち碎かれました。

人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」と言つた。そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によつてバブテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖靈を受けるでしょう。」（使徒 2・37、38）

第二に、主のみことばは靈と魂とを互いに切り離すことができます。人は靈で主のことを思い、魂は人間の考え方や感情、また意思を働かせます。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと靈、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、こちらのいろいろな考え方やはかりごとを判別することができます。

（ヘブル 4・12）

第三に、主のみことばは私たちを新しく生まれ変わらせる力があります。「生まれ変わり」は人間の人生にとつて最も重要なことです。この奇蹟は主のみことばによつて成し遂げられるのです。

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。 （Iペテロ 1・23）

第四に、主のみことばは生きた信仰を生み出します。生きた信仰がなければ、希望も喜びもありません。主のみことばはただ聞くだけではなく、聞いて受け入れなければなりません。そうすることによって人は主の力を体験するのです。

そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

(ローマ 10・17)

第五に、主のみことばは永遠のいのちの確信を与えます。人間の理解や人間の感情ではなく、神のみことばがその確信の土台なのです。

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのこと書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持つていてることを、あなたがたによくわかるためです。

(イヨハネ 5・13)

第六に、主のみことばは私たちを聖め、守りを与えます。人間の努力ではなし得ないことを、主のみことばはなしとげることができます。

どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。あなたのことばに従つてそれを守ることです。私は心を尽くしてあなたを尋ね求めています。どうか私が、あなたの仰せから迷い出ないようにしてください。あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。

(詩篇 119・9～11)

第七に、主のみことばは間違った教えから人間を守ってくれます。現代の特徴は多くの間違った教えが人々に奉じられていることです。この世の中で、私たちは何が真実であり何が偽りであるかをどうやって見分けることができるのでしょうか。ただ主のみことばによつてだけそれを知ることができます。

私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語つて、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起ころう。ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです。

(使徒 20・29～32)

主はヨハネに向かつてお語りになりました。私たちもまた主の語りかけを待つていてしか。もし、私たちが「主よ、お語りください。しもべは聞いております。」という態度をとつていないとしたら、それはわざわいです。主のみ声を聞きたいという思いを持つていなければ、私たちが誤まつた道に行くことはたやすいことです。主のみことばを聞かずになされる私たちの奉仕や努力もまったくむなしいものです。祝福されたご奉仕は、主が私たちに語りかけることがおで

きになる状態にあってはじめてなされるのです。

2 主に聞き従う

ヨハネが「神の使い」として権威を与えられるために先立つたことがあります。それは主のみことばを受け入れる態度です。主のみことばは、ただ聞いて理解するだけではなく、食べて、自分自身の一部としなければなりません。ここで二つの問題についてさらに詳しく考えて見ましょう。一つは「正しい聞き方」とはどういうものか、もう一つは「正しい聞き方の結果」は何かです。

1 正しく聞く

・主が語られるまで黙っていること

正しい聞き方とは、主が語られるまで自分自身は黙っていることです。私たちが何を考え、何を望んでいるかということが大切なではありません。主が何を考え、何を望んでおられるかを私たちが体験して知ることが大切です。主は私たちが自分たちの願いやわがままを言うことをお許しにならぬのではなく、主が何を欲しておられるかを私たちが聞こうとするのを望んでおられるのです。そうして初めて、私たちはほんとうの喜びと平安と自由とを体験することができるのです。

ヨハネは始めに「開かれた巻物をとれ」という命令を受けました。私たちはなんとしばしば「聖書をとつて、わたしのことばを食べよ」という主の呼びかけを聞いたことでしょう。しかし何

度それを無視し、他の新聞や書物をとつて読むことの方を好んだでしようか。

・みことばを食べること

正しく聞くということは、主の前に黙つて主が語つてくださるのを待つことと、主が語つてくださったみことばを受け入れる、「食べる」ということです。

主がすべてのことについて語つてくださることができるよう、私たちも備えをしようではありませんか。聖書のみことばの中で、自分の好きなところだけを探して読むのはまちがつています。イエス様は私たちの生活をよりよくするために忠告を与えようとなさっているのではなく、私たちの生活全体をご自身の御手の内で用いたいと望んでおられるのです。

私たちが主のみことばを受け入れるときにのみ、主のみことばは私たちのものとなります。食は「食べられる」ことによって私たちのものとなり、身体の成長を助けます。同じように主のみことばは、私たちが「食べる」ときにはじめて実をもたらすのです。

ダビデは昼も夜も主のみことばを思つていました。

どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょう。これが一日中、私の思いとなっています。あなたの仰せは、私を私の敵よりも賢くします。それはどこしえに、私のものだからです。私は私のすべての師よりも悟りがあります。それはあなたのさとしが私の思いだからです。

ヨシュアは神のことばを心に留めたとき、成功しました。

(詩篇 119・97～99)

この律法の書を、あなたの口から話さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。
そのうちに記されているすべてのことを守り行なうためである。そうすれば、あなたのするこことで繁栄し、また榮えることができるからである。

(ヨシュア 1・8)

まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。

(詩篇 1・2、3)

私たちも神の使いとなるためには、先ず始めに主のみことばを食べなければなりません。私たちが主のみことばと一つになるなら、主の力を体験するのです。

・服従すること

正しい聞き方とは、主が語られるまで自分自身は黙っていることと、主のみことばを聞いて受け入れる、「食べる」ということ、そして主のみことばに服従することです。

服従とはヨハネにとつては「預言をすること」でした。自分の聞いたことを、さらに他の人に宣べ伝えることでした。

ヨハネは正しく聞き、御使いのところへ行つて巻物を受け取つて食べました。正しく聞くとはいつも「服従」を含んでいるものです。正しく聞くということは、経験した主のみことばを証し

する、宣べ伝えるということです。私たちが主のみことばに服従するときに、主は奇蹟をなしてくださいます。

2 正しく聞いた結果

正しく主のみことばを聞いた結果、もたらされるものは何でしょうか。それは大きな喜びです。
・ 大きな喜び

食物の中の食物として、神のことばはどんな食物よりも人の心を満足させるものです。

主の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、主の仰せはきよくて、人の目を明るくする。

(詩篇 19・8)

あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。

(詩篇 119・103)

私はあなたのみことばを見つけて出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

(エレミヤ 15・16)

主のみことばを通して、私たちはキリストの苦しみと死を知ります。またキリストの流された血潮と、値なしに与えられている救いを知ることができます。「正しく聞く」というのは自

分が黙して主に語つていただくことです。自分の意見や考えはむなしくして、神に従うということです。そうするときに絶えることのない喜びと平安が保たれます。喜びの土台は罪の赦しを与えられているということと、主との間に平和をもつていているということ、そして義とされているということにあります。この確信を私たちは主の偽りのないみことばを通して与えられます。

私たちはどれほどの豊かさを主のみことばを通して与えられているでしょうか。もし喜びに満たされていないとしたら、その人は主のみことばによって生きていないので。なんと多くの人々が、みことばの飢饉の下で生きていることでしょう。主のみことばを正しく聞くことをしない人は、飢え渴きに悩むのです。

私たちが宣べ伝えるべき福音は「喜びの福音」です。私たちの意見ではなく、主のみことばを宣べ伝えなければなりません。「預言する」ということは主の権威によって主のみことばを宣べ伝えることです。

主のみことばは、ことを起こすものです。私たちが罪の赦しのみことばを宣べ伝えるときに、罪の赦しが起こります。罪が赦されるであろうことを私たちが自分勝手に望んでいるというでは決してなく、主のみことばによつて実際に罪の赦しが起こります。人間的にみると、「神の使い」つまりみことばを宣べ伝える「神のしもべ」たちは無力で、その人自身は何も誇れるものは持つていよいよ見えます。しかし主のみことばが彼らの宝なのです。このような「神の使い」については聖書の中に数多く記述されています。

たとえばヨセフはエジプトで囚われの身となり、何の希望もありませんでした。しかし彼は主

のみことばを通して力を得ました。

またモーセは平凡な羊飼いでしたが、主のみことばと権威によってイスラエルの民を囚われの身から解放しました。

そしてダニエルはバビロンに囚われていましたが、主のみことばによって力を得ることができたのです。

・深い苦しみ

神のことばに従つた結果は単に喜びを得られるだけでなく、「深い苦しみ」を与えられることにもなります。次にこのことを考えてみたいと思います。

主のみことばは聞く者には「喜びと恵みの言葉」ですが、他方では「悔い改め」と「さばき」を求める言葉にもなります。この意味で、主のみことばは「苦しみの言葉」でもあります。私たちが宣べ伝えるみことばを私たち自身が受け入れなければなりませんが、その受け入れたみことばは私たちをさばくことにもなるのです。主のみことばは靈と魂とを切り離します。自分の感情や考え、意志などは投げ捨てられなければなりません。自分が否定されなければならないのです。私たちが主のみことばを伝えるときには、この主のみことばが私たちを自己否定の苦しみへと導くのです。

エレミヤやパウロも誤解を受け苦しめられたことがありました。みことばを伝える者はこの世では「アウトサイダー」であり、「平和を乱す者」で、「異分子」とみなされます。悔い改めのな

い世界にみことばが宣べ伝えられるということは、つねに苦しみを意味します。

私たちは大勢の人々が救われることを望んでいます。しかし多くの人々からそれを拒まれます。これは私たちにとつて苦しみとなります。

イエス様ご自身もみことばのこのよう二つの面を経験されました。イエス様は大いに喜ばれると聖書は一方で述べています。しかし一方では、イエス様はさばきのことを思つてエルサレムのために「泣かれた」と書かれています。

エルサレムに近くなつたころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知つていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。」

（ルカ 19・41、42）

エルサレムは悔い改めることがありませんでした。イエス様が泣かれたのは、人々がイエス様に逆らつたからではなく、彼らがさばきにむかつていることをご覧になられたからです。

この苦しみが「とりなし」と「証し」との源となります。福音が、つまりイエス様が拒まれるときには、イエス様のみことばはさばきのみことばになります。イエス様なしにはどんな希望もなく、ただ「滅びる」だけです。私たちがこの事実をほんとうに知つたときには、ネヘミヤやエズラ、ダニエルのように、滅びに向かっている人々のために自ら悔い改め、とりなしをしないではいられなくなるでしょう。これらの「神の使い」たちは、自分自身が罪を犯したかのように、そこの同国人のために悔い改めました。

ヨハネには二つの使命がありました。最後にそれについて考えてみましょう。一つは悔い改めを求めるヨハネの預言です。ヨハネは主に語りかけられ、その結果として黙示録2、3章における七つの教会に対する手紙が生まれました。

そして第二の呼びかけを、黙示録10章11節に見ることができます。ヨハネはここで「もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならない」と命じられました。これは黙示録2、3章が教会に向かつて語られていたのと大きく異なっています。

ヨハネは一方において、ユダヤの「残された者たち」に対して慰めを与えていました。その時ユダヤ人たちは苦難の中におかれしており、忍耐を働かせなければならなかつたからです。

耳のあるものは聞きなさい。とりこになるべきものは、とりこにされて行く。剣で殺すものは、自分も剣で殺されなければならない。ここに聖徒の忍耐と信仰がある。

(黙示 13・9、10)

神の戒めを守り、イエスに対する信仰をもちつづける聖徒たちの忍耐はここにある。

(黙示 14・12)

見よ。私は盗人のように来る。目をさまして、身に着物を着け、裸で歩く恥を見られないようにする者は幸いである。

(黙示 16・15)

ここでヨハネは最も大きな苦難とサタンの攻撃を目前にして、福音を宣べ伝えることになるのです。この福音は真に「慰めの福音」です。ヨハネは靈の目をもって、回復されたエルサレムの神殿を見、イエス様の支配する千年王国を見て預言しました。

しかし悔い改めを拒む人々に向かつては、ヨハネはさばきを宣べ伝えたのです。

真理が述べ伝えられるときには、拒絶と敵意が生ずるものです。悔い改めとさばきが宣べ伝えられるところには、迫害が起るものです。しかしヨハネは人々が彼に逆らい、刃向かつてこうとも、預言を続けなければなりませんでした。

私たちはみことばによつて自分自身を養つているでしょうか。みことばを食べて、みことばと一緒にされているでしょうか。みことばがこの世のすべての甘いものよりも、私たちにとつて甘いものになつていてはどうか。

どんな苦難の中であつても私たちがみことばから離れられなくなつており、すべての苦しみを喜んで受け入れるようになるなら、私たちは主に祝福され、主に用いられるようになります。みことばを伝えるためにヨハネは自分の自由も放棄しました。ヨハネはみことばのために追放されました。

私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあづかっている者であつて、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。

しかしそれにもかかわらず、そこで新しい使命が与えられたのです。彼はもう一度預言するよう命じられたのです。

主はこんにちもなお、お遣わしになることができる自身の「使い」を探しておられます。

主はその御目をもつて、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになつてゐる人々に御力をあらわしてくださいのです。

(II歴代誌 16・9)

私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言つておられる主の声を聞いたので、言つた。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」

(イザヤ 6・8)

私たちもまたイザヤのように「ここに、私がおります。私を遣わしてください」と言うことができると幸いです。

真のイスラエルと、

偽りのイスラエルの測り分け

黙示録11章1節から2節まで

- | | | |
|---------------------|------------|--------------------|
| 1 神の礼拝の回復 | 1 神の聖所 | 3 イスラエルの不忠実に対するさばき |
| 2 異邦人の時の終り | 2 祭壇 | 1 第一の期間 七週 |
| 3 異邦人の時の始まりについて | 3 礼拝している人々 | 2 第二の期間 六十二週 |
| 2 異邦人の時の経過について | | 3 第三の期間 一週 |
| 3 異邦人の時の終り、携挙から再臨まで | | |

黙示録11章全体のテーマは「終りの時代におけるイエス・キリストの証し人たち」です。それ
はまた「証しと苦難」、「いつわりとあざむきの時代における証しの務め」、「イエス様の証し人に
対する忠実さ」と言うこともできます。この章を順に学んでいくのですが、今回はまず初めの
11章の1節と2節について見てみましょう。

それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があつた。「立つ
て、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。² 聖所の外の庭は、異邦人に
与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測つてはいけない。彼らは聖なる都を
四十二か月の間踏みにじる。」
(黙示 11:1, 2)

11章の1節と2節では、「真のイスラエル」と「いつわりのイスラエル」の測り分けについて記
されています。またその中の1節から2節の前半では「神の礼拝の回復」³が、2節の後半からは
「異邦人の時の終り」が告げられています。

1 神の礼拝の回復

1節でヨハネは、「三つのものを測ることを命じられました。「神の聖所」と「祭壇」、そして「そ
こで礼拝している人」です。聖所と祭壇は、常にイスラエルと深い関係をもつています。黙示録
のこの箇所で、主はイスラエルをふたたび新しく整えようとしておられることがわかります。
私たちは、10章で預言されていましたが、ここにも記されているのを見ます。旧約時代の預言

者たちは、「異邦の国々が長い間イスラエルを支配するが、結局は救い主メシアがすべての地上を支配することになる」と預言し続けてきました。

しかしそうなる前に、多くのユダヤ人がイスラエルに帰つてこなければなりません。現在多くのユダヤ人がイスラエルにいますが、彼らはまだまことの信仰を持つていません。彼らはまだ、十字架につけられたイエス様を受け入れていないので。そして、まことの信仰を持つていないので。もかかわらず、彼らはエルサレムの神殿を回復するのです。ヨハネが見ているのは、そのような時代のことです。また、旧約聖書にあるヨナ書は、このイスラエルの歴史を暗示すると見られます。他にも、旧約聖書の中から、これらに関係があると思われる箇所を見てみましょう。

ケルビムが翼を広げると、輪もそれといっしょに動き出し、イスラエルの神の栄光がその上のほうにあつた。主の栄光はその町の真中から上つて、町の東にある山の上にとどました。

(エゼキエル 11・22、23)

この国は全部、廢墟となつて荒れ果て、これらの国々はバビロンの王に七十年仕える。

(エレミヤ 25・11)

「もし、これらのことの後でも、あなたがたがわたしに聞かないなら、わたしはさらに、あなたがたの罪に対しても七倍も重く懲らしめる。」

(レビ 26・18)

ああ、悲しいことだ。私の母が私を産んだので、私は國中の争いの相手、けんかの相手となつてゐる。私は貸したこと、借りたこともないのに、みな、私をのろつてゐる。

(エレミヤ 15・10)

まことに、主はこう仰せられる。「バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。」

(エレミヤ 29・10)

「あなたは、安息の年を七たび、つまり、七年の七倍を数える。安息の年の七たびは四十九年である。」

(レビ 25・8)

わたしはあなたがたを國々の間に散らし、剣を抜いてあなたがたのあとを追おう。あなたがたの地は荒れ果て、あなたがたの町々は廃墟となる。その地が荒れ果て、あなたがたが敵の国にいる間、そのとき、その地は休み、その安息の年を取り返す。

(レビ 26・33、34)

彼らは神の宮を焼き、エルサレムの城壁を取りこわした。その高殿を全部火で燃やし、その中の宝としていた器具を一つ残らず破壊した。彼は、剣をのがれた残りの者たちをバビ

ロンへ捕え移した。こうして、彼らは、ペルシャ王国が支配権を握るまで、彼とその子たちの奴隸となつた。これは、エレミヤにより告げられた主のことばが成就して、この地が安息を取り戻すためであつた。この荒れ果てた時代を通じて、この地は七十年が満ちるまで安息を得た。

(II歴代 36・19～21)

すなわち、その治世の第一年に、私、ダニエルは、預言者エレミヤにあつた主のことばによつて、エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であることを、文書によつて悟つた。

(ダニエル 9・2)

しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行つて、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであつた。 (黙示 12・14)

主から大切な使命を与えられたにもかかわらず、ヨナは主から逃れて異邦人たちの船に乗りました。ですから主は海に大きな嵐を起こされたのです。「海」は、よく異邦人の國々にたとえられる言葉です。そして大きな嵐は、異邦人たちがヨナを海に投げ込むことによつて初めて静まりました。

同じことが、今でもイスラエルの民に起こっています。イスラエルの民は「主の使い人」となる使命を与えられて、主によつて選ばれた民でした。しかしいスラエルの民は、不従順でした。そ

してその刑罰として、異邦人の海の中に、つまり異邦の国々の中へと散らされていったのです。しかし、イスラエルの民は異邦の国々において大きな迫害を受け、イスラエルへとふたたび帰ることになります。主のご計画は、異邦人たちの迫害を通して成就するのです。第二次世界大戦による迫害を通して、一九四八年、イスラエルの建国が成しとげられたことは、その一つの現われです。

：彼らは不信仰によつて折られ、あなたは信仰によつて立つています。高ぶらないで、かえつて恐れなさい。もし神が台木の枝を惜しまれなかつたとすれば、あなたをも惜しまれないでしよう。見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の中にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中とどまつていればあつて、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。彼らであつても、もし不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼らを再びつぎ合わすことができるのです。…ぜひこの奥義を知つていていただきたい。： その奥義とは、イスラエル人的一部がかたくなになつたのは異邦人の完成のなる時まであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。

(ローマ 11・20～23、25、26)

1 神の聖所

イスラエルは再び回復され、もとのオリーブの木に継がれることになるでしょう。

教会はしばしば神の宮と言われますが、1節にある「神の聖所」は、教会を指しているのではありません。この「神の聖所」は、エルサレムに再建される神の神殿を指しているのです。

終わりの時代において、イスラエルは「神の聖所」を持ち、「祭壇」を持ち、「礼拝している人」を持つようになります。神への礼拝が、ふたたび行なわれるようになるのです。

ところが、「神の聖所」であるべきこの神殿において、反キリストが現われて「自分こそはメシヤである」と勝手に主張し、多くの人々が彼を拝むようになるのです。

「彼は一週間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせれる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」

それゆえ、預言者ダニエルによつて語られたあの「荒らす憎むべき者」が、聖なる所に立つのを見たならば…

(マタイ 24・15)

さて、兄弟たちよ。私たちの主イエス・キリストが再び来られることと、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたにお願いすることがあります。靈によつても、あるいはことばによつてでも、あるいは私たちから出たかのような手紙によつてでも、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失つたり、心を騒がせたりしないでください。だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。

なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて神とよばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。

(II テモテ 2・1～4)

2 祭壇

さて、1節に戻つて、ヨハネが測ることを命じられた「祭壇」について見てみましよう。この「祭壇」は「中庭」にあると思われます。なぜなら2節に「外の庭が異邦人に与えられている」とあるからです。

中庭にある「祭壇」は、神への捧げ物が置かれる場所です。そこで神は捧げ物を受け取られます。「祭壇」という言葉は、すべての捧げ物、犠牲、さらにそれらを捧げる人々のすべてが神に受け入れられるということを意味しているのです。

「祭壇」はまた、さばきの場でもあります。

…すべてのものは血によつてきよめられる、と言つてよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。

(ヘブル 9・22)

かつては罪のない動物が人間の罪をあがなうために「祭壇」に供えられました。ですから「祭壇」は、もちろん十字架をも意味しています。イエス様は十字架において、私たちの罪を背負つ

て死んでくださったのです。

見よ。すべてのいのちはわたし（主）のもの。父のいのちも、子のいのちもわたしのもの。罪を犯した者は、その者が死ぬ。

（エゼキエル 18・4）

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

イエス様は、私たちの身代わりになつてくださいました。私たちの救いは、ただイエス様の十字架の上での死によつてのみ、与えられるのです。

まことに、彼（イエス様）は私たちの病を負い、私たちの痛みをになつた。だが、私はちは思つた。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によつて、私たちはいやされた。（イザヤ 53・4、5）

3 礼拝している人

神の「聖所」と「祭壇」だけでなく、「礼拝している人」も「測られ」なければなりません。「測る」とは、何を意味しているのでしょうか。「測る」とは、所有物をはつきりさせ、限定することです。神聖なもの、神に属するものが何かを明白にし、他とはつきりと区別することです。それ

によって、何が神に属し、何が神に属さないものであるかがはつきりするのです。

「測る」、「限定する」という言葉は、默示録7章3節にある「神のしもべたちの額に印を押す」ということと同じ意味です。ユダヤの忠実な残りの者たちは、このように「測られる」ことによつて、神に属する者であることが明白になり、限定され、そして神の守りが約束されるのです。「測られ」、よしとされたものは神のものであり、神によって守られます。たとえ反キリストの力がいくら強くとも、神はその民を守られるのです。

しかし、「測り」に落ちた者は、異邦人に与えられ、神の守りもなく、ただ破滅のままに捨て置かれます。

反キリストがその力を現わす前に、この「測り」は終わります。それはちょうど、「印を押される」ことが、神の所有物と神の保障を明らかにするのとよく似ています。それは、迫害の時代に神がご自身に頼る者たちを守り、導かれたのと同じことです。まことの信仰を持つユダヤ人には、神の驚くべき守りが与えられるのです。

2節にある「聖所の外の庭」は、測られることを禁止され、「そのままに差し置く」、つまり投げ捨てられるのです。

「投げ捨てられる」ことの反対は、「受け入れられる」ということです。つまり「投げ捨てられる」ということは、「彼らがもはや神に属しているのではない」ということです。彼らもはや神によつて守られることはありません。これが「そのままに差し置く」、つまり「投げ捨てられる」ということの意味です。

11章1節において測られ、神と子羊との礼拝者となつていいすべてのユダヤ人たちは、9章20節と21節にある偶像礼拝者、また13章15節にある獸の礼拝者になるのです。

私は、2節の「聖所の外の庭」という言葉の中に、今日見られる形骸化した教会や教派が含まれているのではないかと思われてなりません。すべての外面的なものは滅ぼされます。これらの教会は「神の守り」を受けることができるのでしょうか。

私たちは、この1節と2節で、すでに「神の聖所」に仕えている礼拝者なのかどうか、または「外の庭」においてイエス様との交わりを与えていないものであるかを、きびしく問わなければなりません。それは私たちにとって、大きな問題です。

もしも今、あなたがイエス様とのまことの交わりをもつていていなら、そのことをイエス様に告白して、生活の支配をイエス様に明け渡し、イエス様に仕え、イエス様の守りを約束された人々になつていただきたいと思います。

私たちがイエス様のものとされて、イエス様がわたしたちを顧みていてくださるということを知ることほど大きな宝はありません。終わりの時代においては、イエス様の所有物であり、靈とまことをもつてイエス様を礼拝するものだけが守られるのです。

このようにして、忠実なユダヤ人のみが守られます。そして墮落したユダヤ人は投げ捨てられるのです。この墮落したユダヤ人たちは、その昔イスラエルがローマ帝国に従属したように、再び起ころる強大な反キリストの國と関係を持ち、その支配者と契約を結ぶようになります。しかし、この反キリストとの契約は、さばきの原因になります。さばきとは、2節の後半にあるとおり、異

邦人たちが「聖なる都エルサレムを四十二カ月の間踏みにじる」ことです。

「踏みにじる」とは、支配下にあるものを見下すことであり、その神聖さを汚すことです。聖なるエルサレムは、あたかも汚れたソドムやエジプトのように扱われるのです。なぜそなうなるのでしょうか。なぜならエルサレムは、メシヤであるイエス・キリストを拒み、十字架を拒み、悔い改めることをせず、心をかたくなにしたからです。十字架につけられたイエス様を見て、ユダヤ人はイエス様をメシヤではないと言いました。彼らがいつまでも悔い改めることをしなかつたために、エルサレムは、この世のソドムとエジプトと異なるものとなつたのです。彼らには、主の守りは与えられず、たださばきがくだされるのです。

しかし、もつとも大切なのは、測られ、捨てられた人々ではなく、測られてよしとされた人々です。つまり、神の所有物とされている人々です。つまり、まことの信仰を持つユダヤ人たちは、主に守られ、新たにされ、主の礎とされるのです。救いは昔も今も、ユダヤ人の中からもたらされるのです。

救いはユダヤ人から出るのですから、わたしたちは知つて礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。

(ヨハネ 4・22)

2 異邦人の時の終り

次に、11章2節の後半にある、「異邦人の時」の終りについて考えてみましょう。

「異邦人の時」は、バビロンの捕囚の時代、ネブカデネサルの時代から始まっています。そして

これは、紀元前六百六年からキリストの再臨まで続くのです。この期間をとおして、エルサレムは異邦人によって破壊され、異邦人の支配の下に置かれるのです。

人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となつてあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終るまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

（ルカ 21・24）

教会にはイエス様の再臨の時を計算することは許されていません。私たちはただ、イエス様の空中の再臨をひたすら待ち望むだけです。

イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもつてお定めになつています。」（使徒 1・7）

かつて、イエス様の再臨の日を計算し、持ち物を売り払い、働きもせず、その日のくるのを漫然と待つているような人々がいました。

しかし、イスラエルに対し、イエス様の再臨の時、つまり彼らの大きな苦難がいつまで続くかについては、はつきりと聖書に示されています。「ふたりの証人」が、三年半の間働き、その後で反キリストの支配と独裁が三年半続くとあります。

この「異邦人の時」についてさらにくわしく知るために、まず「異邦人の時の始まり」、次に「異邦人の時の経過」、そして「異邦人の時の終り」の三つについて考えていきましょう。

1 異邦人の時の始まりについて

「異邦人の時」という言葉は、イエス様によつても用いられています。

「人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となつてあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」

（ルカ 21・24）

この時代は、主がイスラエルに与えでおられた地上の支配権を、主がイスラエルから奪い取り、異邦人に与えられた「異邦人の支配の時代」です。この時代、イスラエルの民は異邦人の支配の下にあるのです。

イスラエルには、すべての国々の民の祝福となるという使命が与えられていました。そして、ダビデ王のもとにあつたイスラエルの民は、神の祝福にあずかることができたのです。ダビデ王には、彼の後に「世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」という約束が与えられたのです。

「今、わたしのしもべダビデにこう言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを、羊の群れを追う牧場からとり、わたしの民イスラエルの君主とした。そして、あなたがどこは行つても、あなたとともにおり、あなたの前であなたのすべての敵を断ち滅ぼした。わたしは地上の大いなる者の名に等しい大いなる名をあなたに与える。わたしが、わたしの民イスラエルのために一つの場所を定め、民を住みつかせ、民がその所に住むなら、もは

や民は恐れおののくことはない。不正な者たちも、初めのころのように重ねて民を苦しめるこではない。それは、わたししが、わたしの民イスラエルの上にさばきつかさを任命したことである。わたしはあなたをすべての敵から守って、安息を与える。さらに主はあなたに告げる。『主はあなたのために一つの家を造る。』

あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまで堅く立てる。』

(II サムエル 7・8～13)

後を継いだソロモンは、ダビデの国を四十年間平和の内に治め、その名声は地上のいたるところに伝わりました。彼はまた、神のために神殿を建てました。その神殿の中には神の栄光が満ちました。しかしソロモンの後で、イスラエルの王国は二つに別れました。一つはイスラエルの十の部族からなる国であり、もう一つは、イスラエルの二つの部族からなる国でした。十の部族からなる国をイスラエルと言い、二つの部族からなる国をユダといいました。そして、神から離ることは、十の部族からなるイスラエルの方が早かつたのです。イスラエルは、すでに紀元前七二一年に、アッシャリアによつて捕囚の身となりました。そしてユダの国もまた、紀元前六〇六年にはバビロンに捕らえ、移住させられました。

この頃には、神の臨在の雲は、イスラエルの神殿から離れ去つてしまつていきました。エジプト

からの脱出の時以来、神の臨在の雲の柱は、常にイスラエルの民の上に止まっていたのです。しかし主は、今や臨在の雲の柱を取り去つてしまわれたのです。そして、これが「異邦人の時の始まり」なのです。

ケルビムが翼を広げると、輪もそれといっしょに動きだし、イスラエルの神の栄光がその上のほうにあつた。主の栄光はその町の真中から上つて、町の東にある山の上にとどました。また、靈が私を引き上げ、神の靈によつて幻のうちに私をカルデヤの捕囚の民のところへ連れて行つた。そして、私が見たその幻は、私から去つて上つていつた。そこで私は、主が私に示されたことをことごとく捕囚の民に告げた。
(エゼキエル 11・22～25)

2 異邦人の時の経過について

主はエレミヤをとおして捕囚の期間が七十年であると告げられました。

この国は全部、廢墟となつて荒れ果て、これらの国々はバビロンの王に七十年仕える。
(エレミヤ 25・11)

しかし、モーセをとおして、すでに主は「もしその民が悔い改めなければ、その刑罰は七倍になる」と言わっていました。

もし、これらのことの後でも、あなたがたがわたしに聞かないなら、わたしはさらに、あなたがたの罪に対し七倍も重く懲らしめる。
(レビ 26・18)

その七十年後に、異邦人の王クロスは、主のご計画を実現することになりました。ペルシャの王クロスは、イスラエルの民をバビロンからエルサレムへと連れ帰り、そこで神殿と町を復興させました。そして、エルサレムに神殿が建てられ、礼拝が再び始められるようになりました。しかし、神の臨在の雲の柱は、再びその上に帰ることはありませんでした。なぜなら、真の悔い改めと真の改心とがなかつたからです。

このことについて、主はダニエルをとおして、七十週の間イスラエルの民とエルサレムとはさばかれる、と言われたのです。イスラエルの民は、真の悔い改めに目覚めるように、またまことの神に目が開かれるようになると主によって望まれていました。主の神殿にも、雲の柱が再び戻ることが望まれていました。

しかし、バビロンの捕囚の後で、エルサレムも、イスラエルの民も、ほんとうの意味ではまだ解放されていなかつたのです。ですから、ヘロデが新しく建てた神殿にも、神のご臨在を現わす雲の柱は帰ってきませんでした。

このことによつて、私たちは、主は決して立派な建物や形式的な礼拝が行なわれることを望んでおられるのではなく、イスラエルの民が悔い改め、ご自身のもとへと立ち返ることを望んでおられるのを知ることができます。

イスラエルの民は悔い改めないことによつて、神に退けられたのです。それに代わつて、異邦人の支配が行なわれるようになりました。ダニエル書では、ダニエルが異邦人の支配についての

啓示を受けたことが記されています。それは、四つの世界帝国の啓示であり、四頭の大きな獸として描かれています。

第一は、バビロンの帝国の支配でした。この帝国は、強い獅子に似ていて、その頭は純金であると記されています。

第一のものは獅子のようで、鷺の翼をつけていた。見ていると、その翼は抜き取られ、地から起こされ、人間のように一本の足で立たされて、人間の心が与えられた。

(ダニエル 7・4)

その像は、頭は純金、：

(ダニエル 2・32)

第一は、ペルシャ帝国の支配でした。この帝国は熊のようであり、また胸と両腕とは銀でした。

また突然、熊に似たほかの第二の獸が現われた。その獸は横さまに寝ていて、その口のきばの間には三本の肋骨があつた。するとそれに、「起き上がって、多くの肉を食らえ。」との声がかかった。

(ダニエル 7・5)

胸と、両腕とは銀、：

(ダニエル 2・32)

第三は、ギリシャ帝国の支配です。この帝国は、約として示され、腹とももとは青銅でした。

：突然、ひょうのようなほかの獣が現われた。その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があつた。そしてそれに主権が与えられた。

腹とももとは青銅、：

(ダニエル 7・6)
(ダニエル 2・32)

第四は、ローマ帝国の支配です。この帝国は、足と十本の角を持つ獣であり、鉄のすねを持つた国として示されています。

その後また、私が夜の幻を見ていると、突然、第四の獣が現われた。それは恐ろしく、ものすごく、非常に強くて、大きな鉄のきばを持っており、食らつて、かみ碎いて、その残りを足で踏みつけた。これは前に現われたすべての獣と異なり、十本の角を持つていた。

(ダニエル 7・7)

すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。

(ダニエル 2・33)

すねは、身体の一一番長い部分です。それと同じように、ローマ帝国の支配は、もつとも長く続いたのです。また、足は二本ありますが、これはつまりローマ帝国が二つの帝国に分かれたことを示しています。東ローマ帝国と、西ローマ帝国です。また、十本の角と、両足の十本の指は、十の国々、つまりその支配下にある多くの国々を示しています。

3 異邦人の時の終り、携挙から再臨まで

異邦人の時の終りは、いつでしょうか。この問い合わせるために、ダニエル書9章を見てみましょ。ダニエル書9章で、主は、囚われたダニエルに対して、キリストの千年王国に至るまでのイスラエルの歴史を示しておられます。そして、ダニエル書の2章、7章、8章に書かれているのは「異邦人の歴史」であり、9章に書かれているのは「イスラエルの歴史」であるということを区別して読まなければなりません。

私がまだ語り、祈り、自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために、私の神、主の前に伏して願いをささげていたとき、すなわち、私がまだ祈つて語っているとき、私が初めに幻の中で見たあの人、ガブリエルが、夕方のささげ者をささげるころ、すばやく飛んで来て、私に近づき、私に告げて言った。

「ダニエルよ。私は今、あなたに悟りを授けるために出で來た。あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが述べられたので、私はそれを伝えに來た。あなたは、神に愛されている人だからだ。そのみことばを聞き分け、幻を悟れ。

あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている。それは、そむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し、至聖所に油をそそぐためである。それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。

その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない。やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起り、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者のに上にふりかかる。

(ダニエル 9・20～27)

ダニエルは、なぜこのような啓示を与えたのでしょうか。この預言は、ダニエルの熱心な悔い改めの祈りに対する主のお答えでした。ダニエルは、エレミヤが七十年の預言を示されたように、イスラエルの回復の時についての預言を示されたのです。

「わたし（主）は彼らの楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、ひき臼の音と、ともしひの光を消し去る。この国は全部、廃墟となって荒れ果て、これらの国々はバビロンの王に七十年仕える。七十年の終わりに、わたしはバビロンの王とその民、一一主の御告げーーまたカルデヤ人の地を、彼らの咎のゆえに罰し、これを永遠に荒れ果てた地とする。わたしは、この国について語つたすべてのことば、すなわち、エレミヤが万国について預言し、この書にしるされている事をみな、この地にもたらす。

(エレミヤ 25・10～12)

まい」とに、主はこう仰せられる。「バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがた

を顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。」

(エレミヤ 29・10)

ダニエル書第9章では、しばしば、「あなたの民」、「聖なる都」という言葉が出てきますが、それらがイスラエルの歴史を指していることは明らかです。「聖なる都」という言葉は、地上の都の中ではただエルサレムだけを指して使われています。

9章では、エルサレムという都を再建せよという命令から（25節）、キリストの千年王国に至るまでの歴史（24節）が語られています。

あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている。それは、そむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言を確証し、至聖所に油をそそぐためである。それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油注がれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。

(ダニエル 9・24.)

(25)

そして、六十二週の後のことには、次の26節、27節にこうあります。

その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない。やがて来るべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続い

て、荒廃が定められている。…荒らす忌むべき者が翼に現れる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。

(ダニエル 9・26・27)

これを読むと、「エルサレムを再建せよ」との命令が出てから、千年王国までは、七十週の期間であり、その期間はさらに三つに分けられることがわかります。つまり、最初の期間は七週間であり、第二の期間は六十二週間、そして、第三の期間は一週間です。

ここに書かれている「週」という言葉は、従来からドイツ語でも日本語でも、「週」と訳されてきました。しかし聖書学者の研究によつて、今日では、この「週」は七日間を意味する週のことではなく、むしろ「年」を意味する言葉であり、「年」と訳すべきだといふことがわかるようになります。

3 イスラエルの不忠実に対するさばき

1 第一の期間 七週

以上のことから、ダニエル書に「七週」とあるのは、実は「七年」を意味することになります。さらにイスラエルの民は、悔い改めることをしなかったために、そのさばきは七倍きびしくなりました。つまり、七年の七倍、四十九年になつたのです。さらにダニエルは、六十二週についても語っています。しかしこの期間中も、イスラエルの民は悔い改めることをしませんでした。そのため、六十二週、つまり六十二年は七倍されて四百三十四年になつたのです。

ダニエルは、バビロンに捕らわれていきました。なぜ捕らわれるようになつたのでしょうか。なぜなら、ユダの民は「安息の年」に対する掟を守らなかつたので、主によるさばきがくだされたのです。

主は、四十九年ごとに一年の「安息の年」を設けることを命じておられます。この「安息の年」には、蒔くことも、刈り入れることも許されなかつたのです。売られた土地は、すべて元の持ち主に返され、奴隸は解放されました。しかし、イスラエルの民は、主を信頼しませんでした。このような「安息の年」の掟を守らなかつたのです。その結果、イスラエルの民は、七十年の間囚わかれることになつてしましました。

あなたがたは第五十年目を聖別し、國中のすべての住民に解放を宣言する。：あなたがたはそれぞれ自分の所有地に帰り、それぞれ自分の家族のもとに帰らなければならぬ。この第五十年目は、あなたがたのヨベルの年である。種を蒔いてはならないし、落ち穂から生えたものを刈り入れてもならない。： （レビ 25・10・11）

なお、これらについてさらに深く学びたい方は、レビ記の25章の他の部分、歴代史第一の36章29節から31節、ダニエル書9章の2節をお読みになることをお勧めします。

さて、ダニエルが、神の前に祈つていたとき、七十年間の捕囚の期間がまもなく終わることを示されました。それにしたがつて、少数の者たちがエルサレムに帰りました。しかし、ほとんどユダヤ人たちは、エルサレムに帰ろうとせず、自分からバビロンに残ることに決めたのです。そ

れで、エルサレムに帰ったユダヤ人たちにとっては主のさばきは終わりました。しかし、モーセの預言どおり、イスラエル民族全体に対する主のさばきは、七倍ぎびしくされました。そして、ダニエルが預言した「七十週、つまり七十年」は、「少数の者たちがエルサレムに帰ったその時から始まつた」のです。

ネヘミヤ記の2章にあるとおり、アルタシヤスタ王は、ネヘミヤにエルサレム再建を命じました。これは、紀元前四百四十年の三月、四月のことでした。エズラとネヘミヤはこの再建の次第を私たちに伝えてくれています。

2 第二の期間 六十二週

第二の期間は、六十二週、七倍されて四百三十四週、つまり四百三十四年になります。第一と第二の期間を合わせると六十九週、つまり四百八十三年になります。ダニエル書9章の26節には、「その六十一週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。」と書かれています。

この「油注がれた者」は、約束されたメシヤ、つまりイエス・キリストです。アルタシヤスタ王の命令によるエルサレム再建からキリストの十字架までは、正確に四百八十三年です。そして、イエス・キリストは、紀元後三十二年に十字架につけられたことになります。そしてイエス様も何も残されなかつたのです。

ここで計算の基礎となつてゐる「年」は、太陽暦の年、つまり一年が三百六十五日ではなく、太陰暦による一年、三百六十日を基礎とした年です。ですから、この計算に従うと、アルタシャスタ王の命令は紀元前四百五十一年のことになります。

さて、第一と第二の期間を合わせると六十九週、その次に来るべき最後の一週は、三つに分かれています。それは「一ときと、二ときと、半ときの間」です。

：聖徒たちは、ひと時と、ふた時と、半時の間、彼の手にゆだねられる。

（ダニエル 7・25）

しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行つて、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前を逃れて養われるためであった。 （黙示 12・14）

この期間は、黙示録11章2節、13章5節に記されている「四十二カ月」であり、黙示12章6節、11章3節に記されている「一千二百六十日」であり、つまりそれは「三年半」の期間であることを示しています。

油注がれた者が立つことによつて、つまりイエス様が十字架につけられ、殺されることによつて、イスラエルの歴史は一時的に中断しました。その間イスラエルの地は荒らされました。この時代には、神殿も、王も、国もなくなりました。

四百八十三年の後の時代がどれだけ続くかはわかりません。そしてイスラエルの民は、国を失

い、捨て去られてしまいます。そしてローマ帝国のティトスが、エルサレムの聖所と町を破壊してしまいます。このようにしてユダヤ人たちは、世界の国々の中に散らされていったのです。

しかし主のみことばが成就するのは、なお将来のことです。将来反キリストが、新しく建てられた神殿の中で人々の礼拝を受けるとき、このみことばが完全に成就します。六十九週めに、イエス様が十字架につけられたということは、主のみことばが真実であるとの証拠です。

3 第三の期間 一週

第三の期間は一週間続きます。つまり七年間続くのです。この時が、イスラエル民族にとって千年王国が来るまででもつとも苦しい時となります。この最後の時は、三年半ずつに分けられています。そして、その期間に四つの大事なことが起こります。

まず、はじめの三年半の間に、反キリストの君主は、イスラエルを守ろうと約束します。この君王は世界の支配者であり、再建されるローマ帝国の最高の位に立つ者です。

私がその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があつた。：十本の角は、この國から立つ十人の王。彼らのあとに、もう一人の王が立つ。かれは先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。かれは、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。かれは時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手に

ゆだねられる。

(ダニエル 7・8、24、25)

「反キリストの君主は、ここでは小さな角と呼ばれています。この時代にイスラエルは、エルサレムに神殿を造り、そして礼拝を捧げます。

しかし、この三年半が終わると、反キリストの君主は、イスラエルとの約束を破つて、自分自身を神として挙ることを強制します。默示録11章2節に、「聖なる都を四十二か月の間踏みにじる」つまり聖所を破壊する、と書かれているのは、このことを指しています。

だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。

(IIテサロニケ 2・3、4)

その後で、いまだかつてなかつたほどユダヤ人が迫害されます。そして七年間の終りの半分の時に、イスラエル人の難難はもつとも大きくなります。この難難は、悪魔が天から投げ落とされ、反キリストの中に力を現わすときに最も大きくなるのです。聖書には「大きな難難」について、多くのことが書かれています。

ああ。その日は大いなる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。

(エレミヤ 30・7)

国が始まつて以来、その時まで、かつてなかつたほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。 (ダニエル 12・1)

この地に住む者すべての者は、わななけ。主の日が来るからだ。その日は近い。

(ヨエル 2・1)

「それゆえ、預言者ダニエルによつて語られたあの『荒らす憎むべき者』が聖なる所に立つのを見たならば、…そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。」

(マタイ 24・15)

「荒らす憎むべき者」が、自分の立つてはならない所に立つてゐるのを見たならば（読者はよく読み取るように。）ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は降りてはいけません。家から何かを取り出そうとして中にはいってはいけません。畠にいる者は着物を取り戻つてはいけません。だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。ただ、このことが冬に起こらないように祈りなさい。その日は、神が天地を創造された初めから、今に至るまで、いまだかつてなかつたような、またこれからもないような苦難の日だからです。そして、もし主がその日数を少なくしてくださらないなら、ひとり

として救われる者はないでしょう。しかし、主は、ご自分で選んだ選びの民のために、その日数を少なくしてくださったのです。

(マルコ 13・14～20)

そして最後に、この「滅ぼす者」に対するさばきが行なわれます。

すると、獸は捕らえられた。また、獸の前でしるしを行ない、それによつて獸の刻印を受けた人々と獸の像を挙げる人々を惑わしたあのにせ預言者も、彼といつしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。

(黙示
19・20)

この時に、永遠の正義が現実のものとなります。

ダニエルの七十週のことについて、つまり四百九十年のイスラエルの歴史については、黙示録の中には何も記されていません。しかし最後の七十週のことについては、くわしく記されています。四百九十年が、イスラエルの不忠実な者に対する神のさばきなのです。この最後の一週、つまり七年間は、将来に必ず起ることです。教父であるイレネウスは、「反キリストは最後の一週に現われ、反キリストの独裁が最も強くなるのは後半の三年半である」と言いました。

イエス様もまた、これらのことがらがご自身の再臨に関連していると言つておられます。

「また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起ることです。しかし、終わりが来たのではありません。民族

は民族に、国は國に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起ります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての國の人々に憎られます。また、そのときは、人々が大せいづまき、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。この御國の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」

(マタイ 24・6～14)

したがつて六十九週めと最後の一週めの間に、「教会の時代」が入つてくることになります。「教会」は、新約聖書の中で初めて明らかにされました。「教会」は、旧約聖書の中では明らかにされていません。教会の奥義は、旧約聖書の中では隠されていたのです。パウロによつて、この奥義が初めて明らかにされました。

この奥義は、今は、御靈によつて、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知られていませんでした。その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあつて、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。

(エペソ3・5、6)

このようにして教会が成立しました。そしてこの時代の終わりに、主は教会をみもとへと引き上げられるのです。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

(Iテサロニケ 4・16、17)

教会の時代は、また、恵みの時代とも呼ばれています。

確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

(IIコリント 6・2)

主のみことばと聖靈をとおして、私たちには救いが提供されています。しかも無償の贈物としてです。罪を悔い改めて、イエス様の救いに感謝する者は必ず救われるのです。

さて、黙示録によれば、教会の携挙とともに最後の週が始まります。この七年の後、イエス様は肉体をもつて、再臨されるのです。

今まで乱用されていた異邦人の支配権は奪い去られ、再臨されたイエス様は、すべての異邦人をさばかれます。そしてイエス様が、地上におけるすべての王の王となられます。

最後に、私たちは、ダニエルがなぜこの預言、啓示を受けたかについて見てみましょう。

まず第一に、「主のみことば」によって啓示を受けたのです。ダニエルは、主のみことばが光であり、暗やみの中の道しるべであることを知つていきました。彼は熱心に主のみことばを研究しました。中でも主はダニエルに、特にエレミヤ書をとおしてその目を開いたのです。

次に、彼は「主の靈」によって啓示をうけました。私たちは聖靈によって主のみことばを理解し、主のみことばを生きたものとして受け取ることができます。

エレミヤ書25章の10節から12節で、バビロンが滅びるという預言を読んだダニエルは、イスラエル人の捕囚の期間がまもなく終わることを知りました。ダニエルは、熱心に主のみことばを読んで考え続けました。つまりダニエルは、主の靈にたいして、いつも心を開いていました。ですから主の靈は、ダニエルのうちに住まわれたのです。

あなた（ダニエル）には、聖なる神の靈があるからだ。

（ダニエル 4・18）

あなた（ダニエル）のうちには神の靈が宿り、また、あなたのうちに、光と理解力と、すぐれた知恵のあることがわかつた、と聞いている。

（ダニエル 5・14）

そして三つめは、「祈り」です。ダニエルは捕囚の期間がまもなく終わることを知ったとき、祈りの中で、神に訴えました。

熱心に聖書を学ぶことによつて、私たちは祈りへと導かれます。みことばをとおして、主は語

られます。そして主の靈が、人を祈りへと導くのです。

祈りの中で、ダニエルは「三つのこと」を神の前に持ち出しました。

まず、彼は民の罪を告白しました。ダニエルは、イスラエルの民の罪のためにひざまずいたのです。ダニエル書の9章には、ダニエルの深い悔い改めの祈りが出てきますが、この章は、聖書の中でも、とりわけ意味の深い章の一つであり、ダニエルの祈りは、もつともすばらしい祈りの一つです。少し長いので、次頁に全文でなく部分の引用をしておきますが、ぜひ聖書を開いて、全文をお読みください。恵みが大きいと思います。

次に、彼は罪を告白しただけでなく、主が当然下されるのろいをも受け入れたのです。彼はモーセの律法をとおして、この主ののろいを知っていました。

もし、あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従わず、私が、きょう、命じる主のすべての命令とおきてとを守り行なわないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたはのろわれる。…主があなたを追い入れるすべての国々の民の中で、あなたは恐怖となり、物笑いの種となり、なぶりものとなろう。

(申命記 28・15、37)

これらすべてののろいが、あなたに臨み、あなたを追いかけ、あなたに追いつき、ついには、あなたを根絶やしにする。あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従わず、主が命じられた命令とおきてとを守らないからである。

(申命記 28・45)

ダニエルは、主ののろいがイスラエルの民の上にかかるつてることを知りました。ダニエル書の9章にあるダニエルの祈りは、自分の願いを言い表わしたものではありません。ダニエルは心中で主の言葉と一つになり、主の言葉に満たされました。そしてそこから、自然にダニエルの祈りが流れ出でてきたのです。

ダニエルは主ののろいを受け入れただけではなく、主の約束と主の契約に対する信仰をも強く言い表わしました。

私（ダニエル）は、私の神、主に祈り、告白して言つた。：私たちは罪を犯し、不義をなし、悪を行ない、あなたにそむき、あなたの命令と定めとを離れました。：

主よ、不面目は、あなたに罪を犯した私たちと私たちの王たち、首長たち、および先祖たちのものです。

（ダニエル 9・4、5、8）

あわれみと赦しとは、私たちの神、主のものです。これは私たちが神にそむいたからです。：主よ。あなたのすべての正義のみわざによつて、どうか御怒りと憤りを、あなたの町エルサレム、あなたの聖なる山からおさめてください。：（ダニエル 9・9、16）

ダニエルは、主が生きておられ、いつも正しく、あわれみ深く、その言葉を守られ、さばかれる神であることを知つていたのです。

そして三つめに、ダニエル書9章16節にあるように、ダニエルは神のあわれみを求めたのです。

聖書は、ダニエルについて否定的なことを何ひとつ記録していません。主ご自身は、ダニエルに向かって、あなたは「愛されている者」だと言っておられます。そのダニエルが、この祈りの中において、イスラエルの民の罪の下に身をかがめました。ダニエルはイスラエルの民の一人として、自分が罪を犯している者であるかのように、民の罪を背負つたのです。ダニエルは神のあわれみを確信していたのです。

ですから主は、その祈りをさつそく聞き届けてくださいました。主の啓示は、天使の長ガブリエルによつてダニエルにもたらされました。

私がまだ語り、祈り、自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために、私の神、主の前に伏して願いをささげていたとき、：ガブリエルが、夕方のささげ物をささげるころ、すばやく飛んできて、私に近づき、私に告げて言つた。：「あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが述べられたので、私はそれを伝えに来た。あなたは、神に愛されている人だからだ。」

（ダニエル 9：20～23）

：エルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油注がれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。

（ダニエル 9：25）

このようにダニエルの祈りを聞かれた主は、ガブリエルをつかわして啓示を与えられました。

私たちもまた、熱心に神のみことばを読み、そして兄弟姉妹の罪を自ら担う者となるならば、私たちの祈りが聞き届けられることを体験します。主の靈が、私たちを祈りへと導くことができるならば、幸いです。

17

ふたりの証人

黙示録11章3節から14節まで

- 1 ふたりの証人とは誰か
- 1 イエス様の証し人
- 2 二本のオリーブの木
- 3 二つの燭台

2 何をするか

- 1 行動の時
- 2 行動の場所
- 3 行動の武器

3 何を体験するか

- 1 死
- 2 よみがえり
- 3 昇天

默示録の3節から14節までのテーマは、「ふたりの証人」についてです。それはまた、「終りの時代におけるイエス様の証し人の道」、「証しと苦難」、また、「あざけりに満ちた時代における証しの奉仕」、「証し人のイエス様への忠実さ」、「多くの敵の中での、精靈に満たされた証し」と言うことができます。まず、本文を見てみましょう。

それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日間預言する。⁴彼らは全地の主の御前にある一本のオリーブの木、また二つの燭台である。⁵彼らに害を加えようとするとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。⁶この人たちは、預言をしていいる期間は雨が降らないように天を閉じる力を持つており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままで、何度も、あらゆる災害をもつて地を打つ力を持っている。

そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上つて来る獸が、彼らと戦つて勝ち、彼らを殺す。⁷彼らの死体は、靈的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。

もちろんの民族、部族、国語、國民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめている、その死体を墓に納めることを許さない。¹⁰また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝つて、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。¹¹しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らにはいり、彼らが

足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常な恐怖に襲われた。そのときふたりは天から大きな声がして、「ここに上れ。」と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗つて天に上つた。彼らの敵はそれを見た。¹³ そのとき、大地震が起こつて、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。

(黙示 11・3～14)

1 ふたりの証人は誰か
私たちはこれから、三つの問い合わせについて考えてみたいと思います。まず、「このふたりの証人は誰か。つまり、ふたりの証人の特徴について。」ついで、「ふたりの証人は何をするか。つまり、彼らの活動と使命について。」そして「ふたりの証人は何を体験するか。つまり、彼らの生涯について」です。

1 イエス様の証し人
これについては、三つのことが言えます。まず、「ふたりの証人は、イエス様の証し人」であり、「オリーブの木」であり、「燭台」です。

1 イエス様の証し人
私たちは默示録の10章1節で、「強い御使い」というのはイエス様であることを見てきました。默示録の11章3節で、イエス様は明らかに、これらふたりの証人が「わたしの証人である」と言つ

ておられます。「わたしの証人」という言葉はしばしばイスラエル民族の全体に対して用いられます。イスラエルの民は、イエス様の証人となるように召されているのです。

「あなたがたはわたしの証人——主の御告げ——わたしが選んだわたしのしもべである。
…このわたしが、告げ、救い、聞かせたのだ。あなたがたのうちに、異なる神はなかつた。
だから、あなたがたはわたしの証人。：恐れるな、おののくな。わたしが、もう古くから
あなたに聞かせ、告げてきたではないか。あなたがたはわたしの証人。わたしのほかに神
があろうか。ほかに岩はない。わたしは知らない。」（イザヤ 43・10、12、44・8）

11章の1節で私たちは、「礼拝している人」について学んできました。この3節で私たちは、「証人」について語られているのを見ます。私たちもここに記されているのと同じように、まず「礼拝をささげるために」召され、次に「人々に対する証しをするために」召されているのです。つまりこれは、一つは主に対する奉仕であり、もう一つは人にに対する奉仕です。

しかし、この11章3節では、「ふたりの証人」というのはイスラエル民族の全体を指しているのではなく、イスラエル民族の中の「ふたりの」証人を意味しています。証人は遣わされることによつて初めて意味を持ちます。つまり「誰が」その人を証人として遣わすかが大切です。そして言うまでもなく、全地を統べておられる主が彼らを遣わされるのです。

かつて多くの人々は、この「ふたりの証人」を「モーセとエリヤである」と考えました。エリヤは天に上りました。ユダヤ人の言い伝えによれば、モーセも同じように天に上ったと言わされて

います。またそれがモーセでないとすれば、もう一人の証人は「エノク」だと考えられました。

「あなたがたは、わたしのしもべモーセの律法を記憶せよ。それは、ホレブで、イスラエル全体のために、わたしが彼に命じたおきてと定めである。見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。」

(マラキ 4・4、5)

マラキ書にはモーセとエリヤのことが記されています。マラキ書に書かれていることは、部分的には洗礼者ヨハネによつて成就しました。しかし、マラキ書に語られている預言のすべてでは、終りの時代に、恐るべき苦難の時に、完全に成就します。

黙示録11章に出てくる「ふたりの証人」は、モーセとエリヤです。なぜなら変貌山で、イエス様の前にふたりが姿を現わしたからです。イエス様がこの地上に来られたように、モーセとエリヤもそのときこの地上に戻ってきて、変貌山でイエス様と苦難と十字架、終りの時代のことなどについて語つたのだと思われます。しかし聖書は、ふたりの証人がモーセとエリヤであると明記しているわけではないので、私たちもこのふたりの証人がモーセとエリヤに間違いないと断定することはできません。しかしそれにしても、ふたりの証人が「モーセとエリヤの力を持つていた」ということは間違ひありません。このふたりの証人は、天においても、地においても、すべての権力を持つておられるイエス様について証しをするのです。

2 二本のオリーブの木

次にふたりの証人は、証人であるばかりでなく、「オリーブの木」でもあります。ゼカリヤ書の次の箇所には、オリーブの木について記されています。

彼（御使い）は私に言った。「あなたは何を見ているのか。」そこで私は答えた。「私が見ますと、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には、鉢があり、その鉢の上には七つのともしひ皿があり、この上部にあるともしひ皿には、それぞれ七つの管がついています。また、そのそばには一本のオリーブの木があり、一本はこの鉢の右に、他の一本はその左にあります。」：私はまた、彼に尋ねて言つた。「燭台の右左にある、この二本のオリーブの木は何ですか。」：すると彼は、私にこう言つた。「あなたは、これらが何か知らないのか。」私は言つた。「主よ。知りません。」彼は言つた。「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油注がれた者だ。」（ゼカリヤ 4・2、3、11、13、14）

このゼカリヤ4章14節によると、オリーブの木は、全地の主のそばに立つ「ふたりの油注がれた者」です。彼らはイエス様が全地の支配者であり、まもなくその支配権が全地に現われることを宣べ伝えるのです。

ゼカリヤ書における一本のオリーブの木は、ヨシュアとゼルバベルを象徴しています。それは默示録における一本のオリーブの木をも象徴し、彼らとともにイエス・キリストを指示しているのです。

オリーブの木はともしびの「力の源」です。私たち人間は、イエス様なくしてほんとうに靈とまことをもつて主に仕えることはできません。したがつて、「力の源」という意味では、イエス様もオリーブの木も同じことであり、オリーブの木はイエス様を指し示しているのです。ふたりの証人は、王であり祭司としてイエス様を証ししているのです。

主は誓い、そしてみこころを変えない。「あなたは、メルキゼデクの例にならい、どこしえに祭司である。」

(詩篇 110・4)

ヨシュアもゼルバベルも、神によつて特別に備えられた主の証人でした。彼らは、バビロンの捕囚のあとで、エルサレムの神殿を復興するという使命を与えられていました。しかしサタンは、まずイスラエルの民を、偶像を礼拝するようにと誘惑したのです。その結果イスラエルの民は捕らえられ、外国の民族によつて支配されることになりました。そしてさらに、サタンはあらゆる方法をもつてエルサレムの町と神殿の復興に対し反抗しました。つまり、大きな闇がエルサレムを支配するようになったのです。この闇の中で主の証し人となるためには、人はオリーブの木のようにならなければなりません。オリーブは、聖書によれば「聖靈の象徴」です。これらふたりの証人がオリーブの木であるという意味は、ふたりの証人たちが、聖靈によつて完全に満たされていたということを表わしているのです。

3 二つの燭台

次に、ふたりの証人は、「燭台」でもあります。なぜなら、ふたりの証人は、「燭台」のように燃えているからです。終りの世の闇の中で、ふたりは燭台のように輝いています。そして、これと同じ働きは、私たちにもそなえられています。

しかし、聖靈があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。

(使徒 1・8)

私たちも、主を証しする明りになつてゐるでしょうか。私たちをとおして、光が、学校の中に、職場の中に、家庭の中に、輝いてゐるでしょうか。この終りの時代に遣わされている者は、みなが証し人であり、オリーブの木であり、燭台なのです。

証し人とは、自分を語るのではなく、イエス様を語る者です。オリーブの木は、聖靈で満たされ、特定の使命のために、聖靈の満たしを受けている者を表わしています。

燭台とは、ともしうがあり、燃えるものです。イエス様のみこころにかなうように、という願いに燃えている者を表わしています。

肉体の中にあるうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

(Ⅱコリント 5・9)

私たちの人生の目的は何でしょうか。迷う人々をイエス様のみもとに連れてくることでしょうか。教会を建てることでどうか。信仰の復興を起こすことでしょうか。もちろんこれらのことが悪いというのではありません。しかし、これらのことよりも、もつともっと大切なことがあります。それは「イエス様のみこころにかなった生活をする」ことです。私たちの心の中の、もつとも深い願いは何でしょうか。主の前に静まって、このことをよく考えてみたいと思います。

2 何をするか

次に、ふたりの証人の行動と使命について考えてみましょう。ふたりは全地がイエス様のものであることを宣べ伝えるのです。

ふたりは、イエス様こそが全地を支配するお方であり、このお方によつてイスラエルが回復されることを宣べ伝えます。ゼカリヤは、全地の王と祭司となるべきお方について、預言の成就を目があたりに見ていたのです。

また、このふたりは荒布を着ています。これは悔い改めを象徴しています。ダニエルと同じように、ふたりの証人も、イスラエルの罪の下に身を沈めるのです。

この時代には、反キリストが現われ、神の義が踏みにじられて、悲しみが町に満ちていきました。ふたりは口先だけで悔い改めを叫んだのではなく、洗礼者ヨハネと同じように自分の全存在をかけて民の罪を告げたのです。すべての人は、イエス様の再臨だけが重要であつて、その他の一切のことは第二次的な意味しかないことを知らなければならなかつたのです。

悔い改めのしとして、旧約聖書の時代においては、人々は悲しみの衣を身にまとわなければなりませんでした。

ヤコブは自分の着物を引き裂き、荒布を腰にまとい、幾日もの間、その子のために泣き悲しんだ。

(創世記 37・34)

ヒゼキヤ王は、これを聞いて、自分の衣を裂き、荒布を身にまとって、主の宮にはいつた。

(イザヤ 37・1)

「…彼らはとうの昔に荒布をまとい、灰をかぶって悔い改めていたことだろう。」

(マタイ 11・21)

ふたりはイエス様こそが王の王であること、また来るべき全地の支配者であることを宣べ伝えます。イエス様は王としてまた祭司として、回復されるイスラエルの支配者となられるのです。さてこれから、黙示録に出てくる「ふたりの証人」について、三つのことを考えてみましょう。まず、ふたりの証人の「行動の時」がいつなのか、次に「行動の場所」はどこか、そして「行動の武器」は何か、どのように戦うのか、などについてです。

ふたりの証人が出てくるのは、恵みの時ではなく、怒りとさばきの時です。したがつて私たちは、ふたりの証人の祈りが、恵みを求めるものでなく、さばきを求めるものだということがわかります。

この点について、すこし説明しておきましょう。私たちがすでに学んできたように、教会の携挙の後で千年王国にいたるまでには、その間に七年の期間が横たわっています。そして、この七年の前半の三年半のうちに、次のようなことが起こります。

彼らは大声で叫んで言つた。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行なわず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」
(黙示 6・10)

この期間に反キリストが現われて、イスラエル民族と平和を守る約束をします。

「彼は一週間の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」
(ダニエル 9・27)

この期間には、ふたりの証人も現われて、主の御名によつて預言を行ないます。

「それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。」
(黙示 11・3)

この後、黙示録11章の4節から13節にわたって、そのときに起ることが記されています。この期間の中で、かつて黙示録の7章で学んだように、イスラエル民族の十四万四千人の額に、神のしもべとしての印が押されるのです。

そしてこの期間には、十の国が結束した帝国が起ることです。

また私は見た。海から一匹の獸が上つて来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神を汚す名があつた。 (黙示 13・1)

「あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ國を受けてはいませんが、獸とともに、一時だけ王の權威を受けます。この者どもは心を一つにしており、自分たちの力と權威とをその獸に与えます。この者どもは子羊と戦いますが、子羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、子羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」

(黙示 17・12～14)

また、これらに関連する旧約聖書の言葉としては、他の章でも学んだとおり、ダニエル書の2章36節から45節まで、7章の7、8節と23節から27節までがあり、あわせてお読みくださいといいます。

そして、今学んでいる13章の11節から18節を読むと、にせ預言者が反キリストの側に立つのもこの期間であることがわかります。

さらに、この七年間の後半の三年半にどのようなことが起ころかを説明しておきましょ。七年半のちょうど中頃において、反キリストは、ユダヤ民族と交わしていた平和の約束を、破ります。そして、二人の証人を殺害してしまうのです。こうしてイスラエル民族にとつての、大きな苦難が始まります。

「彼は一週の間、多くの者と堅い約束を結び、半週の間、いにえとささげ物とをやめさせ。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」

(ダニエル 9・27)

そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上つて来る獸が、彼らと戦つて勝ち、彼らを殺す。彼らの死体は、靈的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。

もうもろの民族、部族、國語、國民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝つて、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。

(默示 11・7～10)

しかし、ふたりの証人は、死からよみがえり、神のみもとに上ります。

しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らにはいり、彼らが足で立ち上がつ

たので、それを見ていた人々は非常な恐怖に襲われた。そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上がり。」と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。そのとき、大地震が起こつて、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。

(黙示 11・11～13)

その後に、この三年半は恐ろしい戦乱と革命の時代になります。この時代に起こることは、默示録の6章全体に示されています。つまり、すでに学んだとおり、子羊が七つの封印を解き、白い馬、赤い馬、黒い馬、青ざめた馬が現われ、その後に殉教の人々がさばきを叫び、そして大きな地震と星が地上に落ち、地上の主に従わぬ人々が逃げまどい、御怒りの日が来ます。くわしくは、6章の学びをもう一度お読みください。

この時の、まことの信者であるユダヤ人に対する迫害は、例を見ないほどに激しいものになります。そして、これについては、今学んでいる默示録13章の11節から18節に示されています。

このようにして、イスラエル民族の全体が悔い改めにすすむのです。

その日、主は、エルサレムの住人をかばわれる。その日、彼らのうちのよろめき倒れた者もダビデのようになり、ダビデの家は神のようになり、彼らの先頭に立つ主の使いのようになる。その日、わたしは、エルサレムに攻めて来るすべての国々を捜して滅ぼそう。

(ゼカリヤ 12・8、9)

さらに、いつわりの教会も破壊されます。

この者どもは子羊と戦いますが、子羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、子羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」

(黙示 17・14)

この世の支配権は、イエス・キリストの再臨によつて、破壊されます。

また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗つた方は、「忠実また真実」と呼ばれる方であり、義をもつてさばきをし、戦いをされる。：その方は血に染まつた衣を着ていて、その名は「神のことば。」と呼ばれた。：この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出でていた。この方は、鉄の杖をもつて彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。：また私は、獸と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗つた方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。すると、獸は捕らえられた。また、獸の前でしるしを行ない、それによつて獸の刻印を受けた人々と獸の像を挙む人々とを惑わしたのにせ預言者も、彼といつしょに捕らえられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に生きたままで投げ込まれた。残りの者たちも、馬に乗つた方の口から出る剣によつて殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。

(黙示 19・11・13・15・19・21)

終りの時代はまた、しるしと奇跡の時代です。獸である反キリストやにせ預言者が、多くのしるしと奇跡を行ないます。そして、多くの人々が驚きます。しかし、ふたりの証人のしるしと奇蹟は、それらにまさるものであります。誰もこのふたりの証人に打ち勝つことはできません。これは、十四万四千人のまことの信者であるユダヤ人にとって大きな励ましとなることでしょう。彼らの証言は、ふたりの奇蹟によつて、その眞実であることが証明されるのです。もちろん、この世の力は、ふたりの証人の力を消し去ることはできません。

千二百六十日の間、ふたりの証人は反キリストに対抗します。この千二百六十日が終わるまでには、ふたりの力は絶えることはありません。神が彼らの力となられるからです。

そして、この期間はまた、試練のときです。封印のさばきとラッパのさばきは現実的なものです。あらゆるさばき、あらゆる反キリストの力にかかわらず、ふたりの証人の力は絶えることがあります。これはイエス様の全能の力を証しするのです。

試練は恐るべきものですが、これをとおしてイスラエル民族は神の器となります。また、この時代には一つの分離が起こります。つまり、十四万四千人のユダヤ人がユダヤ民族の中から分離されて、全地にわたつてイエス様の証人となるのです。

さらに、この時代は恐るべき墮落の時代です。この墮落もまた現実的なものです。しかし、ふたりの証人は彼らを取り巻いている現実を見ることなく、ただ主だけを仰ぎ見たのです。

主は私たちにも、ふたりの証人と同じように、罪に対してもつきりとした態度をとることを望んでおられます。神の証しは、闇の夜における明りです。

2 行動の場所

次に、私たちはふたりの証人の「行動の場所」について考えてみましょう。

その場所はエルサレムです。かつて使徒たちはエルサレムにおいて証しをしましたが、この終わりの時代においても、ふたりの証人はエルサレムで証しをするのです。エルサレムはかつて「聖なる都」と呼ばれていました。しかし、この都はきわめて反キリスト的となり、獸である反キリストとともに行動するものとなりました。ユダヤ人はこの世から分離することなく、かえつてこの世的になってしまったのです。

「ユダヤ人である」ということは、神のものであり、神のためのものである、という意味です。しかし、そのユダヤ人たちは、イエス様の支配と権威とを拒む者の集団となつてしましました。そのために、ユダヤ人であるということは、イエス・キリストに逆らう者、と言う意味にすらとられるようになつてしまつたのです。それはかつてのイエス様の弟子たちがすべてユダヤ人であつたことを考えるとまことに悲しむべきことです。

弟子たちはイエスに言つた。「先生。たつた今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」

(ヨハネ 11・8)

その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ

人を恐れて戸がしめてあつたが、イエスが来られ、彼らの中に立つて言われた。「平安があなたがたにあるように。」

(ヨハネ 20・19)

イエス様に属するべきユダヤ人が、イエス様に敵対するようになつたと同じように、かつての聖なる都エルサレムも、ソドムやエジプトと同じように堕落してしまつたのです。

ソドムは墮落と誘惑に満ちた町でした。

もしも、万軍の主が、少しの生き残りの者を私たちに残されなかつたら、私たちもソドムのようになり、ゴモラと同じようになつていた。聞け。ソドムの首領たち。主のことばを。耳を傾けよ。ゴモラの民。私たちの神のみおしえに。

(イザヤ 1・9～10)

「まことの神から離れる」とは靈的な姦淫である」と主は言われています。

どうして、遊女になつたのか、忠信な都が。公正があふれ、正義がそこに宿っていたのに。今は人殺しばかりだ。

(イザヤ 1・21)

エジプトは偶像を持ち、かたくなであり、神の民にたいする憎しみに満ちた国でした。またそれらすべての象徴でもありました。ソドムの特徴は姦淫であり、エジプトの特徴は力をもつて神の民を押さえつけたことにあります。

聖なる都であるエルサレムは、かつては預言者たちを殺し、イエス様を十字架で殺し、そして

終りの時代には、まことの神から離れているこの世の象徴となるのです。エジプトは、まことの神に仕えようとした民を捕らえ、押さえつけた国でした。多くのユダヤ人は、主のために残されたユダヤ人に対して敵対する者になりました。

「エルサレムの預言者の中にも、恐ろしい事をわたしは見た。彼らは姦通し、うそをついて歩き、悪を行なう者どもの手を強くして、その悪からだれをも戻せない。彼らはみな、わたしには、ソドムのようであり、その住民はゴモラのようである。」（エレミヤ 23・14）

イスラエルの歴史には、いつも残された少数の忠実な証し人が存在していました。それは、まことの神から離れたイスラエル国民の中に残された、靈的なイスラエルでした。

エリヤの時代にも、バアルに膝をかがめない七千人が残されていました。

「しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。これらの者はみな、バアルにひざをかかめず、バアルに口づけしなかつた者である。」（I列王記 19・18）

イザヤの時代にも、このような小さな群れが存在していました。この小さな群れが残っているために、主はイスラエルの民を滅ぼすことをなさらなかつたのです。

もしも、万軍の主が、少しの生き残りの者を私たちに残されなかつたら、私たちもソドムのようになり、ゴモラと同じようになつていた。

（イザヤ1・9）

「その日になると、イスラエルの残りの者、ヤコブの家ののがれた者は、もう再び、自分を打つ者にたよらず、イスラエルの聖なる方、主に、まことをもつて、たよる。」

(イザヤ 10・20)

捕囚の時にもこのような人々が存在しました。彼らは少数の群れとなっていたのです。その人々の中に、エヌテル、モルデカイ、エゼキエル、ダニエルとその友達などがいたのです。イエス様がお生まれになつたときにも、洗礼者ヨハネやシモン、アンナなど、イスラエルの救いを待ち望んでいる人々がいたのです。

ちょうどこのとき、彼女（アンナ）もそこにいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贋いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語つた。
(ルカ2・38)

現在でも、イエス・キリストを救い主、メシヤであると信じる少数のユダヤ人が存在しています。しかし、大きな難難の時には、イエス様を救い主として告白する人々は、十四万四千人になります。

それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった。
(黙示 7・4)

以上のことから明らかのように、ふたりの証人の「行動の場所」は次のとおりです。

まず、ふたりの証人の「行動の場所」は、預言者たちとイエス様とが殺された都です。

そこで、ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスをむち打つてから、十字架につけるために引き渡した。

次に、ふたりの証人の「行動の場所」は恥とのろいの場所です。

イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を（ヘブル 12・2）忍び、神の御座の右に着座されました。

キリストは、私たちのためにのろわれた者となつて、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてのろわれた者である。」と書いてあるからです。

（ガラテヤ 3・13）

また、ふたりの証人の「行動の場所」は、救いを拒まれた、死の都です。

祭司長たちや役人たちがイエスを見ると、激しく叫んで、「十字架につけろ。十字架につけろ。」と言つた。ピラトは彼らに言つた。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。」

（ヨハネ 19・6）

「…人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

(マタイ 20・18、19)

これらは決して魅力のある場所、快適な場所ではありませんでした。私たちは、神が私たちを困難な状況と、困難な働きの場所に導かれるときに、このふたりの証人によつて励ましを受けようではありませんか。主は言われます。

「わたしは、あなたの苦しみと貧しさとを知つてゐる。…わたしは、あなたの住んでいる所を知つてゐる。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保つて、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかつた。」

(黙示2・9、13)

3 行動の武器

次に、ふたりの証人の行動の「武器」について考えてみましよう。彼らは何を武器にして戦うのでしょうか。

ふたりの証人が置かれる場所も、時代も、たいへんきびしいものですが、このような状況の中で彼らは十分な武器を与えられるのです。それは「彼らの立場」、「彼らの持つ証し」、そして「彼らの防衛力」の三つです。

まず「彼らの立場」は、全地の支配者である主の前に立つ者です。全世界はふたりの証人に敵対しますが、主は、ふたりの証人の味方となられます。

神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。（ローマ 8・31）

エリヤも、「私たちの仕えている神」と言っています。

…エリヤはアハブに言った。「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。わたしのことばによらなければ、ここ一、三年の間は露も雨も降らないであろう。」

（I列王記 17・1）

エリヤが主に仕えているときには、エリヤは主の前に立ち、主から使命を授けられ、主の使いとなることを意味していたのです。エリヤは主の使命をなしとげるときに、神の権威を受けられたのです。

アブラハムも、墮落し、まさにさばきに会おうとしていた民をかばって、主の御前に立ち続けました。

ふたりの証人もまた、主の前に立ち、主のみ旨にかなうことを探るので、闇の世の中で光となります。

次の武器は、「彼らの持つ証し」です。彼らが持つのは主の権威です。ふたりの証人は、天を閉ざしたエリヤと同じような、また水を血にかえたモーセと同じような主の権威を持つのです。

このふたりの証人は、エリヤとモーセに共通したところがあります。ふたりの証人は、天と地と海に対する権威を持つています。ふたりの証人は、不正な者に反抗し、彼らを悩まし、決して彼らを避けたりしません。彼らは、主と人の正しさを足で踏みにじる者に対して、苦しみとなります。そして、主に対しても忠実に生きる者に対しては、慰めと励ましとなります。

私たちは、モーセがエジプトにわざわいをもたらしたとき、彼がいかにエジプトを悩ませたかを思い出します。

主はモーセに仰せられた。「パロの心は強情で、民を行かせることを拒んでいる。あなたは朝、パロのところへ行け。見よ。彼は水のところに出て来る。あなたはナイルの岸に立つて彼を迎へよ。そして、蛇に変わったあの杖を手に取つて、彼に言わなければならぬ。ヘブル人の神、主が私をあなたに遣わして仰せられます。『わたしの民を行かせ、彼らに、荒野でわたしにつかえさせよ。』ああ、しかし、あなたは今までお聞きになりませんでした。」

(出エジプト 7・14～16)

すると、主はきわめて強い西の風に変えられた。風はいなごを吹き上げ、葦の海に追いやつた。エジプト全域に、一匹のいなごも残らなかつた。

(出エジプト 10・19)

さらに私たちは、コラの家族に対する主のさばきについて思い出すのです。

彼らとすべて彼らに属する者は、生きながら、よみに下り、地は彼らを包んでしまい、彼

らは集会の中から滅び去つた。

(民数記 16・33)

さらに、三年半にわたつて、天を閉ざしたエリヤのことを思い出します。

…エリヤはアハブに言つた。「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。」

(I列王記 17・1)

あるいはエリヤがその敵を火で滅ぼしたことを思い出します。

エリヤはその五十人隊の長に答えて言つた。「もし、私が神の人であるなら、天から火が下つて来て、あなたと、あなたの部下五十人を焼き尽くすだろう。」すると、天から火が下つて来て、彼と、その部下五十人を焼き尽くした。

(II列王記 1・10・12)

それゆえ、万軍の神、主は、こう仰せられる。「あなたがたが、このようなことを言つたので、見よ、わたしは、あなたの口にあるわたしのことばを火とし、この民をたきぎとする。火は彼らを焼き尽くす。」

(エレミヤ 5・14)

ふたりの証人の口から出ていた火は、彼らのさばきの言葉を意味していると思われます。

「それゆえ、見よ、わたしはあなたがたを全く忘れ、あなたがたと、あなたがたや先祖た

ちに与えたこの町とを、わたしの前から捨て、永遠のそしり、忘れられることのない、永遠の侮辱をあなたがたに与える。」

(エレミヤ 23・39)

しかし、彼が知恵と御靈によつて語つていたので、それに対抗することができなかつた。

(使徒 6・10)

ふたりの証人の言葉は、すでに悔い改めを求める最後の呼び掛けであるというよりは、さばきの言葉です。イエス様が、ふたたび来られること、すべての真理に敵対している人々に対するさばきがくだされることを告げるのです。

真理に対する意識的な反抗は、モーセに逆らつたパロに、またエリヤに逆らつたアハブトイゼベルに見ることができます。しかしどの場合も、彼らはモーセやエリヤの言葉の背後に全能の主が立つておられるることを知つていたのです。

天を閉ざすということは、単に雨を止めるだけでなく、恵みの雨をも閉ざすことと意味しています。恵みを拒まれた者は、さばきに向かうのです。

默示録11章6節にある、「水を血に変え」という言葉は、現代の水質の汚染などを意味するだけでなく、愛も、家庭も、芸術も、文化も、あらゆる人間の営みが混乱して汚されることを意味しています。

さらに、ふたりの証人の「防衛力」について考えてみましょう。

彼らの防衛力は、5節にあるとおり、「□から出る」火です。彼らに害を加えようとする者があれば、この火が敵を滅ぼし尽くします。彼らの防衛力は主が許された千二百六十日だけ続きます。

エリヤは彼らに答えて言った。「もし、私が神の人であるなら、天から火が下つて来て、あなたと、あなたの部下五十人を焼き尽くすだろう。」すると、天から神の火が下つて来て、彼とその部下五十人を焼き尽くした。

(Ⅱ列王記 1・12)

それゆえ、万軍の神、主は、こう仰せられる。「あなたがたが、このようなことを言つたので、見よ、わたしは、あなたの口にあるわたしのことばを火とし、この民をたきぎとす。火は彼らを焼き尽くす。

(エレミヤ 5・14)

ふたりの証人は、その使命を果たし終えるまでは、死ぬことがあります。

ヤコブとヨハネは、かつて、イエスの時代に、天からの火を求めてことがあります。

弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましようか。」しかし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた。

(ルカ9・54～56)

イエス様は彼らをきびしく戒めて、「あなたがたは神の子ではないか。それなのに、なんということを言うのか。」と言われたのです。このときはまだ「恵みの時」でした。しかし、黙示録では

すでに恵みの時が終わり、さばきの時が始まつてゐるのです。

3 何を体験するか

1 死

さて次に、ふたりの証人は何を「体験する」のかを考えてみましょう。

ふたりの証人は、「全地は主イエス様のものである」と証言します。ふたりは、反キリストの獸に反抗するのです。そして獸は全地の所有者などではなく、イエス様こそがそのお方であると証言するのです。洗礼者ヨハネと同じように、ふたりの証人はイエス様が来られる日の近いことを証言します。イエス様は再び来られ、支配される日が近いことを証言するのです。

パロの前に立つたモーセと同じように、アハブの前に立つたエリヤと同じように、主がじつさいにおられるふたりは証言するのです。

この証言の結果、何が起つたでしようか。私たちはその結果として、十四万四千人のユダヤ人が印を押され、最初の三年半の間に、あらゆる国民の中から多くの人々が救われることをすでに見てきました。7章をとおして、彼らの証言の結果がどうなるか、直接的に、また間接的に語られています。

さらにその結果として、獸との激しい戦いが起ります。6章ではこの獸のことが語られています。ここで獸は、白い馬に乗り、いわゆる平和の人の姿を装つて現われるのです。

ダニエルは、四つの獸に象徴された四つの帝国を見たのですが、默示録においては、ヨハネは

第四番目のもつとも恐ろしい獸を見たのです。11章7節に出てくる「底知れぬ所から上つてくる」獸がその獸です。

また私は見た。海から一匹の獸が上つて来た。これには十本の角と七つの頭があつた。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があつた。

(黙示 13・1)

：しかし、やがて底知れぬ所から上つて来ます。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獸が、昔はいたが、今はおらず、やがて現われるのを見て驚きます。

(黙示 17・8)

この獸である反キリストは、底知れぬ所から上つてきて、ふたりの証人に戦いをいどみ、ふたりの証人を物が言えなくし、その後ふたりを殺そうとするのです。ふたりの証人の活動する期間は三年半です。つまり四十二カ月であり、千二百六十日です。この期間は主によつて定められた期間です。この時間が過ぎ、彼らの使命が終わるとときに、この獸は、ふたりの証人を殺すことが許されるのです。

このことは、かつてエルサレムで起こったことの繰り返しです。かつてユダヤ人は、イエス様を取り除け、と言いました。

もしあの人をこのまま放つておくなら、すべての人があの人に信じるようになる。そうなると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。

このことが黙示録でも再び繰り返されています。反キリストは、イエス様がまことの支配者であるという証言を、取り除こうとしているのです。そのために、その証し人を殺すのです。しかし、反キリストが殺すことができるのは、ふたりの証人の肉体だけであり、それは悪魔の真の勝利とは言えません。ふたりの証人の「まことのいのち」は殺すことができないのです。

「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れではなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」

(マタイ 10・28)

反キリストがふたりの証人を殺すことができるのは、全能者である主がそのことを許されるからです。ですから黙示録全体の中に、「与えられた」という表現がたくさん出てくるのです。

：彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出ていった。

(黙示 6・2)

彼はまた聖徒たちに戦いをいどんに打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。

(黙示 13・7)

あらゆる民族、国語、部族、国民が、ふたりの証人の死体を眺めます。それはこのことが全世界の目の前で起こったことを意味しています。おそらくこのできごとは、世界中の人々がテレビやラジオで日撃することになるでしょう。ふたりの証人が殺されることによって、全世界の人々は大いに喜ぶのです。彼らの死体が都の大通りにさらされる、ということは、晒し者にされて抹殺されることを意味しています。

そして同じことが、かつてのイエス様に起こりました。イエス様は殺され、苦しまれただけではなく、辱めをも受けられたのです。

イエスは言われた。「エリヤがまず来て、すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの苦しみを受け、さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのですか。」

（マルコ 9・12）

イエス様は、私たちの罪のために死んでくださつただけではなく、辱めの死をも受けられたのです。

当時は、墓に納められないということは、大きな辱めを意味していました。反キリストは、9節にあるように、ふたりの証人の死体を墓に納めることを許さず、ふたりの証人を辱め、その名譽も取り去ろうとするのです。そして、10節にあるように、人々は喜び祝つて互いに贈り物を贈りあうのです。かつて、イエス様がお生まれになったとき、贈り物が贈られたように。なぜ喜び祝つたかというと、ふたりの証人によつて「地に住む人々は苦しめられた」からです。

かつて悪靈は、イエス様に對して「なぜ、まだその時でないのに、もう私たちを苦しめに來られたのですか」と言いました。

すると、見よ、彼らはわめいて言つた。「神の子よ。いつたい私たちに何をしようというのです。まだその時ではないのに、もう私たちを苦しめに來られたのですか。」

(マタイ8・29)

エリヤもまた、イスラエルの民にとつて、心を動搖させ、平安を乱し、彼らを苦しめる者として受け取られていました。

アハブが、エリヤを見るや、アハブは彼に言つた。「これはおまえか。イスラエルを煩わすもの。」

(列王記 18・17)

アハブは、エリヤを敵と見なしたのです。パロもモーセに對して、さばきがこないようにしてくれるようにと願いました。

家臣たちはパロに言つた。「いつまでこの者は私たちを陥れるのですか。この男たちを行かせ、彼らの神、主に仕えさせてください。エジプトが滅びるのが、まだおわかりにならないのですか。」

(出エジプト 10・7)

私たちは、ここに人間の本当の姿を見る思いがします。なぜなら、すべての國民がふたりの証人

の死を喜ぶからです。これは悪魔的な喜びです。イエス様が十字架につけられる日に、ピラトとヘロデが仲良くしたように、ふたりの証人の死のときにも、人々は喜びの声をあげるようになります。獣の勝利が、全世界によつて祝われるのです。

2 よみがえり

次にふたりの証人のよみがえりについて考えてみましょう。

ふたりの証人は殺され、辱められますぐ、人々の喜びは短く、三日半続くだけです。エルサレムの人々の目の前で、またテレビで見ている全世界の人々の目の前で、突然、ふたりの証人はよみがえるのです。そして立ち上がるのです。何という驚きでしょうか。人々にとつては大きな喜びの後で、大きな驚きと不安とが襲つてくるのです。一人の証人は次の二点を体験するのです。
もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御靈が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御靈によつて、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださいのです。

(ローマ 8・11)

ふたりの証人のよみがえりは何を意味しているのでしょうか。これは神がふたりを受け入れておられることを意味しています。神は、彼らの肉のからだを、靈のからだへと変えられるのです。また、神の全能の力の働きによつて私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように

偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。 (エペソ 1・19)

イエス様を死者の中からよみがえらせた神の力が、ここに現われるのです。イエス様のからだは靈のからだでした。復活した後でも、イエス様のからだを巻いていた麻布はそのまま残されました。イエス様は、靈のからだをもつて閉ざされた家の中に入り、弟子たちの前に姿を現わされたのです。また、イエス様は「靈」だけでなく「靈のからだ」もお持ちでした。ですからイエス様は、弟子たちの前で魚をとつて食べることができたのです。靈は食べたりはしません。だからだのあるものだけが、食べることができるのです。

ふたりの証人の死は、それだけでひとつ証しです。イエス様は彼らにとつて偉大なお方であり、そのために彼らはいのちを捧げるのです。これが彼らの証しです

彼らの死は終りでなく完成です。これによつて彼らは自分たちの使命を達成するのです。彼らは使命を果たし、獸に打ち勝つのです。死に至るまで、ふたりは自分のいのちを惜しまなかつたのです。

兄弟たちは、子羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝つた。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかつた。

(黙示 12・11)

ふたりの証人の死によって、一時、神の口はふさがれます。このために世界はその欲するままを行うようになり、何をするにも自由になります。すべての人々は自分の知恵と力に頼つて生き

るようになります。

しかし、自分の知恵と力に頼つて生きるということは愚かなことです。また自分の力で生きることは、永遠の滅びを意味します。「神の証人が死んだのは、神が死んだからであり、我々は自分にしたいことを自由にすることができる」という考えはもちろん間違っています。

11節にあるとおり、三日半の後よみがえったふたりの証人は、彼らに向かつてそれとは正反対のことを身をもつて証しします。つまり、ふたりが復活することによって、主が生きておられるということ、イエス・キリストもまた生きておられ、主のみことばは生きており、したがつてふたりは滅びることがないことを証明するのです。それで人々は、「神のみことばが偽ることがないゆえに、われわれは滅び去る」と言わざるをえなくなり、これが彼らの大きな恐怖と不安に襲われる原因となるのです。

山や岩に向かつてこう言つた。「私たちの上に倒れかかつて、御座にある方の御顔と子羊の怒りとから、私たちをかくまつてくれ。御怒りの大きいなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」

(黙示 6・16、17)

3 昇天

人々はその目でふたりの証人のよみがえりを見るとともに、耳でも天からの大きな声を聞くことがあります。これはヨハネが默示録4章1節で聞いたのと同じ声です。これはまた、ふたりの

証人を天の御国へと呼び入れる声です。12節にある「雲に乗って天に上る」というその雲は、主のご臨在、主のご榮光を表わしています。

：彼らが主の宮の東の門の入り口で立ち止まるとき、イスラエルの神の榮光がその上をおおつた。

（エゼキエル 10・19）

彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい。」という声がした。

（マタイ 17・5）

イエス様に忠実な者に対する態度は、イエス様もまた忠実であられます。これは殉教の道です。しかしこれによって、主がご榮光をお受けになるのです。ふたりの証人の死はいのちへ至る道であり、ふたりの滅びは携挙に至る道です。

ふたりの証人の昇天の結果は何でしょうか。人々はふたりが昇天するありさまを見ます。ちょうど弟子たちが、イエス様の昇天を見たのと同じようにです。イエス様の昇天を見ていた弟子たちは天使たちによつて驚かされました。そして天使たちは彼らに再臨を語りました。

イエスが上つて行かれるとき、弟子たちは天を見つめました。すると、見よ、白い衣を着たひとがふたり、彼らのそばに立つていた。

（使徒 1・10）

終りの時代においては、人々は、天使たちによつて驚かされるのではなく、さばきによつて驚

かされるのです。そのさばきとは13節にあるとおり地震のことです。地震は、イエス様の死の時にも起こりました。また、イエス様の復活のときにも地震が起きました。

すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。

(マタイ 27・51)

すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。

(マタイ 28・2)

黙示録6章12節にも、子羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こったと書いてあります、これは自然と人間にに対する主の御怒りのみわざを記したものであり、11章13節の地震は、大きな都であるエルサレムに対する主がどのように働かれるかが書いてあるのです。

地震によって、三つのことが起ります。

まず第一に、都の十分の一が破壊されます。このことは13節に示されています。都の十分の一とは何を意味しているのでしょうか。これは、すべてのものはもちろん主に属していますが、イスラエル人は自分たちの十分の一だけを主に捧げていたことを意味しています。

十分の一という言葉は、いつも「全体を代表する」意味をもっています。この都はすべてのものを主にささげる備えがなかつたのです。それゆえ、大きなさばきが起こつたのです。「十分の一が破壊された」ということは、「すべてのものが破壊されるべきである」ということを意味しています。

す。主は、「都の全体が破壊されるにあたいする」と言つておられるのです。

第二に、13節にあるとおり、七千人の人々が死にます。

エリヤの時代に、まことの神とバアルのどちらが真に力を持つているかという争いが起きました。この争いは、まことの神に仕える忠実な民と、バアルに仕える不忠実な民との間に起きました。その当時、忠実だった民の数が七千人でした。これに対しても黙示録では、不忠実な民の数が七千人とされているのです。

さらに13節では、生き残った人々は恐怖に満たされ、彼らは天の神をあがめたことが記されています。彼らは獸ではなく、まことの神に榮光を帰するのです。

しかし、彼らの間には、悔い改めが欠けています。それはダニエルとその友人たちがした祈りとはまったく違うものです。

王は怒り、大いにたけり狂い、バビロンの知者をすべて滅ぼせと命じた。：彼らはこの秘密について、天の神のあわれみを請い、ダニエルとその同僚が他のバビロンの知者たちとともに滅ぼされることのないようにと願った。
(ダニエル 2・12、18)

悔い改めのないところに、救いはありません。エリヤの時代に、カルメルの山から、神に榮光を帰したのです。

エリヤが民全体に、「私のそばに近寄りなさい。」と言つたので、民はみな彼に近寄つた。それから、彼はこわれていた主の祭壇を建て直した。

(I列王記 18・30)

当時、すべてのイスラエルの民が神に栄光を帰したにもかかわらず、真に礼拝を捧げたのはその中の七千人だけでした。モーセの時代にも、パロはまことの神、主の存在を認めました。しかしエジプトはわたしがした。

「パロとその戦車とその騎兵を通して、わたしが栄光を現わすとき、エジプトはわたしが主であることを知るのだ。」
(出エジプト 14・18)

主に「栄光を帰する」ということは、必ずしもイエス様を受け入れ、救われることを意味するわけではありません。それは単に神を認めるだけのことであつて、決して罪を悔い改めることではないからです。そして罪の悔い改めのないところには、赦しも救いもありません。

私たちちは初めに、ゼカリヤ書3章に記されているヨシュアのことを見てきました。

ヨシュアは、よごれた服を着て、御使いの前に立っていた。御使いは、自分の前に立っている者たちに答えてこう言つた。「彼のよごれた服を脱がせよ。」そして彼はヨシュアに言つた。「見よ。わたしは、あなたの不義を除いた。あなたに礼服を着せよう。」

(ゼカリヤ 3・3、4)

ヨシュアとゼルバベルとは、默示録のふたりの証人を指し示すものでした。ヨシュアは汚れた

衣を着ていました。汚れた衣とは罪の衣であり、罪とは神と人との壁です。しかし御使いがヨシュアのよごれた服を脱がせたので、ヨシュアは自分の罪が赦されたことを知りました。

ふたりの証人の場合にも、罪を赦された人々を見ることがあります。ふたりは、罪の赦しを体験したからこそ、罪の赦しを宣べ伝えるのです。

その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の靈を注ぐ。

(ゼカリヤ 13・1、12・10)

主はご自身の靈を、イスラエルの民の上に注ぎ出されるのです。このことをとおして十四万四千人のイスラエル人が救われることになるのです。

私たちが罪の赦しの確信を持つていては大きな問題です。イエス様がヨシュアに言わされたように、「あなたの罪は赦された」と私たちにも言われるときに、私たちは本当に幸いな者となるのです。

御使いは、自分の前に立っている者たちに答えてこう言った。「彼のよごれた服を脱がせよ。」そして彼はヨシュアに言った。「見よ。わたしは、あなたの不義を除いた。あなたに礼服を着せよう。」

(ゼカリヤ 3・4)

18

世界を統治するための主の来臨 第七のラツパのさばき、第三のわざわい

黙示録11章15節から18節まで

- | | | | |
|---|---------------|---|--------------|
| 1 | 遣わされた者の大好きな叫び | 3 | 贖われた者たちの真の礼拝 |
| 2 | 天の軍勢の答 | 1 | 神の偉大な力 |
| 3 | 神は王である | 2 | 神の不变性 |
| 1 | 神は王となる | 3 | 神の支配 |
| 3 | 神は王となられた | 4 | 神の怒り |
| 2 | | 5 | 死者の復活 |
| 1 | | 6 | 信じる者の報い |
| 3 | | 7 | 主のさばき |

ここからの学びに入る前に、詩篇第2篇に目を留めておきましょう。

なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者とに逆らう。

「さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの綱を、解き捨てよう。」

天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。ここに主は、怒りをもつて彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。

「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」

「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。」

それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。

(詩篇 2)

黙示録の11章後半には「第七のラッパのさばき」、「第三のわざわい」のことが記されています。「第一のわざわい」については、黙示録9章13節から21節に記されていました。その後の10章か

ら11章13節までは、二人の証人のことが記された、いわば中間的な章です。この中間的な章をはさんだ「第一、第二のわざわい」と「第三のわざわい」は、11章14節によつて結びつけられています。14節には、「第二のわざわいは過ぎ去つた。見よ。第三のわざわいがすぐに来る」と第三のわざわいがまもなく始まることが告げられています。そして第七のラッパが吹き鳴らされます。

第三のわざわいは、第七のラッパから始まるさばきです。

第七の使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こつて言つた。

「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなつた。主は永遠に支配される。¹⁶ それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、言つた。「万物の支配者、常にいまし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。¹⁷ 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りの日が来ました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。」

(黙示
11・15～18)

ここで、私たちは、12章から默示録20章15節までの概観を与えられます。つまり、ここには、後の章にくわしく記されているできごとのスケッチが与えられるのです。ここから私たちは「世界審判」の最後の段階に入るのです。この箇所はその序章になつており、これから先、起ることが、短く要約されているのを見ることができます。これから先には、恐ろしいことが起ります。

しかしヨハネは、ここではまだ、その恐ろしいことを見せられていません。ただ、これから起ころうとしていることの「影」を見ているに過ぎないのです。

ヨハネは「イエス・キリストによる世界支配」をすでに見通しています。彼はここでイエス様の勝利と支配を予見しているのです。

「第七のラッパのさばき」、つまり「第三のわざわい」では、二つのことが同時に起こります。一方では「神の怒りとさばき」が、他方では「神の報いと解放」が行なわれます。つまり、神が「人間の怒りと罪」をさばかれることと、神を恐れる者たちが神のさばきによつて滅ぼされる」とのないよう、彼らに「報いと解放」が与えられることが記されているのです。

この箇所をこれからくわしく見ていきましょう。中心となるテーマは、「神がこの世を支配するためにその御座につかれる」ということです。では、この箇所を次の三つ、「遣わされた者の大きな叫び」、「これに対する天の軍勢の応え」「贖われた者たちの真の礼拝」に分けて考えてみましょう。

1 遣わされた者の大きな叫び

1 救いがもたらされる時

「遣わされた者の大きな叫び」は、「神のご支配が始まることを告げ知らせる声」です。かつて学んだ第七の封印のさばきの時に主の再臨が告げられたように、「第七のラッパのさばき」の時にも主の再臨が告げられます。それは神のさばきがまもなく終わろうとしているからです。神のさば

きの結果は、神ただお一人のご御支配の実現です。神のさばきはすべて、悔い改めを求める主の働きかけであり、やがて来るイエス様の再臨を告げるものです。

2 さばきが告げられる時

「第七のラッパのさばき」には、默示録16章以降にくわしくてくる「七つの鉢」のさばきがすべて含まれます。次々に起こるこれらのわざわいは、「獸の王」、つまり「反キリスト」を拝む人々の上にくだされます。それに先立つて、人々は、10章から11章13節までにあるように二人の証人の証しを聞き、さらに一人の昇天を目撃して、真の神を礼拝しなければならないことを教えられます。しかし、にもかかわらず、人々は反キリストを拝み続けるのです。そして「第七のラッパのさばき」があり、その後、12章から14章までは再び中間的な章が続きます。そして、16章からは、「七つの鉢のさばき」について記されているのです。

多くの人々は、「第七のラッパのさばき」を、コリント人への第一の手紙に出てくるラッパと同じものだと考證いています。しかしこの考え方は正しくありません。「第七のラッパ」と「終わりのラッパ」とは決して同じものではありません。聖書ではいろいろな場合にラッパが吹き鳴らされ、その時、その時に意味があります。たとえば、救いがもたらされるときに鳴らされるラッパが、コリント人への第一の手紙15章に出てきます。

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょ。私たちはみなが眠つてしまふのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。

ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

(Iコリント 15・51、52)

この時は、イエス様がご自身の教会を迎えるために、ご自身で来られるのです。

また、王のもとに人々を集め、王の権威を知らせる時にもラッパが鳴らされます。マタイの福音書24章を見てみましょう。

人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。

(マタイ 24・31)

ここにラッパは、イスラエル人がすべて悔い改めて、救世主であるイエス・キリストを受け入れる時に鳴らされるものです。

私たちはすでに、黙示録4章で、教会が天に引き上げられたことを見きました。その後で鳴らされるラッパは、すべてさばきを告げ知らせるためのものです。黙示録11章15節の場合もそうです。これらのさばきのあとで、イエス様はご自身の国をこの地上にお建てになります。ちょうどエリコが七つ目のラッパで陥落したようになります。イエス様も、第七のラッパとともに、この世にご自身の国を建てられるのです。第七のラッパのさばき、つまり、第三のわざわいとともに、千年王国の前の三年半の時代が始まります。そしてこの期間は、恐ろしいさばきの時代になります。

：「地と海とには、わざわいが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒って、そこに下つたからである。」

(黙示 12・12)

3 王が知らされる時

ヨハネは第七のラッパに続いて起ころるさばきを、この後に、初めて見る」とになります。しかしその前に、ヨハネはそのさばきの時代の姿、「影」を見せられたのです。

恐ろしいわざわいの終わつた後は、いつたいどうなるのでしょうか。それを示されるため、主はヨハネに、さばきの後に来る恵みの時代の王国をお見せになりました。それは、15節にあるとおり、「この世の國は私たちの主およびそのキリストのものとなつた。主は永遠に支配される。」王国です。さばきのあとに、この世の国に対する主の支配が現われるのです。

今、この世は確かに悪魔の支配下にあります。マタイの福音書には、悪魔がイエス様にこの世の支配権を与えようと言つたことが記されています。

今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての國々とその榮華を見せて、言つた。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」

今の時代は悪魔がこの世の支配権を握っているのです。そして黙示録17章では、「淫婦であるバビロン」がこの世の支配権をもつてゐることが記されています。

しかし、主のご支配は必ずやります。黙示録では、恐るべき主のさばきによつてサタンの支配権が決定的に滅ぼされることと、そのあとでイエス様の支配権が確立されることが明らかに示されています。

始めに読んだ詩篇第2篇は、この時代についての預言です。つまり、神は「自身の御子をそのままから主なる神は、彼らに対してさばきをもつて応えざるを得ません。それは、イエス様が、この世の民とこの世の國々とを支配され相続される」と主によつて定められているからです。

わたしに求めよ。わたしは國々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。

(詩篇 2・8)

主なる神の最後の呼びかけもまた、人々が「主」自身に自發的に従い、それによつて「救いを得るか」、あるいは、「神に反抗したまま」「さばきを受けるか」、いずれを取るのか、といふことです。すでに救われている私たちは、天からのラッパの知らせを聞きます。私たちには、さばきを通して主の支配が現わされるということが知られています。

2 天の軍勢の答

15節で私たちは、天からのはつきりとした声を聞くことができます。それは「主が王となられ

た」という声です。

黙示録の最大のテーマは、「主のご支配が現わされる」ということです。特に今学んでいる黙示録11章15節から17節、そして12章10節、19章6節にこのことがはつきりと示されています。

そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの権威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」
(黙示録12・10)

また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハallelヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。」(黙示録19・6)

すでに旧約聖書でも、多くの箇所で、このことについて述べられています。そして、「神は王である」、「神は統治なさる」、「神は永遠に統べ治められる」という証しがなされています。主はどこまでも統べ治められる。

(出エジプト15・18)

主は世々限りなく王である。国々は、主の地から滅びうせた。
(詩篇10・16)

まことに、王権は主のもの。主は、国々を統べ治めておられる。
(詩篇22・28)

まことに、いと高き方主は、恐れられる方。全地の大いなる王。

(詩篇 47・2)

神にほめ歌を歌え。ほめ歌を歌え。われらの王にほめ歌を歌え。ほめ歌を歌え。まことに神は全地の王。巧みな歌でほめ歌を歌え。神は国々を統べ治めておられる。神はその聖なる王座に着いておられる。

(詩篇 47・6～8)

主は、王であられ、みいつをまとつておられます。主はまとつておられます。力を身に帯びておられます。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはありません。

(詩篇 93・1)

主は、王だ。地は、こおどりし、多くの島々は喜べ。

(詩篇 97・1)

ラツパと角笛の音に合わせて、主である王の御前で喜び叫べ。

(詩篇 98・6)

主は王である。國々の民は恐れおののけ。主は、ケルビムの上の御座に着いておられる。地よ、震えよ。

(詩篇 99・1)

この方に、主権と光榮と國が与えられ、諸民、諸國、諸國語の者たちがことごとく、彼に仕えることになつた。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その國は滅びる

ことがない。

(ダニエル 7・14)

主は地のすべての王となれる。その日には、主はただひとり、御名もただ一つとなる。

(ゼカリヤ 14・9)

わたしは足なえを、残りの者とし、遠くへ移された者を、強い国民とする。主はシオンの山で、今よりとこしえまで、彼らの王となる。

(ミカ 4・7)

1 神は王である

「神は王である」という意味は、決して、神が多くの王の中の一人であるということではありません。「神だけが王である」ということです。地のすべての王たちは、神である王に仕えなければなりません。私たち個人はもちろん、すべての民族、すべての国々が「まことの神」のみを王としていただくということです。

私の叫びの声を心に留めてください。私の王、私の神。私はあなたに祈っています。

(詩篇 5・2)

また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。

(黙示 1・5)

この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。

(黙示 17・14)

その着物にも、ももにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。

(黙示 19・16)

2 神は王となる

旧約時代の予言者たちは、「神が王である」ことを知つていただけでなく、この地上で「神が王となられる」ことも知つていきました。「神が王となられる」ということは、神が唯一の支配者であられ、神の許しがなければ何も起こりえないことを意味しています。しかし現在、この地上にはこのような「神の支配」は、まだ現われてはいません。私たちは現在もなお、「御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるよう地でも行なわれますように。」(マタイ6・9、10)と、この地上のために祈らなければならないのです。

現在、私たちの間で見られるさまざまの苦しみの原因は何でしょうか。それはまことの神があがめられずに、まことの神でないものがあがめられていることです。悩みの原因は、間違った対象への礼拝と間違った対象への賛美にあります。人々によつてまことの神の御名があがめられていないことが、夫と妻の不和の原因であり、子どもと親との不和の原因であり、北と南の不和の

原因であり、人間と自然との不調和の原因です。これらすべての不調和から私たちが救い出だされるのは、ただ、天地万物の創造主なる「神」だけがあがめられる時です。もし人々が、「心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえる」（ローマ15・6）ならば、すべての問題は解決され、人々に喜びがもたらされるようになります。

「真の礼拝」と、「バビロンの崩壊（黙示17・5、8）とは同時に起こります。バビロンは真の神への礼拝をやめさせようとたくらみ、「獸」つまり、反キリストを礼拝するよう人々を誘惑します。しかし、この地上で御名があがめられないことがあつたとしても、それによって王である神の神聖さが汚されることはありません。

天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。（詩篇 2・4）

そして、まことの神は人々からはつきりとした答を望んでおられます。つまり、神はすべての礼拝者がご自分の元に来ることを求めておられるのです。

3 神は王となられた

私たちは、神の勝利がすでに達成されているということに気づいているでしょうか。イエス・キリストの十字架と死によつて、悪魔の力はすでに滅ぼされてしまつてゐるのです。ですから、これから先、勝利を得るかどうかは問題でなく、すでに得た勝利を、世界中に明らかにしていくことが重要なのです。黙示録11章と19章で、私たちはすでにかちとられた勝利がたたえられている

のを見ることができます。

千年王国における地上でのイエス・キリストの支配が明らかにされる前に、この世界に悪の満ちる時が必ず来ます。神はいまは沈黙なさつておられます。ですから、多くの人々が「神は死んだ」と言っています。しかしそうではなく、神はいま「この世の君」である悪魔に、多くの時と機会を、許しておられるのです。

今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。

(ヨハネ 12・31)

わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません。

(ヨハネ 14・30)

さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。 (ヨハネ 16・11)

神はすでに勝利をかちとられました。そしてそれがまもなく明らかにされることを、今は沈黙して待つておられるのです。ですから大きな苦難の時である反キリストの支配は、一時的な見せかけの働きに過ぎません。悪魔の支配は、イエス・キリストの支配される国に比べれば、取るに足りないものです。まことの神から離れることにより、人類の破滅が明らかにされるとき、イエス・キリストの支配が現わされるのです。

私たちちはこれまで、七つのラッパが「さばきを告げる」だけではなく、「イエス様の支配の現われ」を告げることを見てきました。黙示録16章の「七つの鉢のさばき」で、神のさばきが最高潮に達します。これらのさばきの後で、イエス様はご自身の支配をこの世に確立されるのです。天にある神の教会は、イエス様のご支配の時をすでに前もって見ることができたので、イエス様に礼拝をささげているのです。

3 賛われた者たちの礼拝

ここで、私たちはこの「天にある神の教会の礼拝」について考えてみたいと思います。これについて、黙示録11章17、18節にその根拠が記されています。次に、ここに書かれている七つの根拠について見ていきましょう。

1 神の偉大な力

反キリストである「獸」の力は大変大きいものですが、神の力はそれにまさっています。イエス様は偉大な勝利者です。この大きな力の前で、二十四人の長老たちは地にひれ伏し、イエス様を礼拝します。これは真の献身です。

イエス様は三つの名前で呼ばれています。それは、「主」そして「神」、そして「全能者」というものです。偉大なるまことの神が、イエス様を通して、この地上でご自身の支配を現わそうとしておられるのです。これが礼拝の第一の理由です。

2 神の不变性

礼拝の第二の根拠は、「神の不变性」です。すべてのものは変わりますが、イエス様は決して変わることのないお方です。

イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。（ヘブル 13・8）

11章17節に「常にいまし、昔います」という表現がありますが、1章4節にあつた「後に来れる方」という表現は消えています。なぜなら、その方が「後に」ではなく、すでに「来られた」方だからです。それゆえ礼拝がささげられるのです。

3 神の支配

礼拝の第三の根拠は、神がその偉大な力を行使されたことです。イエス様の完全なご支配が現わされたゆえに、イエス様は礼拝を受けられるのです。神は常に支配者であられます。しかし、神の支配は千年王国において、はじめて完全に現わされるのです。天にあげられた教会は、この勝利を見て、礼拝せざるをえないのです。

私たちは過去の歴史の中で、しばしば主の民が神に向かつて絶望的な叫びをあげているのを見ます。「なぜあなたは、この国にいる在留異国人のように、また、一夜を過ごすため立ち寄った旅人のように、すげなくされるのですか。なぜ、あなたはあわてふためく人のように、また、人を

救うこともできない勇士のように、されるのですか。」（エレミヤ14・8、9）というような叫びを聞くことがあります。しかし、この「天の教会」においては、このような「叫び」や「疑問」などではなく、ただ礼拝だけがささげられているのです。11章17節で、私たちは、千年王国の平和をあらかじめ見ることができます。18節では、それに先立つ時代をも前もって見ることができるのです。

4 神の怒り

礼拝の第四の根拠は、神の怒りが諸国民の上にもたらされたことです。詩篇第2篇によると、「國々は騒ぎ立ち」ましたが、「焼き物の器のように粉々に」打ち碎かれてしましました。また「國民はむなしくつぶやき」、主のご支配を受けいれようとしませんでした。

イエス様の時代にも、国民は怒り、主を受け入れませんでした。「この方はご自分のかくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかつた。」（ヨハネ1・11）のです。彼らは、イエス様を好まず、「この人ではない。バラバだ。」（ヨハネ18・40）と強盗の釈放を願つたのです。このイエス様に対する怒りは、後には、使徒たちやイエス様の証人たちへ向けられました。

そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。

すると、竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、

（使徒
12・1、2）

イエスのあかしを保つてゐる者たちと戦おうとして出て行つた。

(黙示 12・17)

パウロもかつては、主の弟子たちに向かつて怒りを燃やしました。

さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであつた。

(使徒 9・1、2)

これは、パウロが主の弟子たちではなく、イエス様ご自身に対して怒りを抱いた結果であることが、次の箇所でわかります。

ところが、道を進んで行つて、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。

(使徒 9・3、4)

これらの諸国民の怒りに対し、神はさばきをもつてこたえられます。聖書は、しばしば「神の怒り」について語っています。「怒り」のない神は「愛」のない神です。「怒り」は、傷つけられた神の愛です。この「神の怒り」は千年王国の始まる前のハルマゲドンの戦いにおいて現われます。ハルマゲドンの戦いには、神に反抗する、イスラエルに戦いを挑むすべての人々が集めら

れます。

また、私は竜の口と、獸の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた靈どもが三つ出て来るのを見た。彼らはしるしを行なう惡靈どもの靈である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大きいなる日の戦いに備えて、彼らを集めめるためである。…こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めめた。

(黙示 16・13、14、16)

5 死者の復活

礼拝をささげる第五の根拠は、「死者の復活」にあります。

ハルマゲドンの戦いの後で、死者は報いを得るために復活させられます。このことについては默示録の次の箇所にくわしく書かれています。

また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獸やその像を拝まず、その額や手に獸の刻印を押されなかつた人たちを見た。彼らは生き返つて、キリストとともに、千年の間王となつた。そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかつた。これが第一の復活である。この第一の復活にあづかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持つていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。

6 信じる者の報い

礼拝の第六の根拠は、復活させられた人々が、神から報酬を与えられることです。彼らはイエス様と共に千年王国を支配するのです。

11章18節には、報いを与える三種類の人々が記されています。一つは、「神のしもべである預言者たち」です。預言者とはどういう人を指すのでしょうか。預言者たちは、神の口として用いられている人々のことです。彼らは勇敢にイエス様の証しをし、そのために苦しみをも受けたのです。大きな苦難の時にこれらの預言者たちは、来るべき千年王国の預言をしました。次に「聖徒たち」がいます。ダニエル書にはイスラエル人たちが敵の国々から迫害されることが記されています。その迫害を受けるイスラエルの主の民は、「聖徒」と呼ばれています。

しかし、いと高き方の聖徒たちが、國を受け継ぎ、永遠に、その國を保つて世々限りなく続く。

(ダニエル 7・18)

さらに「御名を恐れかしこむ者たち」がいます。ここで記されている人々はユダヤ人ではなく、異邦人です。これらの人々は大きな苦しみのときにも「獸」を恐れることなく、神のみを恐れて生きた人々です。マタイの福音書にこういう人々のことが記されています。

「そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人

たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御國を繼ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつも、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊ませてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』

(マタイ 25・34～40)

これらの三つのグループの人々は、すべて大きな苦しみの時に神の側に立った人々です。「小さい者も大きい者も」というのは「すべての人々」という意味です。つまり、主は、どんな人であろうと主に忠実な人々に対して報いを与えるのです。いかなる人も見逃されることはあります。神がさばかれるということは、神が、忠実な者とそうでない者とを分けられるということです。

今日はまだ、このように「分けられる」ということはなされていません。

「天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」

(マタイ 5・45)

しかし、その時には、誰が主を恐れ、誰がそうでなかつたかが明らかにされるのです。

「彼らは、わたしのものとなる。——万軍の主は仰せられる。——わたしが事を行なう日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。あなたがたは再び、正しい人と悪者、神に仕える者と仕えない者との違いを見るようになる。」

(マラキ 3・17、18)

7 主のさばき

礼拝の第七の根拠は、地を汚すものたちが、さばかれるということです。黙示録ではこれらのものは「大淫婦」、「バビロン」と呼ばれています。

「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」

(黙示 14・8)

「神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によつて地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」

(黙示 19・2)

昔からその時に至るまで、地に住む人々はバビロンによって偶像礼拝へと誘われてきたのです。

地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。神が地をご覧になると、実に、それは、墮落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。

(創世記 6・11、12)

主が「地を滅ぼす」されるのは、いつも、「神殿が汚される」ことが原因でした。

もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。

(Iコリント 3・17)

この地は、そこでまことの神が礼拝を受ける神殿として創られたのです。しかし、この礼拝の家は、強盗の巣にされてしまいました。

そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる。』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」

(マタイ 21・13)

この世の終わりの時代も、ノアの時と同じように、「墮落の時代」になるのです。そして、最後の審判が、ついに「バビロン」とハルマゲドンに集まる軍勢に下されるのです。

これまで私たちは、「遣わされた者の叫び」、「天の軍勢の答」、「贖われた者たちの礼拝」の声を聞いてきました。また、私たちはここで、「キリストの勝利」と「キリストの支配」の現われも見

ました。最後に、まだ信じておられない方々のために、一言つけ加えておきたいと思います。

イエス様に自分の罪を告白し、イエス様に自分自身とその人生をゆだねた人々は、イエス様に「義」とされて、そのさばきにあうこと�이ありません。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移つているのです。」
(ヨハネ 5・24)

これがイエス様のお約束です。永遠のいのちは、死んだ後に与えられるのではなく、現在生きている間に与えられるのです。誰でもイエス様を受け入れている人には、永遠のいのちが与えられているのです。

そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持つており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。
(ヨハネ 5・11, 12)

そして、永遠のいのちを持つ人は、さばきにあうこと�이ありません。イエス様を信じる人々もさばきの座に立たれます。しかしそれは、さばきを受けるためでなく、報いを受けるためです。罪の問題は、イエス様が十字架での死を通して、すでに解決してくださいました。したがってイエス様を受け入れた人々には「滅び」はありません。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御靈の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

(ローマ 8・1)

ですから、信ずる者は喜びと希望をもつて未来を見る事ができるのです。なぜなら、彼らはイエス様と永遠にいつしょにいることを知つてゐるからです。

神とメシヤに対する竜の戦い

黙示録第11章19節から12章6節

- 1 「女」とは誰か
- 2 「男子」とは誰か
- 3 「竜」とは誰か

私たちはこれに先立つ默示録11章15節から18節までの箇所で、神の最終的な勝利の告知と、神への礼拝の言葉を見てきました。しかし地上の歴史においては、なお多くの苦しみがあり戦いは続きます。默示録12章からはこの大きな患難の時代のことが記されています。

これまで学んできた默示録の中には「開かれた天」のことが何度か出てきましたが、それはいつも何か新しいことの始まりを意味していました。最初は第4章にありました。

その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があつた。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言つた。「ここに上れ。この後、必ず起ころ事をあなたに示そう。」

（默示 4・1）

ここでは、教会が天に引き上げられ、七つの封印された巻物が開かれて、さばきの時代が始まることが記されていました。このさばきの時代は七年間続けます。

一番目には「開かれた天」のことが出てくるのが、ここ12章の始まる直前11章の最後の節です。

それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。また、いなすま、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降つた。

（默示 11・19）

天にある神殿とその中にある「契約の箱」は、イスラエルの民のことを即座に思い浮かべさせます。これは、これから先、イスラエルを中心としたさばきがはじまるることを示しているのです。

旧約聖書では、「契約の箱」はイスラエルの民にとつて最も重要なもので、至聖所に置かれてい

ました。至聖所には、大祭司が一年に一度、民の罪を贖うために入り、そして、そこを出て民を祝福したのです。「契約の箱」は神の「ご臨在」の象徴でした。

彼らが陣営を出て進むとき、昼間は主の雲が彼らの上にあつた。契約の箱が出発するとさきには、モーセはこう言つていた。「主よ。立ち上がりつてください。あなたの敵は散らされ、あなたを憎む者は、御前から逃げ去りますように。」

（民数 10・34、35）

主の契約の箱が陣営に着いたとき、全イスラエルは大歎声をあげた。それで地はどよめいた。ペリシテ人は、その歎声を聞いて、「ヘブル人の陣営の、あの大歎声は何だろう。」と言つた。そして、主の箱が陣営に着いたと知つたとき、ペリシテ人は、「神が陣営に来た。」と言つて、恐れた。そして言つた。「ああ、困つたことだ。今まで、こんなことはなかつた。」

（イサムエル 4・5～7）

「契約の箱」は神の御座であり、そこに神がご臨在になりました。

そこで民はシロに人を送つた。彼らはそこから、ケルビムに座しておられる万軍の主の契約の箱をかついで來た。

（1サムエル 4・4）

ヒゼキヤは主の前で折つて言つた。「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、主よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。

ですから、イスラエルの民にとつて「契約の箱」を見ることは喜びであり、慰めでした。

ベテ・シェメシユの人々は、谷間で小麦の刈り入れをしていたが、目を上げたとき、神の箱が見えた。彼らはそれを見て喜んだ。

(Iサムエル 6・13)

ダビデとイスラエルの全家は、歓声をあげ、角笛を鳴らして、主の箱を運び上った。

(IIIサムエル 6・15)

イスラエルの民は、「契約の箱」が彼らの間に置かれている時、全能なる神も彼らのただ中におられることを信じました。そして、全能なる神が共におられるとき、彼らは守られ、敵は何もすることができないということを知つていました。

默示録のこの個所に再び「契約の箱」が登場してきます。この箱は神の忠実さ、つまり民に対する「神の約束」を表わすものです。神はイスラエルの民になさった約束を、決して忘れずに完全に果たされます。この先大変な患難が特にイスラエルの民の上に襲いかかってきます。これは聖書の他の個所に「ヤコブにも苦難のときだ」と記されているとおりです。

ああ。その日は大いなる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。し

かし彼はそれから救われる。

(エレミヤ 30・7)

そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかつたような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。

(マタイ 24・21)

しかし、苦しみの時代にあっても、「契約の箱」を見るによつてイスラエルの民はその信仰を強められるのです。神はさばきを通して、民を聖めようとしておられるのであって、滅ぼそうとしておられるわけではありません。「稻妻」、「声」、「雷鳴」、「地震」などはこれから来ようとしているさばきを表わすしるしですが、しかし主は、イスラエルの民を忘れず、患難の中でも彼らが喜んで主に栄光を帰することができるようにしてくださるのです。

「契約の箱」が明らかに示されたということは、ここで神の「*ハ*臨在」を表わしています。「契約の箱」は神の御座を象徴するものであり、イスラエルのあらゆる敵に対する「力の象徴」でもあります。従つて「契約の箱」は主イエス様を示すものでもあります。そして「契約の箱」はイスラエル民族に対する神の「保証」です。神は大きな患難の中で、イスラエルの民を導き続けていかれるのです。

さて、第三番目の「開かれた天」が出てくるのは、默示録15章5節で、そこには「その後、また私は見た。天にあるあかしの幕屋の聖所が開いた。」とあります。この箇所は七つの鉢を持つ七人の御使いと関連しているところです。これらの御使いたちは開かれた聖所から出でます。こ

れは神がイスラエルの民を聖め、守ることを表わしています。

第四番目の「開かれた天」は黙示録19章に出できます。

また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。

(黙示 19・11)

七つの鉢のさばきのあと、イエス様が姿を現わして「ハルマゲドンの戦い」に赴かれます。その後で千年王国がやってきます。

このように、「開かれた天」が記される時には、いつも何か新しいことが始まるのです。

私たちがこれから見ようとしている黙示録11章19節からは、「イスラエルを中心とした最後のさばき」が始まります。その中には、七種類の者、つまり「男の子」、「女」、「巨大な龍」、「御使いのミカエル」、「イスラエルの残りの者たち」、「海からの獸」、「地からの獸」のことが記されています。これ以降のテーマは「竜とその戦い」で、12章は「神とメシヤに対する戦い」、「ミカエルに対する戦い」、「女に対する戦い」という三つの部分に分かれています。そして「竜の戦い」では「獸」がその道具とされることが黙示録12章18節から13章18節に語られています。

ではこれから学ぶ默示録11章19節から12章6節までの聖書の箇所見てみましょう。

それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。また、いなづま、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降った。

¹また、巨大なしるしが天に現われた。ひとりの女が太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠をかぶっていた。この女は、みごもつていたが、産みの苦しみと痛みのために、叫び声をあげた。²また、別のしるしが天に現われた。見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。³その尾は、天の星の三分の一を引き寄せる⁴と、それらを地上に投げた。また、竜は子を産もうとしている女の前に立つていた。彼女が子を産んだとき、その子を食い尽くすためであつた。女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもつて、すべての国々の民を牧するはずである。その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。女は荒野に逃げた。そこには、千二百六十日の間彼女を養うために、神によって備えられた場所があつた。

(黙示 11・19～12・6)

1 神とメシヤに対する竜の戦い

12章1節から6節までには、竜が神とメシヤに対して起こす戦いのことが語られています。ここを読むときに三つの疑問が起ります。一つは、ここに出てくる「女」は誰かということです。結論を先に言いますと、「女」とは「イスラエルの民」です。「男の子」とは「キリスト」です。「竜」は「サタン」です。次にこれらについて一つずつ考えてみましょう。

1 「女」とは誰か

この「女」は、カソリック教会では「マリアである」と教えられています。また他の多くの人々

は「自分の属している教派である」とも言っています。また「教会を意味している」と言う人々もいます。しかし、これらの考えはすべて誤りだと言わなければなりません。

默示録11章19節すでに見たように、さばきの中心は「イスラエルの民」ですから、ここに出てくる「女」が「イスラエルの民」を意味することは間違はありません。聖書はしばしばイスラエルのことを「めとられた女性」として描いています。

「子を産まない不妊の女よ。喜び歌え。産みの苦しみを知らない女よ。喜びの歌声をあげて叫べ。夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもよりも多いからだ。」と主は仰せられる。

(イザヤ 54・1)

神はイスラエルの民とシナイ山で契約を結ばれました。このイスラエルの民は、神に属し、他の諸国、民族に対しても神を証しする神の道具となるべき人々でした。しかし、イスラエルの民はしばしば神を離れ、偶像に仕え、神に逆らい、罪をおかして不忠実な女となつていったのです。この様子はエレミヤ書3章1節から25節、ホセア書2章1節から25節などに見ることができます。彼らは彼ら自身に遣わされたメシヤを拒んだときには、不貞の女の性質をはつきりと表わしたのです。しかし、大いなる苦しみの時を経てイスラエルの民は栄光へと導かれます。このことはイスラエルの民が神との交わりをもつことを通して実現されます。

この女、つまりイスラエルについて三つのことが記されています。この女は「太陽を着ている」のです。イスラエル自身が太陽なのではなく、太陽である主を着ているのです。

まことに、神なる主は太陽です。盾です。主は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒ません。

(詩篇 84・11)

太陽を着せられているということは、イスラエルの民が将来「世の光とされる」ことを意味しています。イスラエルから地上に光と救いがもたらされるのです。過去の時代に、イスラエル人の中からこのような「世の光」となる人々が次から次へと生み出されました（ヘブル人への手紙11章）。しかし、将来にはイスラエルの民全體がパウロのように「世の光」となる時がくるのです。今はまだ「教会の時代」です。「世の光」となるように、すべての信者たちが召し出されている時代です。

あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。

(マタイ 5・14)

「わたしは、この民と異邦人の中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信ずる信仰によつて、彼らに罪の赦しを得させ、聖なる者とされた人々の中があつて御国を受け継がせるためである。」

(使徒 26・17、18)

それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪

な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、いのちのことはをしつかり握つて、彼らの間で世の光として輝くためです。

(ペリピ 2・15、16)

そして教会の時代のあとで、イスラエルは「世の光」となるための備えを「苦難を通して」与えられるのです。

また、この女は「月を足の下に踏」んでいます。月は夜の象徴です。今の時代まで、イスラエルは闇の中にいます。イスラエルの民は多くの国々から憎まれていますが、間もなくそれと逆のことが起るでしょう。どの国もイスラエルを憎むことがなくなり、反対に彼らを求めるようになるでしょう。

大きな患難の時代は、想像を絶するものとなります。しかし、この時に神はご自身の民と共におられて、彼らを勝利へと導かることでしょう。これが、「月を足の下に置く」という意味であり、それは常に勝利者となるということを表わしています。

ところで、私たちもまた「月を足の下に踏」んでいるでしょうか。闇と暗黒とを土台にしていないでしようか。私たちは真の勝利者となつてゐるでしょうか。それとも自我という偶像、あるいは流行という偶像、文化あるいは科学という偶像に仕えてゐるのではないでしようか。これらはそれ自体は悪いものではありませんが、いのちとの結びつきが失われているときには、すべてのものが闇であり、暗黒となるのです。

将来においては、光であり勝利者となつたイスラエルが、世界に対して指導的な力を持たされ

るようになるのです。

終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての國々がそこに流れてくる。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。（イザヤ 2・2、3）

わたしの名を恐れるあなたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにね回る。
（マラキ 4・2）

またこの女は、「十二の星の冠」をかぶっています。かつて神は地を治めるためにアダムを召されました。イスラエルはこれと同じように、世界を治める支配権を与えられるようになるでしょう。イスラエルは世界を支配するように神に召されているのです。冠についている十二の星はイスラエルの十二部族を示しています。ヨセフの夢の中にすでに次のような表現が出てきます。

ヨセフはまた、ほかの夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「まだ、私は夢を見ましたよ。見ると、太陽と月と十一の星がわたしを伏し拝んでいるのです。」と言った。

（創世記 37・9）

「契約の箱」が開かれた天の神殿にあるのが見えたことから、12章のできごとはイスラエルを

巡つてのものであることが明らかです。この女はイスラエルの民を示しており、十二の星はイスラエルの十二部族を示しています。そして特にこの女によつて男の子が生み出されたことが、この女がイスラエルであることの証明です。5節に「この子は、鉄の杖を持つて、すべての国々を牧するはずである。」と記されています。この個所は詩篇2篇からの引用です。ユダヤ人は、「約束されたメシヤ」について詩篇2篇に述べられていることを知つていました。

「わたしに求めよ。わたしは國々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち碎き、焼き物の器のように人々にする。」

(詩篇 2・8、9)

「勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸國の民を支配する権威を与えるよう。彼は鉄の杖をもつて土の器を打ち碎くようにして彼らを治める。わたし自身が父からの支配の権威を受けているのと同じである。」

(黙示 2・26、27)

「約束されたメシヤ」は肉としてはイスラエルから生まれるはずでした。

彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上にあり、どこしえにほめたたえられる神です。アーメン。

(ローマ 9・4、5)

「救いはユダヤ人から出るのですから、わたしたちは知つて礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。」

(ヨハネ 4・22)

また、イザヤ書9章6節にある「約束されたメシヤ」も、ユダヤ人について述べられています。ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

(イザヤ 9・6)

繰り返して言いますが、この「女」は「教会」を指しているのではありません。なぜなら、教会からはメシヤは出ないからです。逆に、教会がメシヤであるキリストから生まれたのです。アダムは眠り、そのわき腹からエバが生まれました。それと同じように、イエス様が十字架上で死なれたその死によって、教会が生み出されたのです。

2 「男の子」とは誰か

この答えはすでに見てきたように、「約束されたメシヤ」です。その意味については、「頭なるキリスト」、「体なる教会」、「残されたイスラエル人」、の三つに分けることができます。男の子について、5節に四つのことが示されています。この「子」の「誕生」(ルカの福音書 2

章1節から20節参照)、「目的」(詩篇2篇9節参照)、「召天」(ルカの福音書24章50、51節参照)、「地位」(黙示録3章21節参照)についてです。そして男の子は「鉄の杖をもつて、すべての国々の民を牧するはずである。」と「約束されたメシヤ」であることが語られています。

ここで私たちは黙示録2章26節から28節にある「約束」について考えてみたいと思います。

「勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。彼は、鉄の杖をもつて土の器を打ち碎くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。また、彼に明けの明星を与えよう。」

(黙示
2・26～28)

この「約束」は26節にあるとおり、「教会において勝利者となる者」に与えられています。つまり、主イエス様はお一人で支配することを望んでおられるのではなく、勝利者とともに支配をしようと願つておられるのです。

この男の子は明らかに「ナザレのイエス」を指していますが、同時に「頭なるキリスト」と「体なる教会」の二つをも指しています。

ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。

(Iコリント 12・12)

これまで述べてきたように、この12章の「女」は決して「教会」を意味するものではありません。多くの注解書はこの「女」が教会を指し、教会の勝利者だけが大きな患難の起る前に天に引き上げられて、その他の勝利者になれなかつた人々は苦難を通して聖められるというようなどとを言つていますが、私は違う考え方をとっています。

ここで「誰が勝利者なのか」を考えてみたいと思います。

世に勝つ者とはだれでしよう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。このイエス・キリストは、水と血とによつて来られた方です。ただ水によつてだけでなく、水と血とによつて来られたのです。そして、あかしをする方は御靈です。御靈は真理だからです。

(ヨハネ 5:5, 6)

勝利者とは、イエス様との交わりをもち、イエス様の体の一部とされている人です。新しく生まれ変わつたすべての人々は、その頭であるキリストによつて勝利を得るのです。あるいは、勝利者でない人は、新しく生まれ変わつていません。

新しく生まれ変わつた人々はすべて、天に引き上げられます。イエス様はご自身の体、つまり次に、2節と5節を比較しながらもつと詳しく考えてみましょう。実は、歴史的には5節のほうが2節より早く起こります。そのことは、2節の内容とイザヤ書66章7、8節、ミカ書5章2節から4節までと比べてみるとわかります。イザヤ書にはこうあります。

彼女は産みの苦しみをする前に産み、陣痛の起る前に男の子を産み落とした。誰がこのような事を聞き、だれが、これらの事を見たか。地は一日の陣痛で生み出されようか。国は一瞬にして生まれようか。ところがシオンは、陣痛を起こすと同時に子らを産んだのだ。

(イザヤ 66・7、8)

ここで産婦は、産みの苦しみをする前に、男の子であるキリストを産みだしたのです。イス・キリストの生まれるそのときには、イスラエルの民は産みの苦しみをしなかつたのです。キリストは産みの苦しみを与えることなく生まれてきたのです。つまり、大きな患難がない時代にキリストは生まれたのです。

しかし、黙示録12章2節に出てくる「女」は苦しんでいます。

この女は、みごもつていたが、産みの苦しみと痛みのために、叫び声をあげた。

(黙示 12・2)

産みの苦しみをしている女は、大きな患難にあうときのイスラエルを表わしているのです。

まことに主はこう仰せられる。「おののきの声を、われわれは聞いた。恐怖があつて平安はない。男が子を産めるか、さあ尋ねてみよ。わたしが見るように、なぜ、男がみな、産婦のよう腰に手を当てるのか。なぜ、みんなの顔が青く変わっているのか。ああ。その日は大いなる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。しかし彼はそれ

から救われる。

(エレミヤ 30・5～7)

主よ。あなたはこの国民を増し加え、増し加えて、この国民に栄光を現わし、この国すべての境を広げられました。主よ。苦難の時に、彼らはあなたを求め、あなたが彼らを懲らしめられたので、彼らは祈つてつぶやきました。子を産む時が近づいて、そのひどい痛みに、苦しみ叫ぶ妊婦のように。主よ。私たちは御前にそのようでした。私たちもみごもり、産みの苦しみをしましたが、それはあたかも、風を産んだようなものでした。私たちは救いを地にもたらさず、世界の住民はもう生まれません。 (イザヤ 26・15～18)

大きな患難の時に、キリストはイスラエルの「残りの者」たちの心の内にお生まれになるのです。その時には、彼らはエジプトでヨセフに再会した兄弟たちのように、悔い改めをするでしょう。そして兄弟たちが、ヨセフがその身分を明らかにした時に、ヨセフの前で喜びの涙を流したのと同じことが、イスラエルの民の間にも起こることでしょう。

苦しみの炉の中で、イスラエルの民は鍛えられ、千年王国で奉仕することができるよう備えられるのです。

ミカ書には、ベツレヘムから支配者が生まれるだろうと預言されています。

ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、

永遠の昔からの定めである。それゆえ、産婦が子を産む時まで、彼らはそのままにしておかれる。彼の兄弟のほかの者はイスラエルの子らのもとに帰るようになる。彼は立って、主の力と、彼の神、主の御名の威光によつて群れを飼い、彼らは安らかに住まう。今や、彼の威力が地の果てまで及ぶからだ。

(ミカ 5・2～4)

この支配者をイスラエルは捨てたのです。そのために支配者からいつたん捨てられることになりました。そして、無用なものとされてしまったのです。しかし、いつまでも捨てておかれることはありません。イスラエルが捨てておかれるのは「産婦が子を産むときまで」です。これはイスラエルの信仰のある人々について約束されていることです。イスラエルの民はやがてパレスチナに帰還し、支配者がオリーブ山に立たれるのを見るのです。

ミカはこのメシヤの誕生と、メシヤが天に引き上げられるのを見ていました。そして、大きな患難の時を迎えるまで、このメシヤはイスラエルの民の目からは隠されています。しかし、大きな苦しみのとき、つまり女の産みの苦しみのときに、多くのユダヤ人の目がメシヤに対して開かれるのです。そしてその時、彼らはキリストと共に諸国民を支配するのです。私たちはすでに、默示録11章でこのような信仰をもつ人々、「イスラエルの残りの者たち」について見てきました。すべてのユダヤ人が信仰に至らなくとも、なお、救われた残りのイスラエル人たちが存在するのです。この「残りの者たち」はイエス様に認められて、見守られるのです。

3 「竜」とは誰か

最後に「竜」が誰のことを指しているかを見ましょ。う。「竜」とはサタンです。創世記3章にある古い「狡猾な蛇」のことです。また兄弟を訴える者、神に敵対する者のことです。ここで「竜の起源」、「竜の本質」、「竜の目的」の三つについて考えてみましょ。

この竜は、以前は神に仕え、神をほめたたえる天使の頭でした。しかし、この天使の頭は与えられた自由をわがものとし、ごう慢な心に捕らわれた時に、神に逆らったのです。そして天使の頭は「悪魔」となつたのです。4節に、竜はその尾で「星の三分の一を引き寄せると、それらを地上に投げた」とあります。これは竜に従つて竜と共に墮落した天使が、天使の中の三分の一に及んだことを示しています。これらの天使たちから「悪霊」が生まれたのです。

また、信者になつたばかりの人であつてはいけません。高慢になつて、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。

神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。

(IIペテロ 2・4)

また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもつて、暗やみの下に閉じ込められました。

(ユダ 6)

この天使の頭である「悪魔」の堕落については、聖書の次の箇所に詳しく記されています。

暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。國々を打ち破つた者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。あなたは心中で言つた。「私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。」

（イザヤ 14・12～14）

「人の子よ。ツロの王について哀歌を唱えて、彼に言え。神である主はこう仰せられる。あなたは全きものの典型であつた。知恵に満ち、美の極みであつた。あなたは神の園、エデンにて、あらゆる宝石があなたをおおつていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、しまめのう、碧玉、サファイヤ、トルコ玉、エメラルド。あなたのタンバリンと笛とは金で作られ、これらはあなたが造られた日に整えられていた。わたしはあなたを油そそがれた守護者ケルブとともに、神の聖なる山に置いた。あなたは火の石の間を歩いていた。あなたの行ないは、あなたが造られた日からあなたに不正が見いだされるまでは、完全だつた。

（エゼキエル 28・12～15）

「天から払い落とされた星」というのは、墮落して悪霊となつた天使たちを表わしています。あらゆる人々は終わりの時代には、教会の三分の一が高ぶりや淫乱や拝金主義によつて誘惑されて駄目

になつてしまつと考えています。

では、「竜の本質」について考えてみましょう。竜というのは大変危険な「敵」です。竜と同じように、悪魔はその周囲のものすべてを滅ぼしてしまいます。カインの時代から悪魔はその「人殺しとしての本質」を現わしていました。ですから竜は3節にあるとおり赤い色をしているのです。「赤い色」は、殺人と反乱と戦争とを象徴しています。

またこの竜は、3節では「七つの頭と十本の角とを持つて」います。「七つの頭」があるということは竜が完全な自制力と知恵をもつているということを示しています。この竜の知恵に勝るものは神の知恵以外にはありません。恐るべき知恵をこの竜は持つているのです。

さらに「十」という数字は全世界に対する支配権を象徴しています。その時にはすべてのものが竜に服従するのです。「十本の角」は完全な政治的な支配権を表わしています。聖書はこの竜を「この世の君」と表現しています。

「わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。」

(ヨハネ 14・30)

今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。

(ヨハネ 12・31)

さばきについては、この世を支配する者がさばかれたからです。 (ヨハネ 16・11)

そして竜は「その頭には七つの冠をかぶっていた」と3節にあります。「七つの冠」は専制的な支配権のしるしです。この竜の支配権は権力に基づくものです。竜はイエス様のもつておられる支配権をなきものにしようとしているのです。イエス様もまたその頭に冠をかぶっておられます。

その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。

（黙示 19・12）

さて、この「竜の目的」について考えてみましょう。竜の目的は「女」と「子」とを滅ぼすことです。つまり、イスラエル人と、イエス・キリストとその体である教会が攻撃的とされるのです。悪魔の目的はいつも、神から人を引き離し、神に対して人が逆らうようにさせることです。常に神から人間を独立した者とすることです。エデンの園で悪魔はアダムによってこの目的を実現しました。それ以来、悪魔は神のご計画に対しても戦いを挑んでいます。悪魔が神の目的を知っていることは次の個所からも明らかです。

私はおまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼はおまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとにかみつく。

（創世記 3・15）

そこには人類を救うものが「女」から生まれることが預言されています。そこで悪魔はそのような救い主が生まれることを妨害しようとしたのです。

4節では「竜は子を産もうとしている女の前に立つて」いました。これは子を産もうとしている「女」が逃れ道のない状態に置かれていることを示しています。女の前に立ちはだかる竜は、「女」に力を尽くして向かおうとしています。悪魔の憎しみは、生まれてくる「子」に向けられています。竜は4節の終わり、「その子を食い尽くす」ために「女」の前に立つていています。

イスラエルの歴史は苦難の歴史です。悪魔はイスラエルに攻撃を加え、イスラエルからダビデの末が生まれることを妨げようとしました。それはダビデの末がメシヤとなるからでした。

悪魔は力と偽りとたくらみとをもつて、何も知らない人間を誘惑し、滅ぼそうとしました。悪魔と諸国の民はなぜユダヤ人を憎むのでしょうか。なぜなら悪魔は、神がアブラハムとダビデにその末が世界を支配すると神が約束されたのを知っているからです。悪魔は自分が世界を支配したいがために、諸国の民の心を動かし、ユダヤ人たちを憎むように仕向けています。悪魔はユダヤ人を攻撃するだけでなく、イエス様にも攻撃を加えたのです。悪魔は人間に對しては勝利を得ることができましたが、イエス様に対しては勝つことができませんでした。

悪魔はイエス様がベツレヘムでお生まれになると直ちにイエス様を殺そうと図りました（マタイの福音書2章7～16節）。

後に悪魔はイエス様に地上のあらゆる権力を与えようと申し出ました（ルカの福音書4章5、6節）。これによつて悪魔は父の御手からイエス様を奪いとり、イエス様が父から離れて独立した行動をとられるように誘惑したのです。イエス様は、所有欲、名譽欲、また支配欲の奴隸となるよう誘われました。しかし悪魔は成功しませんでした。

また悪魔は、イエス様が五千人に食事をお与えになつた後で、群衆を動かしてイエス様をこの世の王にするようにと誘惑したのです。

人々は、イエスのなさつたしるしを見て、「まことに、この方こそ、世に来られるはずの預言者だ。」と言つた。そこで、イエスは、人々が自分を王とするために、むりやりに連れて行こうとしているのを知つて、ただひとり、また山に退かれた。

(ヨハネ 6・14・15)

さらに悪魔は弟子たちを通してイエス様が十字架の道を歩まないようさせようと試みたのです。

その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえられなければならぬことを弟子たちに示し始められた。するとペテロは、イエスを引き寄せていさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思はないで、人のことを思つていてる。」

(マタイ 16・21～23)

しかし、イエス様に対する悪魔の試みは、すべて失敗に終わりました。

イエス様は悪魔に滅ぼされることなく、十字架でわたしたちの罪を贖い、父なる神の御座へと昇天なさったのです。十字架の死は表面的には敗北を意味していますが、実際にはイエス様の悪魔に対する勝利を現わしているのです。

そしてイエス様はよみがえられ、世界を統べ治める地位、父なる神の右に着座されたのです。5節に「その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。」とある中の「引き上げられた」という言葉は、教会の撲殺のときに用いられる言葉と同じです。

次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといつしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。

(一)テサロニケ 4・17)

「竜」である悪魔は、イスラエルとイエス様に逆らうだけではなく、教会に対しても逆らうものです。悪魔はイエス様に対しては何もできないので、いまや「イエス様の体である教会」に対して攻撃を加えるのです。悪魔は、やがて教会がイエス様と共に世界を支配するようになることを知つてゐるからです。かつて回心前のパウロは激しく教会を攻撃しました。それ以来、悪魔は教会を攻撃するためにさまざま道具を用いています。

教会が引き上げられたあと、悪魔はその攻撃の目標を失うために、再びイスラエルの民を攻撃し始めます。「女」であるイスラエルに対して「竜」は再び攻撃を始めるのです。二人の証人とその他多くの証し人が、エルサレムにおいて殉教の死を遂げるでしょう。しかし、多くのユダヤ人たちはそこから逃れることができ、神によつて保護されるのです。

「眞の教会」はエノクと同じように破局の前に引き上げられることになつています。そして、「眞のイスラエル」はノアと同じように破局のさなかにも守られるのです。

そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。

(マタイ 24・16)

イスラエルの民が世界史の中、心から外され、その後再び歴史の中心に戻されるまでの期間が默示録12章5節と6節の間におかれてています。

女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもつて、すべての国々の民を牧するはずである。その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。女は荒野に逃げた。そこには、三百六十日の間彼女を養うために、神によつて備えられた場所があつた。

(默示 12・5、6)

これが「教会の時代」です。12章5節はキリストの昇天を記しています。続く6節はイスラエルの民が千年王国が始まる前の三年半の間反キリストに迫害を受けることを記しているのです。イスラエルでまことの信仰をもつた人々は、荒野に神によつて備えられた場所を与えられ、そこで守られるのです。そのとき彼らは、正常な生活と他国との経済的なつながりからも切り離されることになるでしょう。しかしその時には、かつてモーセの時代に四十年間荒野でイスラエルの民が養われたように、彼らも神によつて養われることになるのです。しかも主は彼らに「守りの場所」を与えられるだけではなく、その「期間」も定めておられるのです。それはダニエル書

の7章にも記されているように、千二百六十日と決められています。

彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。

(ダニエル 7・25)

悪魔は神の敵ですが、神の被造物であることに変わりはありません。ですから、神のお許しになる範囲でしか活動できません。悪魔は神のご計画を知っていて、そのご計画を空しいものにしようと試みているのです。

悪魔はすでに十字架によつて完全に自分の力が滅ぼされたことを知っています。もしも、私たちが悪魔に対して勇気をもつて立ち向かうならば、悪魔は逃れ去るでしょう。イエス様が勝利者ですから。

信仰をもつてゐる私たちは、罪の債務からも、罪のさばきからも、罪の力からも解放されています。私たちはまた死の恐怖からも解放されています。

そこで、子たちはみな血と肉を持つてゐるので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によつて、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隸となつていた人々を解放してくださるためでした。

(ヘブル 2・14、15)

黙示録 12章 11節に書かれているように私たちも言われるならば、なんと幸いでしようか。

兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝つた。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかつた。

(黙示 12.11)

最後に詩篇のことばを見てこの章を終わりにしたいと思います。

なぜ國々は騒ぎ立ち、國民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者とに逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの綱を、解き捨てよう。」天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。ここに主は、怒りをもつて彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」

「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言わされた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしは國々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち碎き、焼き物の器のように粉々にする。』それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたよ、慎め。恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。

(詩篇 2)

悪魔に対するミカエルの戦い

默示録12章7節から12節まで

1 戦い

- 1 戦いの場所
- 2 戦いの時
- 3 戦いの目的

2 戦う者

- 1 ミカエルとその使いたち
- 2 龍とその使いたち

3 武器

- 1 小羊の血
- 2 証しの言葉

「私たちちはこれまで、「イエス様に対する悪魔の戦い」について学んできました。次に、「悪魔に対するミカエルの戦い」について見ていきましょう。

⁷さて、天に戦いが起つて、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦つた。それで、竜とその使いたちは応戦したが、勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなつた。⁸こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使ひども彼とともに投げ落とされた。⁹そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの権威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。¹⁰兄弟たちは、子羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝つた。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかつた。¹¹それゆえ、天とその中に住む者たち。喜びなさい。しかし、地と海とには、わざわいが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒つて、そこに下つたからである。」

(黙示 12・7～12)

默示録12章7節から12節までに記されていることを要約すると、次のようになります。
「天における大きな戦い」、「サタンの天からの堕落」、「見えない世界における悪魔の敗北」、「試みる者と訴える者の敗北」、「悪魔に対するミカエルのさばき」、「悪魔の敗北に対する、天における

喜び」、「悪魔に対する、さばきの第一の段階」。

これらを、「戦い」、「戦う者」、「武器」という三つの部分に分けて考えていきましょう。ここには、恐ろしい戦いのことが記されています。

1 戦い

「悪魔に対するミカエルの戦い」がどのような戦いであるかを、默示録12章7節から学んでいきましょう。まず、「戦い」には「場所」と「時」、そして「目的」があります。

1 戦いの「場所」

まず、この戦いの「場所」がどこであるかを考えてみましょう。

今日、世界には、いかなる平和も存在しません。人類の堕落以来、この地上から平和が取り去られてしまったのです。聖書は、「神を離れている者には平安がない」と言っています。

わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。

(創世記 3・15)

この時以来、神と悪魔、光とやみとの間には、絶え間ない争いが起っています。悪魔は「神に等しくなる」としました。このような「高ぶり」が神に対する反逆となつたのです。この結果、悪魔は天の御国から追放されてしまいました。

暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。國々を打ち破った者よ。
どうしてあなたは地に切り倒されたのか。

(イザヤ 14・12)

悪魔の罪は、「高慢」でした。

高慢になつて、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。(イテモテ 3・6)

ルカの福音書の中でイエス様が弟子たちと語られた時、イエス様は、この悪魔の追放のことを思
い浮かべておられました。

さて、七十人が喜んで帰つて来て、こう言つた。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊ど
もでさえ、私たちに服従します。」イエスは言われた。「わたしが見ていると、サタンが、い
なざまのように天から落ちました。確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏み
つけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加える
ものは何一つありません。だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜
んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」

(ルカ 10・17～20)

その時以来、悪魔の住みかは天に置かれていますが、もはや神の「御座近く」ではなくなつた
のです。悪魔の住みかは、今では「空中」に置かれています。次の二ことばは、「空中の権威を持

つ支配者」としての悪魔を示しています。

そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている靈に従つて、歩んでいました。 (エペソ2・2)

また、「空中」とは、私たちの「戦いの場所」でもあります。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもうもうの悪靈に対するものです。 (エペソ 6・12)

私たちの戦いは、イスラエルの民のように「人間」に対するものではなく、また「地上」のものに対するものでもなく、「空中において権力をもつ、悪魔の靈」に対する戦いなのです。

默示録12章に記されている、「戦いの場所」も、「地上」ではなく「天上」のことです。この戦いの結果、悪魔は地上に投げ落とされるのです。しかし默示録を読み進むと、この戦いがその先も続いていることがわかります。

また私は、獸と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。

(黙示19・19)

この戦いは、さらに悪魔が、地上から「底知れぬところ」へと投げ落とされることによつて本然に終わるのです。

また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持つて、天から下つて来るのを見た。彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛つて、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印をして、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようとした。

(黙示 20・1～3)

この戦いは連続した一つの大きな戦いですが、戦いの「場所」によって、三つの段階に分けられます。悪魔はまず、第一段階として「天上から、空中へ」落とされ、第二段階として「空中から、地上へ」落とされ、最終段階として「地上から、底知れぬところへ」と落とされるのです。私たちは、主が罪の成熟する時を待つておられ、罪が成熟する時にその罪をさばかれる、ということを見てきました。罪の成熟と、これに対するさばきと判決とは、激しい「戦い」を意味しているのです。

2 戦いの「時」

次は、戦いの「時」です。戦いは、昼も夜も絶え間なく続けられています。すべての信者は、常に激しい戦いの中に立たされているのです。

この戦いには、二つの段階があります。その第一段階は、はるか以前に起こり、悪魔は、天から空中へと投げ落とされました。そして、戦いの第二段階が、默示録12章7節から12節に記されています。その期間は、千二百六十日、つまり三年半であることが、みことばによつてわかり

ます。默示録12章6節と14節には、次のように記されています。

女は荒野に逃げた。そこには、千二百六十九日の間彼女を養うために、神によつて備えられた場所があつた。しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行つて、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであつた。

(默示 12・6、14)

これらが起ころる「時」は、教会の携挙のあと、つまり、反キリストの時代の中頃です。テサロニケ人への手紙第2の中では、パウロは、教会と聖靈とが地上を去つた後にこの「時」が来ることを示しています。

だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起ころり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。私がまだあなたがたのところにいたとき、これらのことによく話しておいたのを思い出しませんか。あなたがたが知つてゐるとおり、彼がその定められた時に現われるようによつて、いま引き止めているものがあるのです。不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止めるものがあつて、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。

(IIテサロニケ 2・3-7)

このみことばで、不法の人、滅びの子の出現を引き止めているものは、6節では「教会」を意味し、7節では「聖靈」を意味します。教会は聖靈の宮です。ですから、教会が引き上げられる時には、聖靈も共に引き上げられるのです。

御靈も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言ひなさい。渴く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。（黙示 22・17）

教会と聖靈とが地上から引き上げられる時、悪魔は妨げられることなく活動することができるようになります。

そして、「戦いの最終段階」は、千年王国の後にやつてきます。この戦いは、悪魔が火の池に投げ込まれることをもつて終わります。

しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、地の四方にある諸国の人、すなわち、ゴゲとマゴゲを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海べの砂のようである。彼らは、地上の平地に上つて来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降ってきて、彼らを焼き尽くした。そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獸も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

（黙示 20・7～10）

3 戦いの「目的」

この戦いには、二つの目的があります。一つめは「悪魔に対する神の判決」であり、二つめは「天にある遺産の信者たちによる相続」です。

この戦いで、誰が勝利を得るかということは、問題ではありません。なぜなら、勝利はすでにイエス様の十字架の死によって勝ち取られているからです。イエス様は十字架で、サタンに完全に打ち勝たれました。しかし、その判決は、段階的に宣告されるのです。

主が悪魔をさばかれた時、天上から直ちに火の池へと打ち落とすこともできました。しかし、主は、まず悪が成熟することを望まれたのです。最初に悪魔の敗北が明らかにされなければなりません。そしてその後で、悪魔は火の池へと投げ込まれなければならないのです。

悪魔が天上から追放されたとき、「贖われた者たち」が、悪魔が追われた場所を受け継ぐことになったのです。私たちは現在、相続権を持つ者です。

2 戦う者

次に、「戦う者たち」について考えてみましょう。一つめは、「ミカエルとその使いたち」であり、二つめは、「竜とその使いたち」です。ここで大切なのは、それらが「象徴」ではなく、「現実」そのものである、ということです。

ですから、「戦う者」としてここに現われるのは、主やイエス様自身ではなく、「御使いのかしら」であるミカエルなのです。これに対して悪魔は、自分も同じように使いの者を遣わすとい

うことはせず、自分自身が使いの者たちを引き連れて対抗するのです。

1 ミカエルとその使いたち

ミカエルという名前は、「誰が神のようでありえようか」という意味です。これに対し悪魔は、「神のようになろう」としたのです。そして、その高ぶりのために天使長の座を追放されました。この悪魔はまた、エデンの園でエバとアダムを誘惑し、「あなたがたは神のようになる」と言いました。

この悪魔に対し、天使ミカエルが、「誰が神のようでありえようか」という明らかな名前をもつて対抗したのです。ミカエルは、神の義のために、栄光のために、主が唯一のお方であることを示すために、立ち上がったのです。

これに対して悪魔は、自己の正しさ、名譽、偉大さを見せようとします。
私たちはダニエル書の中に、この戦いの前兆を見ることができます。

ちょうどそのとき、一つの手が私の手に触れ、私のひざと手をゆさぶつた。それから彼は私に言った。「神に愛されている人ダニエルよ。私が今から語ることばをよくわきまえよ。そこに立ち上がり。私は今、あなたに遣わされたのだ。」彼が、このことばを私に語つたとき、私は震えながら立ち上がつた。彼は私に言つた。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだらうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシヤの国の君が

二十一日間、私に向かつて立つていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシャの王たちのところに残しておき、終わりの日にあなたの民に起ることを悟らせるために来たのだ。なお、その日についての幻があるので。

(ダニエル 10・10～14)

主はダニエルに対し、諸国民の歴史やさばきを通して現わされる主の勝利を示されました。しかし、ダニエルはその幻を理解することができず、新たな光を求めて祈つたのです。このときに、主は御使いを遣わされ、幻の解き明かしを与えられました。しかし、この御使いが地上に向かう途中で、悪霊のかしらである御使いと出会いました。悪魔はペルシャの王に力を与え、ダニエルに遣わされた御使いがダニエルのもとに着かないようにと試みたのです。しかし、人間に過ぎないペルシアの王は、天から遣わされた御使いを妨げる力を持つてはいませんでした。

私たちもまた、一晩のうちに十八万五千人のアッシリヤ人を滅ぼした、主の使いについての記録を読むことができます。

その夜、主の使いが出て行つて、アッシリヤの陣営で、十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな、死体となっていた。(II列王記 19・35)

私たちは、悪魔がこの地上に対して支配権を持つているだけではなく、「実際に」この地上を支配していることを見るのです。

ミカエルについては、ダニエル書の中に、次のように記されています。

しかし、真理の書に書かれていることを、あなたに知らせよう。あなたがたの君ミカエルのほかには、私とともに奮い立つて、彼らに立ち向かう者はひとりもいない。

(ダニエル 10・21)

その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかつたほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民であの書にしるされている者はすべて救われる。

(ダニエル 12・1)

ダニエル書によると、ミカエルはイスラエルの民と密接なつながりをもつていて御使いです。ミカエルはイスラエルの民を守り、イスラエルの民のために戦う御使いなのです。ダニエル書の中でしばしば、「あなたの民」という表現に出会います。これは、イスラエルの民を意味しています。ミカエルはイスラエルを守り、イスラエルを保護する者です。

ユダの手紙9節で、ミカエルは「御使いのかしら」として記されています。

御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、えて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めてくださるようだ。」と言いました。

(ユダ 9)

ここでも、ミカエルとイスラエルの民とのつながりが見られます。すなわち、モーセというイスラエル人のからだについて論じています。イエス様が教会の携挙のために再臨される時、ミカエルとともにいるのです。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

(テサロニケ 4・16～17)

2 竜とその使いたち

次に私たちは、「竜とその使いたち」について考えてみましょう。

竜である悪魔は、激しくミカエルに逆います。悪魔は神に敵対する者ですが、もちろん神とは比べものにならない者です。しかし、ミカエルとは比べられるのです。なぜなら、悪魔もミカエルも、ともに神よつて創られたものであり、ともに御使いのかしらだからです。「神に等しくなりたい」というごく慢な思いのために、神は、この御使いのかしら、今の悪魔を、天上から追放されました。神は、いかなる被造物も近づくことのない「光の中」に住んでおられるのです。

ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひ

とり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れと、といしえの主権は神のもの
です。アーメン。

(イテモテ 6・16)

しかし、すでに述べたように、悪魔はまだ天上にとどまっているのですから、神の御前に現わ
れる可能性があります。

ある日、神の子らが主の前に来て立つたとき、サタンも来てその中にいた。主はサタン
に仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えて言った。「地を行き巡り、
そこを歩き回つて来ました。」主はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに
心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ悪から遠ざかっている者はひとりも地
上にはいないのだが。」サタンは主に答えて言った。「ヨブはいたずらに神を恐れましょ
うか。」

ある日のこと、神の子らが主の前に来て立つたとき、サタンもいつしょに来て、主の前
に立つた。主はサタンに仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えて
言った。「地を行き巡り、そこを歩き回つて来ました。」主はサタンに仰せられた。「おまえ
はわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざ
かっている者はひとりも地上にはいない。彼はなお、自分の誠実を堅く保つていて。おま
えは、わたしをそそのかして、何の理由もないのに彼を滅ぼそうとしたが。」サタンは主に

答えて言った。「皮の代わりには、皮をもつてします。人は自分のいのちの代わりには、すべての持ち物を与えるのです。しかし、今あなたの手を伸べ、彼の骨と肉とを打つてください。彼はきっと、あなたをのろうに違いありません。」主はサタンに仰せられた。「では、彼をおまえの手に任せる。ただ彼のいのちには触れるな。」（ヨハ 2・1～6）

主は私に、主の使いの前に立っている大祭司ヨシュアと、彼を訴えようとしてその右手に立っているサタンとを見せられた。主はサタンに仰せられた。「サタンよ。主がおまえをとがめている。エルサレムを選んだ主が、おまえをとがめている。これは、火から取り出した燃えさしではないか。」

（ゼカリヤ 3・1～2）

主は、かつて「光の天使」だった悪魔に地上の支配権を与えようとなさったのですが、悪魔はその高ぶりによって、主の御座近くにはべる特権を失つただけでなく、その支配権をも失いました。神が人間を創造され、この地上の支配権を人間にゆだねられたからです。そこで悪魔は人間を誘惑し、自己の支配下に置いたのです。こうして、地上は悪魔の支配下におかれようになつたのです。

主は、悪魔が逆らつたすぐ後で、悪魔を滅ぼされることができたでしょう。しかし主は、悪魔に対しても公平だったのです。それは、悪魔が世の終わりに、「我なら、神よりもさらにはばらし世界を創造することができただろうに。しかし神は、私にその時と機会を与えなかつたのだ。」

と言わせないためでした。

悪魔は世界の支配権を求めています。しかしその支配権は、イエス様の手の中に置かれていました。イエス様は、悪魔を十字架で滅ぼされました。そして、その証拠として復活され、昇天されました。イエス様は、御座に「支配者」としてついておられるのです。

主の判決は、悪魔に対して段階的に定められます。つまり、悪魔は裸にされ、打ち負かされ、天から投げ捨てられるのです。

また、聖書の中で、悪魔には「竜」、「古い蛇」そして「悪魔」という異なった三つの名前が与えられています。その名前の意味するものとは何でしょうか。

まず「竜」は、敵対的な力を表わしています。竜は恐ろしく、また残虐な生き物です。次に「古い蛇」は創世記にあるとおりエデンの園に現われました。蛇はずる賢く、また残虐な生き物です。そして「悪魔」は神の敵対者という意味です。悪魔は、アダムとエバに神の悪口を言い、神の前でヨブの悪口を言いました。また悪魔は、大祭司ヨシュアの悪口をも言いました。悪口は、悪魔の最も有効な武器です。悪魔は、信仰をもつ者同志が互いの悪口を言いあう時に、たいへん喜びます。悪魔は神に敵対するだけでなく、すべての信仰者にも敵対するものです。

ミカエルは、神の正義と神の栄光のために戦い、同時にイスラエルの民を守り、保護します。これに対して悪魔は、イスラエルを守りもせず、保護することもしません。

悪魔は誘惑し、そして訴えます。イエス様は、悪魔こそが偽りの父であり、人殺しの初めであると言つておられます。人々は殺人、盗み、姦淫などの行為そのものが「悪」であると考えがち

ですが、それらのものは「悪の結果」に過ぎないのです。「悪」の実体とは、天上有る悪魔自身なのです。この悪魔が、「神に等しくなりたい」という思いを抱かせようとして、人間の心を誘惑しているのです。

そこで、蛇は女に言つた。「あなた方は決して死にません。あなたがそれを食べるその時、あなたの目が開け、あなたが神のようになり、善惡を知るようになることを神は知つていいのです。」

（創世記 3・4～5）

悪魔は、神から独立し、人間を神から引き離そうとします。悪魔は人間を試み、悪巧みをもつて人を誘惑し、不従順の道へと引き入れます。そして、人がその罪に陥る時に、神の前でその人を訴えるのです。

悪は、時には善のように見えることがあります。ですから、悪魔も時には「光の天使」のように見えることがあります。イエス様が捨てられ、十字架にかけられた時も、まさにそのとおりでした。イエス様に逆らったのは不品行な人たちではなく、民の中の選ばれた人たち、つまり聖書学者、愛国心を持つ人々、律法学者、宗教的な指導者たちなどが、イエス様に逆らったのです。しかし、そのことによつて悪魔は、その本質を明らかにしました。油注がれた救い主に逆らう、というできごとをとおして、見えない世界に住む天使たちの前にも、悪魔の本質が明らかにされたのです。

信者たちの罪を神の前に訴える時、しばしば悪魔は物事の真理をついていることがあります。な

せなら、罪は必ずさばかなければならないからです。しかし、イエス様を訴えることによつて、悪魔は自らが偽り者だという本質を明らかにしたのです。

人間の目には悪く見えないことが、実は悪魔的であるということがあります。たとえば、信仰をもつ者が、自分の判断と自分の力によつて行動することは、悪魔的です。聖書の眞理性を疑うことでも、悪魔的です。人間の智恵によつて神のおきてを破ること、たとえば、「生まれ出ようとする子供の生命を勝手に奪うこと」も、悪魔的です。主への不従順と自己愛を抱きながら、何かのために努力することも、悪魔的です。

「光の天使」を装つた悪魔は、主への従順、信頼、献身から人間を引き離そうと誘惑するのです。悪魔は、人間を「疑い」や「自分に拠り頼むこと」、そして「自己主張」へと誘おうとしているのです。

悪魔の行いはまた、次のように説明することもできます。

悪魔は主のみことばを小さくし、人が罪を犯すことを恐れないようにしむけます。創世記の3章に書いてあるように誘惑するのです。そして、誘惑され、悪魔に説き伏せられてしまつた人々を、今も、天の法廷に訴えているのです。この時、悪魔は「罪を犯す者は、死ななければならぬ」という、神のおきてを持ち出すのです。

見よ。すべてのいのちはわたしのもの。父のいのちも、子のいのちもわたしのもの。罪を犯した者は、その者が死ぬ。

(エゼキエル 18・4)

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

(ローマ 6・23)

悪魔は神のおきてに基づいてさばきを要求します。その時悪魔は、神の力をもつて人を滅ぼすのです。神は、人を生きるように作られましたが、悪魔はこれを滅ぼそうとしています。私たちの時代の特徴とは何でしようか。至るところで人々は、嘘をつかることをあらかじめ予想し、嘘の中で生活しています。イエス様は、「真理を話しているために、あなたがたはわたしを信じません」。(ヨハネ8・45)と言われたのです。

(竜は) 勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなつた。

(黙示 12・8)

悪魔は、神とキリストに逆らうことによつて、その本質が明らかにされ、神の前で完全に敗北しました。したがつて、天には悪魔のいる場所がなくなつたのです。黙示録12章において、悪魔は完全に天上から追放されました。この結果、悪魔はもはや人間を告発し、訴えることができなくなつたのです。悪魔は、告発し、訴える「竜」としての存在だけでなく、告発し、訴える「場所」をもなくしたのです。

エゼキエル書27章には、海の中に沈んでいく豪華な船のことが記されています。この船が沈み、波に呑み込まれた時には、すべてのものが滅び、いかなる生き物も残されませんでした。

おまえのくずれ落ちる日に、…おまえの水夫、船員、修繕工、おまえの商品を商う者、おまえの中にいるすべての戦士、おまえの中にいる全集団も、海の真中に沈んでしまう。…だれかツロのようないに海の真中に滅ぼされたものがあろうか。…おまえが海で打ち破られたとき、おまえの商品、全集団は、おまえとともに海の深みに沈んでしまった。…どこしえになくなってしまう。

(エゼキエル27・27、32、34、36)

同じことが悪魔にも起こったのです。すなわち悪魔は、そのいるべき場所を完全に失ったのです。ミカエルとその御使いたちは、悪魔と悪霊に対するこの判決を言い渡すように、召し出された者たちです。戦いの結果、悪魔は地上へ追放されることになりました。この勝利のゆえに、天上で大きな賛美の声が上ったのです。

そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と國と、また、神のキリストの権威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えているものが投げ落とされたからである。」

(黙示 12・10)

私たちは、悪魔が昼も夜も告発と訴えをつづけるその熱意を見てきました。しかし私たちは、イエス様の完全な勝利を知っています。私たちは次のように、パウロとともに喜ぶことができるのです。

神に選ばれた人々を訴えるのは誰ですか。神が義と認めてくださるのであります。罪に定めよ

うとするのは誰ですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのであります。私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。…高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

(ローマ 8・33～35、39)

イエス様は、私たちのために絶え間ないとりなしの祈りをしていてくださいます。私たちは、聖書全体を通して、イエス様が「偉大な弁護人」であることを知るのです。

「しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直つたら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」
(ルカ 22・32)

「ですから、わたしを人の前で認めるものはみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。」
(マタイ 10・32)

罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのであります。

(ローマ 8・34)

したがつて、ご自分によつて神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。

(ヘブル 7・25)

またわたしは、あなたがたがわたしの名によつて求めるることは何でも、それをしましょ
う。父が子によつて栄光をお受けになるためです。

(ヨハネ 14・13、14)

私の子どもたち。私がこれらのこと書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないように
なるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちは、御父の御前で弁護してくださ
る方があります。それは、義なるイエス・キリストです。

(ヨハネ 2・1)

主は、私たちに対するすべての告発を退けられます。なぜなら、イエス様の血潮が、すべての告
発に對して答え、守つてくださるからです。

悪魔は告発し、訴える者です。私たちも他の人々を告発し、訴える者なのでしょうか。あるい
は、他の人々のために祈る者なのでしょうか。私たちは他の人々のために重荷を負う者でしょ
うか。あるいは告発し、訴える者なのでしょうか。

キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あ

なたがたは、しっかりと立つて、またと奴隸のくびきを負わせられないようにしなさい。

(ガラテヤ 5・1)

兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。

(イテサロニケ 5・14)

私たちは勝利を得る者でしようか。あるいは敗北する者でしようか。

さて、黙示録12章の7節から12節にもどりましょう。

ここには、悪魔に訴えられる人々の勝利について書かれています。彼らは何によつて悪魔に打ち勝つたのでしょうか。ミカエルによつて打ち勝つたのでしょうか。そうではありません。では、彼らの武器は、いったい何だったのでしょう。

3 武器

彼らの武器は、まず「小羊の血」であり、そして彼らの「証しの言葉」です。

1 小羊の血

小羊の血とは、イエス様の血です。イエス様は神の子羊です。

その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

(ヨハネ 1・29)

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によつたのです。

(Iペテロ 1・18、19)

私たちがむなしい生き方から贖い出されたのは、イエス様の身代わりの死によつてでした。私たちは、イエス様の十字架の死によつて、悪魔に対する鎖から解き放たれ、主にしつかりとつながれたのです。

かつて、アベルの血はカインを告発し、訴えました。

さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。

(ヘブル 12・24)

しかし、イエス様の血は私たちを告発したり、訴えたりすることなく、私たちのとりなしをしてくださるのです。

イエス様の血は、罪に対する完成されたさばきと罪の贖い、また赦しを語つてているのです。イエス様の血が流されたことによつて、私たちに神との平和が恵まれました。そしてイエス様の血は、私たちを悪魔の奴隸から贖い出してくださつたのです。

かつてスポルジョンは、次のようなことを話しました。「ある男が、革命家たちに殺されそうに

なりました。その時、男の友人が出てきて、国旗をとり出し、男にまとわせたのです。そして革命家に言いました。「この国旗の国と問題を起こしていいのなら、今すぐこの男を撃て」。革命家たちは、国と問題を起こすことを恐れて男を撃てなかつたので、この男は救わました。

この国旗のたとえと同じように、イエス様の血は私たちを包んでくださるのです。私たちの背後には、イエス様が立つておられます。私たちは贖われてイエス様のものとされました。だから、「悪魔は私たちに対して何もなしえない」と言うことができるのです。

悪魔に対する勝利は、私たちの功によるのではありません。信者は自分の力で悪魔と戦うことはできません。また私たちは、「勝利のために戦う」ではありません。すでに勝ちとられたイエス様の勝利をもとにして、戦うのです。私たちの努力によるのではなく、イエス様の勝ちとられた権利によつて、私たちは勝利を得るのであります。イエス様の血が、私たちを守つてくださるのです。イエス様の血は、私たちの罪の赦しと、義とされることを証ししています。

そして、私たちが義とされて罪の赦しを受けているところでは、もはや悪魔は何の力も持ちえません。悪魔は、私たちが福音について語つたり、貧しい人を助けたり、正しい行いをしようとしたりする時には、あまり反対をしません。しかし、私たちがいつたんイエス様の血潮について語ろうとするとき、大変激しく反対をするのです。

イエス様を信じる者の武器は、「小羊の血潮」と「証しの言葉」です。この二つの武器による戦いを通して、信じる人々の前に力強い証しをするのです。イエス様にある者の勝利は、このようにしてたらされなければなりません。

2 証しの言葉

証しで重要なのは、証しをする人ではありません。ゴルゴタで十字架につかれた、証しさるべきそのお方、イエス様こそが大切です。小羊イエス様についての知識や、信仰だけでは、証しとして十分ではありません。小羊イエス様の勝利を積極的に証しすることが大切です。私たちはしばしばそれについて語らず、沈黙をしてしまいがちです。しかし、小羊の勝利は、私たちの証しによって、明らかにされなければなりません。

私たちの武器は、「小羊の血」です。十字架のもとに静まることです。そして、「証しの言葉」です。勝利を全世界に向かって証しすることです。この二つの武器を通して私たちは、外からの敵に打ち勝つことだけでなく、内側の「自我」という敵に対しても打ち勝つことができるのです。しかし私たちは、どれほど自己を中心として生活することでしょうか。私たちは自己を中心とするか、あるいはイエス様により頼むかの、どちらかです。

の方は盛んになり私は衰えなければなりません。

(ヨハネ 3・30)

「イエス様が榮え、私たちは衰えなければならない」。これがすべての殉教者の叫びです。「証し人」という言葉には「殉教者」という意味もあります。苦しみと死の覚悟が必要です。私たちが自我の生活を捨て去る時に、私たちは実を結ぶのです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦（イエス様）がもし地に落ちて

死ななければ、それは一粒のままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」

(ヨハネ 12・24)

私たちは、十字架につけられて三日の後によみがえられたイエス様のみもとにひれ伏すことが必要です。その結果は、小羊イエス様への礼拝です。小羊イエス様の勝利を世界に宣べ伝えることこそが、私たちの使命です。それを通して私たちは、ほふり場へと引かれて行く小羊となり、また勝利者となるのです。

「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊となりなされた。」と書いてあるとおりです。

(ローマ 8・36)

イエス様を証しするということは、自分よりもイエス様を愛する、ということです。イエス様も、私たちが自我の生活を愛さなくなることを望んでおられます。

「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。」

(マタイ 16・25)

「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」

(マルコ 8・35)

「自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」
(ルカ 9・24)

「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保つて永遠のいのちに至るのです。」
(ヨハネ 12・25)

「生活」、あるいは、「いのち」という言葉は、ギリシャ語では「たましい」という意味です。それは考えること、感ずること、そして欲することです。

「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。：それは、父がわたしを知つておられ、わたしが父を知つているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」
(ヨハネ 10・11、15)

私たちは、自分自身を否定することが必要です。イエス様の勝利が生活の中で明らかにされるためには、自己否定、そしてイエス様のために苦しむことが必要です。
私たちは毎日、証しをし、苦しむか、またこの世に妥協してイエス様を否む態度をとるか、いずれかの選択の前に立たされています。私たちはどのような生活を送っているでしょうか。それは、自己愛と自己支配の生活でしょうか。あるいは、献身と、イエス様に忠実な生活でしょうか。

敵である悪魔は打ち滅ぼされました。私たちの武器のほうが優れていたのです。しかし、信者として私たちは、今もなお苦しい戦いの中にあります。悪魔は私たちをイエス様から引き離そうと試みています。悪魔は私たちに十字架を見上げることを妨げ、自分自身を見ようとさせるのです。このことによつて悪魔は勝利を得るのです。

イエス様の流された血潮に感謝することを、毎日忘れないようにしましよう。このことによつて、私たちは、もはや悪魔が何もないしえないイエス様の証し人となることができるのです。

黙示録12章12節には、「天とその中に住む者たちには喜びが」、そして、「地と海とにはわざわいが来る」と記されています。喜びではなく、このようなわざわいがあなたに襲いかかってくるようであれば、あなたは悔い改めを必要としています。罪を悔い改めてイエス様の血潮に感謝をする者は、救いの確信を得るのです。

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。…もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は眞実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(ヨハネ 1:7,9)

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者は、あわれみを受ける。

(箴言 28:13)

悪魔は地上を支配しようとしています。そして、大きな力をこの地上におよぼしています。しかし、地上に投げ落とされる時、悪魔は自分の時が短いことを知るのです。そして悪魔は、自分の時が短いことを私たちに知られたくないのです。しかし、悪魔が滅ぼされ、イエス様が再臨とともに勝利を明らかにされることとは、ゆるぎない事実です。私たちは、心から、そのことを喜びましょう。

神とその民に対する悪魔の迫害

黙示録12章13節から18節まで

- 1 神の民に対する迫害
 - 1 選ばれた民に対する迫害
 - 2 救い主に対する迫害
 - 3 支配者に対する迫害

- 2 神の民の荒野への道
 - 1 大きなわしの二つの翼
 - 2 そなえられた逃れ場
 - 3 定められた期間

- 3 神の民の守り

自分が地上に投げ落とされたのを知った竜は、男の子を産んだ女を追いかけた。¹⁴しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行つて、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。どころが、蛇はその口から水を川のように女のうしろへ吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした。¹⁵しかし、地は女を助け、その口を開いて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。¹⁶すると、竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保つている者たちと戦おうとして出ていった。そして、彼は海べの砂の上に立つた。

(默示 12・13～18)

この箇所のテーマは「神とその民に対する悪魔の迫害」です。それはまた、「キリスト者への守りと攻撃」、「女に対する竜の怒り」、「地上での激しい戦い」、「荒野での女」と言いかえることもできます。

ここに記されていることが起きる期間は反キリストの時代の後半の三年半に相当します。まことの神に対する悪魔の反抗は、この後で破滅的な終わりを迎えます。悪魔の主張は、まことの神なしで、悪魔と人間とで、より良い世界を作り出せる、というものです。それが、この混乱した世界です。まことの神を無視してこのような結果を招いた悪魔と人間は、神の前にどのような弁明もできません。

さて、この箇所を三つの部分に分けて見ていきましょう。まず、13節の「神の民に対する迫害」、

14節の「神の民の荒野への道」、15～17節の「神の民の守り」です。

1 神の民に對する迫害

黙示録12章13節には、「神の民への迫害」が記されています。神の民は常に攻撃を受けるものですが、終わりの時代には特に激しい攻撃を受けます。

悪魔は自分の時が短いことを知ったため、ますますその攻撃を激しくします。しかし、いかに攻撃が激しくても、その「時」が限られていることは、私たちにとつて大きな慰めです。十字架の上のイエス様の死によって悪魔が滅ぼされたこと、そして、最後のその判決がまもなく下されることを私たちは知っているのです。

打ち滅ぼされた竜は、色々な方法で、またあらゆる力をもつて抵抗しようとします。かつて悪魔は、イエス様の十字架と復活によつて滅ぼされたことを、あらゆる嘘と偽りで否定しようとしました。当時、悪魔は祭司たちを通して「イエスは復活しなかった」と言わせました。しかし、これに失敗したので、悪魔は信者たちを迫害し、捕らえ、そして殺害したのです。

現代における悪魔の武器は、独裁国家にあつてはその武力であり、他の多くの国々にあつては人間中心の、人間の欲望のために組織された宗教です。そしてこの二つのうち、後者の方がはるかに危険です。原理運動やエホバの証人、ローマ・カソリック教会の教義を通して、悪魔はその目的を達成しようとしているのです。

黙示録のこの箇所において、「竜」は「女」を追いかけます。つまり、悪魔はイスラエルを追い

かけるのです。ではなぜ、悪魔の怒りはイスラエルに向けられるのでしょうか。その理由を、三つに分けて考えてみましょう。

1 選ばれた民に対する迫害

まず迫害の第一の理由は、イスラエルが神によつて選ばれた民族だからです。すべての国民がイスラエルをとおして祝福される、と聖書に記されているからです。イスラエルの民に対して、主はご自身を啓示されました。律法と聖書全体とは、まずイスラエルの民に与えられました。すべての国民に対してイスラエル民族こそが、「生けるまことの神の生きた証人」となるべきでした。これが彼らの使命でした。ですから悪魔は、イスラエルを滅ぼそうと試みたのです。

2 救い主に対する迫害

第二の理由は、イスラエルから約束されたメシアが出現したためです。それで悪魔は迫害したのです。

先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。

(ローマ 9・5)

聖書は「救いがユダヤから来る」と述べています。悪魔はいつものことに反抗し、イエス様がお

生まれになつた時には、ヘロデ王を通してイエス様を殺そとしました。

3 支配者に対する迫害

第三の理由は、悪魔が支配している地上が、後にイスラエルによつて支配されることになるからです。ですから悪魔はイスラエルを迫害するのです。千年王国において、イスラエルはイエス様とともにその中心となり、地上を支配するのです。

「迫害される」ということは、イエス様との交わりをもつてゐる証拠です。1節から17節までに述べられてゐる「女」とは、イスラエルの中でもまことの神を信じる残りの者です。イスラエル民族全体は、イエス様の再臨の時に初めて心が開かれるのです。

2 神の民の荒野への道

私たちは、神がエジプトにおける四百年の奴隸生活からイスラエルの民を贖い出され、荒野で四十年間養われたことを知つています。默示録12章14節に記されているイスラエルの残りの者たちの荒野での生活は、これと似ています。

エジプトは竜の国と言われています。なぜならエジプトは、イスラエルを滅ぼすための悪魔の道具だからです。

その方は私に仰せられた。「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの民、すなわち、わたしにそむいた反逆の国民に遣わす。彼らも、その先祖たちも、わたしにそむいた。今日

もそうである。」

(エゼキエル 2・3)

「人の子よ。エジプトの王パロについて哀歌を唱えて彼に言え。諸国の民の若い獅子よ。あなたは滅びうせた。あなたは海の中のわにのようだ。川の中であばれ回り、足で水をかき混ぜ、その川々を濁らせた。」

(エゼキエル 32・2)

出エジプト記によると、かつてイスラエルの男児はナイル川に投げ込まれました。悪魔の怒りが神のひとり子であるイエス様に向けられたからです。また黙示録によると、終わりの時代には、悪魔の怒りはイスラエルの残りの者たちに向けられます。

かつてイスラエルの人々は、パロの憎しみから逃れました。終わりの時代には、イスラエルの残りの者たちが竜の怒りから逃れます。パロがイスラエルの人々を追いかけたように、竜はイスラエルの残りの者たちを追いかけます。しかしその昔、「紅海」がイスラエルの民に害を与えたかったように、竜の吐き出す「水」も、イスラエルの残りの者たちに何の害も与えることができないのです。

かつて主が、イスラエルの人々を四十年間マナをもつて養われたように、終わりの時代にも、主はイスラエルの残りの者たちを養われます。

14節にある「荒野」とは何を意味するのでしょうか。それは、貧しさと孤独、へりくだりです。主は、国を出てさまよっている民に、何を与えられるのか。次にそれを見てみましょう。

1 大きなわしの二つの翼

主は、12章14節にあるとおり、女に「大わしの翼を二つ」与えられました。わしは、ひなが育つてくると、飛ぶことを学ぶように巣から外へ追い出します。ひながうまく飛ぶことができずに落つこちようとする寸前、親のわしは羽を広げてひなを救い上げ、再び巣へと持ち帰るのです。イスラエルの民はこれと同じことを体験しました。

「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたをわしの翼に載せ、わたしのもとに連れて来たを見た。」
（出エジプト 19・4）

わしが巣のひなを呼びさまし、そのひなの上を舞いかけり、翼を広げてこれを取り、羽に載せて行くように。ただ主だけでこれを導き、主とともに外国の神は、いなかつた。

（申命記 32・11、12）

黙示録7章3節には、イスラエルの残りの者たちに印が与えられることが述べられています。

「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまって、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」

（黙示 7・3）

黙示録11章1節には、彼らが測りにかけられることが記されています。

それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があつた。「立つ

て、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。」

(黙示 11・1)

そして今学んでいる節で、イスラエルの残りの者たちが「翼を与えられる」と記されています。

しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行つて、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。(黙示 12・14)

これらのこととは、同じことを意味しています。それは、彼らが神の所有物であり、神の守りを受ける、ということです。

主に頼るイスラエルの残りの者たちが守られ、翼を与えられるのはなぜでしょう。彼らがすべてのものに立つためです。翼に守られて、彼らは障害や危険を乗り越えることができるのです。どのような深い淵も、高い山も、わしはその翼でやすやすと飛び越えていきます。イスラエルの残りの者たちも同じことを経験するのです。

しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷺のように翼をかつて上ることができる。走つてもたゆまず、歩いても疲れない。

(イザヤ 40・31)

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言わたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

「わし」は主の守りの象徴です。終わりの時代にあるイスラエルの残りの者たちは、安全に早く飛び行くことができ、また逃げることができます。

次の詩篇の作者のように言えれば幸いです。

神よ。あなたの恵みは、なんと尊いことでしょう。人の子らは御翼の陰に身を避けます。

(詩篇 36・7)

あなたは私の助けでした。御翼の陰で、私は喜び歌います。

(詩篇 63・7)

次に、イスラエルの残りの者たちは、いつたいどこへ向かって飛ぶのでしょうか。

2 そなえられた逃れ場

14節には、「…荒野に飛んでいって、そこで」と書いてあります。「そこ」とは、神によつてそなえられた守りの場所のことです。人々が迷いながら偶然見つけた場所ではなく、あらかじめ主によつてそなえられた場所です。

さあ、わが民よ。あなたの部屋にはいり、うしろの戸を閉じよ。憤りの過ぎるまで、ほんのしばらく、身を隠せ。

(イザヤ 26・20)

その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。

(イザヤ 27・1)

イスラエルの人々は、その昔、罪人が逃れることのできる「逃れ場」を与えられていました。そこでは罪人が血の復讐を受けることがなく、どのような敵からも攻撃を受けることがなかつたのです。主は、終わりの時代にもこのような「逃れ場」を荒野にそなえられるのです。

竜は反キリストとともに、イスラエルの残りの者たちを迫害します。しかしその結果はどうでしょうか。かつてパロはイスラエルの民を追跡し、紅海で滅ぼされました。ですからイスラエルの残りの者たちも、神によつて守られ、千年王国を支配することになるのです。

3 定められた期間

この荒野の期間は、14節にあるとおり、三年半続きます。そこで彼らは飢えることも渴くこともなく、主によつて養われるのです。

かつて主は、イスラエルの民を四十年間マナと水をもつて養われました。将来においても、主はご自分に属する者を見捨てられることはありません。しかもこの期間は短く、主によつて定められています。これはイスラエルの民にとつては大きな慰めです。

また14節には、「蛇の前をのがれて」とあります。これは、次の二ことばを思い出させます。

私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそいでくださいま
す。

(詩篇 23・5)

これはダビデの体験したことですが、イスラエルの残りの者たちも将来同じ体験をすることにな
ります。悪魔である敵は、彼らに対しても何もできません。なぜなら主が彼らを守られるからです。

3 神の民の守り

最後に、「神の民の守り」について考えてみましょう。創世記には次のように記されています。

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。
彼は、おまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとにかみつく。」
(創世記 3・15)

女の子孫と蛇の子孫との間の戦いは、さらに続きます。十字架において、このみことばのとおり
悪魔はイエス様の「かかとにかみついた」のです。また、イエス様がご自身のいのちをささげら
れ、これによつて「悪魔の頭が踏み碎かれ」たのです。

勝利はかちとられました。しかしその勝利の宣告は後になつて初めて下されるのです。その時
まで悪魔は偽り者、また殺人者として全人類を迫害します。そして悪魔の主な攻撃の目標は、イ
スラエルの残りの者たちに向けられるのです。

さて、15節で竜は女を迫害します。そして、竜の力は女の力とはくらべものにならないほどに
強力なのです。イスラエルの残りの者たちは、水の流れに流れそうになります。この「流れ」と

は何を意味しているのでしょうか。

「それゆえ、見よ、主は、あの強く水かさの多いユーフラテス川の水、アッシリヤの王と、そのすべての栄光を、彼らの上にあふれさせる。それはすべての運河にあふれ、つべの堤を越え、ユダに流れ込み、押し流して進み、首にまで達する。インマヌエル。その広げた翼は、あなたの国の幅いっぱいに広がる。」
(イザヤ 8・7～8)

主はこう仰せられる。「見よ。北から水が上つて来て、あふれる流れとなり、地と、それに満ちるもの、町とその住民とがあふれかかる。人々は泣き叫び、地の住民はみな泣きわめく。

(エレミヤ 47・2)

この「流れ」とは、イスラエルを滅ぼそうとしている、大きな力をもつアッシリヤの王を意味しているのです。また、この「流れ」はこのような外側からの攻撃のみでなく、内面的な誘惑をも意味しています。

あなたの大滝のとどろきに、淵が淵を呼び起こし、あなたの波、あなたの大波は、みな私の上を越えて行きました。

死の網は私を取り巻き、滅びの川は、私を恐れさせた。

(詩篇 18・4)

それゆえ、聖徒は、みな、あなたに祈ります。あなたにお会いできる間に。まことに、大水の濁流も、彼の所に届きません。

そのとき、大水は私たちを押し流し、流れは私たちを越えて行つたであろう。

(詩篇 32・6)

124
(イザヤ
43・2)

あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。

イエス様は「いのちの水の川」をくださいますが、竜は「死の水の川」を流れ出させます。竜が出す「流れ」とは、間違った教えであり、ユダヤ人に対する憎しみです。悪魔は全世界を反ユダヤ的にさせていきます。ですから、イスラエルにとつては大変な苦難の時代となるのです。しかし、ちょうどノアが洪水から救い出されたように、イスラエルも終わりの時代に洪水の中から救い出されるのです。

この世の支配者である悪魔には大きな力が与えられており、この力によつて悪魔はイスラエルの者たちを滅ぼそうとしています。しかし、15節、16節では、海の竜が川のように水を吐き出し女を迫害しても、地が女を助けてその水を飲み干してしまつのです。これが、終わりの時代に竜に起ることです。

私たちは、主が終わりの時代にどのような守りを与えるか知ることはできません。しかし16節に「地がその口を開いて川を飲み干す」と書いてあるように、その時、主の救いが実現するのです。

かつて主に逆ったコラの一族は、民数記16章の31節から33節にあるとおり、地の中にのみこまれてしましました。同じように反キリストの軍勢も、たとえば砂漠の竜巻などによって、地にのみこまれてしまうかもしれません。また悪魔は多くの国々をそそのかし、イスラエルを攻撃せらるかもしれません。ところがその最中に突然、「自國が攻められている」という急報が入り、攻撃を中断せざるをえなくなるかもしれません。

かつて、ダビデを殺そうとしたサウルも同じことを経験しました。ダビデは捕らえられ、殺されそうになりました。ところがその時、サウルに、自國が攻められているという知らせが入りました。そこでサウルはダビデを殺すことを中断し、敵と戦うために国へと引き返したのです。

将来においてどのようなことが行われるかは、大して重要ではありません。肝心なのは、主が必ず竜の攻撃から彼らを守り、保護されることです。

かつてエデンの園で、蛇は女を誘惑することに成功しました。しかし終わりの時代には、女が蛇に打ち勝ちます。竜のあらゆる攻撃は無益です。主が彼らを守られるからです。

主は荒野で、獣のほえる荒地で彼を見つけ、これをいだき、世話ををして、ご自分のひとみのように、これを守られた。

(申命記 32・10)

黙示録12章17節によると、悪魔の怒りはイスラエル、つまり女子子孫の残りの者たちに向かれています。

すると、竜は女に対して激しく怒り、女子子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出ていった。

(黙示 12・17)

これら残りの者たちは明らかに、黙示録11章3節にある「ふたりの証人」の証しを通して信仰に入った人々であり、主の戒めを守り、イエス様の証しを保っている人々です。彼らは神によって愛され、選ばれ、そして救われた人々です。彼らは神の所有として守られるのです。竜は彼らに対して激しく戦いますが、彼らを動かすことはできなかつたのです。

彼らが弱いにもかかわらず、悪魔は彼らを動かすことができませんでした。なぜなら、人の弱さの中に神の力が明らかにされるからです。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んでわたしの弱さを誇りましょう。

(Ⅱコリント 12・9)

なぜイスラエルの残りの者たちは、大きな苦難の時に荒野へと導かなければならぬのでしょうか。そこには主の目的があります。主はご自身に属する民をきよめようとしておられるのです。

それゆえ、見よ、わたしは彼女をくどいて、荒野に連れて行き、優しく彼女に語ろう。

(ホセア 2・14)

シオンに残された者、エルサレムに残つた者は、聖と呼ばれるようになる。みなエルサレムでいのちの書にするされた者である。主が、さばきの靈と焼き尽くす靈によつて、シオンの娘たちの汚れを洗い、エルサレムの血をその中からすすぎ清める。

(イザヤ 4・3、4)

全地はこうなる。—主の御告げ。—その三分の一は断たれ、死に絶え、三分の一がそこに残る。わたしは、その三分の一を火の中に入れ、銀を練るように彼らを練り、金をためすように彼らをためす。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは「これはわたしの民。」と言い、彼らは「主は私の神。」と言う。 (ゼカリヤ 13・8、9)

ですから、悪魔は神の手の中にある単なる道具にすぎないのです。

最後に、私たちはよく考えてみましよう。私たちはイエス様のものでしょうか。あるいは、まだそうなつていでしょか。私たちは「罪の赦し」の確信、「もはや、さばかれることがない」という確信をもつてゐるでしょか。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わ

した方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移つているのです。」

(ヨハネ 5・24)

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

(ローマ 8・1)

「なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」

(ヘブル 8・12)

主を信じない人々にとつては、未来は暗闇であり、絶望です。しかし主を信じる者にとつては、未来はイエス様が来られるというすばらしい希望です。私たちは、未来に大きな苦難が待ち受けているのではありません。イエス様が来されることを待ち望んでいるのです。

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返つて、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになつたか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

(イテサロニケ 1・9～10)

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

(ピリピ 3・20)

祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。

(テトス 2・13)

そうすれば、大牧者が現われるときに、あなたがたは、しほむことのない栄光の冠を受けるのです。

(Iペテロ 5・4)

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるよう、自分を清くします。

(Iヨハネ 3・2~3)

一日一日、喜びをもつて心からイエス様を待ち望んでいる人々は、幸いです。

聖徒の忍耐と信仰

黙示録 13章 1節から10節まで

- 1 獣である反キリストの十の特徴
 - 1 十本の角と七つの頭、十の冠
 - 2 ひょう、熊、しし
 - 3 竜の力と権威
 - 4 打ち殺され、直った頭
 - 5 獣と竜への礼拝
 - 6 けがしごとを言う口
 - 7 限られた期間
 - 8 ののしり
 - 9 表面的な勝利
 - 10 反キリストの支配の時
- 2 いのちの書に名前がしるされている人々

また私は見た。海から一匹の獸が上つて來た。これには十本の角と七つの頭¹とがあつた。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があつた。²私の見たその獸は、ひょうに似ており、足は熊のようで、口はししの口のようであつた。竜はこの獸に、自分の力と位と大きな權威とを与えた。³その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われたが、その致命的な傷も直つてしまつた。そこで、全地は驚いて、その獸に従い、そして、竜を拝んだ。獸に權威を与えたのが竜だからである。また彼らは獸をも拝んで、「だれがこの獸に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう。」と言つた。この獸は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する權威を与えられた。⁴そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしつた。⁵彼はまた聖徒たちに戦いをいどんに打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、國語、國民を支配する權威を与えられた。⁶地に住む者で、ほぶられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる。⁷耳のある者は聞きなさい。とりこになるべき者は、とりこにされて行く。剣で殺す者は、自分も剣で殺されなければならない。ここに聖徒の忍耐と信仰がある。

(黙示 13・1～10)

黙示録13章は、二つの部分からなっています。1節から10節までと、11節から18節までです。1節から10節には、「海から上つて来る獸」、つまり反キリストのことが書かれています。この反キ

リストは悪魔の力の道具であり、悪魔の国で高い地位に就いています。そしてまた、反キリストの国は、全世界を支配している国です。

11節から18節には、「地から上つて来る獸」、つまり「にせ預言者」のことが書かれています。このにせ預言者は、悪魔の誘惑の道具であり、反キリストの教会のかしらであり、世界の宗教を支配する者です。

今まで私たちは、默示録12章で、悪魔が地上に投げ落とされたことを見てきました。終わりの時代には、悪魔は特別な憎しみを抱いて神の民であるイスラエルを迫害します。神に対する悪魔の最後の戦いがくりひろげられるのです。そしてその戦いの時に、悪魔は自分の道具となる者、自分の意志に全面的に服従する者を探し求めます。悪魔の道具となり、服従する者こそが、反キリストであり、にせ預言者です。

終わりの時には、神の三位一体に対して、悪魔の三位一体が形づくられます。なぜなら悪魔は、まことの神を常にまねようとするからです。「父なる神」に対しては悪魔である「竜」が、「イエス・キリスト」に対しては第一の獸である「反キリスト」が、そして「聖霊」に対しては第二の獸「にせ預言者」が、それぞれ対応するのです。

私たちはまず初めに、悪魔の力である第一の獸、「反キリスト」について考えてみたいと思います。

1 獣である反キリストの十の特徴

「反キリスト」は、世界の国家の政治的な支配者としての地位に就いています。そしてこの獸で

ある反キリストは、十の特徴を持つています。それらを見ていきましょう。

1 十本の角と七つの頭、十の冠

13章1節には、「獸が「十本の角と七つの頭」そして「十の冠」を持つていることが記されています。そして、その頭には、「神の名をけがす名があつた」とあります。これらは何を意味しているのでしょうか。

黙示録第13章は、黙示録のなかでももっとも恐るべき章です。この13章では、イエス様がこの地上に千年王国を打ち立てるために再臨される前の三年半の期間のことが記されています。悪魔が用いる道具は人間ですが、その悪知恵のことここでは「獸」と表現されているのです。この「獸」は、ギリシア語では「野獸」という言葉になっています。

反キリストの國、惡魔の國は、地上のあらゆる権力、あらゆる支配権を持つています。竜である惡魔が十本の角と七つの頭を持つように、第一の獸である反キリストも同じ物を持つてゐるのです。このことは、「獸」が人間を超えた知恵と世界の支配権を持つてゐることを意味してゐます。この冠とは、政治的な力のことです。この冠は頭の上にあるのではなく、角の上にかぶせられてゐるのです。それらは、大きな力と比類ない権力を意味してゐるのです。

次の神をけがす「名」ですが、これこそ当時の支配者であったローマ皇帝にもつとも当てはまる呼び名です。ローマ皇帝はみずからを神、神の子、救い主、また主などと呼ばせていました。けがす、とは、神の栄光を奪い取るという意味です。

また、近代では、ドイツの第三帝国で、ヒットラーが「彼はきのうも今日もいつまでも変わらない者だ」と言わっていました。これが、神をけがすということです。反キリストは自分を、比べられるものない者と称してはばかりません。自分は失敗を犯すことなく、完全な者だと言ふのです。すべての反キリストは、自分のことを究極の権威を持つ者だと言うのです。

そして反キリストは、全人類に対する支配権を要求します。すなわち、全人類に無条件の服従を要求するのです。これが全世界を支配する反キリストの特徴です。人が力を持って服従を強いる時、そこには必ず悪魔的な力が働くのです。

表面だけを見れば、このような時代には、科学と技術が大きく進歩し、最も偉大な業績を上げる時でしよう。強力な政治家たちが反キリストとともに政治を支配し、全世界に活気がもたらされる時でしよう。人類の最後の黄金時代が到来する時になるでしょう。そしてこの時代には、あらゆる手段をもつて、神の御名がけがされるようになるでしょう。この時代は悪霊が造り、支配する時代であり、そのせいで神に対する憎しみが高まるのです。

またこの時代には、小羊であるイエス様の支配が意識的に避けられるようになります。イエス様の御名の栄光を奪い取り、その栄光の代わりに、反キリストが自らの名を誇るようになります。さらにこの時代には、反キリストが、十の連邦国家の支配者となります。この十の国家は古いローマ帝国の領域の中に打ち建てられることになると思われます。十の角は十の国家と十の国王、つまり支配者を意味しています。

あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獸と

ともに、一時だけ王の権威を受けます。

(黙示 17・12)

1節にある「十の冠」は、政治的な大きな力を意味しているのです。

2 ひょう、熊、しし

一番目の特徴は、2節にあるとおり、この獸が「ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口はししの口のよう」だということです。同じような記述として、私たちはダニエル書の7章の4節から6節を思い起します。

第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけていた。見ていると、その翼は抜き取られ、地から起こされ、人間のように二本の足で立たされて、人間の心が与えられた。また突然、熊に似たほかの第二の獸が現われた。その獸は横さまに寝ていて、その口のきばの間に三本の肋骨があった。するとそれに、「起き上がって、多くの肉を食らえ。」との声がかかった。この後、見ていると、また突然、ひょうのようなほかの獸が現われた。その背には四つの鳥の翼があり、その獸には四つの頭があつた。そしてそれに主權が与えられた。

(ダニエル 7・4～6)

反キリストの國は、古い帝国の特徴を備えています。「ひょう」のように速く、「熊」のようにどん欲で、「しし」のような力を持っています。これは、ギリシャのようであり、ペルシャのよう

であり、バビロンのようだと言えます。ダニエルはヨハネと違つて、世界の帝国の順序を見たのです。ダニエルはその帝国の順序を未来に向かって見たのですが、ヨハネはそれを過去に見たのです。

ヨハネの時代の帝国とは、ローマ帝国です。默示録17章の8節に、「昔はいたが、今はおらず、やがて現われる」という表現が出てきます。この「昔はいたが」という表現は、ヨハネの時代のローマ帝国に相当します。その後、ローマ帝国は滅亡するのです。しかし、このローマ帝国はやがて再び、別の形で諸国民の間に起ころうとしてくるのです。

聖書はイエス・キリストの神聖を否定する者は、反キリストの靈を持つ者であると述べています。小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。それによつて、今が終わりの時であることがわかります。

(ヨハネ 2・18)

偽り者とは、イエスがキリストであることと否定する者でなくてだれでしよう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。

(ヨハネ 2・22)

反キリストの国は、獸の国にあるあらゆる残虐性を持つっています。反キリストは「ひょう」のように早く、「熊」のように戦い、「しし」のように叫びます。神の名を汚すように叫ぶのです。かつてローマの皇帝たちは、神の栄光を自分のものにして、奪い取りました。皇帝ドミティア

ヌスは、自分を「神であり、また、主である」と称えました。また皇帝の一人だったアウグストスの名は、「高められた者、神聖な者、最高の者」という意味です。

3 竜の力と権威

三番目の特徴は、反キリストは4節にあるとおり、竜から力と権威とを与えられます。つまり反キリストには、この世を超えた力が与えられるのです。野獸の特徴は非情です。反キリストは「ひょう」に似て恐るべきものであり、ひょうによつて、つまり反キリストによつて、人類は恐れと不安につき落とされます。

さらに反キリストは「熊のよう」に自らに逆らうすべての者を打ち倒します。将来出現するであろう統一国家は、いかなる反抗をも許さない国家です。

反キリストは絶対的な力を持つており、同時に、大きな口をも持っています。「しし」の叫びによつて、すべての者が恐れおののくのです。この国の宣伝の力は異常に強力です。悪魔はこの国にすべての力を与えるのです。その力は、悪魔がかつてイエス様を誘惑して、自らを拝ませようとした時の力です。また反キリストは、悪魔が装つたにせキリストでもあります。十字架で死なれたキリストは、「わたしには天においても、地においても、いつさいの権威が与えられていました。」（マタイ 28・18）と言わされたお方です。「すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡ります。」（マタイ 11・27）と言わされたお方です。しかし、反キリストも悪魔が装つたにせキリストとして、大きな力を振るうことができるのです。神のキリストがその権威を明らかにされ

る前に、悪魔のにせキリストが力を現わすことになります。反キリストは、意識して、悪魔の力の提供を受け入れたのです。

悪魔は：言った。「もしひれ伏して私を挙めなら、これを全部あなたに差し上げましょう。

（マタイ 4・9）

反キリストはイエス様が試みの時に退けられた、その悪しき権力のすべてを受け入れるのです。

悪魔は：こう言つた。「この、国々のいつさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。」

（ルカ 4・6）

反キリストの特徴を、パウロは「不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、…」（Ⅱテサロニケ2・9）と記しています。神がキリストを遣わしたように、悪魔である竜は反キリストを遣わすのです。反キリストを通して悪魔はその力を打ち建てようとするのです。

「それゆえ、天とその中に住む者たち。喜びなさい。しかし、地と海とには、わざわいが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒つて、そこに下つたからである。」

（黙示 12・12）

悪魔の怒りは力と権力の中に現われてきます。しかし、この力と権力は、天から落とされた無力な悪魔の力にすぎません。

黙示録6章において、私たちは、反キリストの現われについてすでに学んできました。その時は、古いローマ帝国が再興される時であり、反キリストは平和の神として馬に乗つて現われるのです。

この反キリストを、ダニエルは三つの違つた言葉で記しました。一つは、ダニエル書7章7節にある「その後また、私が夜の幻を見ていると、突然、第四の獸が現われた。」です。反キリストは「第四の獸」です。二つめは、ダニエル書2章40節、「第四の國は鐵のように強い國です」です。反キリストは「第四の帝国」です。さらにダニエル書9章26、27節には、「やがて来るべき君主」とあります。反キリストは来るべき「君主」でもあります。

反キリストの時代の國はまた、ダニエル書2章33節で「鐵と粘土でできたすね」として記されています。鉄と粘土とは混ぜ合わせることができません。その時代の十の國々も、互いに何の關係も持つことのできない國々なのです。

さらにこの時代には、一人の権力者が立てられ、悪魔はこの支配者にすべての知恵と権力を与えます。反キリストは絶対的な独裁者になるのです。反キリストは永遠の統一國家を目指して國々を集めようとしますが、その支配の期間はわずか七年間だけで終ります。そしてこの期間は、反キリストの意志だけが働く時代です。その國の國民は、あらゆる自由を抑圧されることになります。すべてのものが、反キリストの支配の下に置かれるのです。人々は、反キリストの許可を

受けることなく、売ることも、買うこともできなくなります。

黙示録では、反キリストが権威を「与えられた」という表現がよく出でています。

この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十一か月間活動する権威を与えられた。

(黙示 13・5)

彼はまた聖徒たちに戦いをいどんに打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語を国民を支配する権威を与えられた。

(黙示 13・7)

また、あの獣の前で行なうことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るよう、地上に住む人々に命じた。それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえもできるようにして、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。

(黙示 13・14、15)

それは、悪魔から反キリストに力が「与えられた」ことを意味しています。しかし、その悪魔でさえもつながれた犬のようであり、神には近づくことができません。悪魔は、ただ限られた力、限られた自由しか持っていないのです。

4 打ち殺され、直った頭

四番目の特徴は3節にあるとおり、「その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われた」反キリストの「致命的な傷が直つてしまつた」ということです。反キリストの頭の一つは攻撃を受けて一度は打ち殺されます。全世界はそのことによつて恐れます。しかし、反キリストは再び「致命的な傷も直り」、生き返らされるのです。

イエス様について私たちは、「イエス様がほふられた小羊」であり、「よみがえられた」ということを知つてゐるのですが、この点においても、悪魔は神をまねようとします。そして神をまねながら、反キリストはそれを隠して、「イエス様は死に、よみがえらず、世界はますます悪くなつた」と言いふらし、その上で「世界を良くするものは、自分である」と主張します。反キリストの見せかけの、仮の復活を見て、多くの者が悪魔を信じるようになるのです。

多くの人は、奇蹟をなすのは神だけであると信じています。しかし、悪魔もまた、奇跡を行ないます。多くの人々はその時、反キリストの仮の復活によつて、世界の支配権が神から反キリストに移されたと思ひこむのです。

反キリストの「致命的な傷が直つた」というそのことが、反キリストの礼拝の根拠になります。反キリストは「致命的な傷を与えられ」ますが、悪魔によつて復活させられるのです。そして多くの者が彼を信じるようになります。

今からまもなく起ころうとしていることは、ローマ帝国の復興とでもいへばきことではないかと思われます。それを知る意味で、簡単に古代ローマ帝国の歴史に触れておきたいと思います。紀元前一四六年にローマ帝国はコリントを滅ぼしました。これによつて、ギリシャ帝国は滅び

たのです。そして紀元三九五年に、東西ローマ帝国が分裂し、東ローマ帝国と西ローマ帝国が生まれました。紀元四七六年に、西ローマ帝国はオドアケルによって滅ぼされました。一四五三年に、東ローマ帝国はトルコによって滅ぼされました。

私がその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があつた。

(ダニエル 7・8)

十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らのあとに、もうひとりの王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。

(ダニエル 7・24)

ダニエル7章8節、24節によると、十の国とともに一つの小さな国が、つまり一つの角が起つことがあります。この一つの国は三つの王国を滅ぼします。十の國の中から、七つの國だけが残されるのです。ダニエル書におけるこの國、この小さな角は、默示録における「海からの獸」に相当します。パウロによれば、この海からの獸は罪の人間、不法の人なのです。

彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。私がまだあなたがたのところにいたとき、これらのことによく話しておいたのを思い出しませんか。あなたがたが知っているとおり、彼がその定められた時に現われるようになると、いま引き止めているものがあ

るのです。不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があつて、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人々が現われますが、主は御口の息をもつて彼を殺し、来臨の輝きをもつて滅ぼしてしまわれます。

(IIテサロニケ2・4～8)

5 獣と竜への礼拝

五番目の特徴は、13章4節にある、「獣と竜とが礼拝される」ということです。

反キリストが死から復活することによって、人々は反キリストの力を否定できなくなります。人々は実は悪魔を拝んでいるとは知らずに、反キリストを礼拝することになります。反キリストの国は、ちょっと見ると、比べるものがない、永遠のように見え、まさに神の国のように見えるのです。ですから、「だれがこの獣に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう。」と言われるようになるのです。

真の礼拝、正しい礼拝へと人々を導くものは、「だれがまことの主に比べられるでしょうか。」という問い合わせです。ミカエルという名は、「誰が神に等しいか」という意味です。

わが神、主よ。あなたがなさつた奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語つても、それは多くて述べ尽くせません。ん。

(詩篇 40・5)

さて、天に戦いが起こつて、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦つた。それで、竜との使いたちは応戦したが、勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなつた。

(默示 12・7、8)

しかしこの4節では、まことの神ではなく、獸が礼拝されていきます。ここで、惡魔は最後の切り札を出したのです。惡魔は、そのすべての力を反キリストに与えました。

イエス様を信じる人々は世の光であり、地の塩です。しかしイエス様は、まもなくすべての信者を天に引き上げられます。それとともに、やみがこの地上をおおい隠すのです。人々はめくらとなり、反キリストをもつて、惡魔の力をもつて、平和の国を建設しようとします。しかしノアの洪水の前の時代のように、事態はますます悪くなるのです。

教会の携挙によって、信者は神のさばきの座に立たされます。この時惡魔は、信者たちを訴えようとします。しかし、惡魔は神によつて追放されます。

地上では、惡魔はイスラエルの残りの者たちの上に、その怒りをもたらします。すべての人気が、反キリストを礼拝する時は、それは「荒らす憎むべき者が聖なる所に立つ」時です。反キリストを拝まない者は殺されます。この礼拝は決して心からのものではなく、人々の恐れから出てくるものです。

その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われたが、その致命的な傷も直つてしまつた。そこで、全地は驚いて、その獸に従い、そして、竜を拝んだ。獸に権威を与えたのが竜だ

からである。

(黙示 13・3、4)

人は心からの愛によつて反キリストの前にひざまずくのではなく、ただ恐れの心からひざまずくのです。反キリストを礼拝する者は、悪魔の前にひざをかがめる者です。そして、誰もあえて反対しようとしなくなります。獸ほどに強いものはいないからです。これによつて、獸はいつわりであります。全世界が反キリストをほめたたえます。反キリストはいつわりの平和と復活とを約束します。そしてすべての者が、それを信じてしまうのです。全世界は今すでに、このような統一国家をもたらす一人の強力な人物を待ち望んでいるのではないでしようか。人々は、愛と光であるまことの神を退けて、いつわりと殺人者である反キリストを拝むようになるのです。

6 けがし」とを言う口

六番目の特徴として、13章5節にあるとおり、獸に「こう慢なことを言い、けがし」とを言う」口が与えられています。

私がその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来ましたが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があつた。

(ダニエル 7・8)

ごく慢なことを言うのは、まことの神を低くすることです。反キリストは世界に活発な宣伝をして人々を惑わします。巨大資本による世界の経済支配とか、大自然の改造計画とかが、人間の知恵と力に頼つて行なわれます。神聖なもの汚れたものに変えることは、きわめて簡単なことです。これが、終わりの時代の特徴の一つです。

反キリストは、自己の力が限られていることを知っています。それでも悪魔は、神の地位につけようとします。反キリストは、「神はない」と言います。反キリストは「ごく慢なだけでなく、神からその栄光を奪い取る者です。なぜ、反キリストにこのような力が与えられるのでしょうか。それはイスラエルの民が栄光へと成長するためであり、また反キリストを挙げる者たちがさばきに向かって成熟するためです。

さばきを通して、人間の心のなかにあるものが明るみに出されます。イスラエルの残りの者たちは、火の炉の中へ投げ込まれなければなりません。それを通して、銀から「かなかす」が取り除けられるのです。

「見よ。わたしはあなたを練つたが、銀の場合とは違う。わたしは悩みの炉であなたを試みた。」

(イザヤ 48・10)

しかし、反キリストを挙げる者は、まことの神でない者を自分の礼拝対象とするのですから、あらゆる苦しみを味わなればなりません。反キリストによって立てられるこの統一国家では、国民は自由で独立していると思つているかもしれません。しかし実際は、この国は悪魔に支配され、

そしてまた生けるまことの神によつても支配されているのです。反キリストは神が許されることしかすることができます。神が悪魔と人間にこのようなことを許されるのは、すべての人々の前に、「神から離れて自己」の目的を追求することは、結局、破滅におちいる」ということを明らかに示されるためです。

現代人と悪靈とは、この世を「まことの神なし」で楽園にしようとしています。しかし、この目標こそが、破局への道になるのです。

7 限られた期間

七番目の特徴は、反キリストは、神によつてあらゆる力を与えられてはいますが、5節にありますとおり、その期間は限られていることです。四十二カ月の間、この獸はけがしごとを言うことができますが、それ以上の期間は許されていません。主なる神は四十二カ月間だけは悪魔に害を加えないという約束を与えておられるのです。つまり、反キリストの國はほんのわずかな期間しか継続しないのです。

默示録13章の2節には、「竜はこの獸に、自分の力と位と大きな権威とを与えた」と書いてあります。5節と7節には、「神が与えられた」という表現が出てきます。終わりの時代には、世界の真の支配権は悪魔ではなく、まことの神にあるのです。神は悪魔に自由にふるまわせますが、それは決して神の許しの範囲を出ることはできません。主なる神こそが世界の真の支配者なのです。すべては神にかかりています。神ご自身が、悪魔の時を定めておられるのです。

この終わりの時代の国は、ローマ人への手紙13章に出てくるような神に仕える国ではありません。この国はダニエル7章の23節と黙示録13章によりますと、神に対しては独立した国家です。というのは、この国は、「私は神であり、すべてのものは私に属している」と言うからです。この国は、つまりこの国の支配者である反キリストは、人間が何をしてよいか、何をしてはいけないかを決定するのです。

8 ののしり

八番目の特徴は、6節あるとおり、この獣は「神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たち」をののしります。反キリストは思い上がり、その思い上がりの結果がののしりとなつたのです。それまでは、地上のものを神聖なものに見せかけることが行なわれていたのですが、これから後は、神聖なものを下へ引きずり落とすことが行なわれるようになります。反キリストははじめのうちは「すべて目に見えるものは永遠のものである」と言い、すべての人は、その見えるものにすがりつくようになるのですが、その後反キリストは、「見えないものをけがし、ののしる」ようになるのです。

神の栄光をけがることは、神を意識的にののしることになります。人間は神のようになろうとしますが、神は神ですから、人間は神のようにはなれないのです。

ニーチェはかつて、「もし神がいるなら、私は神になる」と言いました。人は生けるまことの神に對して何もすることができないので、「神はない」と簡単に否定するのです。

ののしりには、三つがあります。その三つとは、まず「神に向けられ」、「幕屋に向けられ」つまり神のすみかに向けられ、そして「天にいる人々、特に引き上げられた教会に向けられ」ののしりです。見えない世界を確信している人々は、反キリストによって滅ぼされます。人間はこの世にのみ存在すると言われるようになるのです。全知全能の神も幻であると言われるようになります。

9 表面的な勝利

九番目の特徴は、13章7節のあるとおり、反キリストが「聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許された」ということです。この7節をダニエル書7章の21節、「その角は、聖徒たちに戦いをいどんで、彼らに打ち勝つた。」と比較することができます。ダニエル書における「聖徒たち」は、イスラエルの残りの者たちですが、黙示録においても「聖徒たち」は、同じように、イスラエルの残りの者たちと呼ばれています。

ダニエル書の7章の8節にある「小さな角」の支配の期間も、黙示録の獸の支配の期間と同じようになつて三つに共通している点は、角も獸も、神をののしるということです。

彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。

(ダニエル 7:25)

反キリストは、聖徒たちに打ち勝つ力を神から与えられます。反キリストは、聖徒たちに打ち勝つて、聖徒たちが国家の裏切り者であり、宗教の敵であるときめつけます。そして反キリストの勝利こそが神のさばきだと称するのです。

しかしこの勝利は、ただ表面的なものであり、内面的には、反キリストは聖徒に対して何をすることもできません。まことの神、主を信じるユダヤ人は権利を持たず、祖国を失う者となります。表面的には、あたかも反キリストが、あらゆることについて勝利者となるかのように見えるのです。

しかし、11章3節に出てくる「ふたりの証人」は、反キリストにとって、不安の根元となります。この「ふたりの証人」は、まことの神が生きておられることを思い出させる拠りどころとなります。神は、このふたりの証人のうえに手をおいて、ふたりを守り、悪魔はこのふたりの証人に対して何もできないのです。この大きな苦難の時に、主を信じるユダヤ人たちは、絶え間なく主を呼び求めるようになります。

ルカによる福音書の18章1節から8節までのたとえ話、「神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。」は、終わりの時代におけるイスラエル人に対して、励ましとして語られたみことばです。そしてこのたとえ話の終わりに、イエス様は「このような忍耐と信仰とが地上で見られるでしょうか。」と語つておられます。

詩篇79篇のみことばもまた、成就されます。

神よ。国々は、ご自身のものである地に侵入し、あなたの聖なる宮をけがし、エルサレムを廃墟としました。主よ。いつまででしょうか。あなたは、いつまでもお怒りなのでしょうか。いつまで、あなたのねたみは火のように燃えるのでしょうか。私たちの救いの神よ。御名の栄光のために、私たちを助けてください。御名のために、私たちを救い出し、私たちの罪をお赦しください。そうすれば、あなたの民、あなたの牧場の羊である私たちは、とこしまで、あなたに感謝し、代々限りなくあなたの誉れを語り告げましょう。

(詩篇 79・1、5、9、13)

主に属するユダヤ人たちが苦難の火の炉に投げ込まれるとき、信仰のない人々は喜ぶのです。

悪者は高慢を顔に表わして、神を尋ね求めない。その思いは、「神はない。」の一言に尽きる。彼は心の中で言う。「神は忘れている。顔を隠している。彼は決して見はないのだ。」

(詩篇 10・4、10)

反キリストは聖徒たちをどのような目にも会わせることができます、ただ、彼らをイエス様から引き離すことだけはできないのです。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によつて、これらすべてのことの中にあつても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御

使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

(ローマ 8・37～39)

聖徒たちは、たとえ殺されても、その死を克服することができるのです。それは聖徒たちの力によるのではなく、パウロの言う「神の愛であり」、ヨハネの言う「イエス様の血」です。

「兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝つた。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかつた。」

(黙示 12・11)

反キリストは、羊の皮をかぶついていても獸です。そして、野獸のように憐れみを持たないのです。反キリストはその支配の初めにはイスラエルの民と契約を結びます。しかし、イスラエルの民が彼を押もうとしない時に、反キリストはその契約を破るので。「ふたりの証人」と「忠実なイスラエルの民」とは、反キリストに立ち向かうのです。「ふたりの証人」が引き上げられた後で、多くの殉教者がでます。誰でも反キリストに従わない者は、大きな苦しみを受けます。

10 反キリストの支配の時

十番目の特徴は、7節、8節にあるとおり、生ける神が反キリストに「あらゆる民族、国民を支配する権威を与えたされた」こと、「小羊のいのち書に、世の初めからその名の書きしるされてい

ない者はみな、彼を拝むようになる」ことです。すべての国民は一つにされ、神に逆らいます。すべての国民が反キリストの礼拝を強制されるのです。

今までにも多くの独裁者たちが世界支配を望んできたのですが、いまだにそれを達成した者はありません。ここにおいて、反キリストが初めて世界支配を確立し、そしていわゆる世界平和なるものを実現します。今や戦いは止み、敵対する者もおらず、世界に見せかけの平和が訪れます。経済は発展し、休暇は増え、人々は世界各地に旅行し、楽しみが増えます。人間の住宅問題も食料問題も、すべていい方向に向かうかのように見えます。そしてそこでは、家族を思いやる人、結婚の相手への誠実などはかえりみられなくなり、それらのものは、自由ほん放と肉的な愛にとつて代えられるのです。

反キリストの支配は、今までのすべての支配にまさり、反キリストの知恵は今までのすべての知恵にまさっていると思われるようになります。これを認めない者は愚かな人々と言われ、反キリストを尊敬しない者は犯罪者ときめつけられます。ただ、少数の者だけが、この時代の中で異なった思いを抱きます。そういうた人々は捕らえられて収容所に入れられます。彼らは、国家の敵であり、進歩に対する敵であると言われるのです。

ただ、キリストの血によつて贖われ、キリストの靈に満たされている者だけが、このようなまやかしを見破り、これに抵抗することができます。このようにして、「いのちの書に名前がしるされている者だけが、神の所有とされた者」であることが明らかになるのです。

地に住む者で、ほぶられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされて

いない者はみな、彼を拝むようになる。

(黙示 13・8)

この默示録13章の8節に対しても、二つの解釈がありますが、いずれも大切な真理を含んでいます。

まずこの8節は、エペソ人への手紙の1章4節と比較することができます。
すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、
傷のない者にしようとされました。

(エペソ 1・4)

世界の基の置かれるまえに、私たちはイエス様によって選ばれたのです。やがて再興されるローマ帝国の竜、つまり悪魔も、この書に名前がしるされている者たちを神の御手から奪い去ること
ができないのです。

また私たちは黙示録13章8節を、ペテロ第一の手紙の1章19、20節と比較することができます。
傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。キリストは、世
の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われて
くださいました。

(Iペテロ 1・19、20)

世の始まる前から知られていた小羊、イエス様のことがここに記されています。このみことば
によつて、私たちは小羊の愛が世界の始まる前から存在したことを知ることができます。人間の

創造の以前から、神の贖いのご計画は存在したのです。

2 いのちの書に名前がしるされて いる人々

黙示録の主な主題は、「礼拝」です。その礼拝は、「小羊イエス様に対する礼拝」であるか、「獸に対する礼拝」であるかのいずれかです。「いのちの書に名前がしるされていない者」は、みな獸を拝むようになるのです。しかし、それは悪魔に強制された礼拝です。

しかし、「いのちの書に名前がしるされた人々」は、絶えず心からまことの神を礼拝します。

彼らは、新しい歌を歌つて言つた。「あなたは、巻き物を受け取つて、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、國民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」

(黙示 5・9、10)

いのちの書は、ほふられた小羊の書です。小羊の書は小羊の中に現わされた神の愛の書です。この神の愛は、人類の歴史よりもなお古いのです。この神の愛は十字架で明らかにされました。それゆえ、パウロはイエス様の十字架を喜んだのです。

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあつてはなりません。この十字架によつて、世界は私に対し十字架につけられ、私も世界に

対して十字架につけられたのです。

(ガラテヤ 6・14)

「いのちの書に名前がしるされている者」は、反キリストの足元にひれ伏すことなく、イエス様の血によって悪魔に打ち勝つのです。

「兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかつた。」

(黙示 12・11)

私たちがイエス様に固く結び合わされたのは、主の単なる思いつきではなくて、「世の始まる前」から、定められていたご計画であるということは、すばらしい事実です。イエス様との交わりは永遠の交わりです。それは、誰によつても破られることのない交わりです。何が起ころうとも、イエス様は私たちに対しても眞実なお方なのです。

最後に9、10節について考えてみましょう。

耳のある者は聞きなさい。とりこになるべき者は、とりこにされて行く。剣で殺す者は、自分も剣で殺されなければならない。ここに聖徒の忍耐と信仰がある。

(黙示 13・9、10)

この9節と10節は大変重要な、終わりの時代にある信者たちへの警告の言葉です。ヨハネは信者がこの言葉を深く受け取るようにと、望んだのです。ヨハネは、ドミティアヌス帝が「自らを

神として崇めよ」と命令した時代に生きていました。当時の多くの人々はこの命令を聞いて驚きました。また他の人々は、皇帝を神として崇めることは、たいした問題ではないと考えました。彼らは皇帝の命令が大変なことを意味しているにもかかわらず、そのありさえしていれば何とかなるのではないかと考えたのです。

しかし、9節と10節は、終わりの世に向けられて語られた大切な言葉です。ヨハネは、この皇帝の命じることがそう簡単なものではなく、実は大変なことであると、はつきり語ったのです。ヨハネは、ここで、逃れることのできない殉教の道を預言しました。そして、この9節と10節の言葉は、その当時の信者にとって大きな力となつたのです。この時代の信者たちは皇帝の命令や迫害に対して取り乱すことなく、自分の力に頼ることをしないで信仰を守つたのです。

イエス・キリストに忠実に従つた者は、二つの試みに出会うようになります。

まず、主に忠実な人々は、敵との戦いに陥ります。この時、主なる神に頼らずに、「自分の力」で戦おうとする誘惑に陥りがちです。イエス様に従う者は、このような理不尽な命令や圧迫に怒りを覚え、周囲の迫害や抵抗に自分の力で戦おうとします。

しかし、このように自己の力で戦おうと試みることは、神に頼らないことです。自分の力や考えに頼つて抵抗することは、一見男らしいことのように思われますが、これはこの世のやり方です。この世に対しては、この世の方法で戦うべきだという考えは間違いで、人間によって組織された抵抗を行なうことは、小羊の道ではありません。

主イエス様は、ほふられる小羊のように引かれてゆき、ご自身を神に捧げられたのです。外面

的には、すべては敗北したように見えたのですが、この方法によつてイエス様は勝利を得られたのです。そして、このことを通して、イエス様は信者がとるべき道を示されたのです。力や考えによつてではなく、人は「忍耐と信仰」によつて勝利を獲得するのです。これが本当の勇気です。信者はイエス様を仰ぎ、イエス様の勝利にあざかることによつて、この道を進むのです。危機がせまつた時、かつてのペテロのように剣を取つて闘うことは誤りです。

すると、イエスといつしょにいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに撃つてかかり、その耳を切り落とした。そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」

（マタイ 26・51、52）

剣は国家にとつては武器であつても、信者の武器にはならないのです。政治と剣は、この世の力です。しかし、神の国の方は、これと異なります。力の道を進む者は、それによつて滅びるのです。悪魔は、信者が自らの力に頼り、自分の手ですべてをしようとする時に、勝利を得るのです。悪魔に勝利するたつた一つの方法は、イエス様に対する従順とイエス様に対する愛です。イエス様の道は小羊の道です。それは、信仰と苦しみと、そして愛の道なのです。悪魔は私たちがこの道を進まないよう誘惑し、試みるのです。

二つめの試み、誘惑の危険は、何もしないでエリヤのようにあきらめてしまうことです。エリヤは死ぬことを祈りました。

自分は荒野への一日の道のりをはいつて行つた。彼は、えにしだの木の陰にすわり、自

分の死を願つて言つた。「主よ。もう十分です。私のいのちを取つてください。私は先祖たちにまさつていませんから。」

(I列王 19・4)

エリヤは、「もう十分だ。私は死を望む」と言つたのです。同じように終わりの時代の信者たちも、きっとあきらめの危険にさらされることでしょう。人々はもはや証しする勇気を失います。エリヤの場合は天使が遣わされ、エリヤは水とパンをもつて励まされました。この励ましを受けて、エリヤは荒野を通つて神の山へ上つたのです。

同じようにイスラエルの残りの者たちも、大きな苦難の時に、水とパンをもつて力づけられることでしあう。水とは忍耐を意味します。迫害や憎しみや苦しみや孤独の中にあって、つぶやくことなく耐えることこそが忍耐です。忍耐とは、すべてを神のものとして、神の御手から受け取ることです。そのことを通して信者は、イエス様のくびきが軽いことを体験するのです。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだつていてるから、あなたがたもわたしのくびきを負つて、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

(マタイ 11・28～30)

忍耐とは、最悪のことを神のものとして受け入れることです。

信仰とは何でしあうか。それは、絶えることのないイエス様への献身であり、また忠実さです。

常にイエス様のもとで重荷を負い、イエス様の勝利を感謝することが信仰です。悪魔の勝利を見ても、イエス様から目を離さないことが信仰です。イエス様はこの世に打ち勝つたお方なのですから。

「わたしがこれらのことあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあつては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝つたのです。」
(ヨハネ 16・33)

イエス様を見上げる者は、この世に打ち勝つのです。

なぜなら、神によつて生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝つた勝利です。

(ヨハネ 5・4)

イエス様を見上げることが、勝利の基となるのです。失望し苦しんだとしても、どのような時にも断念することなく、前進することができるのです。その時私たちは、パウロのように主の勝利を得るのです。

人に知られないようでも、よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、罰せられているようであつても、殺されず、悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。

(IIコリント 6・9、10)





喜びをもって主に仕えよ。(詩篇100・2)





不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。
正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。
光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。 (IIコリント6・14)





喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。

(ローマ12・15)





そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、
交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。
信者となった者たちはみないっしょにいて、
いっさいの物を共有にしていた。 (使徒2・42、44)



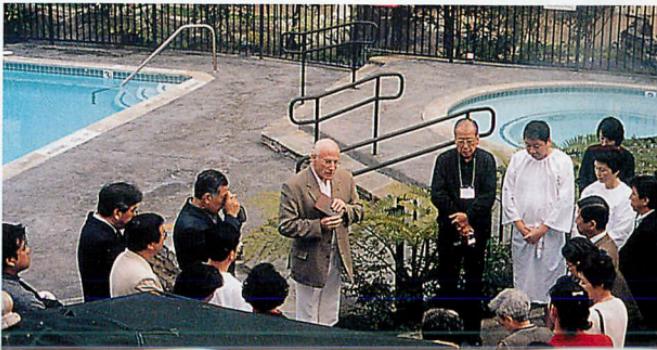


私はいつも、私の前に主を置いた。
主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。
それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。
私の身もまた安らかに住まおう。





あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。
あなたの御前には喜びが満ち、
あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。 (詩篇16・8、9、11)





あなたがたが、最初の日から今日まで、
福音を広めることにあづかって来たことを感謝しています。

(ピリピ1・5)





「わたしがこれらのこととあなたがたに話したのは、
わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、
あなたがたの喜びが満たされるためです。」 (ヨハネ15・11)





よろこびの集い

世界各地で行なわれたキリスト集会「よろこびの集い」の写真集です。





私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、
あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。
私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。

もし私たちが、神と交わりがあると言っているながら、
しかもやみの中を歩んでいるなら、
私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んで
いるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべて
の罪から私たちをきよめます。

(ヨハネ1・3、6、7)

なお、長いこと祈つていた次男の雄治から、手紙が来ました。
それを紹介します。

「お父さん、会社のこと、十五年以來の親友を失つたこと、そして私のこと……、私が心配をかけたことが、がんのきっかけになつてしまつたのではないかと思うと、恐ろしくて、いまさら後悔し謝つただけで済むとは思つていません。今までに、これほど家族をかけがえのないものだと思ったことはありません。私は一生懸命生まれ変わろうと努力しています。こんな勝手なことをしてしまつた私を許してくれてありがとうございます。今まで愛し続けていてくれてありがとうございます。私はお父さんがいなくなつても一生懸命生きていきます。お父さんが言つていた聖書の言葉を、今は素直に読むことができます。自分の誤りに気がつくことができてほんとうによかつたです。お父さんの大きさを知ることができます。お父さんほんとうにごめんなさい。そして、ありがとうございました。」

左から 長男謙太郎さん、賢治さん、長女祐実さん、次男雄治さん、かほるさん



られたことによって失つたものは何もありません。もちろん「孫の顔を見たい」、「子供が結婚するのを見たい」と思います
が、そのようなことは、本当の幸福とは無縁のことです。私はそれらを失つた代償として、大きな大きなものをいただく
ことができたのです。それは「主と共に歩むことができる」という喜びであり、「もうちょうど天国へ行ける」という喜び
です。

ただ「ただけ、本当に悔やまることは、時間はいくらもあつたのに、すばらしい主の福音を、もっと多くの人々に宣べ伝
えることができなかつたことです。自分の周りの人々に、心から主の愛を説こうという気持ちを持たず、すり抜けてきて
しまつた」とを、今後悔しています。

「自分の十字架を負つてわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分の
ものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失つた者は、それを自分のものとします。」

やつとこのみことばの持つ真の意味がわかりました。最近私がよく読んでいるのは次の箇所です。

御靈も花嫁も言う。「来てください。」これを聞くものは、「来てください。」と言いなさい。渴く者は来なさい。いのち
の水がほしい者は、それをただで受けなさい。(黙示 22・17)、「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよ
う。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」(黙示 3・21)
みこころでしたら、あと数カ月、この世で生きなければならないのかもしれません、主が用意してくださつた」計画に
そつて歩んでいけたらと、毎日妻と祈っています。

たくさんのキリスト集会の方々にお祈りいただき、ドイツやアメリカの皆さまにもお祈りいただいたことを、本当に心
から感謝申しあげます。

必ず天国で、イエス様と、皆さまと、共に過ぐすことができるることを確信しております。

べてくださったのでした。

「私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。」（ヨハネ5・20）。

私は今、悲観的になつてゐるわけではありません。あと何日、生きられるかわかりませんが、それは皆さまもいつしよです。それよりも今、この病気を宣告されてから、毎日毎日が本当にすばらしい一日一日であり、今まで生きてきた中で、これほど充実した二ヶ月はありませんでした。新しい一日一日が、すべてが美しく感動的であり、目に見えるもの、耳に聞こえるもの全てが、新しい体験でした。また、家族と過ごす、残された時間も、今までなかつたような中身の濃い時間を過ごさせていただき、心から感謝しています。

主は私に、「主だけを愛し、主のみもとに行くことを願い、礼拝し、真実の祈りを捧げる者に変え、主だけに拠り頼んで生きる者に変えるため」の試練を与えてくださつたのです。私が自分の肉の力ではなく、ただ主の力に頼つて生きるようになるためであり、主の前でへりくだることができるようになるためです。

ですから私は、この病気を与え



次に訪れた試練は会社の危機でした。会社が倒産すれば、大変な「迷惑をおかけすることになります。ですから悩み苦しみ、焦りの日々を過」しました。その時も私は、「何が何でも自分で考え、自分の力で克服しなければ」としていました。主に委ねるのとは正反対でした。「自分の宝は、天にたくわえなさい。」(マタイ 6・20)とありますが、私の宝は地上のものばかりでした。私は主に疑問を投げかけ、聞いたたす者でした。「なぜ」のようなことを私に起こされるのですか」と。それは信仰とは正反対の、サタンの好む考え方です。私は主からいただく試練を素直に受け止めることができなかつたのです。

そして三番目に、同じ会社にいる親友、私の片腕の経理担当常務が、突然心臓発作で倒れ、「亡くなりました。経理、総務関係を任せきつていましたので、想像を絶するバーックでした。」(二)でも私は、主に向かつて「なぜ、どうしてですか」と聞いたたす者でした。

「主は、いつまでも拒まれるのだろうか。もう決して愛してくださらぬのだろうか。主の恵みは、永久に絶たれたのだろうか。」(詩篇 77・7、8)

私は「主よ、なぜお見捨てになるのですか」と尋ねる者でした。

主は私たちが持つてゐるすべてのものの真の所有者であり、それを与え、取り上げる権利を持つお方です。私たちは試練の時、悶々と苦しみますが、聖書のヨブやダビデのようにはいかず、耐えがたい試練の中で混乱し、靈的な危機に陥つてしまします。それがまさに私の姿でした。神を見失い、自分の力で何とかしようと足搔きました。主への不信感が芽生え、期待と夢は幻滅と絶望に取つて代わられました。「主は助けることも、救うこともできるお方なのに、なぜそれを今してくださらないのか」。これは恐ろしいサタンの罠です。

「神様などいない。お前は一人ぼっち。」とささやくのです。

そのようなとき、主は、最終的な試練を、愛をもつてお与えくださいました。それが今回のこの私の病氣でした。自分はどうしようもなく信仰が揺らぎ、サタンの方へと引きずられていた私に、主は、大きな救いの愛の御手を差し伸

一瀬賢治さんは、(株)陽成社とグラネット(株)の取締役社長として活躍しておられましたが、昨年の秋身体に異常が発見され、進行した肝臓がんと診断されました。その二ヶ月後になさった証しをご紹介いたします。なお、賢治さんは、二〇〇一年一月十二日、天に召されました。

必ず天国で、皆さまといつしょに。

一瀬賢治

がんにならることは、私はもちろん周りの方々も考えもしなかったことでした。しかし、実は私は「予想外でのきごと」という気がしたわけでもなかったのです。その頃の私の信仰はあまりにも生ぬるいものでした。この世の欲を追いつづけ、不品行を重ね、闘争し、高ぶり、さばく者でした。かつて私がイエス様を受け入れ救われたのは、自分の傲慢の罪をイエス様に赦していただきためでした。ですから私は「なるほど、主は、こうなさるのか」と思ったのです。

今回の試練には予兆がありました。その一つは、次男の家出でした。その問題を通して、私たち夫婦が本当にサタンと戦つて祈り続けているのか、という問題を、主に突きつけられました。このことを通して、不安定な信仰に対して何度も主から試練をいただき、私たち夫婦が一致するようにと、次々に祈りの課題を与えられました。



抵抗しないで、また絶望しないで、喜びと感謝とをもつて、イエス様の勝利を待ち望むことが大切です。初代教会の信者たちは、忍耐をもつて主の再臨を待ち望みました。そして、彼らは証し人としてイエス様に忠実だったのです。この黙示録の9節と10節は、イスラエルの残りの者たちに警告として与えられた言葉ですが、私たちに対する神からの言葉でもあるのです。私たちも喜びをもつてイエス様を待ち望みましょう。

悪魔の道具、地からの獸とにせ預言者

黙示録13章11節から18節まで

- 1 にせ預言者の十の特徴
 - 1 小羊のような二本の角
 - 2 ものを言う
 - 3 反キリストの権威を持つ
 - 4 獣をあがめる
 - 5 火を天から地に降らせる
 - 6 獣の像を造る
 - 7 像に息を吹き込む
 - 8 ものを言う像
 - 9 像を拌まない者をみな殺させる
 - 10 獣の刻印
- 2 まことの聖靈とにせ預言者

また、私は見た。もう一匹の獸が地から上つて來た。それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言つた。この獸は、最初の獸が持つてゐるすべての權威をその獸の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直つた最初の獸を拝ませた。¹³また、人々の前で、火を天から地に降らせるような大きなしるしを行なつた。¹⁴また、あの獸の前で行なうことを許されたしるしをもつて地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返つたあの獸の像を造るように、地上に住む人々に命じた。¹⁵それから、その獸の像に息を吹き込んで、獸の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獸の像を拝まない者をみな殺させた。¹⁶また、小さい者にも、大きい者にも、富んでいる者にも、貧しい者にも、自由人にも、奴隸にも、すべての人々にその右の手かその額かに、刻印を受けさせた。¹⁷また、その刻印、すなわち、あの獸の名、またはその名の数字を持つてゐる者以外は、だれも、買うことも、売ることもできないようにした。¹⁸ここに知恵がある。思慮のある者はその獸の数字を数えなさい。その数字は人間をさしてゐるからである。その数字は六百六十六である。

(黙示
13・11～18)

私たちは、默示録13章の前半から、反キリストが悪魔の道具だということを見てきました。悪魔は常にその道具を搜しています。主イエス様もまた、ご自分が用いることができる器を、搜しておられます。悪魔の道具にされるか、イエス様の道具になるかは、私たちにかかりています。主はその御目をもつて、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになつてゐる

人々に御力をあらわしてくださるのです。

(II歴代 16・9)

私たちは、反キリストの国家を見てきました。パウロは、ローマ人の手紙の中で、国家の権威は神によって立てられたものだと言いました。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。

(ローマ 13・1)

しかし、終わりの時代には、国家は神のしもべではなく、悪魔のしもべとなります。終わりの時代の国家は、神に帰せられるはずの栄光を、自分のものであると言うのです。

パウロの時代には、国家にはいろいろな問題がありましたが、まだ神のしもべでした。使徒の働きの16、18、19、21、22章には、パウロがその国の議会や法廷に引き出されたことが書いてあります。が、彼は同時に保護されてもいました。また、パウロは次のように言っています。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。支配者を恐ろしいと思うのは、良い行ないをするときではなく、悪を行なうときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行ないなさい。そうすれば、支配者からほめられます。それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行なうな

ら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいなからです。彼は神のしもべであつて、悪を行なう人には怒りをもつて報います。ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです。同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。

(ローマ 13・1～6)

そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。

(イテモテ 2・1)

人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であつても、また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるようには王から遣わされた総督であつても、そうしなさい。というのは、善を行なつて、愚かな人々の無知の口を封じることは、神のみこころだからです。あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実際に用いないで、神の奴隸として用いなさい。すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。

(イペテロ 2・13～17)

私たちは、その当時のローマ帝国の発展の歴史をよく理解しなければなりません。皇帝崇拜は

少しずつ起つてきました。まず、地中海沿岸の各地、ローマの軍隊が来たところで、「正義が来た」と言われるようになりました。ローマの軍隊によって海賊も、強盗も、なくなると思われたからです。ローマ帝国による平和が称えられ、ローマ帝国の安全が伝えられました。ローマの軍隊が来たからにはもう安心だ、と思われました。ローマの精神は大変高いものと考えられました。このローマ帝国に対する感謝から、紀元前一九五年にスミルナでローマの女神に対して神殿が建てられました。これがさらに発展して、紀元前二九年にペルガモで、ローマ皇帝のために神殿が建てられました。このような感謝の表わしかたに対して、最初の皇帝は驚いたのです。

このために、皇帝は特別の許可がない限り、どのような神殿も建ててはならない、という命令を与えました。そして、神殿建造の許可を得るのは大変困難でした。なぜならローマ皇帝は、神殿を建てることは小アジアの習慣であり、眞のローマ人はこのような礼拝の仕方をしないものだと考えていました。

しかし、それでも少しずつこのような神殿が建つて、皇帝を敬うことがローマ帝国の各地で広まるようになりました。やがてローマ皇帝は、このような皇帝礼拝に、特別の価値を見出すようになりました。彼らはこのような皇帝礼拝を通して帝国の統一の強化ができると思うようになります。そして、神殿による皇帝礼拝が皇帝自身によつて命令されるようになつたのです。しかし、初めのうちは皇帝を礼拝することは宗教的な意味よりも政治的な意味が強いものでした。

終わりの時代には、再興されるローマ帝国の皇帝、つまり海から出た獸である反キリストが、前にもまして強く皇帝礼拝を強制します。すべての者は、反キリストを礼拝しなければならないと

言うのです。

ダニエル書の11章の中には、反キリストについての、興味深い記述があります。反キリストは、平和の人として、制限のない約束を与える者、巧言を使う者として、自分を現わしています。ユダヤ人たちは、反キリストと契約を結ぶのです。

　　彼に代わって、ひとりの卑劣な者が起ころる。彼には国の尊厳は与えられないが、彼は不意にやつて来て、巧言を使って国を堅く握る。
（ダニエル 11・21）

しかし反キリストは、その約束を破つてユダヤ人を攻撃するようになります。これは大きな苦難の時の始まりです。

　　彼は、同盟しては、これを欺き、ますます小国の間で勢力を得る。（ダニエル 11・23）

やがて反キリストは、自分自身を神とする礼拝を要求し、すべての神的なものを否定します。この王は、思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高め、大いなるものとし、神の神に向かつてあきれ果てるようなことを語り、憤りが終わるまで榮える。定められていることが、なされるからである。彼は、先祖の神々を心にかけず、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけない。すべてにまさつて自分を大きいものとするからだ。

（ダニエル 11・36、37）

ここでまことの神であるキリストと反キリストの本質を、比較してみましょ。キリストは、上からのものであり、獸は下からのものです。キリストは神との交わりを持ち、神から遣わされたものです。獸はサタンとの交わりを持ち、竜から遣わされたものです。キリストは正義をもつた眞の支配者であり、反キリストは惡魔的な力をもつ独裁者です。キリストの特徴は、十字架と復活の永遠性です。そして、獸はその傷がいつときの間だけいやされるのです。

イエス様は、礼拝を当然受けるべきお方です。反キリストはそれを強制します。イエス様はあらゆる力を常に持つておられます。これに對して反キリストの力は、三年半に限られています。

イエス様はまことの神であり、人を救うために人間の姿をとつて地上に来てくださいました。反キリストは人間であり、自分自身を神とし、人間を滅ぼすのです。

次に私たちは、默示録の11節から18節までを、くわしく見ていきましょう。この箇所で私たちは、惡魔の誘惑の道具を知ることができます。その誘惑の道具とは、地からの獸であり、にせ預言者です。これらは反キリストの教会のかしら、えせ宗教団体の指導者です。

預言者とは何でしようか。それは他の人々のために、主から預かつた言葉だけを語る人のことです。第二の獸、つまり地から出た獸は、默示録の中で三回にわたつて「にせ言者」と呼ばれています。

また、私は竜の口と、獸の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた靈どもが三つ出て来るのを見た。

すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによつて獣の刻印を受けた人々と獣の像を挙げる人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といつしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。

(默示 19・20)

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

(默示 20・10)

これらの「にせ預言者」は、常に反キリストとつながつています。また、「にせ預言者」と反キリストとは、それぞれ異なった人物です。

にせ預言者と反キリストが出て来たところは、同じです。底知れぬ地から、悪魔から出て来たのです。イエス様は、来るべき反キリストだけではなく、来るべきにせ預言者のことも語つておられます。

「にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。」
(マタイ 24・24)

「わたしの名を名のる者が大せい現われ、『私こそキリストだ。』と言つて、多くの人を惑

わすでしょう。」

(マタイ 24・5)

「また、にせ預言者が多く起って、多くの人々を惑わします。」

(マタイ 24・11)

そこで、パロも知恵のある者と呪術者を呼び寄せた。これらのエジプトの呪法師たちもまた彼らの秘術を使って、同じことをした。：しかしエジプトの呪法師たちも彼らの秘術を使って同じことをした。それで、パロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞こうとはしなかった。主の言われたとおりである。

(出エジプト 7・11、22)

1 にせ預言者の十の特徴

私たちは、この「にせ預言者」についても十の特徴を見ることがあります。

1 小羊のような一本の角

黙示録13章11節の後半には、地から上つて来た獸に、「小羊のようない一本の角があり、」と記されています。黙示録の中には、小羊という言葉が二十八回出てきます。小羊とは、イエス様のことです。しかし、ここで出てくる「小羊のようない一本の角」を持った獸、つまりにせ預言者は、イエス様をまねた悪魔の姿です。このにせ預言者は兄弟愛を、また人間愛を強調します。小羊イエス様の特徴は、静かでへりくだり、柔軟なことです。

「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやつて来るが、うちには貪欲な狼です。」
(マタイ 7・15)

にせ預言者の外観もこれに似ています。終わりの時代には、統一された国家権力と同じように、統一された宗教権力が現わされてくるのです。にせ預言者は終わりの時代の教会のかしらです。にせ預言者は光の天使の姿を装つて現われてきます。

こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であつて、キリストの使徒に変装しているのです。しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。
(IIコリント 11・13～15)

2 ものを言う

にせ預言者の特徴は、15節にあるとおり、「獣の像がものを言うことさえもできる」とことです。声は、その人を表わす特徴です。イエス様は、「わたしの羊は、わたしの声を知っている。」と言わされました。

「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。」
(ヨハネ 10・27)

イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ（すなわち、先生）。」とイエスに言つた。

(ヨハネ 20・16)

しかし、悪魔の声は、創世記3章にある蛇の声のように、誘惑の声です。蛇は、「…どんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。…それを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになります。」(創世記3・1、5)と言いました。にせ預言者は、外面的には友好的で協力的に見えます。しかしその心の中は、反キリストの残虐そのものです。話の内容によつて、語る人のほんとうの姿が表わされます。にせ預言者は、真のキリストではなく、反キリストを崇めさせようとします。神の靈ではなく、悪魔の靈が彼の中に宿つてゐるのです。

にせ預言者は、イエス様に対する信頼と従順と獻身とを伝えるのではなく、人に、「自分のことだけを考えて、自分自身を大切にせよ」と教えるのです。人を神から独立させることがこの預言者の目的です。彼は、悪魔のように欺く者です。にせ預言者も聖書のことばを用いますが、それは人を欺くためです。

3 反キリストの權威を持つ

にせ預言者の特徴は、12節から15節にあるとおり、「反キリストの權威を持つ」ということです。12節にある「權威を：働かせる」という言葉は、「神が天と地を創造された」という言葉と同じよ

うに使われています。しかしここでは、神の創造とは逆のことが記されているのです。キリストの力は、神と、神のみことばと、愛と、信仰に基づくものであり、反キリスト、また、にせ預言者の力は、権力と、神から離れた国家に基づくものです。

キリスト者の目的は、神の栄光を現わすことであり、人のたましいが救われることです。にせ預言者の目的は、反キリストを崇めることであり、人を反キリストにつなぎとめることです。

4 獣をあがめる

にせ預言者の特徴は、14節、15節にあるとおり、彼が「獸をあがめる」ということです。

私たちは黙示録のこの部分で、神の三位一体に対する悪魔の模倣を見るることができます。第一に「神に反する」竜、第二に「キリストに反する」海から上つて来た獸、第三に「聖靈に反する」地から上つて来たもう一匹の獸です。

聖靈がキリストを礼拝するように導くのと同じように、地から上つて来た獸は、反キリストを礼拝するように導きます。そして反キリストを礼拝することは、実は悪魔そのものを崇めることになるのです。悪魔は、天を失った後で、地上の礼拝を求めるようになるのです。

イエス様は、悪魔によって「もしひれ伏して私を拝むなら、…」と誘惑された時、ただ、「神である主を拝み、主にだけ仕えよ。」というみことばをもつて、これを退けられました。

イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」

(マタイ 4・10)

かつてローマ帝国がもたらした平和と富の黄金時代は、特に小アジアの各地の祭司たちによつて高く評価されました。祭司たちのかしらには、大祭司がおり、その大祭司は皇帝礼拝を許すとによって教会組織全体を皇帝に従属させたのです。この大祭司は、皇帝がそれにふさわしい礼拝を受けるように特に配慮したのです。

終わりの時代のにせ預言者の目的は、すべての人々の心の中から生けるまことの神に対する信仰を消し去つて、一人の政治的な支配者が、イエス・キリストに代つて立てられるようになるとです。

5 火を天から地に降らせる

にせ預言者の特徴は、13節のあるとおり、「人々の前で、火を天から地に降らせる」ことです。同じことはモーセも、エリヤも、「ふたりの証人」も行ないました。しかし、まことの神への信仰が確かなものとされるための、神の啓示だったのです。

しかし、終わりの時代にこれらのことが起こるのは、反キリストが人々の心を混乱させ、誘惑するためです。

にせ預言者は、大きなしるしと奇跡を行ないます。しかも彼は、エリヤをまねて、「火をもつて答える神がまことの神である」とさう言つてゐます。

「あなたがたは自分たちの神の名を呼べ。私は主の名を呼ばう。そのとき、火をもつて答

える神、その方が神である。」民はみな答えて、「それがよい。」と言つた。(I列王 18・24)

悪魔はまた、ヨブの時代に、次のようなことをしたのです。

この者がまだ話している間に、他のひとりが来て言つた。「神の火が天から下り、羊と若い者たちを焼き尽くしました。私ひとりだけのがれて、お知らせするのです。」

(ヨブ 1・16)

默示録13章13節で、にせ預言者は、11章の「ふたりの証人」の「から火が出たように、天からの火を地に降らせます。悪魔も奇跡を行なうことができるのです。」

「にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民を惑わそうとして、しるしや不思議なことをして見せます。」

(マルコ 13・22)

不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、…。

(IIテサロニケ 2・9)

奇跡というものは、必ずしも生けるまことの神がその背後におられるとは限りません。

「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者がわ

たしに言うでしよう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によつて預言をし、あなたの名によつて悪靈を追い出し、あなたの名によつて奇蹟をたくさん行なつたではありませんか。』

(マタイ 7・21、22)

そこで、パロも知恵のある者と呪術者を呼び寄せた。これらのエジプトの呪法師たちもまた彼らの秘術を使って、同じことをした。彼らがめいめい自分の杖を投げると、それが蛇になつた。しかし、アロンの杖は彼らの杖をのみこんだ。

(出エジプト 7・11、12)

本来、天からの火は、眞実と偽りが区別されるときに、たとえば、カルメル山におけるエリヤの場合のように主が降らされるものです。

「四つのかめに水を満たし、この全焼のいけにえと、このたきぎの上に注げ。」と命じた。ついで「それを二度せよ。」と言つたので、彼らは二度そうした。そのうちに、彼は、「三度せよ。」と言つたので、彼らは三度そうした。水は祭壇の回りに流れ出した。彼はみぞにも水を満たした。ささげ物をささげるころになると、預言者エリヤは進み出て言つた。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことばによつて私がこれらのすべての事を行なつたといふことが、きょう、明らかになりますように。私に答えてください。主よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださる

「ことを知るようにしてください。」すると、主の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまった。民はみな、これを見て、ひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です。」と言つた。

（I列王 18・34～39）

パリサイ人たちがやつて来て、イエスに議論をしけ、天からのしるしを求めた。イエスをためそうとしたのである。

弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言つた。「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましようか。」

（ルカ 9・54）

ところが13章の13節では、にせ預言者が火を天から降らして見せ、あたかも彼の行動の背後に、生ける神が立つておられるかのように見せようとするのです。現代の人々は証拠を見なければ信じようとしません。しかし今の時代は、生ける神のみことばの時代です。神はそのみことばを通して人々を招き、そして働かれるのです。私たちの時代は「見て信じる」時代ではなく、「見ないで信じる」時代です。

情報化時代にますます増えてくる各種のメディアによる映像の氾濫は、人々がただ見ることのみを望んでいる時代であることを表わしています。しかし聖書は、繰り返し神のみことばにのみ

聞くべきことを示しています。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移つているのです。」

(ヨハネ 5・24)

6 獣の像を造る

にせ預言者の特徴は、13章14節、15節にあるように、「獣の像を造る」ということです。これによつて多くの人々は誘惑されます。誘惑は偶像礼拝と関係をもつています。偶像礼拝とは「像を造る」ということであり、主なる神が禁じておられることです。

「あなたは、自分のために、偶像を造つてはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造つてはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、…。」

(出エジプト 20・4、5)

あなたに告げたそのしと不思議が実現して、「さあ、あなたが知らなかつたほかの神々に従い、これに仕えよう。」と言つても、その預言者、夢見る者のことばに従つてはならない。あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、

あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。あなたがたの神、主に従つて歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならぬ。 （申命記 13・2～4）

この「像」は、默示録の中で8回出て来ますが、いずれも神をののしるものであるとされます。また、聖書の他の箇所でも、同じことが記されています。

彼の軍隊は立ち上がり、聖所ととりでを汚し、常供のささげ物を取り除き、荒らす忌むべきものを据える。

（ダニエル 11・31）

常供のささげ物が取り除かれ、荒らす忌むべきものが据えられる時から千二百九十日がある。

（ダニエル 12・11）

「それゆえ、預言者ダニエルによつて語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、（読者はよく読み取るよう）。」

（マタイ 24・15）

彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。 （IIテサロニケ 2・4）

反キリストの像を造るということは、神に帰すべき栄光を反キリストに与えるということです。ネブカデネザル王は自らの像を造らせ、これを拝まない者を火の炉の中に投げ込みました。ダニエルの三人の友だちは、偶像の礼拝を拒否するという大きな信仰の試練を耐え抜きました。彼らは主に守られて、炉の中で燃えることがありませんでした。神の命令は、「神のみを礼拝し、獸を礼拝するな」ということです。

彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

（黙示 14・7）

彼らは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立つていて、こう言います。「わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。あなたのさばきは、一瞬のうちに来た。」

（黙示 18・10）

すると、彼は私に言った。「やめなさい。私は、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書のことばを堅く守る人々と同じしもべです。神を拝みなさい。」（黙示 22・9）

7 像に息を吹き込む

にせ預言者の特徴は、13章15節にあるとおり、彼が「その像に息を吹きこんだ」つまり悪霊を与えたということです。これより以前の時代では、偶像はいのちのない素材で造られていたにす

ぎません。旧約聖書の預言者たちは、偶像は「見ることもできず、聞くこともできず、口を開くこともできない」と言つたのです。

「偶像を造る者はみな、むなし。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。だが、いつたい、何の役にも立たない神を作り、偶像を鑄たのだろうか。見よ。その信徒たちはみな、恥を見る。それを細工した者が人間にすぎないからだ。彼らはみな集まり、立つがよい。彼らはおののいて共に恥を見る。鉄で細工する者はなたを使い、炭火の上で細工し、金槌でこれを形造り、力ある腕でそれを造る。彼も腹がすくと力がなくなり、水を飲まないと疲れてしまう。木で細工する者は、測りなわで測り、朱で輪郭をとり、かんなで削り、コンパスで線を引き、人の形に造り、人間の美しい姿に仕上げて、神殿に安置する。彼は杉の木を切り、あるいはうばめがしや櫻の木を選んで、林の木の中で自分のために育てる。また、月桂樹を植えると、大雨が育てる。それは人間のたきぎになり、人はそのいくらかを取つて暖まり、また、これを燃やしてパンを焼く。また、これで神を造つて拝み、それを偶像に仕立てて、これにひれ伏す。その半分は火に燃やし、その半分で肉を食べ、あぶり肉をあぶつて満腹する。また、暖まって、「ああ、暖まつた。熱くなつた。」と言う。その残りで神を造り、自分の偶像とし、それにひれ伏して拝み、それに祈つて、「私を救つてください。あなたは私の神だから。」と言う。彼らは知りもせず、悟りもしない。彼らの目は固くふさがつて見ることもできず、彼らの心もふさがつて悟ることもできない。彼らは考

えてもみず、知識も英知もないで、『私は、その半分を火に燃やし、その炭火でパンを焼き、肉をあぶって食べた。その残りで忌みきらうべき物を造り、木の切れ端の前にひれ伏すのだろうか。』とさえ言わない。灰にあこがれる者の心は欺かれ、惑わされて、自分を救い出すことができず、『私の右の手には偽りがないのだろうか。』とさえ言わない。』

(イザヤ 44・9～20)

彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。口があつても語れず、目があつても見えない。

(詩篇 115・4、5)

「國々の民のならわしはむなしいからだ。それは、林から切り出された木、木工^{ムジ}が、なたで造った物にすぎない。それは銀と金で飾られ、釘や、槌で、動かないように打ちつけられる。それは、きゅうり畠のかかしのようで、ものも言えず、歩けないので、いちいち運んでやらなければならぬ。そんな物を恐れるな。わざわいも幸いも下せないからだ。」

(エレミヤ 10・3～5)

主が声を出すと、水のざわめきが天に起る。主は地の果てから雲を上らせ、雨のためにいなすまを造り、その倉から風を出される。すべての人間は愚かで無知だ。すべての金細工人は、偶像のために恥を見る。その鑄た像は偽りで、その中に息がないからだ。それ

は、むなしいもの、物笑いの種だ。刑罰の時に、それらは滅びる。（エレミヤ 10・13～15）

これらの災害によつて殺されずに残つた人々は、その手のわざを悔い改めないで、悪靈どもや、金、銀、銅、石、木で造られた、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝み続け、その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを悔い改めなかつた。

（黙示 9・20、21）

しかし、默示録13章の15節では、獸の像の中に悪魔の力が働きます。にせ預言者は、自分も反キリストとともに、神から遣わされていたのだと証明しようとしたのです。そしてこの像は、エルサレムの神殿の中に造られるのです。

彼は一週間の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。

（ダニエル 9・27）

そして、ユダヤ人たちは、この像を拝むように強制されるのです。

8 もの言う像

にせ預言者の特徴は、15節にあるとおり、獸の像がものを言うことができるようになしたことで

す。のことによつて、この像は地上に住む人々の礼拝を受けただけではなくて、「地上を超えた力」をも現わすようになりました。見えるものを崇めさせることを通して、悪魔はその力を現わすのです。

この獸の像は、新しい理想や思想を言いふらします。そして、新しい未来社会への考え方を宣伝しますが、実はそれは惡靈からくるものにほかなりません。多くの大衆がその考え方のとりこになつてしまします。テレビやインターネットを通して人々が無意識のうちに、獸自身を礼拝するようになり、強制されるようになる可能性は大きいのです。

9 像を拝まない者をみな殺させる

にせ預言者の特徴は、15節の後半にあるように、彼が像を拝まない者をみな殺させる、ということです。このような時代が来たとき、かつてのダニエルや、エリヤの時代と同じように、バアルの前に、つまり像の前にひざをかがめない人々が出てくることでしょう。その結果、多くの人々が、国家の敵として、殺され、殉教の死を遂げることになると思われます。

にせ預言者が行なう宣伝の中、心は、反キリストを礼拝させようとすることです。にせ預言者は、おもに三つの点をついてきます。第一は獸の傷、第二は獸の傷のいやし、第三は獸のすばらしさを強調することです。これらのこととは、私たちにイエス様の十字架における死と、イエス様の復活と、イエス様が天に高く引き上げられたことを思い起させます。

聖靈の目的は、イエス様の十字架と復活と昇天とに人々の心の目が開かれて、イエス様の御名

だけがたたえられるようになることです。

悪魔の目的は、にせ預言者にあらゆる力を与えて、獣の像が崇められるように人々を誘うことになります。天からの火、傷のいやし、そして、獣の像がものを言うということ、これらのことを通して、多くの人々が、獣の像のもとへと引き寄せられるのです。

10 獣の刻印

にせ預言者の特徴は、16節にあるとおり、彼が「刻印を受けさせる」ことです。刻印を受けていない者は、仕事も財産も奪われてしまいます。この刻印を持たない者は、のけ者とされ、異端者とされ、国外へと追放されてしまうのです。

ヒットラーの時代には、その党員は、腕にヒットラーのしるしである鍵十字をつけ、その帽子にナチのしるしをつけていました。

古代においても人はしるしを持つていました。これによつて人は誰の所有であるかを明らかにしたのです。奴隸は主人のものであり、兵隊は支配者のものであり、そして反キリストのしるしを持つ者は反キリストのもの、つまり、悪魔のものです。

ここに記されているしるしは、それを持つ者が、完全な反キリストの支配下にあることを表わします。このしるしは、默示録7章の2、3節にある、神がそのしもべたちに押される印の完全な模倣です。

また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上つ

て来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまって、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」

(默示 7・2、3)

2 まことの聖靈とにせ預言者

この13章では、小羊の礼拝が反キリストの礼拝に対比されています。獸のしるしを持つ者に救いはありません。獸のしるしを持つことは、意識してイエス様を退けることです。獸のしるしを受け入れることは、悪魔を受け入れ、悪魔に従うことを意味します。

以上のことを簡単にまとめると、次のとおりです。まず、竜は神に反し、第一の獸はキリストに反し、にせ預言者は聖靈に反するのです。

にせ預言者の反キリストに対する関係は、聖靈がキリストに対する関係です。このまことの聖靈とにせ預言者について、七つに分けて簡単に比較して見たいと思います。

まず、イエス様がヨルダン川のほとりでバプテスマを受けられたとき、聖靈が、イエス様に下り、そしてイエス様にとどまったくのです。そして、イエス様はすべてのことを聖靈を通して行なわれました。

こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御靈が鳩のように下つて、自分の上に来られるのをご覧になつた。(マタイ 3・16)

反キリストは、つねに、にせ預言者のもとにとどまり、すべてのことにおいて、にせ預言者が反キリストを助けるのです。

また、私は見た。もう一匹の獸が地から上って来た。それには小羊のような一本の角があり、竜のようにものを言つた。
(黙示 13・11)

次に、聖靈は神の靈です。

神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない靈を私のうちに新しくしてください。私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖靈を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える靈が、私をささえますように。私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。

(詩篇 51・10～13)

にせ預言者の口から出てくるのは、「汚れた靈」です。

また、私は竜の口と、獸の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた靈どもが三つ出て来るのを見た。
(黙示 16・13)

三番目に、聖靈は「真理の靈」であり、すべてを真理に導く靈です。

「しかし、その方、すなわち真理の御靈が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れ

ます。御靈は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」

(ヨハネ 16・13)

にせ預言者の靈は「偽りの靈」であり、誘惑の靈です。

四番目に、聖靈は自分のことを語らないで、イエス様に栄光が帰されることを求める

「御靈はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」

(ヨハネ 16・14)

それに反して、にせ預言者の靈は、反キリストに栄光を帰することを求めるのです。

この獸は、最初の獸が持つていてるすべての權威をその獸の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直つた最初の獸を拝ませた。…また、あの獸の前で行なうこととを許されたしをもつて地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返つたあの獸の像を造るよう、地上に住む人々に命じた。

(黙示 13・12、14)

五番目に、聖靈は、靈とまことをもつてまことの神を礼拝するように導きます。

「しかし、眞の礼拝者たちが靈とまことによつて父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は靈ですから、神を礼拝する者は、靈とまことによつて礼拝しなければなりません。」

(ヨハネ 4・23、24)

にせ預言者の靈は、偶像礼拝へ、反キリストの礼拝へと、多くの人々を導くのです。

六番目に、聖靈は、永遠のいのちを与えます。

「いのちを与えるのは御靈です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、靈であり、またいのちです。」
(ヨハネ 6・63)

「肉によつて生まれた者は肉です。御靈によつて生まれた者は靈です。」(ヨハネ 3・6)

これに対し、にせ預言者は、ただ、滅ぼすことのみを目的とするのです。

：また、その獸の像を拝まない者をみな殺せた。

(黙示 13・15)

七番目に、聖靈は真の一一致をもたらします。

平和のきずなで結ばれて御靈の一一致を熱心に保ちなさい。

(エペソ 4・3)

なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隸も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御靈によつてバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御靈を飲む者とされたからです。

(Iコリント 12・13)

にせ預言者は、強制される、偽りの外面的な一致しか生み出すことができません。

地に住む者で、ほぶられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる。：この獸は、最初の獸が持つてゐるすべての權威をその獸の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直つた最初の獸を拝ませた。

（黙示 13・8、12）

にせ預言者の宗教とはどのようなものでしようか。人間崇拜、人間礼賛、偶像礼拝、良心の抑圧、獸のしるしを持たない者への迫害。にせ預言者はこれらのものをもたらすのです。

最後に、18節の最後にある六百六十六という数字についてに考えて見ましょう。ヨハネは、「その数字は人間をさしている」と言つています。いっぽうで七という数字は完全な数字であつて、神をさすものです。

さらに私は、御座——そこには、四つの生き物がいる。——と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立つてゐるのを見た。これに七つの角と七つの目があつた。その目は、全世界に遣わされた神の七つの御靈である。

（黙示 5・6）

これに対して六という数字は、人間をさします。たとえば、二十四人の長老、十二のイスラエルの部族、一万二千のイスラエル人、十四万四千人の大きな苦難の時に救われるユダヤ人、これらすべては六の倍数であり、それは人間をさしています。

六という数字はまた、七という数字に比較べると不完全な数字です。反キリストは恐るべき力を持ち、全世界を従えて自分に対する礼拝を強制しますが、にもかかわらず反キリストは不完全であり、無力です。ですから反キリストの数字として六という数字が三回繰り返され、「六六六」と記されてているのです。

六百六十六という数字はまた、人間の高ぶりのもつとも高いところを示しています。六という数字は、人間の進歩の最高の段階を示しています。六という数字は、人間の行動の高さ、広さ、深さの三つの次元を表わしています。六という数字は、人間が神のようになりたいという高ぶりを表わしています。したがって、六百六十六という数字は、「人間の進歩の偉大さ」を示していることになります。

しかし実際には、この数字は悪魔が神のようになることが不可能なこと、反キリストがキリストのようになることが不可能なこと、にせ預言者が聖霊のようになることが不可能なことを、表わしています。このようなことから、私たちは「六六六」という数字の中に、悪魔の三位一体を見ることができるのであります。

イスラエルの敵であつたペルシテ人の巨人、ゴリヤテの背の高さにも、六という数字が含まれています。

ときに、ペリシテ人の陣営から、ひとりの代表戦士が出て來た。その名はゴリヤテ、ガテの生まれで、その背の高さは六キュビト半。頭には青銅のかぶとをかぶり、身にはうろことじのよろいを着けていた。

(イサムエル 17:4、5)

ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かって来るが、私は、おまえがなぶつたイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によつて、おまえに立ち向かうのだ。」

(イサムエル 17・45)

ネブカデネザルの建てた像は高さが六十キュビト、幅が六キュビトでした。

ネブカデネザル王は金の像を造つた。その高さは六十キュビト、その幅は六十キュビトであつた。彼はこれをバビロン州のドラの平野に立てた。

(ダニエル 3・1)

パロは六百の戦車をもつて、イスラエル人を追いかけました。

そこでパロは戦車を整え、自分でその軍勢を率い、えり抜きの戦車六百とエジプトの全戦車を、それぞれ補佐官をつけて率いた。主がエジプトの王パロの心をかたくなにされたので、パロはイスラエル人を追跡した。しかしイスラエル人は臆することなく出て行つた。

(出エジプト 14・6～8)

ローマの一軍団は六千人の兵士によつて組織されていました。そしてまた、六十万人のイスラエル人がエジプトを脱出しました。

イスラエル人はラメセスから、スコテに向かつて旅立つた。幼子を除いて、徒步の壮年

の男子は約六十万人。

(出エジプト 12・37)

しかしモーセは申し上げた。「私といつしょにいる民は徒歩の男子だけで六十万です。しかもあなたは、彼らに肉を与え、一月の間食べさせる、と言われます。」(民数記 11・21)

六という数字は啓示の数字です。したがって、六という数字が三回繰り返されているということは、人間の中に何があり、人間が神に等しくなるうとして何を考え、何をするかが啓示されていると言えましょう。

反キリストが、たとえどれだけ偉大なことをなしとげたとしても、反キリストがなしとげることは、神の完全な七という数字に象徴される、神の完全さには到達することができないのです。しかし神は、この超人間的な反キリストを獣であると言われます。反キリストはまた不法の人であり、したがつて彼の数字は六百六十六なのです。

イエスという名前をギリシャ語のアルファベットで計算すると八百八十八(八八八)になります。イエス様は、かつて人となつてこの地上に来られた永遠の神です。イエス様は完全に神に頼りきつたお方でした。イエス様は十字架の死と復活によつて、私たちを罪から贖い出されました。イエス様は新しい創造のかしらです。八という数字は、「新しい創造」の数字です。

六百六十六という数字は、明らかにある人物の名前を隠しています。ヘブライ語や、ギリシャ語には数字ではなく、代りにアルファベットが数字に使われています。ですから当時は、この数字

を使って、逆にある人の名前を伝えました。ただその名前は、数字を解くことのできる人しか理解することができませんでした。

かつてポンペイの遺跡で「私たちは五百四十五という数字の女性を愛する」と記された壁が見つかりました。その人の名前を知っている人にとっては、その数字が理解できたのです。しかし、その名前を知らない者は、その人が誰であるか、見当がつかなかったのです。

ある名前から数字を計算することは簡単ですが、逆に、数字から名前を再び読み解くことは大変困難です。なぜなら、その組み合わせは無限だからです。

この反キリストの数字を多くの人々が解こうとしました。教父であるイレナウスは西暦二百年の人でしたが、この反キリストの数字を解くために大変な努力をしました。しかし、彼ではむしろ、その数字を正確に解くことはできませんでした。彼は、たとえば、「Latainos」という名称を六百六十六という数字から読み解いて、それをローマ帝国だと考えたのです。

また他の人々はこの数字を「Vicarius filii Dei」と解き、「神の子の代わりに遣わされた者」を意味するところから、それがローマ法王をやると考えました。

ボナパルトと云う名前も、六百六十六という数字から読み解くことができるため、当時の人々は、これがナポレオンを指すと考えたのです。

ペブルイ語のアルファベットによつて、「ローマ皇帝」と云ふべきかも、その数字が六百六十六になります。「Kaiser Theos 嘉帝は神である」と云ふべきかも、同じようにその数字は、六百六十六になります。

驚くべきことだ、皇帝ネロや、ムツソリーニ、ヒットラーという名前も、その数字は、六百六十になります。

ヨハネの時代には、ドミティアヌスが支配していました。ドミティアヌスの称号は、「Autokrator Kaisar Domestianos Sebastos Germanikos」でした。しかし、この名前が非常に長いために、その当時のローマの貴族では、これを短くして、「A Kai Domet Seb Ge」と記しました。これも数字におすと六百六十六になります。ドミティアヌスは神の代理人支配者であり、ローマの皇帝でした。ドミティアヌスが自らの唱えた名前は、眞の神、眞の主としたのですが、これは神を汚す言葉です。ドミティアヌスは、自らを神であると宣言し、自らを神として拝むことを定めた最初の皇帝でした。

ヨハネが黙示録という形でパトモスから信者たちに手紙を送ったのは、このドミティアヌスに対する警告だったのかかもしれません。あるいは彼は、当時小アジアで行われていた皇帝礼拝の宗教的指導者であった大祭司のことについて信者に警戒するように伝えたのかもしれません。ドミティアヌスは反キリストの先行者であり、皇帝礼拝の大祭司はにせ預言者の先行者だったのです。現在私たちは、反キリストの名前を知りません。そして、知らないことはそのまま、知らないと言うほうが賀明です。しかしこれは、私たちの贖い主の名前を知っています。それは「イエス・キリスト」です。この名前の前に、天においても、地においても、すべての者がひざをかがめなければならないのです。

それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののす

べてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

イエス様は、きのうもきょうも、また明日も変わらないお方であります。

イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。

(ヘブル 13・8)

救いも、赦しも、すべてこの御名にかかりています。イエス様は私たちのものであり、私たちはイエス様のものです。それは永遠に変わらない確実なことです。それは同時に永遠の栄光を現わしているのです。

24

悪魔の権力と誘惑のなかのなぐさめ

黙示録14章1節から5節まで

1 守られた神の民

1 四つの試練

2 四つのなぐさめ

2 神の民の勝利の歌

3 神の民の生活における救いの実

1 しみのないこと

2 小羊に従うこと

3 神の初穂とされたこと

4 批難されるところがないこと

¹ また私は見た。見よ。小羊がシオンの山の上に立っていた。また小羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とがしるしてあつた。私は天からの声を聞いた。大水の音のようで、また、激しい雷鳴のようであつた。また、私の聞いたその声は、立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあつた。² 彼らは、御座の前と、四つの生き物および長老たちの前とで、新しい歌を歌つた。しかし地上から贖われた十四万四千人のほかには、だれもこの歌を学ぶことができなかつた。³ 彼らは女によつて汚されたことのない人々である。彼らは童貞なのである。彼らは、小羊が行く所には、どこにでもついて行く。彼らは、神および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われたのである。彼らの口には偽りがなかつた。彼らは傷のない者である。

(黙示 14・1～5)

私は、默示録第13章で、終わりの時代における悪魔の二つの道具について学んできました。海から来た第一の獸は反キリストであり、地から来た第二の獸はにせ預言者でした。この二人は、終わりの時代における国家と宗教との指導者です。反キリストは悪魔の権力の道具であり、にせ預言者は悪魔の誘惑の道具です。

これから学ぶ14章1節から5節までのテーマは、「悪魔の権力と誘惑のなかのなぐさめ」です。私は、默示録12章から13章で、悪魔の目的が何であるかを学んできました。そして、悪魔のわざは「神の沈黙」の中で行なわれます。しかし主なる神は、たとえ沈黙しておられても全能

の支配者です。この14章で、私たちは主なる神がご自身の目的を達成されていかれる手順を見ることがあります。そして悪魔のすべての計画は失敗せざるをえないのです。

また14章は、終わりの時代に起こることの概観です。この章では、終わりの時代に起こるべきことが、きわめて簡潔に記されています。そしてこの「べき」とは、15章以下でさらに詳しく見るることができます。つまり14章は、15章以下の要約なのです。

默示録第14章のテーマとしては、ほかにも次のように言うことができるでしょう。「イスラエルの民の中に立つイエス様」「小羊と小羊に属する人々」「小羊のもとに隠されている十四万四千人」「目的への到達」「近づいたイエス様の勝利」「残りの信ずる者たちに対する励まし」「シオの山に立つ小羊と残りの者たち」。

まず1節から5節までを、三つに分けて見ていきましょう。まず1節にある「守られた神の民」、次に2節と3節の「神の民の勝利の歌」、そして4節と5節の「神の民の生活における救いの実」です。

1 守られた神の民

14章1節で、ヨハネは、13章のように獸について見るのではなく、小羊を見て います。「私は見 た。見よ。小羊がシオンの山の上に立つて いた。」とあります。これは、今から未来において、もつとも感動的ですばらしい光景です。

ヨハネは、13章では恐るべきものを見なければなりませんでした。このためヨハネの心はふさ

がれました。しかし14章でこの小羊を見たとき、どれほど大きな安らぎをおぼえたことでしょう。かつて荒野にいた洗礼者のヨハネは、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ1・29)と言いました。

事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。(ヨハネ 6・40)

あなたはもうすでに、神の小羊であるイエス様を知つておられるでしようか。「小羊」という言葉は、私たちの罪に対する神の怒りとさばきとを、身代わりとなつて受けてくださつたイエス様の十字架の犠牲を意味しています。ヨハネもまた、小羊イエス様を見上げ、罪の赦しを体験した一人でした。

わたしたちの目は、何に向けられているでしょうか。

彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。

(詩篇
34・5)

もしあなたの目が、自分自身、あるいは自分の高慢な心に向けられるなら、あなたは劣等感におそれます。もしあなたの目が、自分の周囲の状態に向けられるなら、平安が失われ、心に不安が起こります。しかし小羊イエス様に目が向けられているときには、私たちは確信と喜びと平安とに満たされるのです。

シオンの山に小羊が立つておられるということは、イエス様が反キリストとにせ預言者の二つ

の獸に打ち勝たれたことを意味しています。シオンの山は主が住まわれて支配なさる場所です。シオンの山は小羊イエス様とイエス様に従う人々の住む場所であり、救いと安全の場所です。

あなたがたは、わたしがあながたの神、主であり、わたしの聖なる山、シオンに住むことを知ろう。エルサレムは聖地となり、他国人はもう、そこを通らない。

(ヨエル 3・17)

私たちはこれまで、神が終わりの時代にイスラエルの民を、印と測りざおとをもつて守られることを学んできました。

「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまって、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」

それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立てて、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。」

(黙示 11・1)

女は荒野に逃げた。そこには、千二百六十日の間彼女を養うために、神によつて備えられた場所があつた。しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行つて、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであつた。

(黙示 12・6、14)

シオンの山は、小羊イエス様による守りの場所です。そしてシオンの山は、神の救いにあずかる恵みをも意味しています。

その昔、神の箱をペリシテ人に奪われた大祭司エリの時代、サウルが王となつた後の困難な時代の後、主はダビデを起こされました。ダビデはシオンの山に城を設け、そこからイスラエルの民とともに下つていき、勝利につぐ勝利をおさめました。默示録の14章に示されているように、真的イスラエルの王である主イエス様も、シオンの山でイスラエルの民を守られ、お救いになります。そのときに千年王国が始まるのです。

シオンの山はあらゆる時代を通してイスラエルの民のあこがれの的でした。多くのイスラエルの民がシオンの山に登り、そこで主なる神をたたえ、そして礼拝をささげました。

神が臨在なさるところには、守りと安全があります。シオンは、イエス様が千年王国を支配する場所を置かれるところです。

主はシオンを選び、それを「自分の住みかとして望まれた。「これはどこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから」

（詩篇 132・13、14）

この14章1節に書かれている「十四万四千人」は、すでに7章1節から8節で学んだ「イスラエルの残りの者たち」です。7章において、大きな苦難の時に守られるために十四万四千人に印

が与えられました。この印は、彼らが主の所有物であることを示す目印として与えられたのです。

私たちは、黙示録14章で主が約束を守られることを見出します。なぜなら、神は反キリストの時代を通して彼らを守られたからです。

黙示録14章には、「大きな苦難の時」に続いて起ることが記されています。ヨハネは、大きな苦難の時でのきごとひとつが実際に起こる前に、見ることができたのです。

ヨハネは、十四万四千人が小羊イエス様のもとで守られているのを見ました。彼らの額には小羊の名と小羊の父の名とが記されていました。彼らはもつとも暗い、きびしい時代に、イエス様と主とを告白していたのです。

小羊と主の名が記されていることは、13章16節に書かれている「獸を挾む者に獸の名が刻印される」とことと対立するものです。刻印は単に外見だけではなくそのものの本質も表わします。神の刻印を押された者はイエス様の本質を持つのです。彼らはイエス様と同じ姿に変えられて行くのです。

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。
(ガラテヤ 4・19)

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御靈なる主の働きによるのです。

(Ⅱコリント 3・18)

これに対する獸の刻印を持つことは、意識的に獸を受け入れている者であり、獸の所有物であり、惡魔の本質を持つことを表わしています。

十四万四千人は、大きな苦難の時に、生けるまことの神への眞実を守り、神の証し人となつたのです。そして何者も、苦難の時に彼らに害を加え、損なうことができません。

そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、ただ、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。　（黙示　9・4）

主は三年半の試練の時に、ちょうど火の中のダニエルと三人の友達とを守られたように、彼らを守られます。このことは、私たちに何を語りかけているのでしょうか。

1 四つの試練

終わりの時代に、十四万四千人のユダヤ人が試練に出会うように、私たちも四つの試練に出会います。

一つめの試練として、惡魔や惡魔の道具が单なるまぼろしではなく現実に現われ、苦しみと悩みが襲ってきます。こういう場合には、イエス様をとおして、神が光と平安のうちに天におられるごとを知っていたとしても、自分自身の状態はどこまでも変わらず、みじめで絶望的だと思われる事がしばしば起こります。これが試練であり、こういう時こそ闇と暗黒の中にあってもしつ

かりとイエス様につかまっていることが大切です。人々はイエス様にまつたく見捨てられたように感じるかもしれません。しかし、決して見捨てられてはいいのです。

「主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対しても何ができるでしょう。」

（ヘブル 13・5、6）

二つめに、人々に時に主に守られていないという考えが襲うかも知れません。しかし主は、いかなる困難にあってもイスラエルの民を守り、導くと約束なさつておられます。この約束は、もちろん私たちにも与えられています。

川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。神は夜明け前にこれを助けられる。（詩篇 46・4、5）

しかし実際には、神の助けが見えず、あごが水に沈むように思われることがしばしば起こります。このようなとき、人は誰からも助けてもらえないと思うかもしれません。しかし、これも試練の一つです。

三つめに、人はまったく孤独であると感じことがあるかも知れません。これも、大きな試練です。人はしばしば、信者や未信者から失望させられます。そしてそれによって、深い孤独感を味わうことがあるかもしれません。またあるとき、人は聖徒たちの交わりによって強められるこ

とがなく、逆に彼らの愛のない態度によつてつまずくことがあるかもしれません。このようないい、と思ひこむかもしれません。私たちは自己の無力さを感じ、諦めてしまうかもしれません。私たちは何をやつても無駄であり、すべてが駄目になると想うかもしれません。このようなとき、悪魔は私たちから平安と喜びを奪い取るのです。

このように私たちは、見捨てられ、助けが得られず、孤独で、無力だ、としばしば感じます。このような試練に出会つて駄目になつてしまふ人々が何と多いことでしょうか。

2 四つのなぐさめ

しかしヨハネは、このようなときにまったく違つたものを見ることを許されました。ヨハネは、「四つのなぐさめ」を見出したのです。

まず、一つめに、主は小羊をとおして、自分の民のそば近くにおいでになります。主はその民のまん中におられます。それは目には見えないが、眞実であり、現実です。目に見える世界では試練がおそってきて、みこころとは逆のことが行なわれているように見えるときでも、この眞実と現実はゆるぎません。「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」（マタイ28・20）とイエス様ご自身が言われたとおりなのです。

イエス様は、小羊として私たちの罪を一身に負わされました。十字架のみわざによって、神の怒りは私たちから永遠に取り去られたのです。イエス様を救い主とし、また主として受け入れた人は、もはやイエス様に捨てられる事はありません。またイエス様の守りから外れることも、ひとりぼっちになることもあります。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

(ローマ 8・1)

二つめに、イエス様はご自身に属する者をよくご存知です。その額に主の聖靈の証印を押された人々は、主のすばらしい救いを体験します。エリアはかつて、イゼベルの怒りの前に、誰も助けてくれる者はいないと思いこみました。しかし主は、バアルの前にひざをかがめない七千人の人々が残されていることをはつきりと示されました。黙示録にある十四万四千人のユダヤ人たちもまた、大きな苦しみの日にも、絶望におちいる寸前にそこから救い出されるのです。

三つめに、イエス様は、十四万四千人の人たちとともにシオンの山に立たれます。それは、堅い基礎の上に立つことを意味しています。つまりどのような場合でも、イエス様の完全な守りが与えられるのです。時には、堅い基礎を見出すことができず、悪魔がその基礎を打ち壊してしまったかのように思うことがあるでしょう。しかしイエス様は、「わたしはわたしの教会を建てよう」と約束してくださいます。

わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。

四つめに、神とイエス様の名とが、人々の額にしるされます。人間の知恵や力は試みの前には何の役にもたちませんが、イエス様はご自身の民をご自身のものとして守ってくださいます。イエス様がみ手を伸ばして守つてくださるとき、悪魔は何の力も持ちえません。イエス様に属する者は、神の全能の守りの下に置かれているのです。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。 (ヨハネ 10・28)

2 神の民の勝利の歌

「神の民」とは、ユダヤ人の残りの者のことです。ヨハネは黙示録7章で、十四万四千人のユダヤ人たちの額に証印が押されることによって、戦いに対しての備えがされることを見ました。

そして黙示録14章で、ヨハネは彼らが戦いの後に勝利者となつているのを見るのです。6節に「あらゆる国民、部族、国語、民族」とありますが、これはその時に、ユダヤ人たちがそれぞれの国から自分の国へ帰つて来ることを意味しています。

わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよ

め、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい靈を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの靈をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従つて歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。あなたがたは、わたしがあなたがたの先祖に与えた地に住み、あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。

(エゼキエル 36・24～28)

黙示録の14章1節から3節に出てくる、勝利者たちがシオンの山上で新しい歌を歌う、ということは、彼らがこの地上で「新しい歌を歌う」ということです。イエス様は、エルサレムで十四万四千人の人々とともに千年王国を建設するために再びこの地上に来られ、エルサレムのシオンの山に立たれるのです。また、聖書の別の箇所では、主の足がオリーブ山の上に立つ、とあります。オリーブ山は、シオンの山の近く、その向かい側にあります。

主が出て来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。
(ゼカリヤ 14・3、4)

ああ、イスラエルの救いがシオンから来るようだ。主が、とりこになつた御民を返されるとき、ヤコブは楽しめ。イスラエルは喜べ。

(詩篇
14・7)

まことに、主は、正しい者の道を知つておられる。しかし、悪者の道は滅びうせる。

終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての國々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。主は國々の間をさばき、多くの國々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国に向かつて剣を上げず、一度と戦いのことを習わない。来たれ。ヤコブの家よ。私たちも主の光に歩もう。

(イザヤ 2・2～5)

2節から3節で、力強い歌声が天から響いてきます。その歌は、大きな苦難の日に命を捧げた殉教者たちが御座のまわりで神に捧げている歌です。13章で、ヨハネは獸の像が拝まれているのを見ました。しかしここで殉教者たちが神に捧げる礼拝は、純粹で、清く、敬虔な礼拝です。この歌声は大水が響くように、あるいは多くの稻妻が轟くように力強いものです。

この歌はイエス様の勝利の偉大さと、イエス様の眞実の偉大さへの力強い賛美です。なぜなら彼らに、悩み、苦しみ、悲しみをとおして、イエス様の限りない守りが与えられていたからです。人は苦難をとおして、心をかたくなにするか、心を平安にしてイエスの勝利をほめたたえるようになるかのいずれかになります。「悩みこそ祈りを教える」ということわざがありますが、苦難の

中で心から祈る人は祈りが必ず聞き届けられることを体験し、イエス様の勝利とすばらしさをほめたたえるようになります。

十四万四千人の人々は、声を合わせて歌っています。彼らもまた、苦難をとおして新しい歌を学んだからです。彼らも、御座の周りにいる殉教者と同じように、苦難を通ってきたのです。彼らの心は、主の愛と誠実さに驚き、そして礼拝せざるをえないのです。彼らの礼拝の中に、主に対する喜びがいきいきとしています。彼らは、主への礼拝が困難となつた時代の背後にも、誠実な神の愛が働いていたことがわかつたのです。

この新しい歌は、苦難をとおして小羊と一つにされたことから起ります。新しい歌は、神の新しいみわざに対して捧げられたものです。この新しい歌の土台は、イエス様が流された血です。

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

(ローマ 3・24)

苦難の時、闇の時こそが、新しい歌を生み出します。

私たちの人生で、何がいったい「新しい歌」を生み出すものになるのでしょうか。それは罪と咎の赦し、罪の鎖からの解放であり、病いや悩みや老弱の時にイエス様に担われ、運ばれしたことの体験であり、仕事であらゆる困難に出会ったときにイエス様に守られたことの体験であり、そして信仰への迫害の時に守られたことの体験です。罪が赦され、新たにされることによつて、「新しい歌」が歌われるのです。

イエス様は十字架につけられて「すべてが完了した。」と呼ばれました。そして復活なさったイエス様は「すべてが新しくされる。わたしがすべてを新しくする。」と言つておられます。新しくするとは、神の怒りから救い出し、神との交わりに入れてくださいることです。これはただ罪の赦しをとおしてのみ可能であり、罪の赦しはイエス様をとおしてのみなしとげられます。

イエス様は、十字架によつて罪の赦しを完成され、それをすべての人へ提供しておられます。イエス様は今もあなたのために取りなしをしておられ、誰でもイエス様を受け入れる者は新しくされるのです。どうかイエス様をあなたの救い主として受け入れてください。そしてイエス様を礼拝する人になつてください。

3 神の民の生活における救いの実

イエス様の勝利が隠されている、ということはありえないことです。イエス様の民は必ずそのことを体験します。私たちは、残されたユダヤ人たちがイエス様に対して忠節をつくしたことをするに見てきました。彼らの額にしるされたまことの神の名を、すべての人が見ることができます。彼らは歎を挙まないで、イエス様を礼拝したのです。

もしも主に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、主に仕える。

私たちは、主に対して忠実な日常生活を送っているでしょうか。私たちは新しい歌の実を持つているでしょうか。この黙示録の4節と5節では、新しい歌を歌う人々の四つの特徴が表わされています。

1 しみのないこと

まず彼らは、女性によつて汚されたことのない人々です。同じことを、以下の聖句にみることができます。

というのも、私は神の熱心をもつて、熱心にあなたがたのことを思つてゐるからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。しかし、蛇が悪巧みによつてエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあつてはと、私は心配しています。
(IIコリント 11・2・3)

きよい良心をもつて信仰の奥義を保つてゐる人です。

(Iテモテ 3・9)

あなたがたは、真理に従うことによつて、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになつたのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい。
(Iペテロ 1・22)

そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもつて御前に出られるように、励みなさい。

(Ⅱペテロ 3・14)

父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤兎や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。

(ヤコブ 1・27)

聖書において「姦淫」や「不品行」は、主に対する不忠実のしるしです。ギリシャ語やラテン語では、この反対が「おとめ」という言葉です。この言葉は男性、女性両方に用いられるので、日本語の「童貞」という意味も持っています。アベルやヨセフやメルキゼデクやヨハネについても、この言葉が用いられています。すなわち「おとめ、童貞」は、神に対する忠実さ、礼拝における純粹さを表わしているのです。

十四万四千人の人々は、守られていると同時に、一方では汚れから自分自身の身を守っている人々です。詩篇の16篇1、2節は、ダビデのこのよな態度を示しています。

神よ。私をお守りください。私は、あなたに身を避けます。私は、主に申し上げました。「あなたこそ、私の主。私の幸いは、あなたのほかにはありません。」

(詩篇 16・1、2)

おとめが花婿以外の者に愛を捧げることがないように、十四万四千人の人々もイエス様以外に彼らの愛を捧げることはできません。誘惑と試練のなかで、彼らはつねにイエス様だけを待ち望みました。困難の中で、彼らはイエス様だけに勇気と守りを求めていたのです。

2 小羊に従うこと

まことのキリスト者を簡単に定義すると、「小羊イエス様に従う者」です。

門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立つて行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。
(ヨハネ 10・3、4)

小羊イエス様に従う者とは、闇の中でも、迷い道でも、イエス様だけに忠実に従う者をさします。小羊イエス様の道は、力や権力や自己主張の道ではありません。小羊イエス様の道は、従順と献身との道です。

イエス様に対する愛は、感情的な愛ではなく、私たちの生活を根本から定め、支える愛でなければなりません。イエス様に対する愛とは、あらゆる障害にもかかわらずイエス様に従い通す愛です。そしてイエス様に従う者は、つねにイエス様の指示すところに従う備えができています。4節に見られる彼らの態度は、イエス様のお導きに完全に従つていくことでした。今の時代で

言えば、たとえ結婚しようとしないと、イエス様のご用のために自らを捧げることです。私たち
は徹頭徹尾、イエス様の導きに従っているでしょうか。小羊イエス様の道は苦難と犠牲の道です
が、それはイエス様の栄光に至る道なのです。

3 神の初穂とされたこと

彼らは小羊にささげられる「初穂」として、人々の中から贖われました。十四万四千人は初穂、
つまり刈り入れの初めとして、来るべき千年王国のためにイスラエル人の中から選ばれ、備えら
れた人々です。しかし千年王国は、さらにすべてのイスラエル人によつて満たされるはずです。
ローマ人への手紙には次のようにあります。

こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。

(ローマ 11・26)

十四万四千人は新しい国の初穂であり、イエス様とともにこの地上を支配します。十四万四千
人の人々は、イスラエル民族の千年王国の初穂であり、彼らの使命は「地上的」なものです。

これに対し私たちは、イエス様のからだである教会の初穂であり、イエス様のからだである教
会の使命は「天上的」なものです。

つまり、私たちが救われたのは、この地上での祝福を受けるためではありません。イエス様の
からだである教会は主ご自身のために救われたのです。確かに教会はこの地上にありますが、こ
の地上のものではありません。教会の心は主に結びついていますから、私たちはこの世から離れ

て天上の主に結びつくことが必要です。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖靈の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払つて買い取られたのです。ですから自分のからだをもつて、神の栄光を現わしなさい。

(Iコリント 6・19、20)

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わつたむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によつたのです。

(Iペテロ 1・18、19)

4 批難されることがないこと

イエス様は十四万四千人の人々の真実さを誉めておられます。彼らの口には偽りがなかつたからです。終わりの時代には、人々は獸の偽りの奇跡によつて惑わされます。しかしこの十四万四千人の人々は、ナタナエルのように偽りのない人々なのです。

イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りがない。」

(ヨハネ 1・47)

また、彼らの中には欺きがありません。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。

(詩篇 32・1、2)

イスラエルの残りの者たちはまた、忠実です。

イスラエルの残りの者は不正を行なわず、偽りを言わない。彼らの口の中には欺きの舌はない。まことに彼らは草を食べて伏す。彼らを脅かす者はない。

(ゼバニヤ 3・13)

その日になると、イスラエルの残りの者、ヤコブの家ののがれた者は、もう再び、自分を打つ者にたよらず、イスラエルの聖なる方、主に、まことをもって、たよる。

(イザヤ 10・20)

イエス様こそが、彼らにとつて唯一真実なお方です。十四万四千人の群れは、獣ではなく、イエス様にすべての栄光を帰します。彼らは神と人の前に誠実です。彼らの生活の基礎は罪の赦しの上に立っています。イエス様の血とイエス様の御名が彼らの誉れです。それゆえに、彼らには批難されるべきところがありません。

すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。

(エペソ 1・4)

「自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなつた栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」
(エペソ 5・27)

今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によつて、あなたがたを「自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」
(コロサイ 1・22)

それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がつた邪悪な世代の中にあつて傷のない神の子どもとなり、…
(ピリピ 2・15)

あなたがたを、つまずかないよう守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもつて栄光の御前に立たせることのできる方に、…
(ユダ 24)

すべてのものが汚され、獸によつて支配され、にせ預言者によつて惑わされる時代に、イエス様に対する彼らの愛だけが誠実を守りとおすのです。

すべての人々が獸を喜んでいる時代に、彼らは神の小羊イエス様だけに従うのです。
すべての人々が獸の魔力に支配されている時代に、彼らはイエス様によつてその魔力から解放されているのです。彼らは、外面向にはそのような魔力に影響を受けるかもしませんが、心の

中は自由なのです。

すべての人々が偽りを語り、獸を喜んでいる時代にあって、彼らは、イエス様だけに従っています。

イエス様が私たちをご覧になるとき、私たちをどのように判断されるでしょうか。

25

大きな苦しみの終わりの時代への預言

黙示録14章6節から13節まで

1 第一の天使の、「永遠の福音」の知らせ

1 永遠の福音
2 御国の福音
3 恵みの福音

2 第二の天使の、さばきの知らせ

3 第三の天使の、選択の知らせ

1 獣を礼拝する者に対するさばきの警告
2 忠実な者に対する報い

また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。⁷ 彼は大声で言つた。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」⁸

また、第二の、別の御使いが続いてやつて来て、言つた。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」⁹

また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやつて来て、大声で言つた。「もし、だれでも、獸とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けるなら、そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獸とその像とを拝む者、まだれでも獸の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける聖徒たちの忍耐はここにある。」¹⁰ また私は、天からこう言つてゐる声を聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである。』御靈も言われる。『しかし。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。』」¹¹ （默示 14・6～13）

默示録のこの箇所のテーマは次の三つです。すなわち、「大きな苦しみの終わりの時代に対する預言」、「世界史の終わりの直前における、三人の御使いの叫び」、そして「さばきの予告の知らせ」

です。

また、この箇所は、三人の御使いの知らせに分けることができます。第一の天使の知らせは6節と7節にある「福音の知らせ」、第二の天使の知らせは8節の「さばきの知らせ」、第三の天使の知らせは9節から13節の「選択の知らせ」です。

まず、第一の天使の知らせから見ていきましょう。

1 第一の天使の、「永遠の福音」の知らせ

第一の天使の知らせは、6節と7節にある、「永遠の福音」の知らせです。それはまた、神のさばきの時が来たことを知らせ、神を恐れ、神をあがめることを要求する知らせです。

6節にある「永遠の福音」とは、何を意味するのでしょうか。福音とはただ一つ、イエス様のことです。そのイエス様は、万物の創造者であり、王であり、救い主です。福音についてさらに詳しく言いますと、永遠の福音とは創造者であるイエス様のことであり、御国の福音とは王であるイエス様であり、恵みの福音とは救い主であるイエス様のことです。これについて簡単にみてみましょう。

1 永遠の福音

永遠の福音は、すべての人類のためであり、主の被造物をとおして明らかにされています。
…というのは、不義をもつて真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対しても、

神の怒りが天から啓示されているからです。

(ローマ 1・18)

神の存在は、神が造られた被造物を見ることによつて明らかであり、それをとおして人々は主への礼拝に導かれます。ヨブの悔い改めや、御使いを見て従つたコルネリオは、そのよい例であり、またダビデは次のように言つています。

私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさつて恐ろしいほどです。私のたましいは、それによく知つています。

(詩篇 139・14)

イエス様のことを聞いたことのない人々がどうして神を認め礼拝するように導かれるか、という問い合わせに対する答えがここに与えられています。つまり、神はすべての被造物を創られたお方だと知ることにより、すべての人々が神への礼拝に導かれるのです。このようにして、多くの人々の群れが礼拝に導かれます。

彼らは、新しい歌を歌つて言つた。「あなたは、巻き物を受け取つて、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほぶられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贋い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であつた。彼らは大声で言つた。「ほぶられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、榮

光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と讃れと栄光と力が永遠にあるように。」また、四つの生き物はアーメンと言ひ、長老たちはひれ伏して拝んだ。

（黙示 5・9～14）

イエス様について聞いたことのない人々は、主が造られた宇宙や自然をとおして神を認め、礼拝するよう導かれ、救われるのです。そして主の目から見れば、イエス様がこのような人々のために死なれたからこそ、人々は救われることができるのです。

默示録14章6、7節では、「永遠の福音」がはつきりと宣べ伝えられています。この永遠の福音においては、人は神の前にひざまずき、礼拝を捧げることができます。

神は、獸に対して礼拝を捧げず、まことの神を礼拝する者を救う、と言つておられます。「永遠の福音」は、詩篇96篇の5、9、10節に記されています。

まことに、国々の民の神々はみな、むなし。しかし主は天をお造りになつた。…聖なる飾り物を着けて、主にひれ伏せ。全地よ。主の御前に、おののけ。国々の中で言え。「主は王である。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはない。主は公正をもつて国々の民をさばく。」

（詩篇 96・5、9、10）

「永遠の福音」は、反キリストについて語られている默示録13章の12節から17節にはつきりと

対立しています。

黙示録14章の6節から7節では、三つのことが要求されています。第一に、まもなく滅び去る反キリストを恐れることなく、永遠の創造者である神を恐れよう、ということです。神への恐れない福音は、悪魔的なものです。

第二に、神を汚し、神の栄光を踏みにじる反キリストではなく、栄光を神に帰そう、ということです。

第三に、造られたもの、つまり反キリストではなく、創造者であるまことの神を礼拝しよう、ということです。

「永遠の福音」の内容は、「創造者としての神」です。これがまことの神を礼拝する根拠です。まことの神に対して降伏することは、かたくなな心を捨てて神を礼拝し、神の前にひざまずき、そして反キリストを拝まないことです。

2 御国の福音

「御国の福音」とは何でしょうか。御国の福音とは、まことの神が王であるということです。悔い改めて、神のご支配を認めることです。御国の福音は、イスラエルの民とも密接に結びついています。神はダビデとの約束によつて、この地上に神の国を建設されます。

あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にどこしまでも続き、あなたの王座はどこしまでも堅く立つ。

(IIサムエル 7・16)

「御国の福音」は、昔の預言者たちや洗礼者ヨハネ、またイエス様によつて宣べ伝えられました。

それから、イエスは、すべての町や村を巡つて、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわざらいを直された。 (マタイ 9・35)

そして大きな苦しみの時に、ユダヤ人をとおして、み国の福音が再び宣べ伝えられることになるでしょう。

この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。 (マタイ 24・14)

この福音の結果、黙示録7章にあるように、神の御座のまわりに多くの礼拝者の群れが起ころります。

3 恵みの福音

「恵みの福音」は、今日宣べ伝えられています。

けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

(使徒 20・24)

「恵みの福音」とは、イエス様が十字架で私たちの罪のために死なれたこと、そして救いを成就されたことです。主は、すべての罪人を愛され、罪人たちのためにひとり子を惜しまずにお与えになつてくださいました。自分の罪を認めて神のご支配に自らを委ねる人は、罪の赦しが与えられ、神の子とされるのです。

イエス様は、今日もあなたにこのことをしてくださるとしておられます。

すべて、疲れた人、重荷を負つている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

(マタイ 11・28)

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

(ヨハネ 6・37)

御靈も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言ひなさい。渴く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

(黙示 22・17)

私たちは、次の三つの質問に対しよく考えてみましよう。

私たちは、神を恐れ、すべての誉れを神にささげているでしょうか。

「私たちは、神のみこころに従おうとしているでしょうか。それとも自分の意思を押し通そうとしているでしょうか。」

「私たちは、主なる神を愛し、神に対して真実の愛をささげているでしょうか。」

2 第一の天使の、さばきの知らせ

次に8節の、第二の御使いの知らせについて考えてみましよう。この御使いは「さばき」を知らせ、また人間の乱れた文化の滅亡を預言します。それは同時に、主の勝利の叫びでもあります。最後の警告と降伏への勧告のあとで、最後のさばきがやってきます。獸である反キリストに喜んで従つていた人々の上に、神の叫びが響きます。8節で、第二の御使いはバビロンの滅亡を預言しています。この最後の警告は、「バビロンの富と幸福に惑わされるな」ということです。黙示録17、18章には、バビロンの滅亡についてくわしく述べられています。

バビロンは、神の民に対する最も激しい敵対者でした。神の民は、七十年間このバビロンに捕らえられ、奴隸とされていました。

バビロンは主の御手にある金の杯。すべての国々はこれに酔い、国々はそのぶどう酒を飲んで、酔いしれた。たちまち、バビロンは倒れて碎かれた。このために泣きわめけ。その痛みのために乳香を取れ。あるいはいやざれるかもしれない。(エレミヤ 51・7、8)

バビロンは、政治と宗教の中心でした。また偶像礼拝と誘惑の中心でもありました。

ああ、今、戦車や兵士、二列に並んだ騎兵がやって来ます。彼らは互いに言っています。
「倒れた。バビロンは倒れた。その神々のすべての刻んだ像も地に打ち砕かれた。」と。

(イザヤ 21・9)

バビロンは、默示録17章1節で、「淫婦」と名づけられています。偶像礼拝と姦淫とは、ともに罰せられなければなりません。そのため、バビロンによって誘惑された者に「神の怒りのぶどう酒」が注がれるのです。

そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。

(默示 14・10)

主の御手には、杯があり、よく混ぜ合わされた、あわだつぶどう酒がある。主が、これを注ぎ出されると、この世の悪者どもは、こぞって、そのかすまで飲んで、飲み干してしまう。

(詩篇 75・8)

バビロンはまた、人間の乱れた文化の頂点でもありました。多くの人々はこの乱れた文化に醉わされて、物事をはつきりと見る目を失ってしまいました。人々は、技術の進歩は、乱れた文化を発展させることはできても、決して人間の内面にある渴きをいやすことはできないということに気づかないのでした。

歴史的に見ますと、ヨーロッパの文明から大きな災いが流れ出たことがわかります。人々は文明の進歩によつてパラダイスに近づいたのではなく、単に生ける神から引き離されただけであり、人々は「神の怒りとさばきに値する者」へと成熟したに過ぎません。生ける神の拒絶は神のさばきを招き、結局は文明の破滅に至ります。

8節にある、終わりの時代におけるバビロンとは、生ける神から離れた教会を指しています。それはにせ預言者がとなえる世界宗教です。にせ預言者の世界宗教の中心地は、たぶんローマではないでしょうか。

私たちは默示録14章で、天に響く勝利の力強い声を聞きます。バビロンに対するこの勝利の声について、18章にさらにくわしく記されています。人々は、バビロンによって神から引き離され、真実の愛を失つてしまうのです。バビロンはサタンの道具です。つまり迷わす者たち、嘘つきの者たちです。

3 第三の天使の、選択の知らせ

1 獣を礼拝する者に対するさばきの警告

9節にある第三の御使いは、誰を礼拝するのかと、選択をせまっています。御使いは反キリスト的な世界に対するさばきのことを語っています。それは同時にこの世への警告でもあります。この世と妥協し、見えるものに頼つている人々に対する警告です。

さばきはバビロンにくだるだけではなく、獣を拝む者にもくだります。御使いは「生けるまこ

との神は、獸を拝む者に対して恵みを与えるられない」と警告しています。獸を拝む者は、意識的に神を拒み、意識的に悪魔に仕えます。獸を礼拝することは神に対する人間の反逆の頂点です。この時代には、獸を拝むように見せかけて、心中ではイエス様を拝む、というようなごまかしはありません。妥協はありえないのです。ですから御使いは、選択が必要だと語っているのです。

10節にある「神の怒りのぶどう酒」とは、神の罪に対する怒りを意味しています。イエス様は十字架において、私たちの代わりに苦しみの杯を飲まれ、私たちが受けるべきさばきを代わりに受けたださいました。にもかかわらずイエス様を拒んだ人々は、この時神の怒りの杯を飲むのです。

それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従つて報いをお与えになります。

(ローマ 2・4～6)

10節には火と硫黄のことが記されています。火や硫黄は、ソドムやゴモラの場合と同じように、神の恐ろしいさばきの象徴です。この恐ろしいさばきは、「聖なる御使いたちと小羊との前」で行なわれます。その時、獸に仕えるすべての人々は、イエス様が私たちの罪を担い、私たちのため

に死んでくださつたことを、驚きをもつて認めざるをえません。しかし、悔い改めるにはもう遅すぎるのであります。なぜなら、その時にはすでにさばきが始まつており、このような人々はもはや言いわけができず、休むことのない永遠の苦しみに投げ込まれているからです。

11節はもつとも厳粛な真理です。

それは夜も昼も消えず、いつまでもその煙は立ち上る。そこは代々にわたつて、廢墟となり、だれも、もうそこを通る者はない。

(イザヤ 34・10)

すると、獸は捕えられた。また、獸の前でしるしを行ない、それによつて獸の刻印を受けた人々と獸の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といつしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。

(黙示 19・20)

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獸も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

(黙示 20・10)

火や地獄、永遠の滅びは、聖書の真理です。イエス様はいつもそのことを語つておられます。

「それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども、わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。』」

イエス様は、天に引き上げられた後も、このことを語つておられます。

しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受けける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。

(黙示 21・8)

パウロもまた、それについて語っています。

苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現わるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から避けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。

(IIテサロニケ 1・7～9)

ヨハネもそれについて、厳粛に語っています。

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獸も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

(黙示 20・10)

ユダもまた、同じ真理を語っています。

アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れず犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」

(ユダ 14、15)

ペテロもまた、そのことについて語っています。

神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。また、昔の世界を救さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました。また、無節操な者たちの好色なふるまいによつて悩まされていた義人口トを救い出されました。というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。これらのことわざるようすに、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置くことを心得ておられるのです。

(II ペテロ 2・4~9)

地獄は、否定することのできない真理です。

11節には、「永遠にまでも」という表現が用いられています。この表現は、本来は「永遠から永遠へ」という意味であり、聖書の中に十二回出てきます。このうち八回は、神が「永遠から永遠」に至るまで生きておられる、ということについて書かれている箇所です。また一回は、義とされた者の祝福に関連して用いられています。

また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と讃れと栄光と力が永遠にあるよう。」

(黙示 5・13)

残りの三回は、滅びに関して述べられています。黙示録20章10節には、悪魔の永遠の滅び、救われていないうちの永遠の滅びについて記されています。

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獸も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

(黙示 20・10)

「永遠に昼も夜も」とあるところは、原語は「永遠から永遠」という表現が用いられています。それは神によるさばきが「永遠」に続くことを意味しています。したがって、ここは聖書の中で、もつとも厳肅な箇所です。

2 忠実な者に対する報い

13節では、まことの神に従う人々たちに、獸を拝む者たちとはまったく反対のことが起ることが記されています。

獸を拝む者に対しては、永遠の苦しみ、悲しみのみが与えられます。しかしイエス様のために命を捨てる者に対しては、イエス様は「あなたは幸いである。」と言われます。

ここで私たちは、獸を拝む者たちと、イエス様を礼拝する人々とを、比較してみましょう。

獸を拝む者たちは、その額に獸の名と獸の数字とが記されています。そして小羊を礼拝する人々には、イエス様の御名が、また神の御名が記されています。

獸を拝む者たちは悪魔の奴隸にされます。小羊を礼拝する人々は救われて心の自由を与えられます。

獸を拝む者たちは姦淫を犯す者であり、淫婦です。小羊を礼拝する人々は、おとめのように汚れのない人々です。

獸を拝む者たちは偽りを語り、誘惑を受けます。小羊を礼拝する人々は、その口に偽りがなく、誘惑から守られます。

獸を拝む者たちは獸を礼拝しますが、小羊を礼拝する人々は小羊に従います。

獸を拝む者たちは永遠に滅びに至り、小羊を礼拝する人々は永遠に救われます。

獸を拝む者たちには平安がなく、小羊を礼拝する人々には真の平安があります。

10、11節には、獸を礼拝する者へのさばきが記されており、12、13節には忠実な者への報いが

記されています。

この御使いの警告のあとで、恐るべき戦いが行なわれます。悪魔は反キリストとにせ預言者をとおして力を現わし、そして人々を惑わします。しかし、この時代に殉教をとげる人々は祝福されます。ユダヤ人たちは、救世主を待ち望み、神の御国の建設を待ち望み、そしてその約束された神の御国をまもなく体験する確信を得ます。

しかし、神の御国が来る前に殉教をとげた人々はどうなのでしょう。この問い合わせに対する答えは、天から聞こえる声によつて与えられます。彼らはなぐさめをえるのです。

また私は、天からこう言つている声を聞いた。「書きしるせ。【今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである。】」御靈も言われる。「しかし。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。」

(黙示 14・13)

殉教をとげる人々は、第一の復活にあずかり、主と共に支配を行うようになるのです。

また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわつた。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獸やその像を拝まず、その額や手に獸の刻印を押されなかつた人たちを見た。彼らは生き返つて、キリストとともに、千年の間王となつた。∴この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に對しては、第二の死は、なんの力も持つていかない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王とな

る。

(黙示 20・4、6)

彼らは、殉教の報いとして、地上における支配を与えられるのです。

天から声を出しているのは誰でしょう。それはもちろんイエス様ご自身です。さらに、聖靈もその声に対して「しかし」と同意をもって答えていました。このような二重の証しは、それが確実なことだと強く証明しているのです。

勝利を得る人々の群れは、獸を拝む者たちにはつきりと対立しています。12節には、勝利を得る人々の三つの特徴が記されています。

一つめは忍耐です。忍耐とは、弁明せず、攻撃せず、困難や孤独や死すらも神からの賜物として受けとることです。忍耐とは、最後の時に至るまで信仰を守りとおすることです。

しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

(マタイ 24・13)

二つめは従順です。従順とは、神の戒めに対しても注意深く、忠実であることです。神の言葉は信者にとつて岩のような土台です。神の言葉への従順こそ、勝利を得る人々の特徴です。イエス様に対する愛だけが、このような従順を可能にします。勝利を得る人々は、獸の強制や命令、誘惑を投げ捨て、神の戒めのみを受け入れます。

三つめは信仰です。イエス様に対する信仰、イエス様が十字架の上で流された血に対する信仰だけが、救いと永遠のいのちをいただく道です。勝利を得る人々の群れは、ペテロと同じように、

イエス様が生ける神の子、キリストであることを証しします。

シモン・ペテロが答えて言つた。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」

(マタイ 16・16)

そして、彼らはこのような信仰を、終わりの日に至るまで守りとおします。

あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもつて、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。

(マルコ 1・13)

私の福音に言うとおり、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思つていなさい。

(マルコ 2・8)

私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。

(マルコ 4・7)

勝利を得る人々は、いのちを捨てても、獸を拝んで永遠の滅びに入ることを拒み、三年半の間獸による苦しみに耐え、のちに千年王国でイエス様とともに支配者となることを選ぶ人々です。13節の終わりの部分に、「彼らの行ないは彼らについて行くからである」とあります。人を救うのは「彼らの行ない」ではなく、ただ、イエス様の十字架上の血による犠牲だけが私たちを救

うのです。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によつて救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。

(エペソ 2・8、9)

しかし、イエス様に対する愛からでた行ないは、彼らについて行き、永遠に残り、そして報われるのです。

ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立つて、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知つているのですから。

(Iコリント 15・58)

よく氣をつけて、私たちの労苦の実をだいなしにすることなく、豊かな報いを受けるようになりなさい。

(IIヨハネ 8)

だが、愛する人たち。私たちはこのように言いますが、あなたがたについては、もつと良いことを確信しています。それは救いにつながることです。神は正しい方であつて、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。

(ヘブル 6・9、10)

もし、あなたがイエス様のものであるなら、あなたの「行ない」はどのようにでしょうか。あなたは、救い主イエス様のために、何をなさっているのでしょうか。

もし、あなたがイエス様を受け入れておられないなら、あなたの罪があなたを責めることでしょう。イエス様の血は、あなたの罪のために流されました。どうか、イエス様にあなたの罪を告白してください。そうすれば、イエス様はあなたの罪を赦してくださいます。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が糺のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

(イザヤ 1・18)

すると、人々が中風の人を床に寝かせたままで、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。しつかりしなさい。あなたの罪は赦された。」と言われた。

(マタイ 9・2)

26

さばきへの知らせと警告

黙示録14章14節から20節まで

- 1 さばき主であるイエス様
- 2 割り入れ
- 3 ぶどうの刈り入れ

¹⁴ また、私は見た。見よ。白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗つておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた。¹⁵ すると、もうひとりの御使いが聖所から出て来て、雲に乗つておられる方に向かつて大声で叫んだ。「かまを入れて刈り取つてください。地の穀物は実つたので、取り入れる時が来ましたから。」そこで、雲に乗つておられる方が、地にかまを入れると地は刈り取られた。

また、もうひとりの御使いが、天の聖所から出て來たが、この御使いも、鋭いかまを持つていた。¹⁸ すると、火を支配する権威を持つたもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言つた。「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。」¹⁹ そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。²⁰ その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スターイオンに広がつた。

(黙示 14・14～20)

この箇所のテーマは、「さばきへの知らせと警告」です。それはまた、次のように言いかえることができます。「使いたちの中、心におられるさばき主の現われ」、「イエス様の再臨における、神なき者たちへのさばき」、「イエス様のさばきと神の判決の実現」、また「神の激しい怒り」です。默示録14章で私たちは、七人の人物を見ることができます。彼らは互いに関連しあっています。最も重要な人物が真ん中におられます。さばき主としてのイエス様です。そのほかの六人は、イ

エス様の御使いたちです。彼らは、イエス様のさばきのためにそれぞれが異なる使命を与えられています。最初の三人は、招きのことばをもたらす御使いたちでした。つまり「福音の知らせ」、「さばきの知らせ」、そして「選択の知らせ」をもたらした御使いたちでした。

1 さばき主であるイエス様

ヨハネの黙示録の14章14節で、ヨハネはイエス様が王として、支配者として、さばき主として、白い雲に乗って来られるのを見ました。白い雲に乗っておられるということは、支配者であることを意味しています。頭にある金の冠はイエス様が王であることを現わしています。手に持たれた鋭いかまは、イエス様がさばき主であることを示しています。さらに三人の御使いたちが、かまを持ってイエス様に従います。これは、9節までに出てきた招きの言葉を伝える御使いではなく、かまを持つたさばきの御使いです。

私たちは、14節から20節までを、次のような二つの部分に分けて見ていきましょう。一つめは、14節から16節までにある「刈り入れ」です。ここで記されている「刈り入れ」は、地上の諸国民に対する刈り入れです。イエス様は正しいさばき主としてこの地上に臨れます。

次に、17節から20節までは、「ぶどうの刈り入れ」について記されています。ここで語られている「ぶどうの刈り入れ」は、イスラエルの民であつて、その他の諸国民ではありません。その中心にはイスラエルの王としてのイエス様が立つておられます。

黙示録14章の13節までで、私たちは最後の日のことだが、簡潔に要約されていることを見て

きました。まず初めは、小羊とともにシオンの山にいる十四万四千人のユダヤ人についてであり、次いでイエス様の再臨の前に起る殉教者たちの群れについてであり、そしてバビロンの滅亡と獸を挾む者たちに対するさばきについてでした。

それに続く14節から20節で、私たちは、神のさばきの要点を見ることができます。

14節の頭で、ヨハネは「私は見た。見よ。」と言っています。この言葉とともに、御使いたちは背後に退いて、「人の子」とあるイエス様ご自身が姿を現わされます。

「人の子」という言葉は、聖書の中に八十回出でます。ダニエル書7章13節でイエス様は「人の子」と表現されています。ダニエルは、最初に神の子を人の子として、見たのです。

見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、…

（ダニエル 7・13）

また、黙示録1章13節にも、「人の子」という表現が出てきます。

それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帶を締めた、人の子のような方が見えた。

（黙示 1・13）

イエス様は、神でありながらまことの人間としてこの地上に来てくださいました。これに対して反キリストは、まことの神の目から見れば、人間と呼べるような存在ではなく、獸のようなものですから、それにふさわしく獸と呼ばれているのです。

「人の子」であられるイエス様こそが、来たるべき日のさばき主です。14節でイエス様は、白い

雲に乗つて来られます。白い雲は神の臨在を現わしています。

三日目の朝になると、山の上に雷といなずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿營の中の民はみな震え上がつた。

（出エジプト 19・16）

彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい。」という声がした。

（マタイ 17・5）

アロンがイスラエル人の全会衆に告げたとき、彼らは荒野のほうに振り向いた。見よ。主の栄光が雲の中に現われた。

（出エジプト 16・10）

すると、主はモーセに仰せられた。「見よ。わたしは濃い雲の中で、あなたに臨む。わたしがあなたと語るのを民が聞き、いつまでもあなたを信じるためにである。」それからモーセは民のことばを主に告げた。

（出エジプト 19・9）

モーセが山に登ると、雲が山をおおつた。主の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。主の栄光は、イスラエル人の目には、山の頂で燃え上がる火のように見えた。モーセは雲の中にはいって行

き、山に登つた。そして、モーセは四十日四十夜、山にいた。

(出エジプト 24・15～18)

主は雲の中につけて降りて来られ、彼とともにそこに立つて、主の名によつて宣言された。

(出エジプト 34・5)

そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。：イスラエル全家の者は旅路にある間、昼は主の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があるのを、いつも見ていたからである。

(出エジプト 40・34、38)

雲はいつも神のご栄光を現わすものでした。「白い」という言葉は、「明かり」と関連して、來るべきさばきの正しさを表しています。

またこの白い雲は、イエス様の目に見える再臨を意味しています。

私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗つて来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。

(ダニエル 7・13)

イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言っておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗つて来るのを、あなた

がたは見ることになります。」

(マタイ 26・64)

そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帶びて雲に乗つて来るのを見るのです。

(マルコ 13・26)

こう言つてから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。イエスが上つて行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白衣を着た人がふたり、彼らのそばに立つていた。そして、こう言つた。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立つているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上つて行かれるのを見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

(使徒 1・9-11)

見よ、彼が、雲に乗つて来られる。すべての日、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかし。アーメン。
(黙示 1・7)

全世界の審判者であるイエス様は、地上に限られた支配者などではなく、天の御座につき、すべてを支配なさるお方です。

14節の中ほどには「金の冠」のことが書かれています。「金の冠」は、イエス様が、王であるこ

とを示します。それは勝利と支配の象徴であります。ヨハネはここで、御座についておられる方、イエス様のことを証ししています。このような御座に座しているお方を仰ぎ見ることが、私たちの日々の信仰にとって大切なことです。

私たちがこの御座を見るなら、すべてを支配なさるお方を見るなら、この地上におけるすべてのことは、小さな取るに足りないものに思えてきます。御座についておられるお方、イエス様を仰ぎ見る者は、心に安らぎを得るのでです。すべての上におられるイエス様を仰ぎ見ることほど重要なことはありません。

2 刈り入れ

次に、この部分に述べられている「刈り入れ」について見ていきましょう。この「刈り入れ」は、普通の刈り入れではなく、「大きな刈り入れ」です。その言葉の中に、恐るべきさばきの意味がこめられています。世界の審判者は、鋭いかまを手にしています。それは、マタイ13章に記されているような「大きな刈り入れ」です。

イエスは答えてこう言われた。「良い種を蒔く者は人の子です。畑はこの世界のことです。良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どもたちのことです。毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。人の子はその使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法

を行なう者たちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歎きしりするのです。そのとき、正しい者たちは、天の父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。」
(マタイ 13・37-43)

イエス様が最初にこの地上に来られたのは、十字架の上でいのちを捨て、救いをなしとげるためでした。そしてイエス様が再び来られるのは、さばきを行なわれるためです。イエス様の救いを受け入れなかつたすべての者がさばかれます。イエス様は来るべきさばき主として定められているお方です。

「また、父はだれもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。また、父はさばきを行なう権を子に与えられました。子は人の子だからです。」
(ヨハネ 5・22、27)

イエス様は、かつては神のみことばを蒔く者として来てくださいました。

イエスは多くのことを、彼らにたとえで話して聞かされた。「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。」
(マタイ 13・3)

しかし黙示録14章では、イエス様は間もなくかまを持つて、刈り入れる者として来られるのです。かまは悔い改めようとしない者たちのために備えられています。
さばきはまた、分離を意味します。不信頼な者たちは雑草のように刈り取られるのです。この

ようなさばきは、マタイの福音書25章に記されています。

「人の子が、その栄光を帶びて、すべての御使いたちを伴つて来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての國々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を繼ぎなさい。：』

それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。：』

こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり、正しい人たちは永遠のいのちはいるのです。」

(マタイ 25・31～34、41、46)

イエス様は、默示録の14章後半で、真理そのものとして、すべての支配権を持つお方として、さばきを行なうお方として、そのみ姿を現わされます。そこではイエス様はもはや、招くことをなさらず、戸を叩くことをなさいません。それまで隠されていたすべてのことがその時明るみに引き出されるのです。

そして、イエス様だけがただお一人、眞実なお方ということが明らかにされます。そのイエス様を受け入れることは、罪の赦しを受け、永遠のいのちをいただくことであり、イエス様を拒むことは、滅びにいたることを意味します。

ところで、私たちは気がついているでしょうか。イエス様が人々を救いに招かれる時が過ぎ去り、恐ろしいさばきが行なわれる時が近づいていることを。イエス様がさばきを始められてからでは、すべては手おくれなのです。ですから、今、イエス様に聞き従うことがもつとも大切なことです。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

(マタイ 11・28)

イエス様は、今は愛と忍耐をもつて、人々を救いに招こうとしていてくださいます。ですから今、イエス様を拒む者は、やがてくるさばきの日に、かまを手にしてもはや憐れむことをなさらないイエス様を恐れなければならなくなるのです。

さて、15節と16節に記されている刈り入れは、何を意味しているのかを考えてみましょう。

氣をつけなければならないのは、その「刈り入れ」は、「イエス様が花嫁を迎えること、雲の上で信者を迎えることを意味していない」ということです。挙げはすでに行なわれた後なのです。黙示録の7章から14章に記されている「救われた人々の群れ」も、すでにイエス様のご臨在のもとにおかれているのです。十四万四千人の救われたユダヤ人たちも、刈り取られるのではなくて、イエス様とともに千年の間支配を行なうのです。

この箇所では、悔い改めをしたくない者たちは罪の実が熟しているために、刈り取られること、さばかれることが記されているのです。

15節にある「地の穀物が実つた」という言葉は、穀物が成熟し、やがて腐る、というような意味を含んでいます。イエス様がいちじくの木を呪われた時に起こったようなことが、ここで起こっているのです。

弟子たちは、これを見て、驚いて言つた。「どうして、こうすぐにいちじくの木が枯れたのでしようか。」

(マタイ 21・20)

このさばきは、旧約の時代の預言の成就を意味しています。

「諸国の人は起き上がり、ヨシャパテの谷に上つて来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。」

(ヨエル 3・12)

「それゆえ、わたしを待て。——主の御告げ。——わたしは証人として立つ日を待て。わたしは諸国の人を集め、もうもろの王国をかき集めてさばき、わたしの憤りと燃える怒りをことごとく彼らに注ぐ。まことに、全地はわたしのねたみの火によつて、焼き尽くされる。」

(ゼパニヤ 3・8)

ユダヤ人を迫害した国民は、さばかれます。イスラエルがイエス様の支配の中心になるのです。15節では、さばきが聖所から出てくることが記されています。これは、さばきが神が臨在しておられる御座から始まるることを意味しています。さばきの御使いが、「かまを入れて刈り取つてくれ

ださい。」と叫びます。これは御使いが主なる神のさばきを始めてくださいと、御子イエス様に大声で伝えているのです。この御使いは単なる仲介者に過ぎません。そして今や刈り入れの時が来たのです。

イエス様は世界の審判者であられ、御使いの仲介を通してのみ、さばきを行なわれます。イエス様の特徴は、このような時であつても決してご自身の意思を実行なさるのではなく、いつも父なる神のみこころを行なわることです。今や、獸と、獸の像を挙む者に対する神のさばきが行なわれるのです。このさばきは、すべての国民に対して行なわれます。このさばきがどのように行なわれるかは、この14章では、かんたんに「地は刈り取られた」とだけ記されていて、くわしく記されていません。それが具体的にくわしく述べられているのは15章です。

今の世は、決してよくなることはありません。逆に、神がさばかれるをえないほど、悪くなるいっぽうなのです。

3 ぶどうの刈り入れ

17節から20節までには、「ぶどうの刈り入れ」について記されています。四番めの御使いが仲介者となつてその使命をはたすのです。かまは世界のさばき主であるイエス様ご自身の手によつて、「ぶどう」に対してふるわれるのです。

第五番めの御使いは、死をもたらすものです。酒ぶねに投げ入れられて踏まれるというのは、すべてのものが滅ぼされることを意味しています。

第六番めの御使いは、さばきを実行します。ここに出てくる天の聖所、祭壇、ぶどうのぶさ、酒ぶね、都という言葉は、すべてユダヤ人に関する言葉です。

「もう一つのたとえを聞きなさい。ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造つて、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。さて、収穫の時が近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりは袋だきにし、もうひとりは殺し、もうひとりは石で打つた。そこでもう一度、前よりももっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。しかし、そのあと、その主人は、「私の息子なら、敬つてくれるだろう。」と言つて、息子を遣わした。すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合つた。「あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。」そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまつた。このばあい、ぶどう園の主人が帰つて来たら、その農夫たちをどうするでしよう。」彼らはイエスに言つた。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。「家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。」だから、わたしはあなたがたに言ひます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実をむすぶ国民に与えら

れます。また、この石の上に落ちる者は、粉々に碎かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。」祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれのたどえを聞いたとき、自分たちをさして話しておられることに気づいた。

(マタイ 21・33～45)

ぶどう畠はイスラエルを意味しています。イエス様はここで、「石の上に落ちる者は、粉々に碎かれる。」と言つておられます。この言葉はごく慢で悔い改めることをしたくないパリサイ人を指しています。イエス様は、神の国の実を結ばないユダヤ人たちに対し警告を与えられたのです。

ぶどうの木は、聖書ではいつもイスラエルの民を意味しています。

わたしは、あなたをことごとく純良種の良いぶどうとして植えたのに、どうしてあなたは、わたしにとつて、質の悪い雑種のぶどうに変わつたのか。 (エレミヤ 2・21)

イスラエルに対するさばきは、旧約聖書の中で、はつきりと預言されています。

回りのすべての国々よ。急いで来て、そこに集まれ。一主よ。あなたの勇士たちを下してください。一 諸国の民は起き上がり、ヨシャパテの谷に上つて來い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。

かまを入れよ。刈り入れの時は熟した。来て、踏め。酒ぶねは満ち、石がめはあふれて

いる。彼らの悪がひどいからだ。さばきの谷には、群集また群集。主の日がさばきの谷に近づくからだ。太陽も月も暗くなり、星もその光を失う。

主はシオンから叫び、エルサレムから声を出される。天も地も震える。だが、主は、そこの民の避け所、イスラエルの子らのとりでである。

(ヨエル 3・11～16)

「エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもつて進んで来るこの者は。」「正義を語り、救うに力強い者、それがわたしだ。」「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいたかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。それで、彼らの血のしだりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。わたしの心のうちに復讐の日があり、私の贖いの年が来たからだ。わたしは見回したが、だれも助ける者ではなく、いぶかつたが、だれもささえる者はいなかつた。そこで、わたしの腕で救いをもたらし、わたしの憤りを、わたしのささえとした。わたしは、怒って国々の民を踏みつけ、憤って彼らを踏みつぶし、彼らの血のしたたりを地に流した。」

(イザヤ 63・1～6)

あなたは、エジプトから、ぶどうの木を携え出し、国々を追い出して、それを植えられ

ました。：万軍の神よ。どうか、帰つて来てください。天から日を注ぎ、よく見てください。そして、このぶどうの木を育ててください。

(詩篇 80・8、14)

イスラエルは多くの実を結ぶよく茂つたぶどうの木であった。多くの実を結ぶにしたがつて、それだけ祭壇をふやし、その地が豊かになるにしたがつて、それだけ多くの美しい石の柱を立てた。

(ホセア 10・1)

「さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。そのぶどう畠についてのわが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畠を持つていた。彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘つて、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。

そこで今、エルサレムの住民とユダの人よ、さあ、わたしとわがぶどう畠との間をさばけ。わがぶどう畠になすべきことで、なお、何かわたしがしなかつたことがあるのか。なぜ、甘いぶどうのなるのを待ち望んだのに、酸いぶどうができたのか。さあ、今度はわたし、あなたがたに知らせよう。わたしがわがぶどう畠に對してすることを。その垣を除いて、荒れすたれるに任せ、その石垣をくずして、踏みつけるままにする。わたしは、これを滅びるままにしておく。枝はおろされず、草は刈られず、いばらとおどろが生い茂る。わたしは雲に命じて、この上に雨を降らせない。」

まことに、万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家。ユダの人は、主が喜んで植えつけたもの。主は公正を待ち望まれたのに、見よ、流血。正義を待ち望まれたのに、見よ、泣き叫び。

（イザヤ 5・1～7）

ああ、彼らのぶどうの木は、ソドムのぶどうの木から、ゴモラのぶどう畑からのもの。彼らのぶどうは毒ぶどう、そのふさは苦みがある。そのぶどう酒は蛇の毒、コブラの恐ろしい毒である。

（申命記 32・32、33）

主は、私のうちにいたつわものをみな追い払い、一つの群れを呼び集めて、私を攻め、私の若い男たちを滅ぼされた。主は、酒ぶねを踏むように、おとめユダの娘を踏みつぶされた。

（哀歌 1・15）

このように多くの箇所に記されている「ぶどうの木」は、悔い改めようとしないイスラエルの民を意味しています。イエス様を信じる十四万四千人のイスラエル人たちは、さばきに出会うことはありません。彼らは反キリストによつて苦しめられますが、イエス様によつて守られるのです。

さばきは祭壇から行なわれます。祭壇とは十字架の犠牲を表わしている場所です。イエス様の救いを信じる者は贖われて救われます。多くのイスラエル人たちはこの十字架を拒み祭壇を投げ

捨てたために、終わりの時にこの祭壇からさばきを受けることになるのです。

14節から16節にあるさばきでは、イスラエルに対する諸国民の迫害のあるなしによって、さばきは区別されていました。しかし17節から20節に述べられたさばきには、どのような区別もありません。ですからそのさばきはいつそう恐ろしいものになるのです。

救いの祭壇が、さばきの祭壇となるのです。容赦のない神の怒りが、悔い改めをしない人々に下されるのです。

それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。

(IIテサロニケ 2・12)

ぶどうを踏んでしほるということは、罪に対する神の怒りを示しています。

この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもつて彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。

(黙示 19・15)

神の怒りはパレスチナに現われます。ですからパレスチナは将来さらに荒れた場所になってしまいます。19節から20節には最終的な戦い、15章に出てくるハルマゲドンの戦いと同じことが簡単に記されています。この時、救われていないユダヤ人たちと諸国民とは、共同戦線をはつて、神に対する戦いを始めるのです。この戦いの一方の支配者は反キリストです。主ご自身が、この戦

いに際して人々を招かれます。主はご自身の永遠の勝利をよく知つておられるからです。
悔い改めないユダヤ人たちは、さばかれ、残りのユダヤ人たちは、救われます。このさばきは
決定的なものであり、このさばきからの救いはもはやありません。

20節にある、酒ぶねで踏まれる者は、救われることがなく滅ぼされます。イエス様の招きを拒
んだ者たちは、すべてさばかれ、滅び去るのです。

このさばきの激しさについて、20節では、その血が千六百スタディオン、つまり三百キロメー
トルまで広がるとあります。このことから、パレスチナの全土が血にまみれることがわかります。
この千六百という数字には何か意味があるのでしょうか。四十という数字は常に「長い期間」を
表わす数字です。四十の四十倍が千六百ですから、これは無限大を意味しています。つまり千六
百という数字は、決定的な、想像を絶するさばきを意味しているのです。

ハルマゲドンの戦いはこのように真に恐るべきものです。この「ハルマゲドンの戦い」につい
て、ここで少し学んでおきましょう。くわしくは15章で出てきます。
ハルマゲドンは、エルサレムの外にあるヨシヤバテの谷にあります。

わたしはすべての国民を集め、彼らをヨシヤバテの谷に連れ下り、その所で、彼らがわ
たしの民、わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで、彼らをさばく。彼らはわたしの
民を諸国の民の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分け取つたからだ。：諸国の民
は起き上がり、ヨシヤバテの谷に上つて来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々を

さばくために、さばきの座に着くからだ。

(ヨエル 3・2、12)

見よ。主の日が来る。その日、あなたから分捕つた物が、あなたの内で分けられる。わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。町は取られ、家々は略奪され、婦女は犯される。町の半分は捕囚となつて出て行く。しかし、残りの民は町から断ち滅ぼされない。主が出て来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。

(ゼカリヤ 14・1～4)

このハルマゲドンの戦いは、イエス様がエルサレムの町の外で犠牲になられたのと同じように、エルサレムの外で行なわれます。

ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負つて、宿営の外に出て、みもともに行こうではありませんか。

(ヘブル 13・13)

エルサレム自身は、この戦いによつて、損なわれることはあります。エルサレムの中においては守りと救いがあり、エルサレムの外ではさばきと滅びがあるのです。内側にいる者は救われ、外側にいる者は滅ぼされるのです。

そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といつしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。

(マタイ 25・10)

犬ども、魔術を行なう者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行なう者はみな、外に出される。

(黙示 22・15)

イエス様の犠牲を受け入れようとしない者は、エルサレムの外側においてさばきを受けることになります。しかし、二千年前に私たちの身代わりとしてイエス様の上にさばきが行なわれたことを信ずる者は、もはやさばきを受けることがないのです。

また、この石の上に落ちる者は、粉々に碎かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。

(マタイ 21・44)

なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」したがって、より頼んでいるあなたたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となつた。」のであって、「つまずきの石、妨げの岩。」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからですが、またそうなるように定められていたのです。

(I ペテロ 2・6～8)

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことが多く、死からいのちに移っているのです。

(ヨハネ 5・24)

イエス様は、今日もあなたに声をかけて招いておられます。イエス様は、罪の赦しと、いつまでも絶えることのない平安と、永遠のいのちを、提供しておられます。しかしイエス様は、まもなく世界の審判者として容赦のないさばきを行なわれます。イエス様は、すでにあなたの救い主、またあなたの主になつておられるでしようか。

さばきの中で守り通される者たち

默示録15章1節から8節まで

1. 巨大な驚くべきしるし
2. 勝利をかちえる殉教者たち
 - 1 殉教者のいる場所はどこか
 - 2 殉教者は誰か
 - 3 殉教者は何をしているのか
- 3 神の怒りの奉仕者

黙示録の15章は、ヨハネが「巨大な驚くべきしるし」を見たところから始まっています。

また私は、天にもう一つの巨大な驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。神の激しい怒りはここに窮まるのである。私は、火の混じった、ガラスの海のようなものを見た。獸と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々が、神の立琴を手にして、このガラスの海のほとりに立っていた。彼らは、神のしもべモーセの歌と子羊の歌とを歌つて言つた。

「あなたののみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ。あなたの道は正しく、眞実です。もちろろん民の王よ。主よ。だれがあなたを恐れず、御名をほめたたえない者があるでしょうか。ただあなただけが、聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。あなたの正しいさばきが、明らかにされたからです。」

その後、また私は見た。天にある、あかしの幕屋の聖所が開いた。⁶ そしてその聖所から、七つの災害を携えた七人の御使いが出て來た。彼らは、きよい光り輝く亞麻布を着て、胸には金の帶を締めていた。また、四つの生き物の一つが、永遠に生きておられる神の御怒りの満ちた七つの金の鉢を、七人の御使いに渡した。⁸ 聖所は神の栄光と神の大能から立ち上る煙で満たされ、七人の御使いたちの七つの災害が終わるまでは、だれもその聖所にはいることができなかつた。

(黙示 15・1~8)

この15章と次の16章とは続いていて、その内容は「七つの怒りの鉢」、「最後のさばきに続くイエス様の支配」、「反キリスト的な支配に対する最後のさばき」、そして「七人の御使いを通しての七つの鉢の注ぎ」です。

またこの15章の題名は「さばきの中で守り通される者たち」です。それは同時に「最後の苦しみに対する備え」を示しています。この章を三つの部分に分けて考えてみましょう。その三つの部分とは、「巨大な驚くべきしるし」、「勝利をおさめた殉教者たち」（2節から4節）、「神の怒りの奉仕者」（5節から8節）です。

1 「巨大な驚くべきしるし」

「巨大な驚くべきしるし」が現れるのは、福音が宣べ伝えられた後のことです。主はこの15章と16章で、ご自身に対立している人々に対して、さばきの内容を前もって知らせようとなさつておられます。

前に学んだように、「七つの封印のさばき」は地上の四分の一にもたらされ、「ラツパのさばき」は地上の三分の一にもたらされ、ここに見る「鉢のさばき」は、地上の全体にもたらされます。黙示録のこの部分には「巨大な驚くべきしるし」が記されています。これまでにも私たちは、黙視録の他の部分で「しるし」を見てきました。最初のしるしは12章の1節に記されていました。

また、巨大なしるしが天に現われた。ひとりの女が太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠をかぶっていた。

この「太陽を着た女」は、すでに学んだように、イスラエルの民を表わしています。イスラエルは将来、世界に光をもたらす民族になるのです。

第二のしるしも、12章3節に出てきます。

また、別のしるしが天に現われた。見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。
(黙示 12・3)

この竜は、年老いた蛇の悪魔です。悪魔は反キリストを通して、特にイスラエルの民を迫害するのです。

そして第三のしるしは、この15章の1節に出てきます。

また私は、天にもう一つの巨大な驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。神の激しい怒りはここに窮まるのである。
(黙示 15・1)

「ここ」に出てくる「しるし」は、「七つの災いをもつた七人の御使い」です。これをもつて、神の最後のさばきはすべて終わるのです。そしてこの最後のさばきについては、默示録の16章から19章までにくわしく記されています。

「七つの封印のさばき」と、「ラツバのさばき」は、終わりの時代のすべてを通して継続されます。しかし、「鉢のさばき」は、イエス様が神の御国を建設される直前の時代においてのみ行なわれます。そのとき、主はその怒りを決定的に注ぎだされるのです。

黙示録11章で、二十四人の長老たちは御座の前にひれ伏して「いまやあなたのさばきの時が来ました」と言っています。

…あなたの御怒りの日が来ました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。

（黙示 11・18）

旧約聖書では「さばき主としての神」は、「エロヒム・イエホヴァ・シャダイ」という言葉で示されています。この同じ言葉が黙示録11章17節、また15章3節の「万物の支配者である神」というところで使われています。

そして、この黙示録11章18節において「御怒りの日が来ました」と予告されていた主の怒りが、いま学んでいる15章以下で実現されます。そしてこの御怒りの日には、七人の御使いたちが主のためにさばきを行ないます。この御使いたちははつきりと目に見える姿を持っています。だからヨハネは「巨大な驚くべきしるしを見た」と記したのです。同じ意味のことを、パウロはテサロニケ人への手紙第2で述べています。

…そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起ります。このとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。

（IIテサロニケ 1・7～8）

イエラエルの歴史を思い出してみましょう。その昔、主はエジプトの圧制からイスラエルの民を解放しようとなさいました。そして苦難の終りのときにさばきの御使いがエジプトに遣わされ、エジプトの初子の男児がすべて殺されました。このさばきの後で解放が行なわれたのです。それと同じように、黙示録のこの箇所においても、「七つの怒りの鉢」が注ぎ出されたあとで、千年王国が立てられるのです。

このことによって私たちは、神の究極の目的がさばきにあるのではなく、ご自身のご栄光を現わされるためであることがわかります。さばきは、神に従わず、神に対して反抗的な民族を滅ぼすための手段にすぎません。このような「純化」を通さなければ、神の新しい創造は行なわれえないのです。

また、さばきとは、その人が運がわるいから、宿命だからそれを受けるというようなものではなく、主が神の使いを通して全人類に与えられるものです。「世界の破局」は、主を恐れない政治家や技術者、科学者などによる、人間の悪魔的な征服欲、破壊欲によつてもたらされるものばかりではないのです。

さらにさばきは、罪に対する神の怒りです。すべてのさばきは、一度に襲つてきます。私たちには「神の怒り」がどのようなものかを知ることはできません。ただ、「神の怒り」が想像を絶した恐ろしいものであることを知るだけです。「神の怒り」は、人々が恐れている核爆発などよりも、はるかに恐ろしいものです。

このさばきでは、いかなる罪も必ず罰せられます。愛において、神は神らしくあられたように、

怒りにおいても、神は神らしくあられます。しかしヨハネは、この恐るべきさばきを見る前に、これとは違つたすばらしいものを見たのでした。

2 勝利をかちえる殉教者たち

ヨハネが見たすばらしいものとは何でしようか。ヨハネは「勝利をかちえる殉教者たち」を見ることが許されたのです。もう一度その部分を、15章2節から4節で見てみましょう。

私は、火の混じつた、ガラスの海のようなものを見た。獸と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝つ人々が、神の立琴を手にして、このガラスの海のほとりに立つていた。彼らは、神のしもべモーセの歌と子羊の歌とを歌つて言つた。「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ。あなたの道は正しく、眞実です。もちろん民の王よ。主よ。だれがあなたを恐れず、御名をほめたたえない者があるでしょうか。ただあなただけが、聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひげ伏します。あなたの正しいさばきが、明らかにされたからです。」

(默示 15・2-4)

この部分で、私たちは三つのことを知ります。まず「殉教者のいる場所はどこか」、次いで「殉教者は誰か」、そして「殉教者は何をしているのか」です。

1 殉教者のいる場所はどこか

「殉教者のいる場所」は「ガラスの海」のある場所です。ガラスの海はどこにあるのでしょうか。それは神の御座の前にあります。神の御座は天にあります。したがつてこれらの殉教者たちは天にいるのです。ヨハネは、この記述に続く5節で「また私は見た。天にある、あかしの幕屋の聖所が開いた。」と書いています。神の御座は天の聖所にあるのです。

私たちもすでに、黙示録4章6節において「ガラスの海」について見てきました。

御座の前は、水晶に似たガラスの海のようであった。

(黙示 4・6)

また、旧約聖書にも、このガラスの海は、祭司たちが身を清めるための水が入っていた青銅の鉢として記されています。

それから、鑄物の海を作った。：海は、祭司たちがその中で身を洗うためのものであつた。

(II歴代 4・2、6)

しかし天にいる殉教者たちは、もはや身を清める必要はありません。彼らはすでに救われて聖められているからです。したがつて「ガラスの海」は、水ではなく、水晶という固いものになっています。「火のような海」は、殉教者たちがたどつた苦難の道を思わせます。またこの「水」は、主なる神とイエス様のもとから流れ出す「いのちの水」をも表わしています。

御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。

(黙示 22・1)

2節で、彼らは「火の混じった、ガラスの海」のそばにいます。この部分から私たちは、紅海のほとりに立つ勝利者の群れ、イスラエルの民のことを思い出します。人間的に見れば、彼らは紅海によって前をはばまれ、エジプトの軍勢によって後ろから攻められ、絶望的な状態におちいつていました。しかし、主の奇蹟の御手に救われて、彼らは紅海の向こう岸に渡ることができ喜んだのです。絶望的な状態の中から、主は彼らを助け出してくださったのです。

あなたは私の力の神であられるからです。

(詩篇 43・2)

2 殉教者はだれか

ついで私たちは、默示録15章2節にある、「打ち勝った人々」が誰であるかを考えてみましょう。彼らは、「獸と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々」つまり「勝利者」として記されています。ここに書かれているとおり、彼らは三つの点において勝利者なのです。

まず彼らは、反キリストに従つたり、反キリストを拝むことを拒みました。その拒み方は断固としたものでした。

次に彼らは、にせ預言者によつてだまされることはありませんでした。彼らは獸のしるしを受けませんでした。そして彼らは、そのようなゆるぎない態度のゆえに、その生命を犠牲にしたのです。すでに学んだように、默示録13章17節には、「その刻印、すなわち、あの獸の名、またはその名の数字を持つている者以外は、だれも、買うことも売ることもできないようにした。」とあり

血潮の価値

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が絢のよう
に赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のよう赤くても、羊の毛のようになる。」

(イザヤ 1・18)

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められ
るのです。

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公
にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯
されて来た罪を神の忍耐をもつて見のがして来られたからです。 (ローマ 3・24、25)

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たち
は互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(ヨハネ 1・7)

「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」
(ヨハネ 6・37)

3 私たちの身代わりとなられたイエス

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によつて、私たちはいやされた。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行つた。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。
(イザヤ 53・4～6)

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。
(Iペテロ 2・24)

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。
(IIコリント 5・21)

し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(イヨハネ 1・9)

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

(箴言 28・13)

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききつたからです。

私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

(詩篇 32・1～5)

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。

悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから。

(イザヤ 55・6、7)

私が神の御子の名を信じてゐるあなたがたに対してこれらのことと書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持つてゐることと、あなたがたによくわからせるためです。

(ヨハネ 5・13)

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。 (イペテロ 1・23)

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

(詩篇 119・105)

みことばのすべてはまことです。あなたの義のさばきはことばことばへ、とこしえに至ります。

(詩篇 119・160)

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。(詩篇 119・162)

悔い改めと信仰

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は眞実で正しい方ですから、その罪を赦

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださいでしょう。なお海外にもキリスト教会、よろこびの集いが広がっていますので、英語とドイツ語を入れました。ご活用ください。

1 美ことばの大切さ

真理によって彼らを聖め別つてください。あなたのみことばは真理です。

(ヨハネ 17・17)

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。

(エレミヤ 15・16)

まことに、あなたは喜びをもつて出て行き、安らかに導かれて行く。山と丘は、あなたがたの前で喜びの歌声をあげ、野の木々もみな、手を打ち鳴らす。　（イザヤ 55・12）

主に贖われた者たちは帰つて来る。彼らは喜び歌いながらシオンにはいり、その頭にはとこしえの喜びをいただく。楽しみと喜びがついて来、悲しみと嘆きとは逃げ去る。

（イザヤ 51・11）

恐れるな。わたし（主）はあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右手で、あなたを守る。

（イザヤ 41・10）

主はすべての国々の目の前に、聖なる御腕を現わした。地の果て果てもみな、私たちの神の救いを見る。

（イザヤ 52・10）

私たちは黙示録15章2節から4節で、大きな苦難を通りぬけてきた勝利者の群れを見てきました。そして私たちは、彼らの賛美と、礼拝と、証しの歌を見てきました。彼らの歌の中には、ほんのわずかな利己心も、復讐心も、犠牲と殉教を誇る心も見られません。ただ主のご栄光に対す
る願い、恐れと賛嘆と賛美、そして真の礼拝があるだけです。私たちも、主のご栄光のみを願い、心から賛美と礼拝をささげましょう。

人間の目から見れば、表面上は悪魔が暴れまわっているように見えるかもしれません。しかし、実は主の御使いがこれらを行っているのです。

人間の目から見れば、すべてが混乱しているように見えるかもしれません、主の目には、すべてが計画に従つて行なわれているのです。

人間の目から見れば、地獄が勝利をえたように見えるかもしれません、主の目から見れば、すべてが神の栄光を現わすために用いられているのです。

人間の目から見れば、主がその民を捨てさられたように見えるかもしれません、主は常にその民を見守つておられるのです。

人々はこれらについて、まちがつた考え方を抱きがちです。多くの人々は、時に、自分の人生が混乱してしまい、私たちは悪魔の力にもてあそばれており、自分は主の臨在から遠ざけられるのではないかと思つてしまします。

しかし、そのような時こそ、私たちは主のみことばを「目に見える現実よりもより確かなもの」として信じとおくことが大切です。そうすることによつてのみ、主は私たちにみこころを現わしてくださり、平安と確信に満ちた信仰と生活へと再び導いてくださるのです。

あなたが水の中を過ぎるときも、わたし（主）はあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押しながされない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。

(出エジプト 19・18)

そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。（出エジプト 40・34）

聖所に立ちのぼる煙は、主のご臨在を表わすものです。しかし同時に、主はそのご臨在を隠されることもあります。人類の罪が熟したために、聖なる、義なる主は、さばきを行なわないではいられなくなるのです。そして愛なる主は、悪をさばかれるとき、食い尽くす火となられます。

多くの人々は主に帰すべき栄光を反キリストに与えたのです。多くの人々は主の愛を足の下に踏みにじつたのです。多くの人々は悔い改めを求める主の声を拒んだのです。多くの人々は主の寛容を軽んじたのです。そしてその結果、神の怒りがいまや明らかにされようとしているのです。

さばきは最終的には主の御手から行なわれます。さばきそれ自体が主への奉仕であり、主のご栄光を明らかにするものだからです。さばきは時の権力者によつて行なわれるのではなく、主の御使いによつて行なわれます。つまり主がすべてを支配なさるのです。すべてのさばきは、主が定められた計画に従つて行なわれます。さばきは、人間の罪によつて呪いをうけた被造物の切なるうめきに対する答えとして行なわれます。

すべてのさばきにおいて、主ご自身が唯一の支配者です。

さばきのとき、人間の目から見れば、この世が地獄になつたように見えるかもしません。しかし、すべては主によつてなされているのです。

イエス様の足元に、自らの罪を言い表わし、イエス様に身をゆだねる者を、イエス様は決してさばかれることはありません。

御子を信じる者はさばかれない。

(ヨハネ 3・18)

「わたし（イエス様）のことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5・24)

しかしイエス様を拒む者は、イエス様のさばきを受けなければなりません。彼らは、主の御手におちいることの恐ろしさを体験しなければなりません。

私たちは8節にあるように、「聖所は神の栄光と神の大能から立ち上る煙りで満たされ」るのを見ることになります。同じ状況として、旧約聖書に、イザヤが汚れを清めていただくときには、宮が煙りで満たされたことが記されています。

その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙りで満たされた。

(イザヤ 6・4)

また、エジプトの地を出たイスラエルの民は、荒野において同じような体験をしました。

シナイ山は全山が煙つていた。それは主が火の中につって、山の上に降りて来られたからである。その煙は、かまどの煙のように立上り、全山が激しく震えた。

にやつてくるのです。神に対するあらゆる悪魔的、人間的な反逆は、さばきによって静められなければなりません。

7節にある「神の御怒りの満ちた七つの金の鉢」の中には、天地創造以来のすべての人間の不正と罪とがあふれています。主はこれらの不正と罪とをさばかれます。さばきは、主なる神の感情的な怒りから行なわれるではありません。主は、ほかに方法がまったくないときのみ、さばきを行なわれるのであります。この主なる神のさばきのご計画は、絶対的に正しく、誰も主のまちがいを指摘することはできません。主なる神のさばきと恵みのご計画には不正なところがあります。いつの時代にも、いかなるところでも、主は働いておられます。全能者として、主なる神は世界の歴史を導いておられます。

十七世紀以来、人類は自分たちの力によって世界を変えようと試みてきました。そしてそれがもたらした結果について深く反省しようとしたままでした。人類はどうしたら創造者である主の意にかなうかを問題にせず、ひたすら自分たちの判断に基づいて行動してきました。その結果の一つの例は、いわゆる環境汚染、公害に見られます。この環境汚染、公害は、現代人の意思や感情、思想の汚れを反映していると言えましょう。このような心の汚れ、反省と悔い改めのないこと、神に対しての反逆に対しても、ただ神のさばきが下されるだけです。

「金の鉢」は、本来は神へのいけにえを捧げるための鉢でした。人々が礼拝も、賛美も、感謝も、獻身も、従順も、愛も、神に捧げない場合においては、この鉢は「さばきの鉢」に変えられるのです。そしてイエス様はこの「さばきの鉢」を、全世界のために欲されるのです。

十戒を刻んだ板があり、それによつて祝福と呪い、いのちと死とが定められるのです。主のいましめを、主のみことばを守ろうとしなかつた人々はさばきを受けるのです。

神の御国を建設するためには、それに先立つて、さばきによつて、主による聖めがなされなければなりません。外面向に見れば、それは暴力的で破壊的なさばきに見えますが、主の真意は聖めであり、そのための主のさばきなのです。

神のさばきを行なう御使いたちは、イエス様と同じような着物を着ています。

彼らは、きよい光り輝く亞麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。 (黙示 15・6)

足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。

(黙示 1・13)

この衣は、汚れのない聖さを表わしています。金の帯は、来るべき御国における主の義の支配を意味しています。そして、イエス様と同じ衣を着た御使いたちは、きたるべき御国のためにさばきを行なうことを表わしています。私たちは、主に遣わされた御使いたちのさばきが、主に対する「礼拝」であることを知らなければなりません。私たちは困難の中において、常にこのことを忘れないようにし、誤りにおちいらないようにしなければなりません。

これらの御使いたちは、自然の力とか、悪魔的な力によつてさばきを行なうのではなく、「神に遣わされて」さばきを行なうのです。この御使いたちは、神の「損なわれた栄光を回復するため」

ム・シャダイ)と、呼びかけるのです。

黙示録7章と15章の比較もまた重要です。7章において、私たちはユダヤ人の群れ(1節から8節)と異邦人の群れ(9節から17節)との二つの群れを見てきました。二つの群れは、大きな苦難を通して救われた人々であり、千年王国において、重要な地位が与えられる人々です。

7章の二つの群れは、殺されませんでしたが、15章の二つの群れは、殉教によってその使命をまつとうしたのです。これらの群れは、神の御座の近くに置かれ、イエス様とともに、御国における支配者とされるのです。

3 神の怒りの奉仕者

黙示録15章1節のみことばは、この章全体の主題を表わしています。そして2節から4節までを見ると、殉教者たちが御座とガラスの海の前に座っています。ヨハネもまた、この殉教者たちのそばに座っています。

ところが5節になると、ヨハネは天の外に立っています。聖所の扉が開かれて主の怒りの奉仕者たちが出てくるのをヨハネは見ていています。

11章19節で学んだように、主は神殿を開かれ、その中の契約の箱を見せられました。契約の箱は、主のイスラエルに対する忠実さの証しです。旧約の時代には、民を祝福するために聖所から祭司が出てきました。しかし15章6節では、聖所から裁きの御使いたちが「鉢」を持って出てくるのです。つまり、神の聖所から、神の裁きが行なわれるのです。聖所の中には契約の箱の中に

す。あなたのさばきが地に行なわれるとき、世界の住民は義を学んだからです。

(イザヤ
26・9)

天は神の義を告げ知らせる。まことに神こそは審判者である。

(詩篇
50・6)

正しい主のさばきによって、神の義が明らかにされます。これは、ただ主のさばきを通してのみ可能です。すべての悔い改めたくない者たちは、神の国の実現の前にさばかれなければならぬのです。

默示録 15章3、4節と14章7節との比較は、意味深いものがあります。

「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

(默示
14・7)

終りの時代においては、「恵みの福音」ではなく、「御国と永遠の福音」が宣べ伝えられます。「御国と永遠の福音」が要求するところは、神の創造を認めることを通して、神への恐れと礼拝とが生じてきます。15章3、4節で歌われる歌によつて、この福音の要求が満たされるのです。「御国と永遠の福音」の結果、多くの国民が信仰に入ります。これらの信者たちは、主をもろもろの民の王、つまり諸国民の王と語りかけています。「御国と永遠の福音」の結果、ユダヤ人の殉教者たちが起こされ、彼らは、主を万物の支配者としての神（イエホヴァ・エロヒ

ての国民は神への礼拝のために集まるのです。すでに学んだ默示録13章4節、8節、12節、15節では、獸が自分を礼拝するように求めていました。しかし、終りのときには、主だけが礼拝を受けるにふさわしいお方となれます。そして来たるべき千年王国においてそれが実現されます。神の目的は次のみことばどおり、平和の國の建設を通して明らかにされているのです。

「また、あなたの民イスラエルの者でない外国人についても、彼があなたの御名のゆえに、遠方の地から来て、——彼らは、あなたの大きいなる御名と、力強い御手と、伸べられた腕について聞きますから。——この宮に来て祈るとき、あなたご自身が、あなたの御住いの所である天でこれを聞き、その外国人があなたに向かって願うことをすべてかなえてください。そうすれば、この地のすべての民が御名を知り、あなたの民イスラエルと同じように、あなたを恐れるようになり、私の建てたこの宮では、御名が呼び求められなくてはならないことを知るようになるでしょう。」

(I列王記 8・41～43)

・「あなたの正しいさばきが、明らかにされたからです。」

第七の証しは、「主の正しいさばきが明らかにされた」ということです。

確かに、主は地をさばくために来られる。主は義をもつて世界をさばき、公正をもつて國々の民を、さばかれる。

私のたましいは、夜あなたを慕います。まことに、私の内なる靈はあなたを切に求めま

(詩篇 98・9)

「あなただけが神です」と、主に向かつて言うことこそが最も重要です。

反キリストと悪魔と、にせ預言者は、何でも欲することができますが、いま、終りの時に
おいて、主が侵すことのできない神聖さをもつて、主ご自身を現わしておられるのです。この絶
対的な支配と栄光こそが、主のご目的です。

「聖なる方、真実なる方、ダビデのかぎを持つてゐる方、彼が開くとだれも閉じる物がな
く、彼が閉じるとだれも開く物がない。その方がこう言われる。」（黙示 3・7）

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常
にいまし、後に来られる方。」

（黙示 4・8）

「聖なる、真実な主よ。」

（詩篇 86・9）

・「すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。」

第六の証しは「すべての国々の民が来て、神の前に礼拝を捧げるためにひれ伏す」ことです。

主よ。あなたが造られたすべての国々は、あなたの御前に来て、伏し拝み、あなたの御
名をあがめましょう。

主だけが神ですから、礼拝を受けるにふさわしい方は主だけです。神の栄光に導かれて、すべ

たえることができなかつたのです。聖靈の目的は、主イエスにすべての栄光を帰させることです。私たちの目的は何でしようか。私たちは心から主の御名をたたえることができるでしようか。

・「ただあなただけが、聖なる方です。」

第五の証しは、「ただあなただけが聖なる方である」ということです。

私たちは罪に汚れていますが主だけは聖いお方です。そして主のもとには汚れを洗う泉が湧き出でています。主は神聖であられ、あらゆる悪から離れておられ、しかも恵みに満ちておられます。主のように聖なる方はありません。あなたに並ぶ者はないからです。

(I サムエル 2・2)

国々の民よ。大いなる、おそれおおい御名をほめたたえよ。主は聖である。

(詩篇 99・3)

主の御名は聖であり、おそれおおい。

(詩篇 111・9)

まことに、あなたは大いなる方、奇しいわざを行なわれる方です。あなただけが神です。

(詩篇 86・10)

私は神を恐れる者です。

(詩篇 86・2)

主よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。 (詩篇 86・11)

アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持つてきた。主は、アベルとそのささげ物とに目を留められた。 (創世記 4・4)

ウツの地にヨブという名の人がいた。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。

・「御名をほめたたえないものがあるでしょうか。」

第四の証しは、「すべての人々が主の御名をほめたたえる」ということです。

ダニエルはこう言った。「神の御名はどこしえからどこしえまではむべきかな。」

(ダニエル 2・20)

かつて反キリストは、すべての誉れを自分のものにしようとし、自分を称えることを人々に強要しました。しかし殉教者たちは主ご自身を知り体験したがゆえに、主以外のなにものもほめた

もあります。これらの道を通して、信者は、主が自分を正しい道へと導かれること、すなわち栄光の道へと導かれるることを知るのです。私たちが、正しく真実な生活へと導かれるためには、偽りが除かれなければなりません。

・「だれがあなたを恐れない者があるでしょうか。」

第三の証しは、「だれが神を恐れないでいらっしゃるか」ということです。

諸国の民の王よ。だれがあなたを恐れない者がありましようか。それは、あなたに対しても当然なことです。諸国の民のすべての知恵ある者たちの中にも、そのすべての王国の中にも、あなたと並ぶような者はいないからです。 (エレミヤ 10・7)

「神をおそれよ」ということは、聖書の全巻をとおして一貫している命令です。

神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとつてすべてである。 (伝道者 12・13)

すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。

(イペテロ 2・17)

神を恐れるということが、すべての信者の特徴です。聖書には、神を恐れる者が唯一の知恵ある者だと記されています。

時代にも、ひとしくこれを見ることがあります。默示録15章の歌の部分は、まず第一に、「イエホヴァ・エロヒム・シャダイ、万物の支配者としての神」への呼びかけと贊美に始まっています。

・「あなたの道は正しく、真実です。」

第二の証しは、すべての王である神のみわざは、正しく、真実であるということです。

主は岩。主のみわざは完全。まことに、主の道はみな正しい。主は真実の神で、偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。
(申命記 32・4)

主はご自分のすべての道において正しく、またすべてのみわざにおいて恵み深い。

(詩篇
145
・
17)

苦難の時代には、必ず主を証しする人々がいます。彼らは普通の人々が理解できないような方法で、主の真実を知っているのです。

天が地よりも高いように、わたし（主）の道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。
(イザヤ
55・9)

主が人を導かれる道は、常に正しく真実です。さばきにおいて私たちは、主の正しさを受け入れ、そのさばきが非情なものでないことを受け入れます。そして主の道は、同時に「恵みの道」で

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」
(黙示 4・8)

「しかし。主よ。万物の支配者である神よ。あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」

(黙示 16・7)

私は、この都の中に神殿を見なかつた。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。

(黙示 21・22)

私たちは、主のみわざの偉大さを、宇宙の秩序の中に、地球や月の運行の中に、季節の変化の中に、原子の配列の中に、また動植物の神秘の中に、さまざまと見ることができます。

私たちは、神のみわざの偉大さを、植物の種から実になるまでの成長と繁殖の中に、見ることができます。私たちは、神のみわざの偉大さを、海と陸とのかかわりの中に、天体間の距離のバランスの中に、人間の生活に適した気温の状態の中に、見ることができます。さらに私たちは、神のみわざの偉大さを、三十万種類以上の植物において、また百万種類以上の動物の種類において、見ることができます。

すべてのものの主であられる神のこのような偉大なみわざの記述は、旧約の時代にも、新約の

同じように人間的に見れば、イエス様は、十字架で敗北なさつたように見えます。しかし、神の目から見れば、イエス様は十字架上の死によつて勝利を得られたのです。

「モーセの歌と子羊の歌」はまた、賛美や礼拝の歌だけではなく、大きな「証し」でもあります。それは、旧約聖書における主の言葉の真実がここで証しされているからです。そして、3節後半から始まる「歌」は、七つの証しからなりたつていてることがわかります。

・「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。」

第一の証し、「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。」を学ぶに先立つて、聖書からいくつかの箇所を見てみましょう。

主よ。あなたのみわざはなんと大きいことでしょう。

（詩篇 92・5）

主のみわざは偉大で、みわざを喜ぶすべての人々に尋ね求められる。

（詩篇 111・2）

新しい歌を主に歌え。主は奇しいわざをなさつた。

（詩篇 98・1）

また次の箇所では、主は万物を支配なさるお方として証しされています。

見よ。山々を造り、風を造りだし、人にその思いが何であるかを告げ、暁と暗やみを造り、地の高い所を歩まれる方、その名は万軍の主。

（アモス 4・13）

大きな迫害と不安から解放されて、モーセとイスラエルの民は主をたたえる歌を歌いました。モーセの歌は「主の栄光をたたえ、主が悪魔に打ち勝たれたことに対する勝利の歌」でした。そしてそれはもちろん、モーセ個人をたたえた歌ではありません。このようにして神の力は、紅海のみわざの中にさばきとして示されたのです。

黙示録15章3節に戻りましょう。次に、ここでの歌は「子羊であるイエス様」をたたえて歌われています。「小羊の歌」とは、十字架の上で子羊として救いを完成してくださった神の御子イエス様をほめたたえる歌です。

終りの時代には、人々はイエス様を土台にしてのみ堅く立つことができます。子羊がすべてにまさって力あるお方です。これこそが彼らが体験したことです。彼らは子羊の獣に対する勝利が完成されたがゆえに、この歌を歌つてゐるのです。

黙示録の13章7節には、一見「獣」が勝利を得たかのように思われるところが出てきます。

彼（獣）はまた聖徒たちに戦いをいどんでも打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。

（黙示 13・7）

この部分だけを読むと、獣は勝利したように見えます。しかしその勝利は、人間の目から見て、そう見えるだけの偽りの勝利です。神の目から見たとき、打ち負かされた人々こそが眞の勝利者なのです。

3 殉教者は何をしているのか

黙示録15章3節で、これらの殉教者たちは、「神のしもべモーセの歌と子羊の歌とを歌つて」いるとあります。つまり彼らは「賛め歌を歌う者」として、「礼拝を捧げる者」として、「証しをする者」として、歌いながら神の御座に近づこうとしています。

まず、「モーセの歌」とは何を意味するのでしょうか。旧約聖書の出エジプト記を見ると、イスラエルの民を追うエジプトのパロの軍勢が、主によつて海の中に投げ込まれ、全滅したとき、モーセが神に向かつて歌つた歌が記されています。

「主に向かつて私は歌おう。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに。…主よ。あなたの右の手は力に輝く。主よ。あなたの右の手は敵を打ち碎く。…主よ。神々のうち、だれがあなたのような方があるでしょうか。だれがあなたのように、聖であつて力強く、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行なうことができましようか。…主はどこしえまでも統べ治められる。」（出エジプト 15・1、6、11、18）

イスラエルを滅ぼそうとしたパロは、反キリストの雛形です。エジプトの力は、主なる神によつて打ちやぶられたのです。

こうして、主はその日イスラエルをエジプトの手から救われた。イスラエルは海辺に死んでいるエジプト人を見た。イスラエルは主がエジプトに行なわれたこの大いなる御力を見たので、民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。（出エジプト 14・30、31）

ます。生きていくための糧が買えなくなり、それを絶たれることは死を選ぶことを意味します。それでも彼らは獸の刻印を拒否し、妥協よりも苦難と死を選んだのです。

彼らは死にいたるまでイエス様に忠実だったのです。彼らはイエス様が預言なさつたように、憎まれ、迫害され、そして殺されたのです。

そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎られます。

（マタイ 24・9）

表面的には、彼らは殺されることによつて敗北したかのように見えますが、彼らの死は、実は勝利を意味しています。ですから彼らは、神の御座の近くにいるのです。一方、反キリストに従つた者たちは、14章10節にあるとおり「神の怒りのぶどう酒を飲まされた」のです。

主に対する忠実さを、死をもつてまつとうした人々こそ打ち勝つた人々です。そして主は彼らを復活させられたのです。彼らは第一の復活にあずかる人々です。

∴彼らは生き返つて、キリストとともに、千年の間王となつた。

（黙示 20・4）

これらの殉教者たちは、イエス様のためにいのちを捨て、いまや御座のまわりにいて、神をたたえる者になつたのです。

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

(エペソ 1・7)

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によつたのです。

(イペテロ 1・18、19)

兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝つた。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかつた。

(黙示 12・11)

5 確信の根拠

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造つた方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖つたのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」

(イザヤ 43・1)

「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあ

あなたの罪を思い出さない。」

(イザヤ 43・25)

「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去つた。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖つたからだ。」

(イザヤ 44・22)

そして女に、「あなたの罪は赦されています。」と言われた。

(ルカ 7・48)

「なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」

(ヘブル 8・12)

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出することはしない。」(ヘブル 10・17)

東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

(詩篇 103・12)

金錢を愛する生活をしてはいけません。いま持つてあるもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。

人間が、私に対して何ができるでしょうか。」

(ヘブル 13・5、6)

6 思いわずらうな

また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしこがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。

(マタイ 13・22)

だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養つていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もつとすぐれたものではありませんか。

あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾つてはいませんでした。

きょうあつても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装つてくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありましょうか。信仰の薄い人たち。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言つて心配するのはやめなさい。

こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知つておられます。

(マタイ 6・25～32)

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによつて、あなたがたの願い事を神に知つていただきなさい。

そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。

(ピリピ 4・6、7)

あなたがたの思い煩いを、いつさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

堅く信仰に立つて、この悪魔に立ち向かいなさい。（ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。）（Iペテロ 5・7～9）

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださいさる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。

（詩篇 55・22）

7 試練の時

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

（ヤコブ 1・12）

ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。（ヤコブ 4・7、8）

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は眞実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(イコリント 10・13)

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよう、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

堅く信仰に立つて、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通つて來たのです。

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくださつた神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

(イペテロ 5・8～10)

あなたがたは、信仰により、神の御力によつて守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。

そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、

信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエ

ス・キリストの現われのときに称賛と光栄と榮誉に至るものであることがわかります。

(Iペテロ 1・5～7)

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

(IIコリント 12・9、10)

そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることはありません。なぜなら、私たちに与えられた聖靈によつて、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

(ローマ 5・3～5)

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従つて召された人々のためには、神がすべてのこととを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8・28)

疲れた者には力を与え、精力のない者には活氣をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男

もつまづき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷺のように翼をかつて上ることができる。走つてもたゆまず、歩いても疲れない。

(イザヤ 40・29～31)

基礎的なみことば

ist ausgegossen in unsere Herzen durch den Heiligen Geist, der uns gegeben worden ist. (Römer 5, 3-5)

Wir wissen aber, daß denen, die Gott lieben, alle Dinge zum Guten mitwirken, denen, die nach «seinem» Vorsatz berufen sind. (Römer 8, 28)

Er gibt dem Müden Kraft und dem Ohnmächtigen mehrt er die Stärke. Jünglinge ermüden und ermatten, und junge Männer straucheln «und stürzen.

Aber die auf den HERRN hoffen, gewinnen neue Kraft: sie heben die Schwingen empor wie die Adler, sie laufen und ermatten nicht, sie gehen und ermüden nicht. (Jesaja 40, 29-31)

Dem widersteht standhaft durch den Glauben, da ihr wißt, daß dieselben Leiden sich an eurer Bruderschaft in der Welt vollziehen.

Der Gott aller Gnade aber, der euch berufen hat zu seiner ewigen Herrlichkeit in Christus, er selbst wird <euch>, die ihr eine kurze Zeit gelitten habt, vollkommen machen, befestigen, kräftigen, gründen. (1. Petrus 5, 8-10)

... die ihr in der Kraft Gottes durch Glauben bewahrt werdet zur Errettung, <die> bereit <ist>, in der letzten Zeit geoffenbart zu werden. Darin frohlockt ihr, die ihr jetzt eine kleine Zeit, wenn es nötig ist, in mancherlei Versuchungen betrübt worden seid, damit die Bewährung eures Glaubens viel kostbarer erfunden wird als die des vergänglichen Goldes, das aber durch Feuer erprobt wird, zu Lob und Herrlichkeit und Ehre in der Offenbarung Jesu Christi; ... (1. Petrus 1, 5-7)

Und er hat zu mir gesagt: Meine Gnade genügt dir, denn <meine> Kraft kommt in Schwachheit zur Vollendung. Sehr gerne will ich mich nun vielmehr meiner Schwachheiten rühmen, damit die Kraft Christi bei mir wohne.

Deshalb habe ich Wohlgefallen an Schwachheiten, an Mißhandlungen, an Nöten, an Verfolgungen, an Ängsten um Christi willen; denn wenn ich schwach bin, dann bin ich stark. (2. Korinther 12, 9-10)

Nicht allein aber das, sondern wir rühmen uns auch in den Trübsalen, da wir wissen, daß die Trübsal Ausharren bewirkt, das Ausharren aber Bewährung, die Bewährung aber Hoffnung; die Hoffnung aber läßt nicht zuschanden werden, denn die Liebe Gottes

基礎的なみことば

... indem ihr alle eure Sorge auf ihn werft; denn er ist besorgt für euch. Seid nüchtern, wacht! Euer Widersacher, der Teufel, geht umher wie ein brüllender Löwe und sucht, wen er verschlingen könne. Dem widersteht standhaft durch den Glauben, da ihr wißt, daß dieselben Leiden sich an eurer Bruderschaft in der Welt vollziehen. (1. Petrus 5, 7-9)

Wirf auf den HERRN deine Last, und er wird dich erhalten; er wird nimmermehr zulassen, daß der Gerechte wankt. (Psalm 55, 23)

7. Bei Glaubensprüfungen

Glückselig der Mann, der die Versuchung erduldet! Denn nachdem er bewährt ist, wird er den Siegeskranz des Lebens empfangen, den er denen verheißen hat, die ihn lieben. (Jakobus 1, 12)

Unterwerft euch nun Gott! Widersteht aber dem Teufel, und er wird von euch fliehen.

Naht euch Gott, und er wird sich euch nahen. Säubert die Hände, ihr Sünder, und reinigt die Herzen, ihr Wankelmütigen! (Jakobus 4, 7-8)

Keine Versuchung hat euch ergriffen als nur eine menschliche; Gott aber ist treu, der nicht zulassen wird, daß ihr über euer Vermögen versucht werdet, sondern mit der Versuchung auch den Ausgang schaffen wird, so daß ihr sie ertragen könnt. (1. Korinther 10, 13)

Seid nüchtern, wacht! Euer Widersacher, der Teufel, geht umher wie ein brüllender Löwe und sucht, wen er verschlingen könne.

die Sorge der Zeit und der Betrug des Reichtums ersticken das Wort,
und er bringt keine Frucht. (Matthäus 13, 22)

Deshalb sage ich euch: Seid nicht besorgt für euer Leben, was ihr essen und was ihr trinken sollt, noch für euren Leib, was ihr anziehen sollt. Ist nicht das Leben mehr als die Speise und der Leib mehr als die Kleidung?

Seht hin auf die Vögel des Himmels, daß sie nicht säen noch ernten, noch in Scheunen sammeln, und euer himmlischer Vater ernährt sie <doch>. Seid ihr nicht viel vorzüglicher als sie?

Wer aber unter euch kann mit Sorgen seiner Lebenslänge eine Elle zusetzen?

Und warum seid ihr um Kleidung besorgt? Betrachtet die Lilien des Feldes, wie sie wachsen: sie mühen sich nicht, auch spinnen sie nicht. Ich sage euch aber, daß selbst nicht Salomo in all seiner Herrlichkeit bekleidet war wie eine von diesen.

Wenn aber Gott das Gras des Feldes, das heute steht und morgen in den Ofen geworfen wird, so kleidet, <wird er das> nicht vielmehr euch <tun>, ihr Kleingläubigen?

So seid nun nicht besorgt, indem ihr sagt: Was sollen wir essen? Oder: Was sollen wir trinken? Oder: Was sollen wir anziehen?

Denn nach diesem allen trachten die Nationen; denn euer himmlischer Vater weiß, daß ihr dies alles benötigt. (Matthäus 6, 25-32)

Seid um nichts besorgt, sondern laßt in allem durch Gebet und Flehen mit Danksagung eure Anliegen vor Gott kundwerden; und der Friede Gottes, der allen Verstand übersteigt, wird eure Herzen und eure Gedanken bewahren in Christus Jesus. (Philipper 4, 6-7)

基礎的なみことば

Ich habe dich bei deinem Namen gerufen, du bist mein. (Jesaja 43, 1)

Ich, ich bin es, der deine Verbrechen auslöscht um meinetwillen, und deiner Sünden will ich nicht gedenken. (Jesaja 43, 25)

Ich habe deine Verbrechen ausgelöscht wie einen Nebel und wie eine Wolke deine Sünden. Kehre um zu mir, denn ich habe dich erlöst! (Jesaja 44, 22)

Er aber sprach zu ihr: Deine Sünden sind vergeben. (Lukas 7, 48)

Denn ich werde ihren Ungerechtigkeiten gnädig sein, und ihrer Sünden werde ich nie mehr gedenken. (Hebräer 8, 12)

. . . und: »Ihrer Sünden und ihrer Gesetzlosigkeiten werde ich nicht mehr gedenken.« (Hebräer 10, 17)

So fern der Osten ist vom Westen, hat er von uns entfernt unsere Vergehen. (Psalm 103, 12)

Der Wandel sei ohne Geldliebe; begnügt euch mit dem, was vorhanden ist, denn er hat gesagt: »Ich will dich nicht versäumen noch verlassen«, so daß wir zuversichtlich sagen können: »Der Herr ist mein Helfer, ich will mich nicht fürchten. Was soll mir ein Mensch tun?« (Hebräer 13, 5-6)

6. Sorgen verboten!

Wo aber unter die Dornen gesät ist, dieser ist es, der das Wort hört, und

... und [alle] werden umsonst gerechtfertigt durch seine Gnade, durch die Erlösung, die in Christus Jesus ist.

Ihn hat Gott dargestellt zu einem Sühneort durch den Glauben an sein Blut zum Erweis seiner Gerechtigkeit wegen des Hingehenlassens der vorher geschehenen Sünden unter der Nachsicht Gottes; . . . (Römer 3, 24-25)

Wenn wir aber im Licht wandeln, wie er im Licht ist, haben wir Gemeinschaft miteinander, und das Blut Jesu, seines Sohnes, reinigt uns von jeder Sünde. (1. Johannes 1, 7)

In ihm haben wir die Erlösung durch sein Blut, die Vergebung der Vergehungen, nach dem Reichtum seiner Gnade, . . . (Epheser 1, 7)

... denn ihr wißt, daß ihr nicht mit vergänglichen Dingen, mit Silber oder Gold, erlöst worden seid von eurem eitlen, von den Vätern überlieferten Wandel,
sondern mit dem kostbaren Blut Christi als eines Lammes ohne Fehler und ohne Flecken. (1. Petrus 1, 18-19)

Und sie haben ihn überwunden um des Blutes des Lammes und um des Wortes ihres Zeugnisses willen, und sie haben ihr Leben nicht geliebt bis zum Tod! (Offenbarung 12, 11)

5. Über die Heilsgewißheit

Aber jetzt, so spricht der HERR, der dich geschaffen, Jakob, und der dich gebildet hat, Israel: Fürchte dich nicht, denn ich habe dich erlöst!

Alles, was mir der Vater gibt, wird zu mir kommen, und wer zu mir kommt, den werde ich nicht hinausstoßen; . . . (Johannes 6, 37)

3. Jesus als Stellvertreter

Jedoch unsere Leiden — er hat **«sie»** getragen, und unsere Schmerzen — er hat sie auf sich geladen. Wir aber, wir hielten ihn für bestraft, von Gott geschlagen und niedergebeugt.

Doch er war durchbohrt um unserer Vergehen willen, zerschlagen um unserer Sünden willen. Die Strafe lag auf ihm zu unserm Frieden, und durch seine Striemen ist uns Heilung geworden.

Wir alle irrten umher wie Schafe, wir wandten uns jeder auf seinen **«eigenen»** Weg; aber der HERR ließ ihn treffen unser aller Schuld. — (Jesaja 53, 4-6)

... der unsere Sünden an seinem Leib selbst an das Holz hinaufgetragen hat, damit wir, den Sünden abgestorben, der Gerechtigkeit leben; durch dessen Striemen ihr geheilt worden seid. (1. Petrus 2, 24)

Den, der Sünde nicht kannte, hat er für uns zur Sünde gemacht, damit wir Gottes Gerechtigkeit würden in ihm. (2. Korinther 5, 21)

4. Vom Wert des vergossenen Blutes

Kommt denn und laßt uns miteinander rechten! spricht der HERR. Wenn eure Sünden rot wie Karmesin sind, wie Schnee sollen sie weiß werden. Wenn sie rot sind wie Purpur, wie Wolle sollen sie werden. (Jesaja 1, 18)

2. Über Buße und Glauben

Wenn wir unsere Sünden bekennen, ist er treu und gerecht, daß er uns die Sünden vergibt und uns reinigt von jeder Ungerechtigkeit. (1. Johannes 1, 9)

Wer seine Verbrechen zudeckt, wird keinen Erfolg haben; wer sie aber bekennt und läßt, wird Erbarmen finden. (Sprüche 28, 13)

Glücklich der, dem Übertretung vergeben, dem Sünde zugedeckt ist!
Glücklich der Mensch, dem der HERR die Schuld nicht zurechnet und in dessen Geist kein Trug ist!

Als ich schwieg, zerfielen meine Gebeine durch mein Gestöhn den ganzen Tag.

Denn Tag und Nacht lastete auf mir deine Hand; verwandelt wurde mein Saft in Sommergluten.

So tat ich dir kund meine Sünde und deckte meine Schuld nicht zu. Ich sagte: ich will dem HERRN meine Übertretungen bekennen; und du, du hast vergeben die Schuld meiner Sünde. (Psalm 32, 1-5)

Sucht den HERRN, während er sich finden läßt! Ruft ihn an, während er nahe ist.

Der Gottlose verlasse seinen Weg und der Mann der Bosheit seine Gedanken! Und er kehre um zu dem HERRN, so wird er sich über ihn erbarmen, und zu unserem Gott, denn er ist reich an Vergebung! (Jesaja 55, 6-7)

BIBELVERSE

1. Gottes Wort als einziges Fundament

Heilige sie durch die Wahrheit: dein Wort ist Wahrheit. (Johannes 17, 17)

Fanden sich Worte von dir, dann habe ich sie gegessen, und deine Worte waren mir zur Wonne und zur Freude meines Herzens; denn dein Name ist über mir ausgerufen, HERR, Gott der Heerscharen. (Jeremia 15, 16)

Dies habe ich euch geschrieben, damit ihr wißt, daß ihr ewiges Leben habt, die ihr an den Namen des Sohnes Gottes glaubt. (1. Johannes 5, 13)

. . . denn ihr seid wiedergeboren nicht aus vergänglichem Samen, sondern aus unvergänglichem durch das lebendige und bleibende Wort Gottes. (1. Petrus 1, 23)

Eine Leuchte für meinen Fuß ist dein Wort, ein Licht für meinen Pfad. (Psalm 119, 105)

Die Summe deines Wortes ist Wahrheit, und jedes Urteil deiner Gerechtigkeit <hält> ewig. (Psalm 119, 160)

Ich freue mich über dein Wort wie einer, der große Beute macht. (Psalm 119, 162)

love into our hearts by the Holy Spirit, whom he has given us. (Romans 5:3-5)

And we know that in all things God works for the good of those who love him, who have been called according to his purpose. (Romans 8:28)

He gives strength to the weary and increases the power of the weak. Even youths grow tired and weary, and young men stumble and fall; but those who hope in the Lord will renew their strength. They will soar on wings like eagles; they will run and not grow weary, they will walk and not be faint. (Isaiah 40:29-31)

基礎的なみことば

Resist him, standing firm in the faith, because you know that your brothers throughout the world are undergoing the same kind of sufferings.

And the God of all grace, who called you to his eternal glory in Christ, after you have suffered a little while, will himself restore you and make you strong, firm and steadfast. (I Peter 5:8-10)

... who through faith are shielded by God's power until the coming of the salvation that is ready to be revealed in the last time.

In this you greatly rejoice, though now for a little while you may have had to suffer grief in all kinds of trials.

These have come so that your faith-of greater worth than gold, which perishes even though refined by fire-may be proved genuine and may result in praise, glory and honor when Jesus Christ is revealed. (I Peter 1:5-7)

But he said to me, "My grace is sufficient for you, for my power is made perfect in weakness." Therefore I will boast all the more gladly about my weaknesses, so that Christ's power may rest on me.

That is why, for Christ's sake, I delight in weaknesses, in insults, in hardships, in persecutions, in difficulties. For when I am weak, then I am strong. (II Corinthians 12:9-10)

Not only so, but we also rejoice in our sufferings, because we know that suffering produces perseverance; perseverance, character; and character, hope.

And hope does not disappoint us, because God has poured out his

Be self-controlled and alert. Your enemy the devil prowls around like a roaring lion looking for someone to devour.

Resist him, standing firm in the faith, because you know that your brothers throughout the world are undergoing the same kind of sufferings. (I Peter 5:7-9)

Cast your cares on the Lord and he will sustain you; he will never let the righteous fall. (Psalms 55:22)

7. Times of trial

Blessed is the man who perseveres under trial, because when he has stood the test, he will receive the crown of life that God has promised to those who love him. (James 1:12)

Submit yourselves, then, to God. Resist the devil, and he will flee from you.

Come near to God and he will come near to you. Wash your hands, you sinners, and purify your hearts, you double-minded. (James 4:7-8)

No temptation has seized you except what is common to man. And God is faithful; he will not let you be tempted beyond what you can bear. But when you are tempted, he will also provide a way out so that you can stand up under it. (I Corinthians 10:13)

Be self-controlled and alert. Your enemy the devil prowls around like a roaring lion looking for someone to devour.

基礎的なみことば

wealth choke it, making it unfruitful. (Matthew 13:22)

"Therefore I tell you, do not worry about your life, what you will eat or drink; or about your body, what you will wear. Is not life more important than food, and the body more important than clothes?

Look at the birds of the air; they do not sow or reap or store away in barns, and yet your heavenly Father feeds them. Are you not much more valuable than they?

Who of you by worrying can add a single hour to his life?

"And why do you worry about clothes? See how the lilies of the field grow. They do not labor or spin.

Yet I tell you that not even Solomon in all his splendor was dressed like one of these.

If that is how God clothes the grass of the field, which is here today and tomorrow is thrown into the fire, will he not much more clothe you, O you of little faith?

So do not worry, saying, 'What shall we eat?' or 'What shall we drink?' or 'What shall we wear?'

For the pagans run after all these things, and your heavenly Father knows that you need them. (Matthew 6:25-32)

Do not be anxious about anything, but in everything, by prayer and petition, with thanksgiving, present your requests to God.

And the peace of God, which transcends all understanding, will guard your hearts and your minds in Christ Jesus. (Philippians 4:6-7)

Cast all your anxiety on him because he cares for you.

"I, even I, am he who blots out your transgressions, for my own sake, and remembers your sins no more. (Isaiah 43:25)

I have swept away your offenses like a cloud, your sins like the morning mist. Return to me, for I have redeemed you. (Isaiah 44:22)

Then Jesus said to her, "Your sins are forgiven." (Luke 7:48)

For I will forgive their wickedness and will remember their sins no more. (Hebrews 8:12)

Then he adds: "Their sins and lawless acts I will remember no more." (Hebrews 10:17)

... as far as the east is from the west, so far has he removed our transgressions from us. (Psalms 103:12)

Keep your lives free from the love of money and be content with what you have, because God has said, "Never will I leave you; never will I forsake you."

So we say with confidence, "The Lord is my helper; I will not be afraid. What can man do to me?" (Hebrews 13:5-6)

6. Worries are forbidden

The one who received the seed that fell among the thorns is the man who hears the word, but the worries of this life and the deceitfulness of

基礎的なみことば

blood. He did this to demonstrate his justice, because in his forbearance he had left the sins committed beforehand unpunished- (Romans 3: 24-25)

But if we walk in the light, as he is in the light, we have fellowship with one another, and the blood of Jesus, his Son, purifies us from all sin. (I John 1:7)

In him we have redemption through his blood, the forgiveness of sins, in accordance with the riches of God's grace (Ephesians 1:7)

For you know that it was not with perishable things such as silver or gold that you were redeemed from the empty way of life handed down to you from your forefathers,
but with the precious blood of Christ, a lamb without blemish or defect.
(I Peter 1:18-19)

They overcame him by the blood of the Lamb and by the word of their testimony; they did not love their lives so much as to shrink from death. (Revelation 12:11)

5. Certainty of salvation

But now, this is what the Lord says-he who created you, O Jacob, he who formed you, O Israel: "Fear not, for I have redeemed you; I have summoned you by name; you are mine. (Isaiah 43:1)

3. Jesus as representative

Surely he took up our infirmities and carried our sorrows, yet we considered him stricken by God, smitten by him, and afflicted.

But he was pierced for our transgressions, he was crushed for our iniquities; the punishment that brought us peace was upon him, and by his wounds we are healed.

We all, like sheep, have gone astray, each of us has turned to his own way; and the Lord has laid on him the iniquity of us all. (Isaiah 53:4-6)

He himself bore our sins in his body on the tree, so that we might die to sins and live for righteousness; by his wounds you have been healed.
(I Peter 2:24)

God made him who had no sin to be sin for us, so that in him we might become the righteousness of God. (II Corin-thians 5:21)

4. Value of Jesus's blood

"Come now, let us reason together," says the Lord. "Though your sins are like scarlet, they shall be as white as snow; though they are red as crimson, they shall be like wool. (Isaiah 1:18)

... and [all] are justified freely by his grace through the redemption that came by Christ Jesus.

God presented him as a sacrifice of atonement, through faith in his

2. Repentance and faith

If we confess our sins, he is faithful and just and will forgive us our sins and purify us from all unrighteousness. (I John 1:9)

He who conceals his sins does not prosper, but whoever confesses and renounces them finds mercy. (Proverbs 28:13)

Blessed is he whose transgressions are forgiven, whose sins are covered.

Blessed is the man whose sin the Lord does not count against him and in whose spirit is no deceit.

When I kept silent, my bones wasted away through my groaning all day long.

For day and night your hand was heavy upon me; my strength was sapped as in the heat of summer.

Then I acknowledged my sin to you and did not cover up my iniquity. I said, "I will confess my transgressions to the Lord"-and you forgave the guilt of my sin. (Psalms 32:1-5)

Seek the Lord while he may be found; call on him while he is near. Let the wicked forsake his way and the evil man his thoughts. Let him turn to the Lord, and he will have mercy on him, and to our God, for he will freely pardon. (Isaiah 55:6-7)

All that the Father gives me will come to me, and whoever comes to me I will never drive away. (John 6:37)

BIBLE VERSES

1. God's word as the only true guide

Sanctify them by the truth; your word is truth. (John 17:17)

When your words came, I ate them; they were my joy and my heart's delight, for I bear your name, O Lord God Almighty. (Jeremiah 15:16)

I write these things to you who believe in the name of the Son of God so that you may know that you have eternal life. (1 John 5:13)

For you have been born again, not of perishable seed, but of imperishable, through the living and enduring word of God. (1 Peter 1: 23)

Your word is a lamp to my feet and a light for my path. (Psalms 119: 105)

All your words are true; all your righteous laws are eternal. (Psalms 119:160)

I rejoice in your promise like one who finds great spoil. (Psalms 119: 162)

すぐに起こるはずのこと 「ヨハネの默示録」 第1・2巻のおすすめ

ヨハネの默示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし默示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、靈的に正しく読み解くことは困難になってしまいます。しかし、この默示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの默示録に、もつと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の婦人のための学び会で、約1年半ほどの間に行なわれたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には默示録の第1、2、3章が、第2巻には默示録の4、5、6、7章が収められています。この「すぐに起こるはずのこと」は、引き続いて次々に刊行されていく予定です。

ゴットホルト・ベック著

すぐに起こるはずのこと 「ヨハネの默示録」

第1巻 價三〇〇円
第2巻 價二五〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所（電話番号も記入の上）〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町4-19-11 吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。



実を結ぶ命がんにうち勝つたドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」

(エレミヤ 31・3)

リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたりバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ振り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。さらに病床にあつて本の読めない方々のために、PBAのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ(8本一組)があります。

ゴットホルト・ベック編著
実を結ぶ命 がんにうち勝つたドイツ少女リンデ

価格三三〇円

お申込みはハガキに本の名前(第何集、上下巻の別)、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180-0004武藏野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。



光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズのおすすめ

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々生きができるようになったかを、多くの方々が証されています。第1集から第9集まであり、実に五九六人の方々それぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。このシリーズは9集まですでに五十万部を越えてひろく愛読されています。

光よあれ

私たちは主のもの 証しシリーズ

第1集

25人の証し
価三三〇円

第4集

66人の証し
価三五〇円

第7集

69人の証し
価四〇〇円

第2集

25人の証し
価三五〇円

第5集

67人の証し
価三八〇円

第8集

88人の証し
価四〇〇円

第3集

42人の証し
価三三〇円

第6集

70人の証し
価三八〇円

第9集

144人の証し
価四〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180-0004
武藏野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト教会まで。代金と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込
みください。

絶えず祈れのおすすめ

ゴットホルド・ベック著

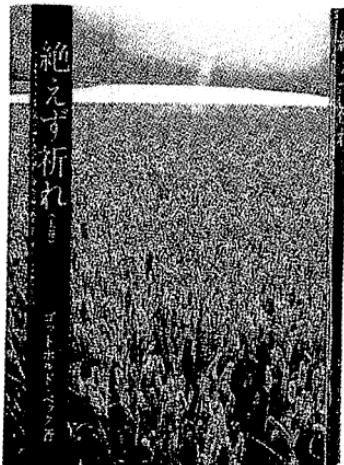
主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を私たちにそぞろとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえにそそがれるとびらを開けるのです。祈りのほんとうのたいせつさをよく知ることができれば、まだ救われていないかたがたはイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われているかたがたは、いまよりもさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るためのはげましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」「まことの祈り」「祈りへのまねき」「真剣な祈り」「祭司としての奉仕」「イエスのみ名によって祈る」「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージがおさめられています。

絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

上巻価四〇〇円・下巻価二五〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、
冊数、氏名、住所、電話番号記入の上〒180-0
004 武藏野市吉祥寺本町4-9-11 吉祥寺キリスト
教会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振
込用紙でお振込みください。





なものも私たちを**神の愛**から引き離すことはできない（上・下巻）ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト教会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追つて学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い靈的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願つておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

なものも私たちを
神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック編著
各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、
冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180-10
00-4 武藏野市吉祥寺本町4-9-11 吉祥寺キリスト
教会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振
込用紙でお振込みください。

キリスト集会の「」案内

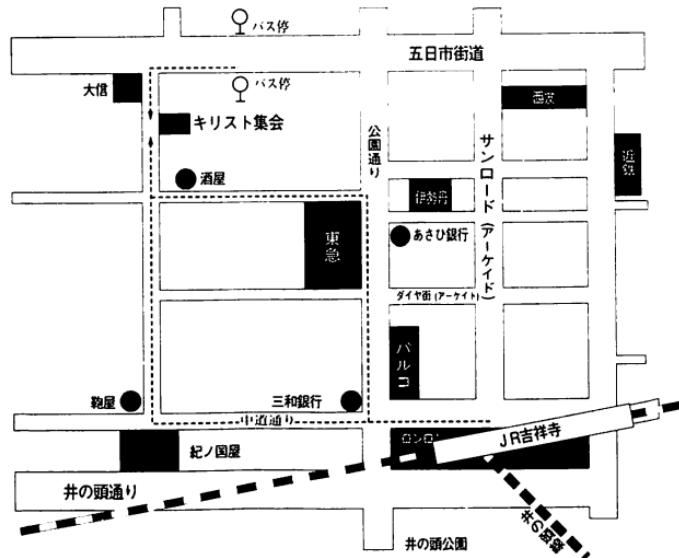
- ・牧師制度がありません……キリスト集会には牧師制度はありません。いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いつさいの強制ではなく、純粹に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとひとの集いです。
- ・組織も、会則もありません……キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもつてなされます。
- ・会員制度がありません……会員として登録されるようないわゆる会員名簿にあたるものはありません。出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいつさい排除して、主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。
- ・献金制度がありません……月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行なわれ、無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。
- ・日曜礼拝……祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあざかります。あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。礼拝の後は福音集会で、兄弟によつて主のみことばがとりつがれます。
- ・家庭集会……家庭でひらかれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音の喜びをつたえる集いです。世界で百箇所以上あり、多くの所で日曜礼拝が行なわれます。
- ・よろこびの集い……西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国のひとびとが集まる大きな集会です。快適で経済的な宿泊設備を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会のご案内

私たちは、純粹に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになつて聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。

吉祥寺キリスト集会

G. ベック	0422-22-2016	東京都武藏野市吉祥寺本町4-9-11	〒180-0004
日曜礼拝	10:30	14:00	19:00
日曜メッセージ	12:00	15:00	20:00
子供日曜学校		9:00	
中高生日曜クラス		9:00	



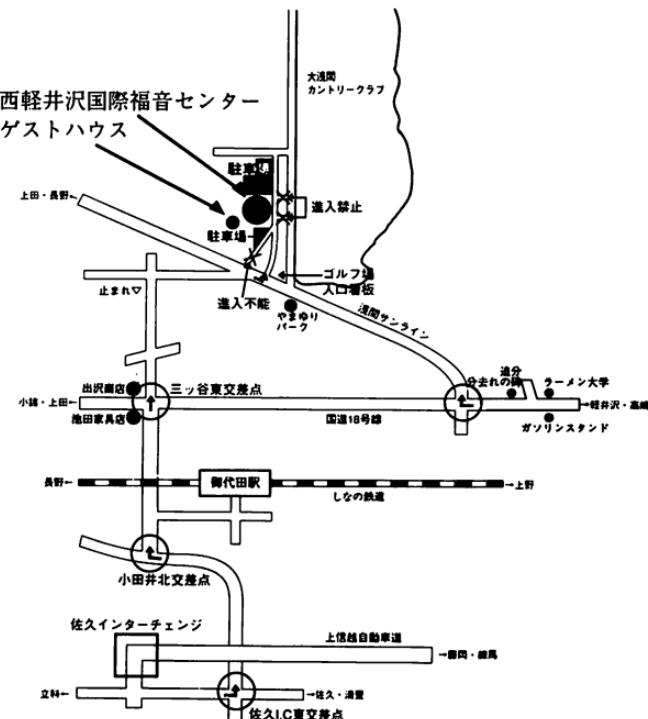
西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター

0267-32-6400 (代) 長野県北佐久郡御代田町塩野 450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

0267-32-6444 長野県北佐久郡御代田町塩野 450-33 〒389-0201



- 上信越自動車道で佐久インターチェンジから出て上図を参考にしてください。
- しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分=1000円程度。徒歩約45分=3km。
御代田へは東京駅から長野行新幹線「あさま」で軽井沢乗りかえ、しなの鉄道3つ目御代田下車。
- 国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5km先、2つ目の追分宿の信号を越え、左にESSOのガソリンスタンドを越えて浅間サンライズに右折して入ります。そこから約3kmです。
- 道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

キリスト集会のご案内 (2001年5月1日現在)

西軽井沢国際福音センター

0267-32-6400 (代) 長野県北佐久郡御代田町塩野 450-15 ☎ 389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

0267-32-6444 長野県北佐久郡御代田町塩野 450-33 ☎ 389-0201

吉祥寺キリスト集会(集会所)

0422-21-8450 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 ☎ 180-0004

高橋誠一 011-782-3440 北海道札幌市東区伏古11条3丁目6-22 ☎ 007-0871

佐藤幸賀 0166-92-1136 北海道上川郡美瑛町美瑛原野五線 ☎ 071-0239

樺原留美子 0166-26-2054 北海道旭川市10条8 ☎ 070-0000

深沢門太 0196-92-5056 岩手県岩手郡雫石町西安庭30-23-4 ☎ 020-0572

高田英彦 022-375-5815 宮城県仙台市泉区松陵5-2-3 ☎ 981-3108

平 正明 0764-31-9294 富山県富山市明輪町1-242 アバガーデンハイツ 401 ☎ 930-0001

齊藤眞吾 0286-56-3556 栃木県宇都宮市下栗町484-30 ☎ 321-0923

黒田清隆 0272-68-2622 群馬県前橋市西大室町1324 ☎ 379-2104

御任克彦 0270-24-3090 群馬県伊勢崎市大手町24-2 ☎ 372-0048

山崎暉子 0298-41-2838 茨城県土浦市烏山5-2250-9 ☎ 300-0836

藤田瑛二 0294-37-0116 茨城県日立市西成沢町2-15-10 ☎ 316-0032

横野忠秋 0294-73-2525 茨城県常陸太田市天神林町870-2 ☎ 313-0049

山口一郎 0299-83-6827 茨城県鹿嶋市宮中4477-7 ☎ 314-0031

飯塚展夫 0297-78-5718 茨城県取手市戸頭4-8-203 ☎ 302-0034

南村恵三 0298-74-2401 茨城県牛久市上柏田3-46-6 ☎ 300-1232

石井啓司 0297-48-5795 茨城県北相馬郡守谷町みずき野8-4-6 ☎ 302-0121

竹沢 規 048-833-8037 埼玉県浦和市上木崎6-36-15 ☎ 338-0804

吉田 浩 048-736-9723 埼玉県春日部市南3-15-7 ☎ 344-0064

藤井保夫 048-761-2936 埼玉県春日部市栄町1-212-8 ☎ 344-0058

岡崎龍夫 0492-64-4469 埼玉県上福岡市西2-7-18 ☎ 356-0005

堤 堅太 0492-34-5711 埼玉県川越市笠幡2744-2 ☎ 350-1175

白石康子 048-773-0435 埼玉県上尾市東町1-13-9 ☎ 362-0031

植本條文 0474-97-1684 千葉県印旛郡白井町清水口1-5-2-102 ☎ 270-1435

三上 忍 043-496-2413 千葉県印旛郡酒々井町東酒々井3-3-354 ☎ 285-0923

桶田隆一 0475-22-0373 千葉県茂原市茂原1624 ☎ 297-0026

青山裕子 0471-64-2643 千葉県柏市東柏1-6-17 ☎ 277-0017

金杉民子 0471-64-5698 千葉県柏市あかね町4-21 ☎ 277-0027

小川一夫 0473-26-8449 千葉県市川市菅野3-22-6 ☎ 272-0824

水嶋節子 0473-67-4628 千葉県松戸市栄町6-418-2 ☎ 271-0062

会沢道広 043-251-8874 千葉県千葉市稻毛区園生町158-9 ☎ 263-0051

唐沢梅子 03-3269-2937 東京都新宿区赤城下町53-19 ☎ 162-0803

佃 たえ子 03-3793-6086 東京都目黒区碑文谷6-10-10 ☎ 152-0003

上野 亘 03-3484-3451 東京都世田谷区千歳台2-20-14 ☎ 157-0071

重田定義 03-3395-1775 東京都杉並区清水2-8-12 ☎ 167-0033

蘇畑卓郎 03-5374-8281 東京都杉並区下高井戸5-26-4 ☎ 168-0073

松田 博 03-5393-5595 東京都練馬区谷原6-6-13 ☎ 177-0032

松見敬三 0424-51-2638 東京都田無市本町2-14-16-205 ☎ 188-0011

飯守恪太郎	0422-22-3483	東京都武藏野市吉祥寺北町 1-27-15	〒 180-0001
江藤善治	0422-22-8446	東京都武藏野市吉祥寺東町 1-13-1	〒 180-0002
田中順治	0422-53-8190	東京都武藏野市中町 3-4-4 武藏野ビューハイツ	609 〒 180-0006
高橋正一	0422-44-3898	東京都三鷹市井ノ頭 2-30-7	〒 181-0001
平山義輝	0425-75-3317	東京都府中市北山町 1-14-5	〒 183-0041
染野茂夫	0423-85-1841	東京都小金井市中町 1-15-17	〒 184-0012
池田潤太	0425-72-2661	東京都国立市西 2-26-32	〒 186-0005
本田謹子	0424-66-3066	東京都田無市向台町 4-15-6	〒 188-0013
古田 稔	0426-91-5079	東京都八王子市みつい台 1-24-12	〒 192-0014
岡本雅文	0427-25-6899	東京都町田市森野 4-5-15	〒 194-0022
阿部 基	0427-26-4593	東京都町田市木曾町 520-7	〒 194-0033
今川 慎	0424-73-2494	東京都東久留米市滝山 3-4-18	〒 203-0033
辻田浩康	0423-46-5080	東京都小平市小川町 1-445-1 ガーデンハイツ	1-413 〒 187-0032
竹本 隆	0423-75-0121	東京都多摩市一ノ宮 3-7-5	〒 206-0022
田中 鑑	045-562-7488	神奈川県横浜市港北区日吉 5-2-1	〒 223-0061
木内基夫	045-962-1535	神奈川県横浜市青葉区奈良町 1566-290	〒 227-0036
黒田百合	045-971-8836	神奈川県横浜市青葉区みたけ台 8-22	〒 227-0047
柳原基子	045-844-6056	神奈川県横浜市港南区上永谷 5-22-67	〒 233-0012
相模原キリスト教会所 (問合せ先番号 立之)	0427-71-2822		
		神奈川県相模原市横浜山 3-33-6 スターハイルズ尾上	〒 229-1122
神沢 殿	0427-43-6732	神奈川県相模原市御園 1-18-55	〒 228-0817
梯上伸世	0462-47-9799	神奈川県厚木市毛利台 3-6-1	〒 243-0037
香川 哲	0465-43-2534	神奈川県小田原市小竹 781-22 橋団地 23-2	〒 256-0802
長岡健次	0262-78-8655	長野県長野市松代町皆神台 153	〒 381-1223
依田政利	0267-45-1863	長野県北佐久郡軽井沢町追分 6582	〒 389-0115
山田正博	0263-78-4728	長野県南安曇郡梓川村梓 5455-4	〒 390-1702
官城昭代	0265-78-2284	長野県伊那市御園中部 5	〒 396-0000
芝田米蔵	0546-35-0195	静岡県藤枝市前島 2-24-24	〒 426-0067
大塚二郎	0537-23-7465	静岡県掛川市水垂 1116-17	〒 436-0061
篠塚智子	0543-67-7329	静岡県清水市天神 1-11-17	〒 424-0809
吉野千鶴子	054-287-3531	静岡県静岡市中田本町 1-43	〒 422-8043
足立秀子	0533-68-2035	愛知県蒲郡市神の郷下向山 75-7	〒 443-0007
河合 徹	0568-23-1209	愛知県西春日井郡師勝町鹿田 2512-1 グリーンシティ D	-1403 〒 481-0004
辻田雅彦	0565-31-2745	愛知県豊田市平芝町 5-23-2	〒 471-0065
松本昭二	052-804-6016	愛知県日進市香久山 3-301-1 ライフウェルズ	3-403 〒 470-0134
津田 修	052-806-7491	愛知県名古屋市天白区高宮町 209	〒 468-0031
大下直弘	0577-33-3559	岐阜県高山市三福寺町 777-2	〒 506-0807
三五幸男	0593-26-7854	三重県四日市市桜花台 1-10-9	〒 510-1216
松浦 都	0749-24-6874	滋賀県彦根市城町 1-6-36	〒 522-0068
西山 誠	0748-32-4368	滋賀県近江八幡市池田本町 930-32	〒 523-0043
高村昌彦	0748-32-3623	滋賀県近江八幡市土田町 828-2	〒 523-0082
藤後健二	0775-34-8277	滋賀県大津市富士見台 17-43	〒 520-0846
久枝信一	0726-80-2218	大阪府高槻市松が丘 3-2-24	〒 569-1031
伊藤利雄	0721-29-2861	大阪府富田林市須賀 355-1-201	〒 584-0062
松井 一	0729-93-8779	大阪府八尾市北久宝寺 1-4-13 グリーンマンション	509 号 〒 581-0071
加藤竜四郎	0721-28-3996	大阪府富田林市寺池台 4-1-304-404	〒 584-0073
池島精一	06-6328-1071	大阪府大阪市淀川区瑞光 1-14-2	〒 533-0005
高橋義夫	06-6658-1775	大阪府大阪市西成区千本中 1-5-9	〒 557-0054

広田裕彦	0743-74-0237	奈良県生駒市俵口町 363-5	〒 630-0243
山科一雄	07437-5-0096	奈良県生駒市俵口町 623-6	〒 630-0243
奥田俊夫	0797-81-1694	兵庫県西宮市宝生ヶ丘 1-12-7	〒 669-1112
森島左武郎	0798-65-3719	兵庫県西宮市高木東町 12-14	〒 663-8033
芦屋キリスト集会所		兵庫県芦屋市朝日ヶ丘町 6-31	〒 659-0012
村田タヤ子	0797-31-3362	兵庫県芦屋市朝日ヶ丘町 6-31	〒 659-0012
渡辺 進	078-302-3093	神戸市中央区港島中町 6-14 ポートピアプラザD棟 803	〒 650-0046
内田忠志	07948-5-5047	兵庫県三木市緑が丘東 1-9-11	〒 673-0533
山下 彰	0797-74-7876	兵庫県宝塚市野上 4-14-25	〒 665-0022
森 正樹	0864-72-9084	岡山県倉敷市蘆池 3-3-14	〒 711-0932
岡本 悟	08694-8-3754	岡山県岡山市金岡西町 1181-7	〒 704-8193
渡部弥寿志	0823-31-3441	広島県呉市瀬戸見町 12-8	〒 737-0834
佐武照代	0839-22-2552	山口県山口市白石 2-5-33	〒 753-0070
内田厚純	0877-45-9159	香川県坂出市笠指町 4-5	〒 762-0038
高島佳紀	087-865-3020	香川県高松市三条町 1-5	〒 761-8072
宮西清士	0877-98-6739	香川県綾歌郡飯山町東坂元三ノ池	446-23 〒 762-0081
徳島キリスト集会所		渭東公民館	
鈴木克男	0886-64-3956	徳島県徳島市南沖洲 1-9-20-1	〒 770-0874
岡本広海	08875-6-1940	高知県香美郡野市町西野 2121-2	〒 781-5232
竹本真夫	08875-2-1794	高知県香美郡土佐山田町東本町 2-2-45	〒 782-0031
森本恵美	0887-52-3592	高知県香美郡土佐山田町久次 434	〒 782-0000
渡辺初美	0897-55-3185	愛媛県西条市本町 146	〒 793-0022
光藤英彦	0899-33-6321	愛媛県松山市持田 2-4-15	〒 790-0855
庄野直勝	092-606-1990	福岡県福岡市東区奈多団地 28-103	〒 811-0204
河口有介	092-847-1726	福岡県福岡市早良区小田部 3-26-1-301	〒 814-0032
橋本昭雄	093-471-6730	福岡県北九州市小倉南区中曾根東 4-12-6	〒 800-0213
宮崎敏雄	0940-32-9469	福岡県宗像市泉ヶ丘 2-35-2	〒 811-4142
松井正典	092-927-0546	福岡県筑紫野市筑紫駅前通り 2-125	〒 818-0022
須崎和子	0944-53-7266	福岡県大牟田市草木 747	〒 837-0917
重枝学	0967-32-4154	熊本県阿蘇郡阿蘇町乙姫 2070-12	〒 869-2226
小山田忠功	0975-32-6313	大分県大分市八幡六組一	〒 870-0807
中野覚司	0977-72-8361	大分県速見郡日出町字上神田 555-87	〒 879-1500
堀内 肇	0956-63-5089	長崎県北松浦郡佐々町羽順和免 718-2	〒 857-0341
友寄英俊	0956-31-1985	長崎県佐世保市大和町 884	〒 857-1165
歳川謙治	0957-52-0919	長崎県大村市上諏訪町 1055-1-103	〒 856-0023
上野 哲	0984-23-5951	宮崎県小林市堤 2952-28	〒 886-0003
前田幸則	0985-39-5458	宮崎県宮崎市大字広原 781-3	〒 880-0125
安藤正和	099-257-8994	鹿児島県鹿児島市田上 4-22-5	〒 890-0034
永川 誠	0995-65-6414	鹿児島県姶良郡姶良町下名 1062-17	〒 899-5543
竹田保洋	0996-88-2816	鹿児島県出水郡長島町平尾 199	〒 899-1302
沖縄キリスト集会			
	098-933-9068	沖縄県沖縄市山里 2-4-2	〒 904-0033
喜屋文昌信	098-933-0284	沖縄県沖縄市久保田 1-25-3	〒 904-0023
鵜飼経世	098-930-0659	沖縄県沖縄市高原 487	〒 904-2171
崎浜秀安	098-835-0007	沖縄県那覇市三原 3-9-29	〒 902-0063
平良昌弘	098-945-1581	沖縄県西原町字幸地 315-9 坂田ハイツ B-53	〒 904-0116

アメリカ／シアトル
中津泰明 206-232-4400 8031 84th Ave.S.E.Mercer Island,WA 98040 U.S.A

サンフランシスコ
勝子 Stover 415-499-8436 2151 Elderberry Lane San Rafael,CA 94903,U.S.A
福元謙六郎 650-588-5044 810 Robin Lane,Millbrae,CA 94030,U.S.A

カナダ／オタワ
井出和雄 613-591-0654 197 Equestrian Drive,Kanata,Ontario,K2M1K7, CANADA

トロント
南場良光 905-271-8234 175 Angelene Street,Mississauga,Ontario,L5G1X1,CANADA

バンクーバー
野田房男 604-924-0917 2040 Hill Dr,North Vancouver.B.C.V7H2N5, CANADA

・移動があったときは西軽井沢国際福音センター 0267-32-6400 羽石まで

すぐに起こるはずのこと
ヨハネの默示録
第3巻

定価 400 円
(本体 381 円)

2001年4月25日初版

著 者 ゴットホルド・ベック

編 集 酒井千尋 福留伸子 石塚優子
井野文雄・副子 清水まみ
デザイン版下 鯨守裕太郎 上野文子 小林珠美
表紙写真 高橋金三
印 刷 新生宣教団

発行所 キリスト集会
〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11
電話 0422-21-8450 (集会所)

価格 400円（本体価格 381円）



日本を訪れたドイツの集会の方々と、ドイツよろこびの集いで再会。